

# 石田遺跡 III

—一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書15—



1998年3月

島根県教育委員会  
建設省松江国道工事事務所

正 誤 表

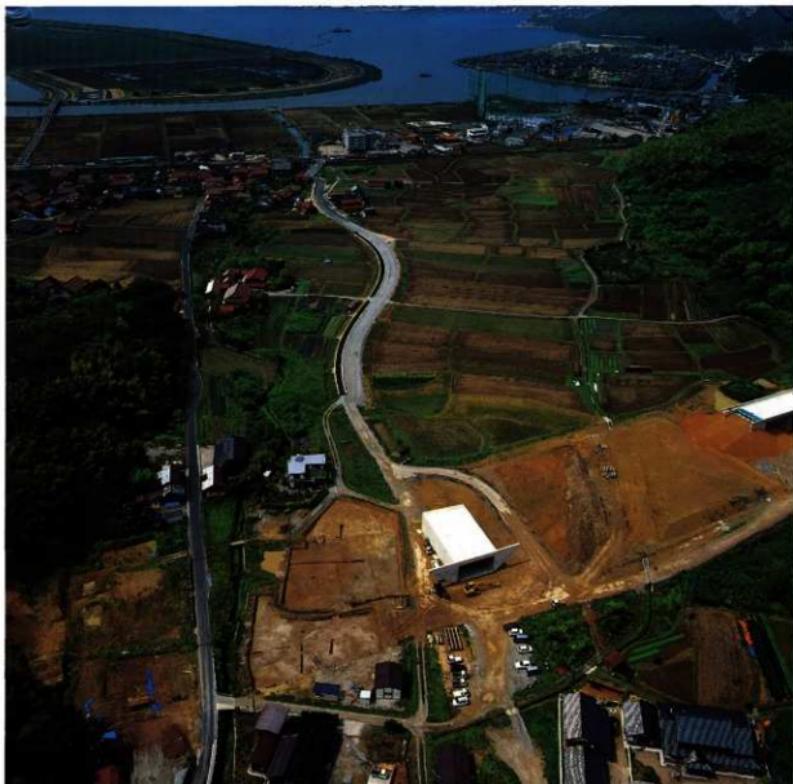
頁	誤	正
P 7 15行目	竪穴式石室	竪穴式石擗
P 8 註(12)	「門生・門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡の調査」	「門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡」
P 21 37行目	2段掘りを	2段掘り状を
P 23 10行目	円盤充填	円盤充填
17行目	小型器台高杯である。10は小型器台高杯の	小型器台である。10は小型器台高杯の
29行目	口縁部段部の	口縁部段部
P 41 24行目	円盤充填	円盤充填
P 55 12行目	古墳後期末前後	古墳時代後期末前後
P 57 16行目	川幅 (5~10m前後)	川幅程度 (5~10m前後)
P 72 20行目	頸骨部に	頸部に
P 77 6行目	12~18は	15~18は
20行目	4方向の円形透かしが	4方向に凸孔が
P 84 11行目	終末期円墳	終末期の円墳
P 85 1行目	長頸甕	長頸瓶
P 87 22行目	状の施設で	状の単葬墓施設で
P 88 21行目	後述するSD01	後述するSD04
27行目	南端はSK01	南端はSK05
30行目	SK01に後出する。	SK05に後出する。
P 89 37行目	S X01とはほぼ同時の	S X01新相とほぼ同時の
P108 5行目	円盤充填法的な	円盤充填法的な
P120 11行目	櫛捲状の	櫛捲文状の
P127 7行目	結びつくかどうかは再検討を要す。	結びつくかどうかは検討を要す。
P142 17行目	松山編年Ⅲ~Ⅳ期	松山編年Ⅱ~Ⅲ期
20行目	円盤充填法	円盤充填法
P160 22行目	行った結果ではなかろうか。	行った結果と想定される。
29行目	最も高いのではないだろうか。	最も高いものと想定される。
P161 4行目	竪穴住居址が知られており、	古墳時代後期の竪穴住居址が知られており、
22行目	可能性がある。	可能性が期待される。
P187 第76図-3	出土土器觀察表 カキメ	ハケメ
P205 第127図-17	出土石器一覧表 SD03	SD05

# 石田遺跡Ⅲ

—一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書15—

島根県教育委員会  
建設省松江国道工事事務所

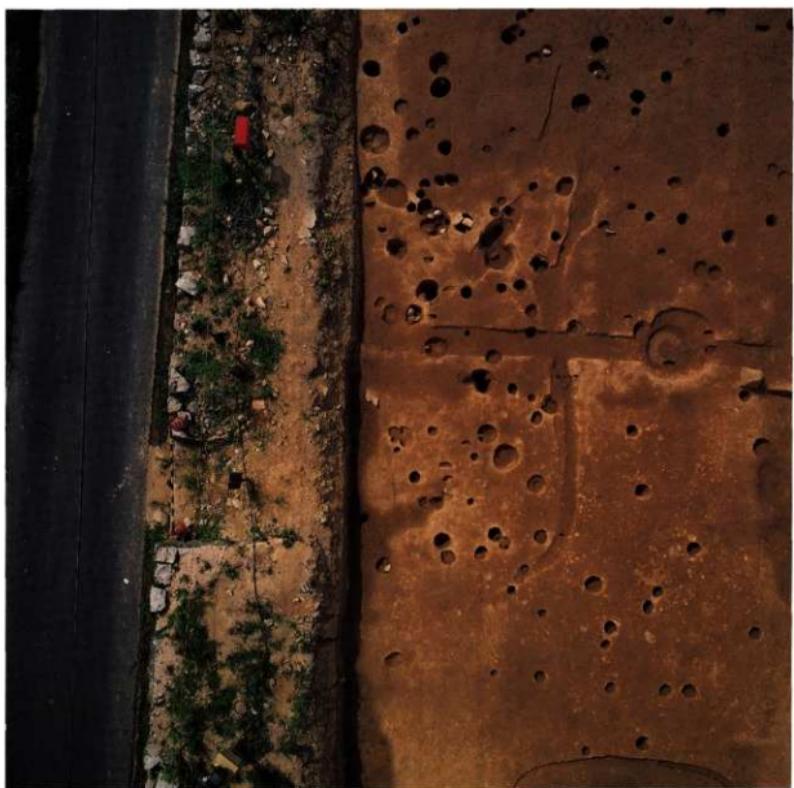




石田遺跡上空から中海を望む



石田遺跡 I - N 区 (北から)



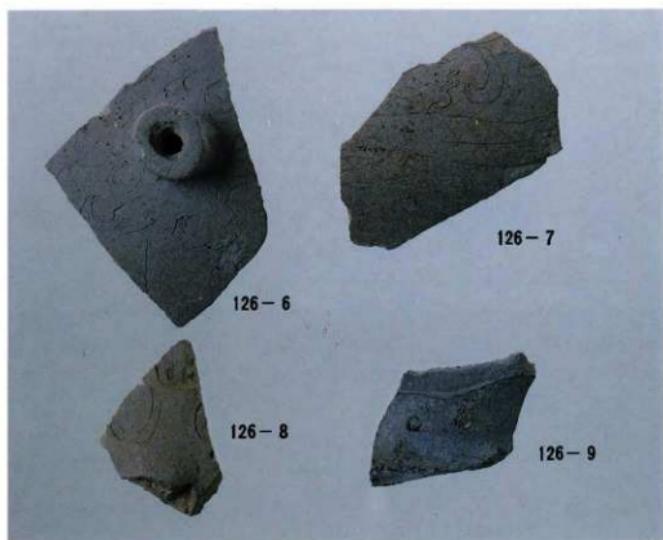
I - N区 SB02~04完掘時（真上から）



III-5・6区完掘時（真上から）



III區墨書土器出土（上「上」、下「古」）



石田遺跡出土墨書・ヘラ描須恵器

## 序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても道路建設予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成7・8年度に実施した遺跡調査の成果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの御理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成10年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石 龍太郎

## 序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号安来道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このたび報告書第15集を刊行する運びとなりました。

本報告書は平成7年度・8年度に調査を実施した安来市吉佐町に所在する石田遺跡の調査成果をとりまとめたものです。この調査では縄文時代から古墳時代後期にかけての各時代の集落跡を検出したほか、各時代の遺物が多量に出土いたしました。これらの調査成果は安来の古代史の一端を明らかにしただけでなく、出雲地方全体の歴史を解明していく上でも極めて重要な資料になるものと思われます。本報告書が地域の歴史を解明する糸口となり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いと思います。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり調査に御協力を頂きました建設省松江国道工事事務所、安来市をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

島根県教育委員会

教育長 江口博晴

# 例 言

- 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成7年度、8年度に実施した、一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

安来市吉佐町 石田遺跡

- 調査組織は次のとおりである。

調査主体	島根県教育委員会
(平成7年度)	現地調査
事務局	島根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、森山洋光（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター 宮道正年（センター長）、佐伯善治（課長補佐）、 渋谷昌宏（企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）
調査員	ト部吉博（埋蔵文化財調査センター主幹）、片山寛志（兼）文化財保護主事）、 池淵俊一（主事）、東森 晋（臨時職員）
整理作業員	青戸房子、佐伯明子、三奈木康江
(平成8年度)	現地調査
事務局	島根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、森山洋光（課長補佐） 埋蔵文化財調査センター 宮道正年（センター長）、古崎茂治（課長補佐）、 渋谷昌宏（企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）
調査員	足立克己（調査第4係長）、池淵俊一（主事）、梅木政志（臨時職員）、永井麗子（同）
整理作業員	原 英知子
(平成9年度)	報告書作成
事務局	島根県教育庁文化財課 勝部 昭（課長）、島地徳郎（補佐） 埋蔵文化財調査センター 宮道正年（センター長）、古崎 茂治（課長補佐）、 渋谷昌宏（企画調整係主事）
調査員	池淵俊一（主事）、田中強志（臨時職員）、福田市子（同）
整理作業員	金森千恵子、多久和文子、田中路子、佐々木京子、中嶋美穂子、荒川あかね、 瀬川恭子、広田和子、陶山佳代、板垣見知子、錦織美千恵、渡辺恵子

- 平成7年度、平成8年度の発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、（社）中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部（平成7年度）

布村幹夫（現場事務所長）、寺田 透（技術員）、周藤美奈子（事務員）

（平成8年度）布村幹夫（現場事務所長）、永原正寛（技術員）、高崎増美（事務員）

5. 現地調査、及び資料整理については、以下の方々から有益なご助言とご協力をいただいた。  
記して感謝の意を表させていただく。(敬称略)
- 三宅博士（安来市教育委員会）、金山尚志（同）、水口晶郎（同）、東森市良（安来高校教諭）、  
根鉢輝雄（倉吉市教育委員会）
6. 採図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。
7. 採図の縮尺は、図中に明示した。
8. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。
9. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。
- |        |           |            |
|--------|-----------|------------|
| P…ピット  | S I…堅穴住居跡 | S B…掘立柱建物跡 |
| S K…土坑 | S D…溝     | S R…自然河道   |
10. 本書に掲載した遺物の実測及び採図の浄写は、主として以下の者が行った。  
(実測) 片山、池淵、東森、梅木、永戸、福田、田中、舟木 聰、月坂雄一、原喜久子、多久和文子、金森千恵子  
(浄写) 池淵、田中強志、福田、陶山、金森、多久和、板垣、錦織、渡辺
11. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、池淵が行った。
12. 本書の執筆は、卜部、池淵が行った。
13. 本書の編集は池淵が行った。
14. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は、島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

## 目 次

1. 調査に至る経緯	(ト 部)	1
2. 石田遺跡の位置と環境	(池 渾)	3
3. 調査の経過状況と概要	(池 渾)	9
1章 これまでの調査経過		9
2章 調査区の概要		12
4. 調査の結果	(池 渾)	14
1章 I区の調査		14
1節 I-N区の調査		14
2節 I-S区の調査		43
2章 II区の調査		84
3章 III区の調査		92
1節 III-1・2区の調査		98
2節 III-3～6区の調査		113
5. まとめ	(池 渾)	159
6. 自然科学的分析		163
石田遺跡出土鉄滓の調査	(和鋼博物館)	163



## 挿 図 目 次

第1図 石田遺跡の位置	3
第2図 石田遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第3図 第1次調査I区全体図	10
第4図 調査区配置図	11
第5図 I区遺構配置図	15
第6図 I区調査区土層図(1)	16
第7図 I区調査区土層図(2)	17
第8図 I-N区S I 01実測図	18
第9図 I-N区S I 01出土遺物実測図(1)	19
第10図 I-N区S I 01出土遺物実測図(2)	19
第11図 I-N区S I 02実測図	20
第12図 I-N区S I 02出土遺物実測図	22
第13図 I-N区S B 01実測図	24
第14図 I-N区S B 01付近出土遺物実測図	25
第15図 I-N区S B 02~04付近実測図	26
第16図 I-N区S B 02実測図	27
第17図 I-N区S B 02出土遺物実測図	28
第18図 I-N区S B 03実測図	29
第19図 I-N区S B 04実測図	30
第20図 I-N区S B 02~S B 04付近出土遺物実測図(1)	31
第21図 I-N区S B 02~S B 04付近出土遺物実測図(2)	32
第22図 I-N区S B 02~S B 04付近出土遺物実測図(3)	33
第23図 I-N区S B 08実測図	34
第24図 I-N区S B 09実測図	35
第25図 I-N区S B 10実測図	35
第26図 I-N区S A 01実測図	36
第27図 I-N区S A 02実測図	36
第28図 I-N区S A 03実測図	37
第29図 I-N区S K 01~03実測図	38
第30図 I-N区S K 03出土遺物実測図	39
第31図 I-N区遺構外出土遺物実測図(1)	39
第32図 I-N区遺構外出土遺物実測図(2)	40
第33図 I-N区遺構外出土遺物実測図(3)	41
第34図 I-N'区街道状遺構実測図	42
第35図 I-S区遺構配置図	44

第36図	I-S区S I 03実測図	45
第37図	I-S区S K04実測図	46
第38図	I-S区S I 03内S K04出土遺物実測図	47
第39図	I-S区S B05実測図(1)	48
第40図	I-S区S B05実測図(2)	49
第41図	I-S区S B06実測図	50
第42図	I-S区S B07実測図	51
第43図	I-S区遺構外出土遺物実測図(1)	52
第44図	I-S区遺構外出土遺物実測図(2)	53
第45図	I-S区遺構外出土遺物実測図(3)	54
第46図	I-S区トレンチ出土遺物実測図	55
第47図	I-S区S R01実測図	56
第48図	I-S区S R01遺物出土状況図(1)	58
第49図	I-S区S R01遺物出土状況図(2)	59
第50図	I-S区S R01出土状況図(3)	60
第51図	I-S区S R01出土遺物実測図(1)	61
第52図	I-S区S R01出土遺物実測図(2)	62
第53図	I-S区S R01出土遺物実測図(3)	63
第54図	I-S区S R01出土遺物実測図(4)	65
第55図	I-S区S R01出土遺物実測図(5)	66
第56図	I-S区S R01出土遺物実測図(6)	67
第57図	I-S区S R01出土遺物実測図(7)	69
第58図	I-S区S R01出土遺物実測図(8)	70
第59図	I-S区S R01出土遺物実測図(9)	71
第60図	I-S区S R01出土遺物実測図(10)	73
第61図	I-S区S R01出土遺物実測図(11)	74
第62図	I-S区S R01出土遺物実測図(12)	75
第63図	I-S区S R01出土遺物実測図(13)	76
第64図	I-S区S R01出土遺物実測図(14)	78
第65図	I-S区S R01出土遺物実測図(15)	79
第66図	I-S区S R01出土遺物実測図(16)	80
第67図	I-S区S R01出土遺物実測図(17)	81
第68図	I-S区S R01出土遺物実測図(18)	82
第69図	I-S区S R01出土遺物実測図(19)	83
第70図	II区遺構配置図	84
第71図	II区S X01実測図	85
第72図	II区S X01主体部実測図	86
第73図	II区S X01出土遺物実測図	87

第74図	II区 S K05・S D04実測図	88
第75図	II区 S X02実測図	89
第76図	II区 S X02出土遺物実測図	89
第77図	II区 S X03実測図	90
第78図	II区 S X03出土遺物実測図	90
第79図	II区 遺構外出土遺物実測図	91
第80図	III区全体図	93
第81図	III区調査区上層図	95, 96
第82図	III区遺物出土状況図	97
第83図	III区 S R02実測図	98
第84図	III-1・2区出土遺物実測図(1)	99
第85図	III-1・2区出土遺物実測図(2)	100
第86図	III-1・2区出土遺物実測図(3)	101
第87図	III-1・2区出土遺物実測図(4)	103
第88図	III-1・2区出土遺物実測図(5)	104
第89図	III-1・2区出土遺物実測図(6)	105
第90図	III-1・2区出土遺物実測図(7)	107
第91図	III-1・2区出土遺物実測図(8)	108
第92図	III-1・2区出土遺物実測図(9)	109
第93図	III-1・2区出土遺物実測図(10)	110
第94図	III-1・2区出土遺物実測図(11)	111
第95図	III区 S I 04実測図	113
第96図	III区 S B11実測図	114
第97図	III区 S B12実測図	116
第98図	III区 S I 04・S D05出土遺物実測図	117
第99図	III区 S D05実測図	117
第100図	III区 S D06～09実測図	118
第101図	III-3～6区出土遺物実測図(1)	120
第102図	III-3～6区出土遺物実測図(2)	121
第103図	III-3～6区出土遺物実測図(3)	123
第104図	III-3～6区出土遺物実測図(4)	124
第105図	III-3～6区出土遺物実測図(5)	125
第106図	III-3～6区出土遺物実測図(6)	127
第107図	III-3～6区出土遺物実測図(7)	128
第108図	III-3～6区出土遺物実測図(8)	129
第109図	III-3～6区出土遺物実測図(9)	131
第110図	III-3～6区出土遺物実測図(10)	132
第111図	III-3～6区出土遺物実測図(11)	134

第112図 III-3～6区出土遺物実測図(1)	135
第113図 III-3～6区出土遺物実測図(2)	137
第114図 III-3～6区出土遺物実測図(3)	138
第115図 III-3～6区出土遺物実測図(4)	139
第116図 III-3～6区出土遺物実測図(5)	140
第117図 III-3～6区出土遺物実測図(6)	141
第118図 III-3～6区出土遺物実測図(7)	143
第119図 III-3～6区出土遺物実測図(8)	144
第120図 III-3～6区出土遺物実測図(9)	145
第121図 III-3～6区出土遺物実測図(10)	146
第122図 III-3～6区出土遺物実測図(11)	147
第123図 III-3～6区出土遺物実測図(12)	148
第124図 III-3～6区出土遺物実測図(13)	149
第125図 III-3～6区出土遺物実測図(14)	150
第126図 石田遺跡出土墨書き、ヘラ描須恵器実測図	151
第127図 III区出土石器実測図(1)	152
第128図 III区出土石器実測図(2)	153
第129図 III区出土石器実測図(3)	155
第130図 III区出土石器実測図(4)	156
第131図 III区出土石器実測図(5)	157

## 1. 調査に至る経緯

昭和47年5月26日付けて、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道9号バイパス」建設の基本設計資料として、島根県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文化財の有無について照会があった。そこで、県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て、昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果を踏まえ、建設省からルート案が提示され、昭和48年7月には松江市東地区の予定ルートにかかる遺跡の取扱いについて協議があった。

昭和49年7月には安来地区の折板～月坂間のルート案について協議があった。つづいて昭和50年1月22日付で県教育委員会あて松江東地区と安来地区のうち清水～月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受け、昭和50年7月には建設省と契約を取り交わし、昭和50年度、松江市竹矢町才ノ峰古墳群、同矢出町平所遺跡、安来市早田町大坪古墳群の発掘調査を、昭和51年度には松江市平所遺跡の関連再調査、東出雲町出雲郷布敷遺跡の試掘調査を実施した。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲町出雲郷から安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で、予定ルートにも変更が生じたため、昭和62年度・63年度に再度分布調査を実施した。発掘調査はまず、安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インターチェンジ部を含む）で平成元年度から同4年度まで7遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同臼コクリ遺跡、同岩屋口遺跡、黒井田町越峰遺跡、同才ノ神遺跡、島田町島田南遺跡）で実施した。

さらに平成5年度からは安来市荒島町から東出雲町出雲郷を「安来道路西地区」として、さらに平成5年度からは安来市吉佐町から島田町間の3.9kmを「安来道路東地区」として引き続き調査を行った。そのうち安来道路東地区では、平成5年度は吉佐町の石田遺跡、カンボウ遺跡、国吉遺跡、平ラⅠ遺跡、平ラⅡ遺跡と島田町の島田黒谷Ⅰ遺跡、島田黒谷Ⅱ遺跡、島田黒谷Ⅲ遺跡、普請場遺跡、明子谷遺跡の調査を行い、平成6年度には吉佐町の石田遺跡、五反田遺跡、徳見津遺跡、目廻遺跡、山の神遺跡、門生町の門生黒谷Ⅰ遺跡、門生黒谷Ⅱ遺跡、門生黒谷Ⅲ遺跡、陽徳遺跡、陽徳寺遺跡、平成7年度には門生黒谷Ⅲ遺跡、石田遺跡の調査を行った。

現地調査の一方で、調査終了分の遺跡については順次報告書作成を実施しており、安来道路東地区では本書を含め現在まで15冊の報告書を刊行している。

## これまで刊行された安来道路東地区関連の報告書一覧

(平成10年3月現在)

報 告 書 名	シリーズ番号	刊 行 年	主 な 内 容
一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財報告書	1	1991年3月	宮内遺跡（弥生集落）の概要
一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書	2	1992年3月	宮内遺跡、島田南遺跡の概要
島田南遺跡	3	1992年3月	奈良時代集落跡
越峠・宮内遺跡	4	1993年3月	越峠遺跡…弥生後期、古墳後期集落跡 宮内遺跡…弥生集落跡、導入期石棺内蔵横穴墓他
臼コクリ遺跡・大原遺跡	5	1994年3月	臼コクリ遺跡…横穴墓群、弥生集落、墳丘墓他 大原遺跡…横穴墓、弥生集落、古墳中期玉作跡他
男子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡・猫ノ谷遺跡	6	1994年3月	島田黒谷Ⅲ遺跡…弥生末墳墓群 猫ノ谷遺跡…弥生後期高地性集落
石田遺跡・カンボウ遺跡	7	1994年3月	石田遺跡…古墳後期集落 カンボウ遺跡…古墳中～後期集落他
岩屋口南遺跡	8	1995年3月	横穴墓、古墳中期集落、奈良時代鍛冶工房他
才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡	9	1995年3月	才ノ神遺跡…弥生後期高地性集落、平安期祭祀跡 普請場遺跡…弥生後期高地性集落 島田黒谷Ⅰ遺跡…繩文前～後期包含層
平ラⅡ遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群	10	1995年3月	平ラⅡ遺跡…儀穴墓、終末期古墳、古墳時代集落跡、土作他 吉佐山根1号墳…主体部箱式石棺3基の小方墳 穴神横穴墓群…彩色壁画石棺内蔵の横穴墓他
陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡	11	1995年3月	陽徳遺跡…典型的弥生後期高地性集落 平ラⅠ遺跡…自然河道
徳見津遺跡・目越遺跡・陽徳寺遺跡	12	1996年9月	徳見津遺跡…古墳後期～奈良期集落、鍛冶工房 目越遺跡…落とし穴、木棺墓 陽徳寺遺跡…近世寺院跡、奈良～平安堤跡
岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡(F区)	13	1997年3月	岩屋口北遺跡…弥生後期高地性集落、前方後円墳、横穴墓群 臼コクリ遺跡(F区)…石棺内蔵横穴墓2基
門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡(五反田古墳群)	14	1998年3月	門生黒谷Ⅰ遺跡…5世紀末、9世紀須恵器窯跡他 門生黒谷Ⅱ遺跡…古墳中期集落、平安期木棺墓他 門生黒谷Ⅲ遺跡…弥生後期集落、前期末～中期初頭古墳群
石田遺跡Ⅲ	15	1998年3月	繩文時代中期末の住居址、古墳後期集落、終末期古墳他

## 2. 石田遺跡の位置と環境

石田遺跡は島根県安来市吉佐町に位置する。吉佐町は安来市内でも最も東端に位置し、山一つ越えれば鳥取県米子市陰田町に至る。まさに雲伯国境とも呼ぶべき場所である。

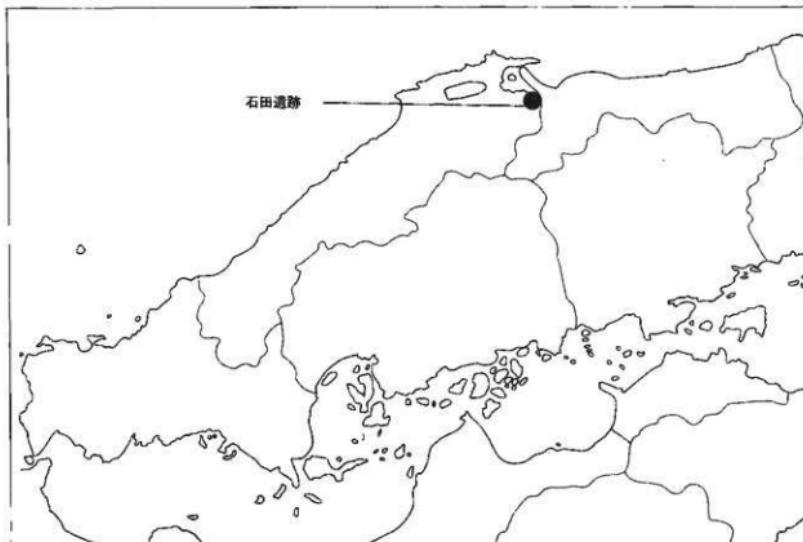
当地区の西に広がる安来平野は、伯太川・飯梨川・吉田川の沖積作用によって形成された県内有数の穀倉地帯であるが、それから東の地域には標高100m前後の比較的低い丘陵が鳥取県境まで連なっており、この低丘陵を南北に縫うように全長10km前後の小規模河川が平行して流れ、それぞれの川沿いに狭い谷底平野を形成している。その東には日野川の沖積作用によって形成された米子平野が広がっている。このように安来東部の中海沿岸地域はその地理的特性からみて、大勢力の成立しにくい、大平野に挟まれた緩衝地帯的性格をもつ地域であると言える。

北には中海の最奥部が入り込んでいる。現在の海岸線は近年の干拓事業のため遠ざかっているが、当遺跡群の主要な時期である古墳時代にかけては、海岸線はおそらく現在のJR山陰本線より南の辺りまで深く入り込んでいたものと思われる。

また現存する『出雲国風土記』上れば現在の弓が浜半島は「夜見島」と記載されており、当時は現在の米子市街地の一部が途切れて水道状となっていたことが窺える。これがいつの時期まで遡るのかは不明瞭だが、ある時期に当地が美保湾と中海をつなぐ海上交通の要衝であったことは疑いなく、弥生時代終末期に当地に多数の高地性集落が出現するのは、この水道の存在と深く関わっていた可能性も十分考慮される。以下、各時代ごとに当遺跡周辺の主要な遺跡についてふれておきたい。

### 旧石器・縄文時代

安来平野における旧石器・縄文時代の遺跡はまだ少ない。旧石器時代の遺跡としては安来市吉佐



第1図 石田遺跡の位置



第2図 石田遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1 / 50,000)

周辺の遺跡一覧

1 石田遺跡	縄文～奈良時代集落、古墳地	36 岩屋北遺跡	横穴墓12基、弥生後期集落
2 平ラII遺跡 吉佐山根1号墳 穴神横穴墓群	古墳集落、玉作、横穴墓 前期古墳 彩色巻軸画移石棺	37 岩屋口南遺跡 38 白コクリ遺跡	横穴墓5基、古墳～奈良集落 横穴墓19基、弥生後期墳墓、集落
3 鶴出シ遺跡	縄文時代石器	39 大原遺跡	弥生集落、古墳時代中期玉作地
4 竹原遺跡	弥生土器・土器器、須恵器	40 宮内遺跡	弥生後期集落、横穴墓2基
5 吉佐貝御塚古墳	横穴式石室	41 あんもしも山古墳群	円墳（径25m）
6 神宝古墳群	円墳、円筒埴輪	42 新林古墳群	前期古墳群
7 神代塚古墳	横穴式石室、市指定	43 上神山古墳	長持形石棺、中世山城
8 カンボウ遺跡	古墳中～後期集落址	44 晴亮古墳	前方後円墳（50m）、舟形石棺
9 仙吉遺跡	石造土壇墓	45 寺さん古墳	長持形石棺2
10 八幡山古墳	前期古墳、幕式石棺	46 高広遺跡	横穴13基、弥生、古墳以降集落跡
11 門生黒谷T遺跡	須恵器集落、奈良時代墓葬跡	47 補丁遺跡	前方後円墳、弥生～古墳墓葬跡
12 門生古墳跡群山根地区	古墳中期須恵器類、山河跡	48 長曾上埴輪群	弥生後期墳墓群
13 門生古墳跡群高畠地区	古墳中期須恵器類、山河跡	49 深鳥横穴墓群	3基以上
14 鳥取黒谷Ⅱ遺跡	弥生時代末頃墓群	50 叶谷遺跡	弥生後期集落
15 門生黒谷Ⅱ遺跡	古墳中期集落跡、平安木棺墓	51 大坪古墳群	中期古墳6基、弥生後期集落
16 門生黒谷Ⅲ遺跡	弥生時代集落、前中期～中期初頭古墳群	52 九重土壤墓群	弥生後期墳墓群
17 陽徳寺遺跡	近世寺院跡、古代堤	53 清末大日堂瓦窯跡	弥生末上埴輪群、横穴墓、近世墓
18 陽徳寺遺跡	弥生後期高地性集落	54 清瀬山古墳群	13基（前方後円墳2、47m、33m）
19 五反田遺跡	古墳後期銅冶作跡	55 大人原古墳群	4基（前方後円墳1）
20 日照遺跡	木棺墓、落とし穴	56 敦美寺	奈良時代寺院跡
21 巣見津遺跡	古墳後期～奈良時代鍛冶集落	57 史跡米子城跡	近世城郭
22 山ノ神遺跡	古墳時代集落地	58 木子城跡6遺跡	近世屋敷跡、弥生末未系土器群
23 茶屋燒廻寺	須恵器、土器器、布目瓦	59 日久美遺跡	弥生・水田跡他
24 八坂古墳	円筒埴輪	60 池内遺跡	弥生～古墳時代水田跡
25 門生・山根遺跡	古墳時代集落	61 藤田遺跡群	古墳、横穴墓地
26 山根古墳	前方後円墳	62 黑田1号墳	横穴式石室
27 明子谷遺跡	縄文土器、弥生土器、土器器	63 駆出広畠遺跡	鉛冶集落
28 島田黒谷Ⅰ遺跡	縄文土器、弥生土器器	64 路田隠れが谷遺跡	弥生末、古墳後期～奈良時代集落跡
29 芹崎塚遺跡	弥生後期集落	65 藤田夜坂遺跡	弥生末集落地
30 烏山南遺跡	奈良時代集落、墨書き器	66 新山研石山遺跡	古墳時代集落地
31 岩崎1号横穴	刀・須恵器	67 新山山遺跡	弥生後期集落地
32 赤崎山横穴	九天井形	68 日原古墳群	6号墳前期古墳
33 猫ノ谷遺跡	弥生後期作居	69 福市遺跡	弥生～古墳時代大規模集落
34 才ノ神遺跡	弥生後期集落、奈良～平安祭祀	70 青木遺跡	弥生～古墳時代人規模集落
35 鮎岬遺跡	弥生後期、古墳後期～奈良時代集落		

町カンボウ遺跡の瀬戸内技法によってつくられた安山岩製の剥片を用いた削器、同黒井田町小汐手遺跡から玉髓製の削器が出土している。特に後者は東北地方からの搬入品である可能性が指摘されおり、環日本海交流の一端を窺うことができる。<sup>(2)</sup>

縄文時代の遺構・遺物についても、近年の安来道路関係の調査によって徐々に資料が蓄積されつつある。縄文草創期・早期の遺物は極めて稀だが、安来市荒島町柳Ⅱ遺跡で織維土器が若干採集されている。<sup>(4)</sup> 前期になるとやや増加し、高広遺跡で磯ノ森式併行の土器が出土しているほか、同島町島田黒谷Ⅰ遺跡<sup>(5)</sup>で羽島下層前後併行の土器が比較的まとまって出土している。

中期は前述の島田黒谷Ⅰ遺跡から船元式・里木Ⅱ式の土器が若干出土している。また中期末～後期初頭と考えられる住居址状遺構が当遺跡から検出されており、安来地域では唯一の縄文時代の遺構であり注目される。また、当遺跡の南約500mに鶴出シ遺跡・竹原遺跡からは時期は不明だが、小面積の調査にもかかわらず、石錐が比較的まとまって出土しており、付近に縄文時代の集落が存在していたことが窺える。当遺跡Ⅲ区の礫層中出土の石器類もこの辺りから運ばれたものである可能性がある。

縄文後期になると遺跡数は増加し、前述の各遺跡の他、島田町明子谷遺跡、門生黒谷Ⅱ遺跡で当該期の遺物が確認されている。時期的には福田KⅡ式～縁帶文期の時期のものが目立つ。これらの大半は谷底平野の河川堆積物中から出土したもので、この時期にそれぞれの小谷単位で集落が散在していた様相を窺うことができる。<sup>(7)</sup>

#### 弥生時代

安来平野における弥生集落の本格的出現は弥生中期後半から後期初頭にかけての時期であり、中期後半には低丘陵の縁辺部に集落が認められるようになる。当該期の代表的な集落としては、吉佐町山ノ神遺跡、高広遺跡、佐久保町宮内遺跡、同大原遺跡があげられる。<sup>(9)</sup>

後期になると集落数は著しく増加し、これらの大半は比較的比高の高い丘陵頂部付近で検出されている。これら安来平野周辺の弥生時代後期の高地性集落には後期前半を中心とする時期と後期末を中心とする時期の二つのピークがあるようである。<sup>(10)</sup> 前者の代表例としては門生黒谷Ⅲ遺跡、大坪遺跡<sup>(11)</sup>、後者の代表として門生町陽徳遺跡、佐久保町岩屋口北遺跡などがあげられる。

これらの集落の立地の様相は、倭国大乱から邪馬台國の時代における当地域の社会的緊張を何らかの形で反映させていると考えられる。特に終末期の高地性集落は出雲部付近以外の西日本ではあまり類例が無く、今後詳細な検討が必要であろう。また弥生後期後半～終末にかけての当地域の集落においては外来系土器が若干確認されている。当遺跡に隣接するカンボウ遺跡からは北九州系の二重口縁壺、当遺跡では美作の影響を受けたと思われる鉢が出土している。また米子市米子城跡Ⅵ遺跡やその周辺の遺跡では、庄内河内甕をはじめとする畿内系土器が比較的まとまって出土している。<sup>(12)</sup> これらの外来系土器の存在は、当地が陸海交通の要地であるだけではなく、そうした外勢の介入を受けやすい、大規模平野を拠点とした地域勢力の間に位置する一種の緩衝地帯であるという地理的特性も大きく作用していたものと思われる。

また、この時期には、安来平野西端の荒島丘陵に多くの四隅突出型埴丘墓が築かれているが、当該期における安来東部地域の埴墓の検出例はまだ少ない。門生黒谷Ⅰ遺跡に隣接する島田黒谷Ⅲ遺跡では弥生終末期の方形台状墓と思われる埴墓が確認されているほか、黒井田町長曾土塙墓のような集団墓が幾つか確認されている程度である。ただ当遺跡の南に位置する伯太町カウカツ遺跡では

吉備の特殊壺・小形特殊器台を伴う四隅突出型墳丘墓が検出されている。荒島丘陵の四隅突出型墳丘墓で確実な吉備系の特殊壺・特殊器台が確認されていないことからみて、その特異性は注目に値する。

#### 古墳時代

古墳時代前期において、安来平野西端の荒島丘陵では大成古墳・造山1号墳といった全国的にも稀な大型方墳が築造されるのに対し、安来平野東端にあたる当地域においては目立った前期古墳は現在のところ確認されていない。当地域で内容の判明している前期古墳としては、箱式石棺と土器棺を埋葬施設とし、鉄劍（鉄ヤリ）2本を出土した吉佐町八幡山古墳<sup>(16)</sup>、箱式石棺3基を埋葬施設とした1辺約10mの方墳である吉佐町吉佐山根1号墳<sup>(17)</sup>、土器棺2基が検出された小規模な方墳である陽徳II区1号墳<sup>(18)</sup>、箱式石棺1基が検出された五反田5号墳<sup>(19)</sup>、やや西に位置するが、鉄劍・管玉が出土した宮内町新林古墳群などがあげられる。これらの古墳はいずれも一辺10m前後の小規模なものである。これらの前期古墳は各小河川単位に3~4基前後存在するようであり、それぞれの小河川沿いの狭い小平野を生産基盤とした在地首長の墳墓であると考えられる。

中期になると、飯梨川東岸の安来東部においても大型の古墳が築かれるようになる。代表例としては川西編年II期併行の埴輪をもち竪穴式石室を主体部とした五反田1号墳、出雲最古の舟形石棺を埋葬施設とした全長約50mの尾堀塚古墳<sup>(20)</sup>、大型円墳であるあんもち山古墳などがあげられる。これらの安来東部の大型古墳は円墳ないし前方後円墳で占められており、飯梨川西岸の大型古墳が方墳系であるとの好対照をなしている。

古墳時代後期になると安来平野全域で横穴墓が築かれるが、安来市東端の当地域では他の地域とやや異なる展開をとげる。当地域では神代塚古墳・吉佐貝塚古墳といった安来地域では極めて例外的な横穴式石室をもつ古墳が築かれたのち、首長墓は横穴墓である穴神1号墓へ移行する。穴神1号墓は平面形態・羨道・玄門の構造などから米子平野の横穴墓との共通点が指摘されている一方<sup>(21)</sup>、家形石棺は当該期の出雲に通有にみられるタイプのものである。こうした小地域の首長墓制の変化に6世紀から7世紀にかけての国境地域の複雑な政治的動向の一端を垣間みることができる。なお穴神1号墓の調査においては家形石棺に彩色壁画が描かれていることが再確認され、話題となつた。

古墳時代の集落としては、前期では確実なものは確認されていない。中期以降集落の検出例は丘陵斜面部を中心に一気に増加する。門生黒谷II遺跡・平ラII遺跡・石田遺跡・カンボウ遺跡など当該期の集落例は数多い。またこの時期には安来平野において大原遺跡を代表とする多くの玉作遺跡が確認されている。その他の当地域の生産遺跡としては県内最古の須恵器窯である門生黒谷山根1号窯を含む門生黒谷古窯跡群、6世紀後半~8世紀の専業鍛冶工房である吉佐町徳見津遺跡・五反田遺跡などがあげられる。後者のような製鉄・鍛冶関連遺跡は米子市西部の陰田・新山遺跡群においても広く展開していることが知られており、当地域一帯が当時の鉄製産地帯であったことが窺える。

#### 奈良時代

律令期以降も集落が数多く確認されており、前述の鍛冶工房もこの時期にも引き続き操業が行われている。官衙関係の遺跡は明瞭でないが、当遺跡や島田南遺跡<sup>(22)</sup>では墨書き土器等の文字資料が出土しており、注目される。寺院関係では「出雲國風土記」に記載のある「教吳寺」と推定される寺院

跡が安来平野南部において確認されている。<sup>(30)</sup>またこの教吳寺出土のものと同様な軒丸瓦が門生町陽徳寺遺跡で出している。<sup>(31)</sup>

以上、吉佐町周辺の地理的・歴史的環境について述べてきた。当地域がさして農業生産力の高い小規模平野であるにもかかわらず、多くの注目すべき遺跡が存在する要因としては交通の要衝であることと、冒頭に述べた雲伯国境の地であるという地理的特性によるところが大きく作用しているものと思われる。しかしそれだけで説明できない問題も多く、今後各時期の遺構・遺物についての詳細な検討を踏まえ、当地域の歴史的展開を考えていく必要があろう。

## 註

- (1) 島根大学汽水域研究センター『中海・宍道湖とその流域』公開シンポジウム報告集 1993
- (2) 島根県教育委員会『石田遺跡・カンボウ遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 1994
- (3) 安来市教育委員会 水口晶郎氏・島根県埋蔵文化財調査センター 丹羽裕裕氏から御教示を頂いた。
- (4) 島根県教育委員会『拂II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区N 1996
- (5) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書』1984
- (6) 島根県教育委員会『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷I遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 9 1995
- (7) 安来市教育委員会『県道米子伯太線改良工事に伴う試掘調査報告書』1996
- (8) 島根県教育委員会『明子谷遺跡・島田黒谷II遺跡・島田黒谷III遺跡・猫ノ谷遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V 1994
- (9) 島根県教育委員会『越峰遺跡・宮内遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書N 1993
- (10) 島根県教育委員会『白コクリ遺跡・大原遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 V 1994
- (11) 島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ラI遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11 1995
- (12) 島根県教育委員会『門生一門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡の調査』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14 1998
- (13) 下部吉博「大坪古墳群」「面道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書T」1976
- (14) 島根県教育委員会『岩原口北遺跡・白コクリ遺跡(F区)』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13 1997
- (15) (財)鳥取県埋蔵文化財調査センター『米子城跡6遺跡』1996 なお庄内河内郷については平成9年度の調査で出土したものであり、調査担当者の湯村功氏から御教示を得た
- (16) 東森市良「7章 八幡山古墳」「安来市内遺跡分布調査概報II-(宇賀荘・島田・安米地区)」-1989 安来市教育委員会
- (17) 島根県教育委員会『平ラII遺跡・吉佐山根I号墳・穴神横穴墓群』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10 1995
- (18) 註11に同じ
- (19) 註12に同じ
- (20) 平成6年度に安来市教育委員会が調査
- (21) 大谷亮二・清野孝之「昆尾塚古墳の再検討」「島根考古学会誌」13集
- (22) 安来市教育委員会『安来市内遺跡分布調査報告書』 1991
- (23) 註22に同じ
- (24) 註17に同じ
- (25) 島根県教育委員会『徳見津遺跡・日廻遺跡・陽徳寺遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 1996
- (26) 島根県教育委員会『五反田遺跡・山の神遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 16 1998
- (27) (財)米子市教育文化財団『新山遺跡群・奥陰田遺跡群調査概報』 1993他
- (28) 島根県教育委員会『島田南遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 3 1992
- (29) 安来市教育委員会『教吳寺』 1985
- (30) 註25に同じ

### 3. 調査の経過状況と概要

#### 1章 これまでの調査経過

石田遺跡はこれまでに4回にわたって調査が行われており、最初の2回の調査については既に報告書も刊行されており、今回報告するのは第3次・4次調査分についてである。ここではまず既報告分の概要について簡単にふれたのち、今回報告する第3次・4次調査の経過について述べていきたい。

##### 1. 第1次調査（平成5年度）<sup>(1)</sup>

第1次調査は平成5年の4月から12月にかけて一般国道9号安来道路建設に伴う事前調査として実施した。調査区は御茶屋川の右岸の丘陵縁辺部から平野部にかけての部分である。この調査では丘陵部縁辺部をⅠ区、水田部西側をⅡ区、カンボウ遺跡寄りの東側をⅢ区として調査が行われている。

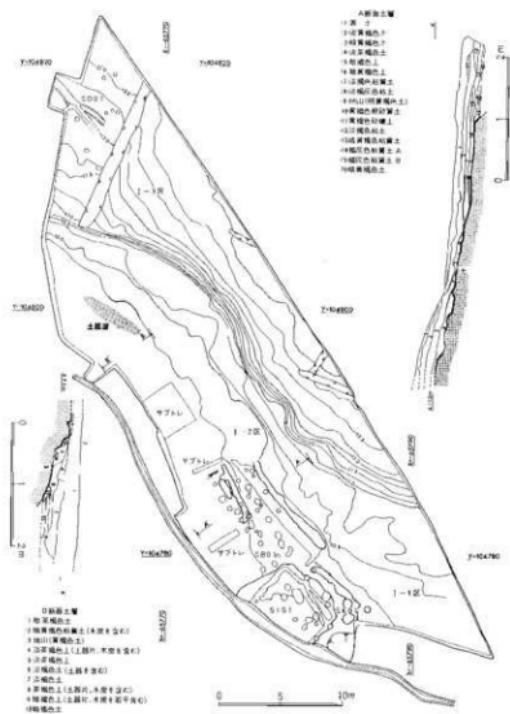
遺構は主としてⅠ区で確認されており、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物跡などの集落の一角が明らかにされている。特に竪穴住居（S I 01）では出雲の平野部では珍しい作り付けの竈が検出され、注目された。

また東側に隣接するカンボウ遺跡でも、同年度の調査で当該期の住居址が数棟確認されており、この時期に吉佐の小平野の丘陵縁辺部一帯に集落が広がっていたものと予想される。

水田部のⅡ・Ⅲ区では溝状遺構や自然河道が検出されている程度で、明確な集落址は確認できていない。後述する本報告のⅢ区の様相に類似する状況であり、主として水田等の生産の場として利用されていたようである。遺物は主として古墳時代後期の遺物が包含層中から多数出土している。また中近世の陶器器類も比較的まとまって出土しており、報告者は上流に位置する六ノ坪遺跡内の寺院跡との関連を指摘している。



石田遺跡調査参加者（第4次調査時）



## 2. 第2次調査（平成5年 度）<sup>(2)</sup>

第2次調査は第1次調査中の平成5年の10月から11月にかけて行われた。この調査は第1次調査の安来道路建設に伴う調査ではなく、これに関連する県道改良工事に伴う調査である。同じ年度に行われた調査ではあるが、調査原因が異なることから本報告では第2次調査と呼称しておく。

調査区は御茶屋川右岸の水田部で、本報告Ⅲ区の北に隣接する地点である。調査区は約200m<sup>2</sup>のトレンチ状の調査であったこともあり、溝状遺構とピット敷基を検出したのみであるが、溝状遺構中から弥生終末期の搬入系土器が出土している。

### 3. 第3・4次調査（平成7年度）

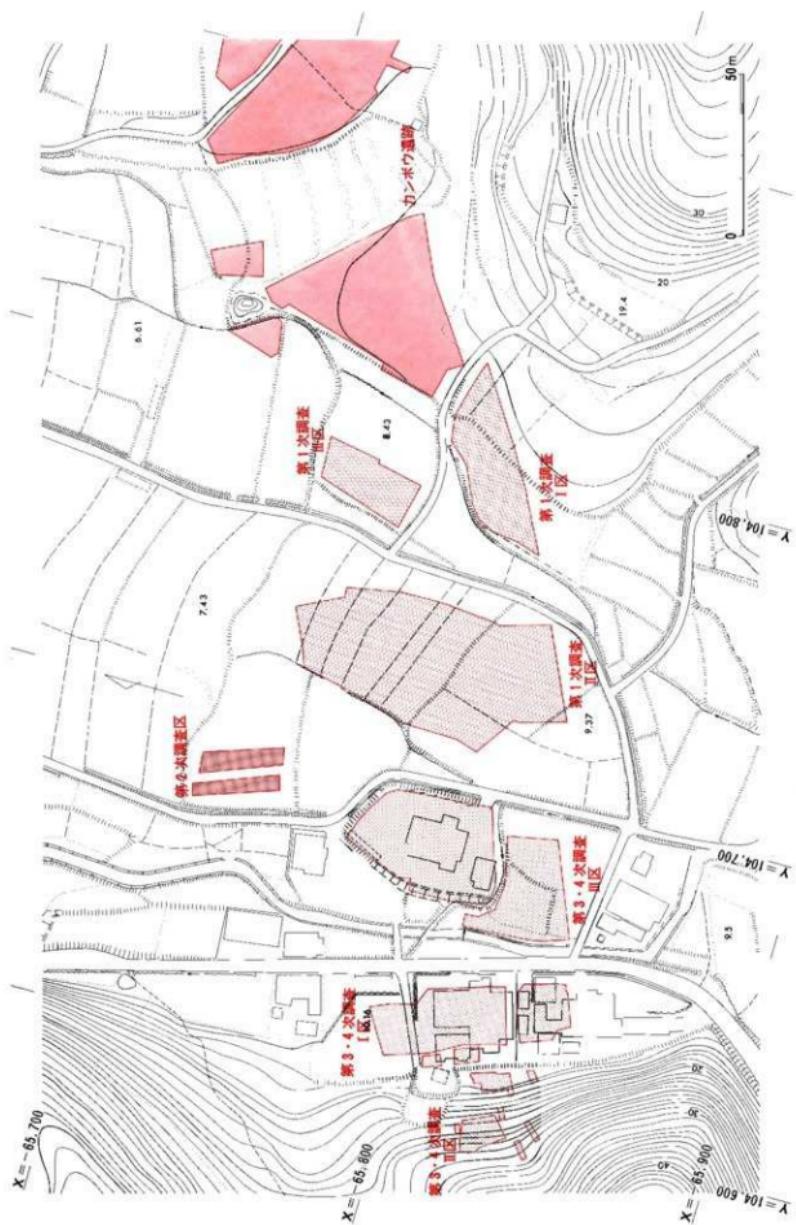
第3次調査は第1次調査と同様安来道路建設に伴う調査で、調査区は第1次調査時に

第3図 第1次調査1区全体図(遺構S=1/400, 土層S=1/80)

は用地買収及び家屋移転が終了していなかった第1次調査区の西側、御茶屋川両岸地区である。

平成6年度の試掘調査からこの地区にも遺構・遺物の存在が予想されたため、平成7年度に全面調査を実施する運びとなった。当初は半年度で全調査区の調査を実施する予定であったが、後述する御茶屋川右岸のⅢ区内に位置する家屋の移転が大幅に遅れ、7年度中のⅢ区の調査は実質上不可能となつた。よって建設省との協議の上、平成7年度には御茶屋川左岸の河岸段丘上に位置するⅠ区と、穴神横穴墓群の立地する丘陵東側斜面のⅡ区についての本調査を実施し、Ⅲ区については家屋移転が終了次第平成8年度内で対応することとなつた。

第3次調査は平成7年6月からI区の表土掘削から開始し、縄文時代から古墳時代にかけての各時期の集落や終末期の円墳などを検出したのち、10月6日に終了した。第4次調査は家屋移転が終了した平成8年3月4日に重機による表土掘削を開始した。III区は遺構は少なかったものの、包含層である礫層中から多種多様な遺物が出土し、5月31日にすべての調査を終了した。



第4図 調査区配置図 ( $S = 1/1500$ )

## 2章 調査区の概要

### 調査区区割りについて

今回報告分の第3次・4次調査分の調査区については、第3次調査の御茶屋川左岸の低段丘部分をI区、その西側の丘陵東斜面部をII区、そして第4次調査時の御茶屋川右岸水田部の調査区をIII区と本報告中では呼称する。

なお、I～III区の名称は平成5年度調査時にも使用しているが、本報告中では特別な断りが無い限りI～III区の呼称は第3次・4次調査の区割りを指すこととし、必要な際には「第1次調査○区」と記述することとしたい。以下、調査経過に従って各調査の細かな概要について述べておく。

### I区の調査経過と概要

I区の調査は平成7年6月21日に表土掘削を開始した。調査区内は現在も使用している排水溝が東西に走っており、この部分は調査不可能であることから、この溝を境に北半部をI-N区、南半部をI-S区と呼称することとし、I-N区の調査から開始した。

I区は調査前まで宅地として使用されていたこともあり、かなり削平・搅乱が及んでいたが、主として後述するI-N-3・5区から多数の掘立柱建物跡・土壤・溝を検出した。掘立柱建物の性格上、明確に共伴する遺物を確認できなかったが、付近からの出土遺物からみて6世紀末から7世紀前半にかけての建物跡と考えられる。その後I-N区中央部で古墳時代前期の堅穴住居址、北端部で古墳時代中期の堅穴住居址を検出した。特に前者は出雲地方では珍しい2本柱の住居址であり、床面からは外来系土器と考えられる小型器台・二重口縁壺を検出した。I-N区の調査は8月23日に空撮を行い、9月5日に全ての作業を終了した。

I区南半分のI-S区の調査は8月29日から着手した。I-S区も宅地の跡地でかなり搅乱が及んでいたが、主として西半部から6～7世紀代の掘立柱建物跡を数棟検出した。また調査区南西部からは円形プランと想定される縄文時代中期～後期初頭の住居址を1棟検出した。

I-S区東側は御茶屋川の旧河道であるSR01が南北に走っており、6世紀後半にこの河道を人为的に埋め立てた上に建物が営まれていたものと考えられた。このSR01の覆土中からは埋め立ての際に投棄された多量の土器が出土し、小面積の調査であるにもかかわらず調査は約1カ月近くかかり、9月28日にI-S区の調査を終了した。

なお9月29日には地元吉佐町住民を対象にミニ現地説明会を開催し、多数の参加を得た。

### II区の調査経過と概要

II区の調査はI区の調査と平行してトレンチ調



現地説明会風景（第3次調査時）



I 区調査風景

査を行い、のちにS X01と呼称することになった終末期古墳を検出したため全面調査に切り替え 9月4日から着手した。

II区はかなりの急斜面で、調査前にはマウンドらしき高まりも全く認められず、当初は遺構は存在しないものと考えていた。トレンチ調査時に、後でS X01の埋葬施設の一部であることが判明した石列状遺構を検出した際にも古墳であるとは想定しておらず、付近を拡張して周

溝を確認し、初めて終末期古墳であることが解った次第である。よってトレンチ調査の際に墳丘部分の中央部を抜いてしまい、埋葬施設の構造までを十分明らかにできず、反省点の多い調査であった。

II区ではこのS X01のはか、供獻土器の認められたS X02や集石土壌であるS X03といったやや特殊な土壌を検出した。性格は明らかではないが、S X01と隣接することからみて墳墓関連の遺構と想定される。

第3次調査は10月6日にその全てを終了した。

### III区の調査経過と概要

第4次調査であるIII区の調査は平成8年3月4日から着手した。III区は調査前までは水田及びそれを埋め立てて造成した宅地として利用されていた場所である。

III区は第1次調査II区の西に隣接する調査区であり、当初は第1次調査の状況からみて、耕作土下に黒褐色粘質土系の厚さ10cm~20cm前後の薄い遺物包含層があり、その下は地山である砂礫層が存在するものと考えていた。ところが調査を進めるにつれ、III区東側は第1次調査時II区と同様な状況であったが、III区西側は地山と考えていた砂礫層中に多量の遺物が含まれている事実が判明した。これらの砂礫層中の遺物は御茶屋川の氾濫時に上流からもたらされたものと考えられるが、かなりの量があり、比較的近接した場所に大規模な集落が存在したものと予測される。

この砂礫層の調査は深いところで約2m近くの深さに達し、人頭大の大型の礫をやっとこき取り除くと、下から完形の須恵器が出土するといった状況であった。鍬は石に跳ね返されて齒が立たず、県内の各調査現場からツルハシをかき集めて、調査員も総出でツルハシを振るうといった、知らない人が見れば一見、ひと昔前の工事現場と見間違うかのような調査であった。

III区の調査では、前述の砂礫層中から墨書き器やヘラ書き器をはじめとする、主として古墳時代後期~奈良時代の遺物を多数検出したほか、調査区北西部で竪穴住居址、総柱建物を含む掘立柱建物跡2棟、溝等の各種遺構を若干ながら検出した。これらの遺構はかなり削平されており出土遺物に乏しいが、おおよそ6世紀後半から7世紀にかけての遺構であると考えられた。

III区の調査は平成8年5月31日に空掘を実施し、全ての調査を終了した。

## 4. 調査の結果

### 1章 I区の調査

I区は御茶屋川の左岸に位置し、川が細長い谷から吉佐の小平野へ出る、扇状地の扇の要にあたる位置に立地する。標高は約8m～10m前後であり、段丘状地形の緩やかなに斜面上に集落が営まれている。東側約500mにはカンボウ遺跡、西側約200mの丘陵には彩色壁画の発見で一躍有名になった穴神1号横穴墓が位置している。I区の調査面積は約1,000m<sup>2</sup>である。

I区は、既に述べたとおり北のI-N区と南のI-S区とに分かれるが、I-N区ではさらに南北に1本、東西に2本の土層観察用ベルトを任意に設定し、都合6区に区切って調査を実施した（第5図）。

#### 1節 I-N区の調査

I-N区は、経過のところで述べたとおり、調査前は宅地として利用されており、特に西半部に開拓してかなり削平された状況が認められたが、東半分については遺構・遺物の遺存状況は比較的良好であった。

**遺構の分布状況** 遺構の分布状況は、I-N区東半のI-N-3・5区に6世紀～7世紀にかけての掘立柱建物跡（S B02～04、S B09・10）が集中して認められ、掘立柱建物群の北に隣接して古墳時代前期の竪穴住居址S I 02が位置し、調査区北端のI-N-1・2区に古墳時代中期後半の竪穴住居址であるS I 01や加工段を伴う掘立柱建物であるS B01が位置している。

I-N区の西半分は削平のため遺構の遺存状況は良好ではないが、近世の掘立柱建物と想定されるS B08やS K03が存在する。

**基本層序** I-N区の基本層序は、造成土の下に厚さ約30cm～40cm前後の黒色系～暗灰褐色系の遺物包含層が存在し、その下に遺構検出面である明黄褐色系の地山面が認められる。

ただしこの黄褐色の地山面が認められるのはI区西半部のみであり、東半部はこの基盤層の上に黄・白色地山ブロックを多く含む灰褐色～黒褐色系の粘質土が堆積しており、この上面から遺構が掘り込まれていた。この地山ブロックを含む灰褐色～黒褐色系の粘質土中には出土遺物は認められず、遺構が営まれる以前に東側斜面から流れた土が堆積したものと考えられる。

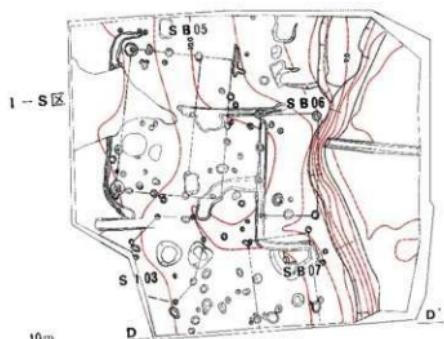
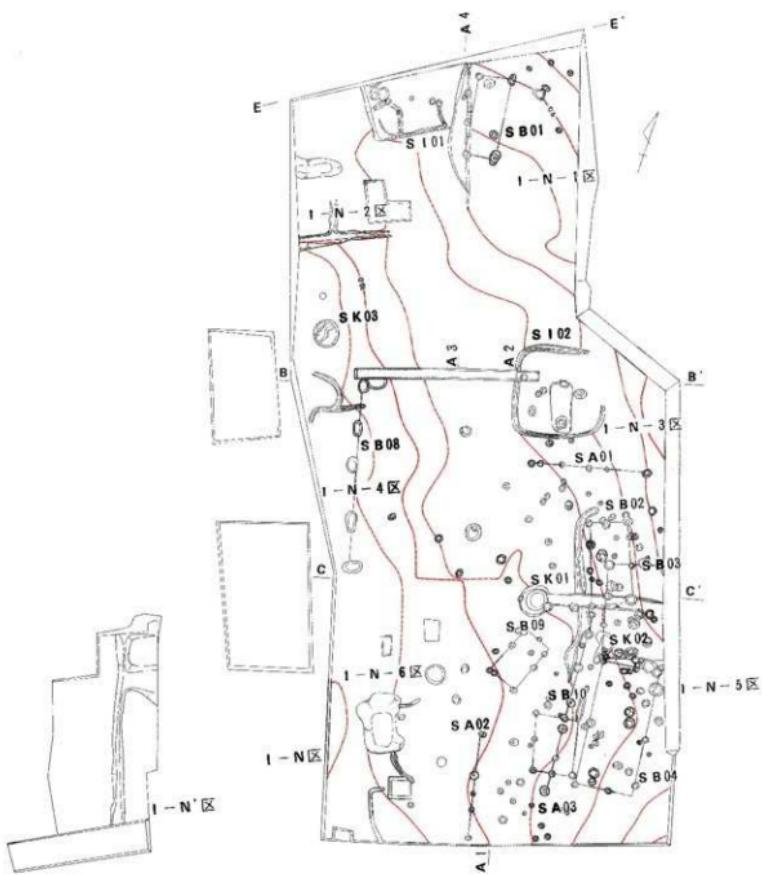
調査当初、この地山ブロックを含む灰褐色～黒褐色系の粘質土を包含層として誤認しており、部分的に掘りすぎてしまった部分がある。第5図のI-N-3・4区境界付近でコンタが乱れているのはこのためである。

また遺物包含層である黒色系～暗灰褐色系の土層中より掘り込まれているピットが断面で幾つか確認されており、本来は複数の遺構面が存在したものと思われるが、遺物包含層中の遺構プランの検出は困難な状況であった。

以下、竪穴住居址、掘立柱建物跡、柵列、土壤の順に各遺構について報告していきたい。

#### A. 竪穴住居址

##### S I 01（第8図）



第5図 I区遺構配置図 ( $S = 1/250$ )

I-N区北端で検出した堅穴住居址で、住居址の北半分は調査区外に存在する。当住居址は平成6年度の試掘調査において既に確認されており、前述した明黄褐色系のしっかりとした地山に掘り込まれた住居址でプランの検出も比較的容易であった。

**規模・形態** 住居址のプランは整美な方形を呈しており、西側と南側の壁は残存するが、斜面下方にあたる東側は壁が残っていない。住居址東側はS B01と切り合っており、プランや土層観察からはS B01→S I 01の順であると想定されるが、今一つ定かではない。

現存での規模は東西辺が4.3m、南北辺が3.0mを測る。住居址西壁中央部に位置すると想定されるP 1中心部を基点に折り返すと、住居址本来の規模は東西約4.5m、南北4.8m前後であったと推測される。

**覆土** 住居址内の覆土は、上層から地山ブロックを含む黄褐色土、焼土・炭を含む暗灰褐色土、そして床面直上に炭を多量に含む黒褐色土が薄く堆積していた。遺物は主として暗灰褐色土、黒褐色土中から出土している。

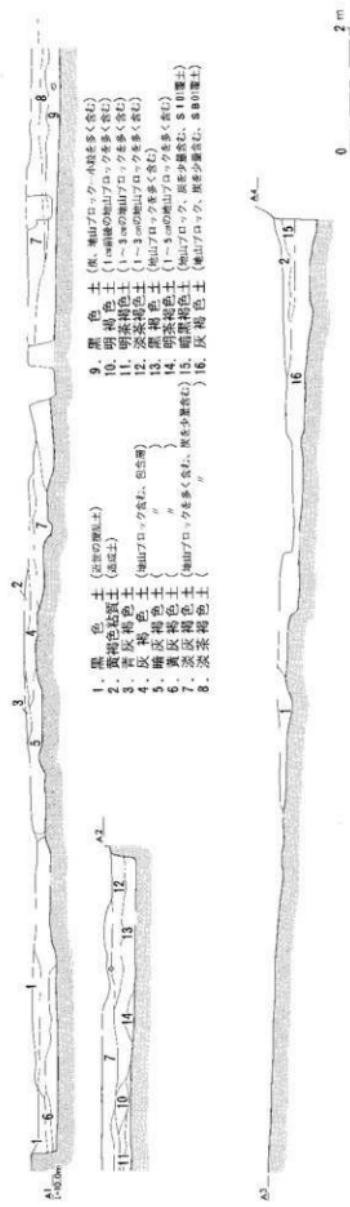
なお、東西の断面観察では当住居址の東側に壁体構造の落ち込みとそこから上へ立ち上がるラインが観察されたが、先に述べたとおり明瞭なものではない。

**床面** 床面は大部分が残存しており、基本的に地表面を水平に整え床面として使用している。

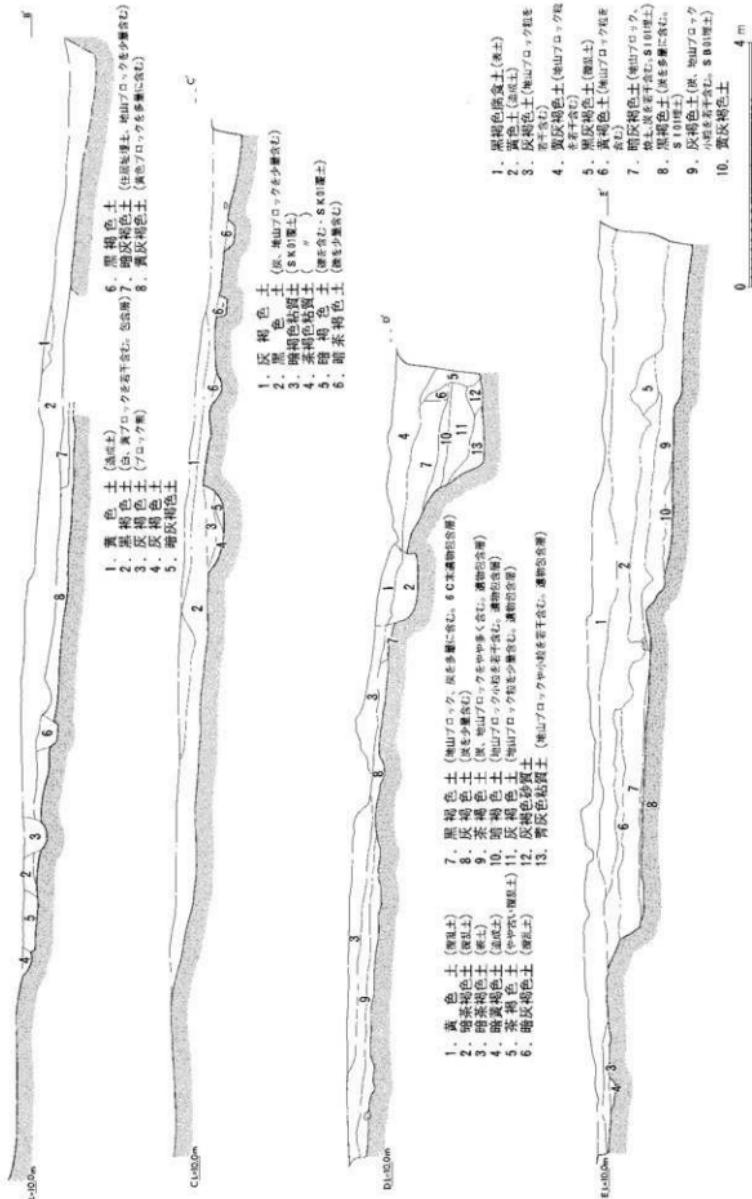
また当住居址は建て替えが行われており、中央ピットの切り合い関係からみて西側の斜面上方へやや拡張したことが窺える。この際の床面はレベルを変えることなく部分的に粘土を薄く張って床面を整えている状況が観察された。

#### 柱穴・壁体構造

住居址床面からは柱穴と想定されるピットを5基検出している。このうち主柱穴と想定されるのはP 3～5である。このうちP 3、

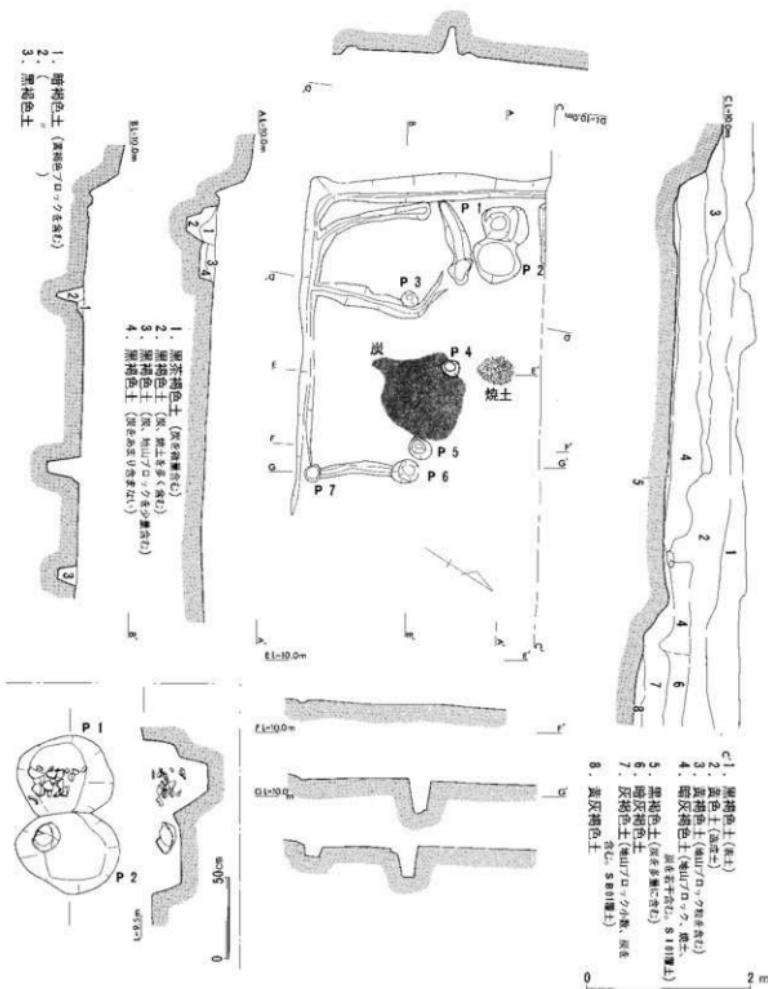


第6図 I区調査区土層図(1)

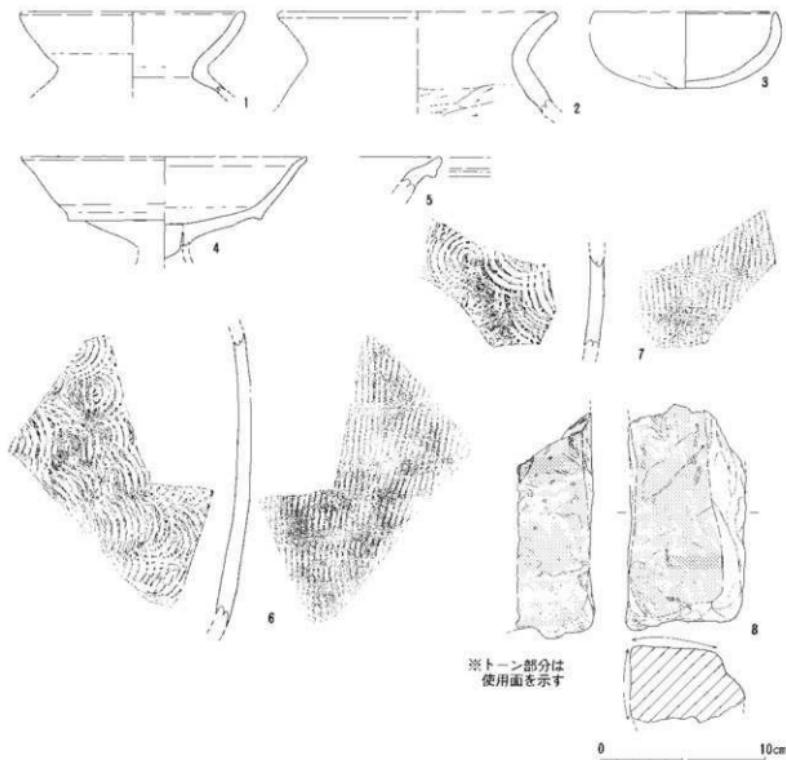


第7図 I区調査区土層図(2)

P 6 が配置からみて四本柱の主柱穴に相当し、P 4 が 2 本柱の主柱穴に相当するものと考えられるが、その前後関係については明らかにできなかった。柱穴の規模は径 20cm～30cm と小規模なものだが、深さは 40cm 前後と深くしっかりしている。こうした径は小さいが深くしっかりした柱穴は、当地域における 5 世紀代の建物の柱穴に普遍的に認められるものである。



第 8 図 I-N 区 S 101 実測図 (S = 1/60)

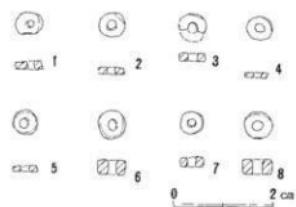


第9図 I-N区S 101出土遺物実測図(1) (S = 1/3)

壁体溝は住居址壁の残存する部分をほぼ周全しており、住居址南西隅は建て替えのため部分的に2重に巡っている。壁体溝の規模は幅20cm弱、深さ5cm前後を測る。

また住居址南側壁体溝とP 3・P 6との間には幅15cm前後の間仕切り用と考えられる溝が確認された。このうち南壁体溝とP 3との間の間仕切り溝はP 3付近で西壁へ向けて折れ曲がっており、住居址南西部を仕切って何らかの空間を割り出そうとした意図が窺える。

**炉・焼土面** 炉と想定される土壌は住居址西壁付近で2基切り合って検出された。この2基は、土層観察から建て替えの際にP 2→P 1へ作り替えられたものと



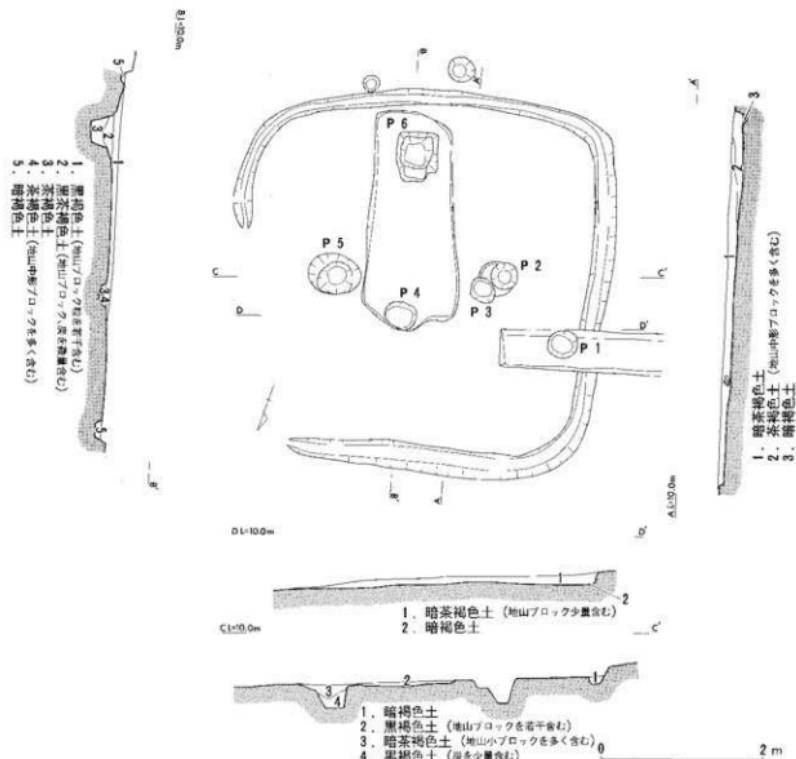
第10図 I-N区S 101出土遺物実測図(2)  
(S = 1/1 1~4床面出土、5~8 P 1・2出土)

想定される。炉のプランは不整圓丸方形を呈し、規模は径55cm～60cm、20cm～37cmを測り、新しいP 1の方が深い。炉の南北には住居址西壁に直交して長さ1.05m、幅20cmの溝が2条取り付いている。炉内の埋土は、P 1では上層が黒茶褐色土、下層が炭・焼土を多く含む黒褐色土が堆積していた。一方P 2の覆土は同じ黒褐色土系の土ではあるが、炭・焼土は顕著に認められていない。

焼土面は、住居址中心部付近で50cm×35cmの楕円形状の広がりが認められた。またP 4とP 5との間には比較的広範囲にわたって炭が集中している面を確認している。

**遺物の出土状況** 遺物は覆土中から須恵器壺片や土師器が若干出土しているほか、床面付近でも少數ながら遺物が確認された。特に炉と想定されるP 1・2からは、土師器高杯・甕に伴い滑石製白玉が数点出土している(第8図左下)。高杯といった祭祀的な器種の土師器や滑石製白玉の存在からみて、炉を廃棄する際に何らかの祭祀行為を執り行つたものと考えられる。

#### S I 01出土遺物(第9・10図)



第11図 I-N区S I 02実測図 (S = 1/60)

第9・10図はS I 01からの出土遺物である。第9図1は甕の口縁部で、口径13.8cmを測る。口縁部は単純口縁タイプのもので、やや内湾気味に立ち上がり口縁部端部は丸く収める。色調は赤褐色を呈し、5世紀代の甕によく見られるものである。2はP 1から出土した甕で、口径17.1cmを測る。1と同様単純口縁タイプのものだが、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。

3は土師器壺で床面から出土した完形品である。砂粒を殆ど含まない精緻な胎土で色調は赤褐色を呈する。底部付近には手持ちヘラケズリしき痕跡が認められるが定かでない。4は炉と想定されるP 2から出土した高杯部で、口径17.6cmを測る。杯部は突帯状の稜をもって大きく外反するタイプのもので、杯部底面には脚部との接合時に上から粘土棒を押し込んだような痕跡が認められる。

5は須恵器甕の口縁部で、ベルト中の出土である。口縁部端部よりやや下がった位置に断面半円形状の突帯がめぐっている。6・7は須恵器甕の胴部片で覆土中の出土である。外面に平行タタキのちカキメ、内面には同心円状當て具痕が認められ、特に當て具痕をナデ消した形跡は見当たらない。

8は床面出土の四角柱状を呈する砥石で、片側を欠損しているが現状で長さ13.7cm、幅6.9cm、厚さ4.7cm、重量651gを測る。2面に使用したと考えられる平滑な面が認められる。

第10図はP 1・2及びその周辺床面から出土した滑石製臼玉である。いずれも同様な形態を呈し、径4.8~5.4mm、孔径1.8mmを測る。

**年代** 住居址内出土土器は、概ね松山編年N<sup>(3)</sup>期に収まるものと考えられ、住居址の特徴もこの年代観と矛盾しない。

#### S I 02 (第11図)

S I 02はI-N-3区で検出した竪穴住居址で、標高9.5m前後の緩斜面上に立地する古墳時代前期の住居址である。この時期の造構は、当調査区においてはS I 02しか確認していない。

**規模・形態** S I 02は上半部をかなり削平されていたが、床面はほぼ残存しており、およそその規模・構造を知りうることは可能である。平面プランは隅丸正方形を呈し、東西4.8m、南北4.7mをはかる比較的小型の住居址である。住居址壁は大半が失われていたが、比較的残りの良い西側で壁高約15cmを測る。

**覆土** 住居址内覆土は、上層が暗茶褐色土、下層が地山ブロックを多く含む茶褐色土が堆積していた。遺物はどちらの層からも若干はあるが出土している。

**床面** 床面は大半が残存しており、特に貼床などの施設は認められなかった。

**柱穴・壁体溝** ピットは床面上から計6基検出しているが、このうち主柱穴と想定されるピットはP 2とP 5の2基であり、2本柱構造の竪穴住居址であったと考えられる。主柱穴であるP 2・5の規模は径42cm~65cm、深さ30cm前後を測る。

壁体溝は北西部を除いて壁沿いにはほぼ全周しており、幅約25cm、深さ10cm前後のものである。

**炉・焼土面** 炉と想定される土坑は住居址南壁に寄ったところで検出した。この土坑はやや特異な構造のものである。すなわち、まず住居址中央部から南壁付近にかけて、長さ約2.7m、幅1.2m、深さ5cm前後の浅い土壌を掘り込み、この土壌の南端に1辺約50cm、深さ30cmを測るほぼ正方形の土壌(P 6)を掘り込んでいる。これに対応するかのように浅い土壌の北端にも径40cm、深さ10cm弱の浅いピット(P 4)が認められた。

2段掘りを呈し、1段目が浅いタイプの中央ピットは当該期に比較的類例が認められ、蓋状の板を受けるための施設である可能性が指摘されているが、こうしたかなり大型で長方形を呈するタイ

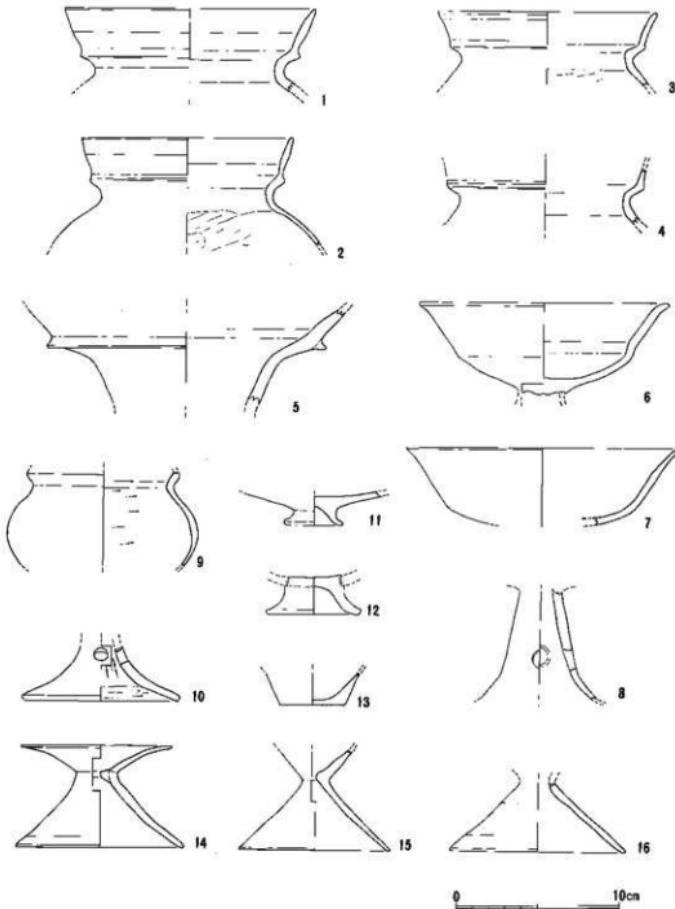
のものはあまり例がない。方形ピット（P 6）内の埋土は、上層に炭化物を若干含む黒褐色土、下層に茶褐色土が堆積していた。

また、この土壙の他は火薬らしき焼土面などは検出されていない。

**遺物の出土状況** 遺物は覆土巾から若干出土したほか、床面、中央ピットであるP 6 からも既生土器が比較的まとまって出土している。P 6 からは第12図6・7の高杯が出土しており、時代は異なるがS I 01と同様住居址廃棄時に炉内に高杯を投棄したものと考えられ、興味深い。

#### S I 02出土遺物（第12図）

第12図はS I 02からの出土遺物である。1は床面からやや浮いた状態で出土した甕で、口径15.4



第12図 I-N区S I 02出土遺物実測図 (S = 1/3)

cmを測る。色調は淡黄褐色を呈し、口縁部段部は横方向に突出する。口縁部は直線的に立ち上がり、やや中央部で膨らみをもったのち、口縁部端部をやや細く丸く収める。2は床面直上から出土した甕である。色調は淡黄色を呈し、口縁部形態は1の甕に類似する。胴部内面のヘラケズリは右方向である。3は口径13.4cmをはかる甕で、口縁部は直線的に外向きに立ち上がり、口縁部端部は若干外向きに折り曲げ気味に収めている。内面のヘラケズリは右方向である。

5は床面から出土した2重口縁甕で、頸部は「ハ」字状に大きく開き、口縁部段部は断面三角形の突帯を貼り付け横向きの突出を指向している。色調は黄褐色を呈し、在地のものとやや異なる印象を受ける。畿内系2重口縁甕の影響を受けたものであろう。

6はP 6から出土した高杯の杯部で、淡黄褐色を呈し口径15.3cmを測る。杯部はゆるい稜をもって外反し端部はやや外向きに折れ曲がる。脚部との接合は円盤充填によるもので、底部に円形の刺突痕を残す当地域に通有のタイプの高杯であるが、やや小振りで杯部が深い印象を受けるものである。7も基本的には6と同じ高杯の杯部であるが、やや大型で杯部が浅いタイプのものである。8は高杯脚部で脚部屈折部付近に2方向に円形透かしを穿つ。

9は口縁部端部を欠損しているが、口縁部がやや内傾する短頸甕と思われる資料である。胴部はよく張り内面に右方向のヘラケズリを施す。11・12は低脚杯の脚部で、いずれも色調は淡黄褐色を呈し、脚端部は外反を指向し丸く収める。

10・14～16は小型器台高杯である。10は小型器台高杯の脚部と考えられる資料で、底径9.8cmを測り、脚部はゆるやかに大きく外反し脚端部に面を形成する。脚部中程に円形透かしを穿つ。

14は完形の小型器台で、色調は青みのかかった淡灰白色を呈する。受部と脚部が貫通するタイプの器台で、口縁部は立ち上がりがなく単純口縁のもので、ゆるやかに外反する。風化の為、内外面の調整は不明。

15・16は小型器台脚部の資料で、いずれも14に似た色調・胎土の特徴を備え、受部と脚部が貫通するタイプのものである。脚部はほぼ直線状に「ハ」字状に大きく開く。

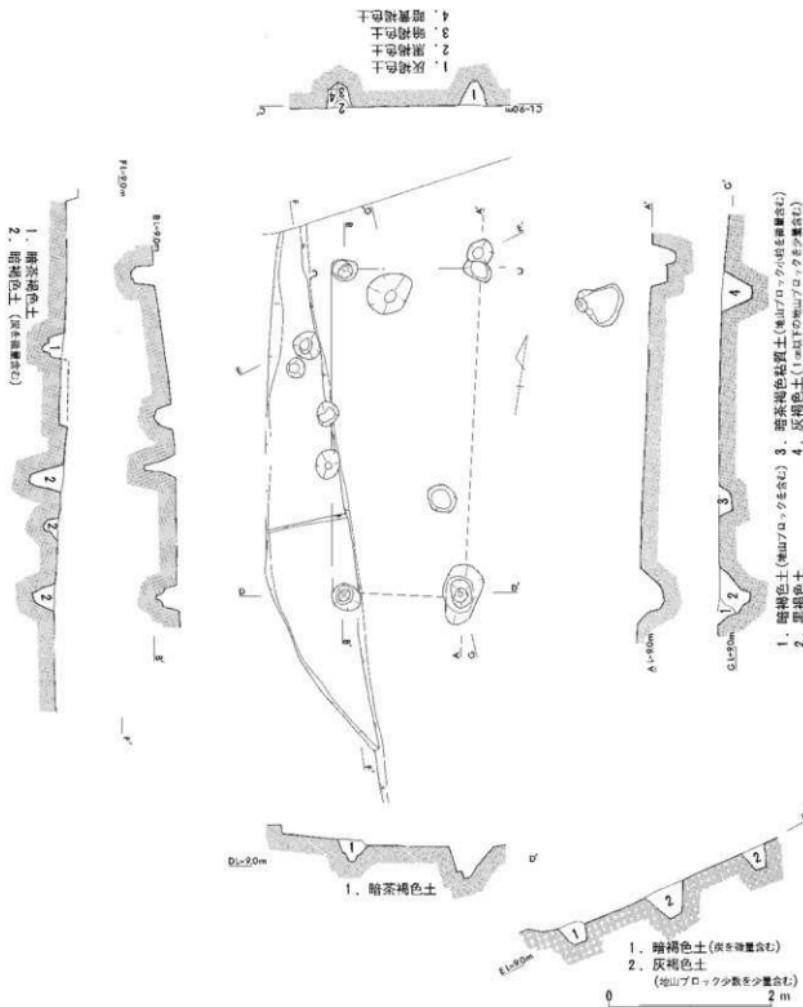
**年代・性様** 当住居址出土資料には在地のもの他、かなり外来系の影響を受けたと思われる土器が出土している。5は畿内系2重口縁甕の影響を受けたものであり、14～16の小型器台も外来系土器の影響を受けたもので、色調・胎土とも在地のものとは異なる。14～16の器台については細部において若干異なるにせよ畿内の小型器台の影響化に成立したものと考えられる。<sup>(4)</sup>

在地の土器の特徴は、風化が著しく特徴が掴み難いが1・2は色調や胎土は口縁部の特徴から一見草田編年5期<sup>(3)</sup>、塩津山編年5期前後のものにも一見みえる。ただ2のように口縁部段部のがやや鈍いつくりである点や、3のように複合口縁部の立ち上がりが短い点は古墳時代前期後半の特徴を有する。また高杯の形態も小型で杯部が深く、脚部に円形の空かしを穿つもので、前期後半によくみられるタイプのものである。こうした点からみて当住居址の年代は古墳時代前期後半と考えられ、壁際土坑を有する住居址の形態上の特徴とも符合するものである。

#### S B01(第13図)

S I 01の北側で検出した加工段を伴う掘立柱建物跡で、標高9.0m前後の緩斜面上に位置する。加工段の北側は調査区外へ延びている。S I 01の記述で述べたとおり、S I 01とは切り合い関係にありS B01が先行するものと考えられる。

**規模・形態** S B01は傾斜に平行して南北方向を主軸に造成されており、加工段の規模は現存する

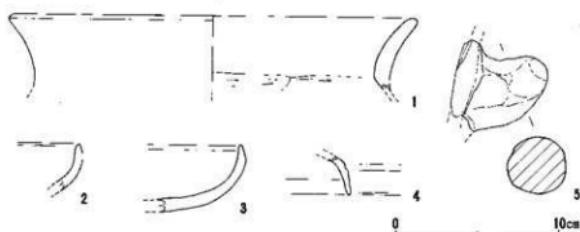


第13図 I-N区S B01実測図 ( $S = 1/60$ )

規模で長さ6.6m、幅2.7mを測る。加工段の壁はS I 01によって切られているため残りが悪く、現存する高さで壁高約10cmを測る。形態は整美なものではなく、コーナー部分は緩くカーブを描いている。

**覆土** 覆土は炭化物・地山ブロックを含む灰褐色土であり、暗黒褐色～灰褐色系のS I 01の覆土との区別はやや困難なところがあった。

**床面** S B01はI-N-1・2区にまたがって位置しており、先にI-N-1区を調査した際床面



第14図 I-N区S B01付近出土遺物実測図 (S=1/3)

を数cm掘り過ぎているが、概ね遺存状況は良好と言える。床面は基本的に地山を削り出すことによって作られているが、床面は水平ではなく、東へ向けて緩やかに傾斜している。

**柱穴・壁体溝** 加工段内からは計11基のピットを検出した。どのピットがこの加工段に伴うものであるかは今一つ明確ではないが、加工段主軸に平行して並ぶピットを基準に、現状では桁行2間、梁間1間の掘立柱建物を復元することが可能である。復元した建物址は梁間の長さが1.45m~1.6m、桁行4.1mを測るが、桁行西側の中間に位置する柱穴は確認できていない。柱穴の規模は径30cm~70cm、深さ20cm~40cmの規模のものである。柱穴の覆土は暗褐色~黒褐色系の土が堆積していた。

またこの加工段に伴う壁体溝は認められなかった。

#### S B01付近出土遺物（第14図）

S B01からの出土遺物は床面遺物は無く、覆土中出土遺物も上層部分のものであり建物に明確に伴う遺物は確認できていない。第14図にはS B01付近の覆土中から出土した遺物を図示した。

1は土師器蓋で、口径はやや不明瞭だが25.1cmを測る。口縁部はやや厚手で緩やかに外反し、口縁部端部は丸く収める。内面頸部以下ヘラケズリを施す。6世紀後半以降のものと思われる。

2・3は土師器壺または高杯の口縁部資料である。いずれも色調は赤橙色を呈し、胎土は砂粒を殆ど含まない精緻なものである。口縁部は内湾し、端部は先細り状に丸く収める。S I 01からの混入品であると思われる。

4は須恵器の坏蓋である。肩部にやや幅広の沈線が1条巡っており、口縁部端部は丸く収める。大谷編年4~5前期後のものと考えられる。<sup>(7)</sup>

5は瓶の把手部分で、胴部との接合は胴部を穿孔せず貼り付けるタイプのものである。把手の断面は不整円形を呈し、外面は粗いナデによって仕上げている。

**年代** 当建物址の年代はS I 01との切り合い関係から5世紀後半以前と考えられるが、周辺覆土から出土した遺物はS I 01からの混入品の坏身と6世紀後半以降の須恵器・土師器であり、これに該当するものは見当たらず、細かな年代については不明である。

#### B. I-N-3・5区の掘立柱建物跡群

前述のとおり、I-N区南東側のI-N-3・5区からは多数のピット群と溝・土壤を検出した。このうち区画溝と考えられる溝(S D01)の東に、溝の軸に沿って2間×3間の掘立柱建物を復元することができた。この建物址の主軸や、同じく区画溝の痕跡と思われるS D02の主軸線を手がかりにして、条件を満たさない部分もあるものの5棟分の掘立柱建物を復元してみた。これらの他にも多数ピットが存在することからさらに複数の建物址があったものと想像されるが、現状での復元は困難である。

I-N-3・5区掘立柱建物跡  
群の時期（第20～22図）

これらの掘立柱建物跡は加工段を伴うものではなく、出土遺物はピット中や区画溝中から若干出土したものを除けば、すべて覆土中からの出土である。よってSB02を除けば、それぞれの建物に確実に伴う遺物は無い。

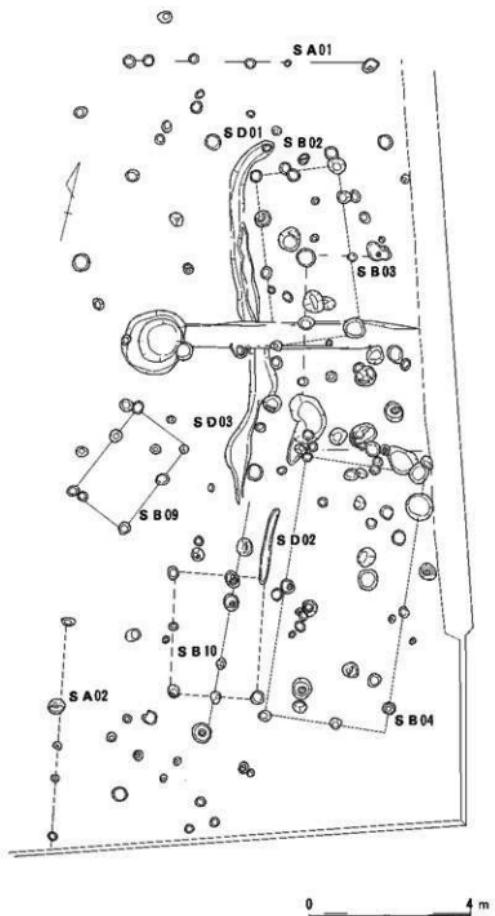
第20～22図はこの掘立柱建物跡群付近の覆土中から出土した土器である。詳細は後述するが、やや時期的に降る資料を含むものの、概ね大谷4期～5期を中心とした土器群であると考えられる。後述するI-S区の掘立柱建物跡群もほぼ同時期のもの考えられ、この時期御茶屋川左岸一帯に集落が展開していたものと推察される。

**S B 02（第16図）**

ピット群北側で検出した掘立柱建物で、斜面上方に区画溝をもつ。

建物の主軸は等高線とほぼ平行して設定されており、N-23°-Wをはかる。また建物付近のレベルは標高9.5m前後である。

規模・構造 SB02は梁間2



第15図 I-N区SB02～04付近実測図 (S=1/120)

間、桁行3間の建物址と推定され、梁間の長さは2.0m、桁行の長さは4.2m～4.3mを測る。柱間距離は梁間で0.9m～1.1m、桁行で0.9m～1.8mであり、桁行はやや不揃いとなっている。また南側の梁間中央の柱穴は検出していない。

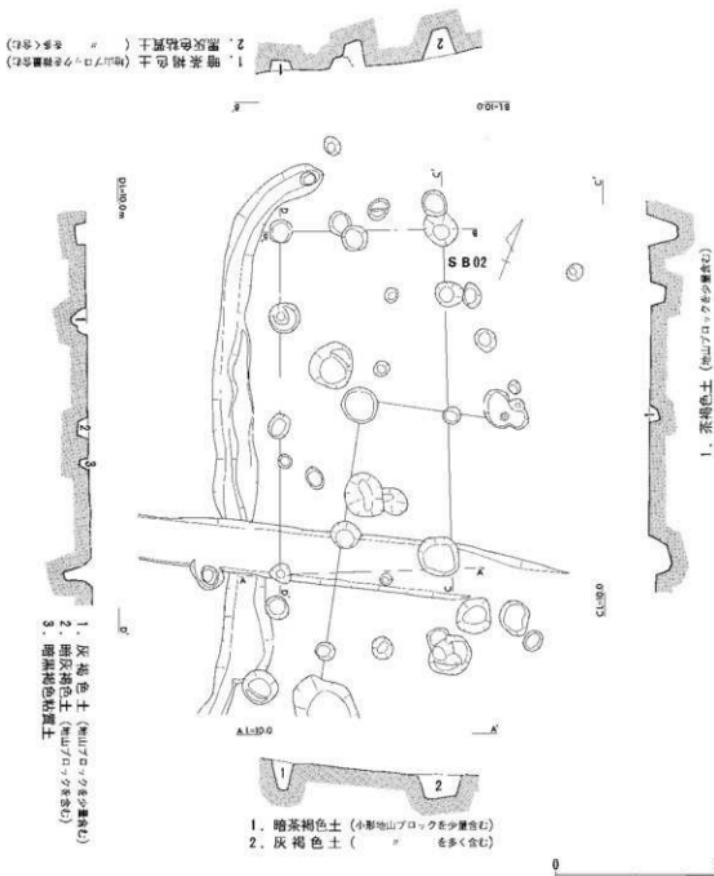
**柱穴・区画溝** 柱穴は径25cm～50cm、深さ10cm～35cmを測り、ばらつきがみられ、建物の四隅に比較的大型で深くしっかりした柱穴を設ける傾向が認められる。

柱穴の覆土は灰褐色、茶褐色系の土が堆積していたが、柱の抜き取り痕らしきものは断面では確

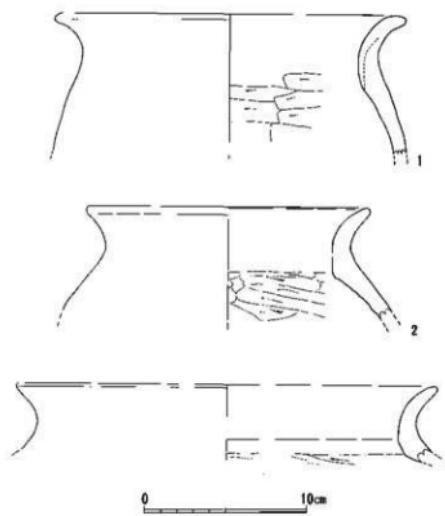
認できていない。

建物の西側には区画溝（S D01）が認められた。溝は南北方向に直線的に延び、北側は東へゆるやかに折れて収束している。溝の南側は別の区画溝（S D03）と切り合っている。前後関係については判然としないが、プラン上では S D01 が先行するように観察された。区画溝の規模は、長さ6.6m、幅35cm～50cm、深さ15cmを測る。溝の覆土は暗茶褐色土の単層であり、覆土中から土師器が若干出土している。

この溝は加工段を伴う掘立柱建物の場合の壁体溝に相当する溝と考えられる。機能的には区画としての役割と共に、斜面上方からの雨水の流れ込みを遮断する機能を果たしていたものと推察される。



第16図 I-N区 SB02実測図 ( $S = 1/60$ )



第17図 I-N区SB02出土遺物実測図 (S = 1/3)

17.5cmを測る。口縁部は短く外反する。3はやや大型の甕と考えられるもので、器壁が1.3cmと分厚い。

**年代** SD01から出土した土器は土師器甕のみで、細かな年代を窺うことはできないが、前述のとおり周辺出土遺物からみて大谷編年4～5期を中心とした時期のものと想定される。

#### S B 03 (第18図)

S B 02のやや南側で検出した掘立柱建物で、北半部はS B 02と重複している。建物の主軸はS B 02よりやや東へ振っており、N-13°-W前後を指向する。

**規模・構造** 当建物は桁行東側は調査区外にあるため全容は明らかでないが、桁行3間、梁間2間以上の建物であったと想定される。建物の規模は、桁行の長さ4.9m、梁間は2間と想定すれば4m近くあったものと考えられる。それぞれの柱間距離は、現状で桁行が1.5m～1.7m、梁間が1.8m前後を測る。

**柱穴・区画溝** 柱穴は径25cm～40cm前後とややばらつきが認められ、深さも10cm～30cmと比較的浅いものである。またこの建物に伴う区画溝らしき溝は検出していない。

**炉・焼土面** 建物内には炉・焼土面らしき痕跡は認められなかった。

**年代** S B 02と同様、周辺覆土出土土器からみて大谷編年4～5期を中心とする時期の建物であると想定される。

#### S B 04 (第19図)

ピット群南側で検出した掘立柱建物である。建物の主軸はS B 03とはほぼ同様な主軸を指向し、建物の主軸はN-5°-W前後であり、南北方向を指向している建物である。桁行柱間距離が長い点や建物南東隅の柱穴を欠く点等、建物として復元するには不十分な点もあるが、区画溝と考えら

**炉・焼土面** 建物内からは炉に相当する土壤・焼土面は確認できていないが、建物北側に焼土面が認められた。

**遺物の出土状況** 覆土中からは多数の須恵器・土師器が出土しているが、この建物址に確實に伴う遺物は区画溝(S D01)から出土した若干の土師器のみである。これらの土師器はS D01の南側から比較的まとまって出土した。

#### S B 02出土遺物 (第17図)

第17図はS D01から出土した土師器である。1は単純口縁の甕で、口縁部はかなり分厚いつくりで強く外反し、端部を丸く収める。肩はあまり張らない器形のものである。胴部内面には左方向のヘラケズリを施す。

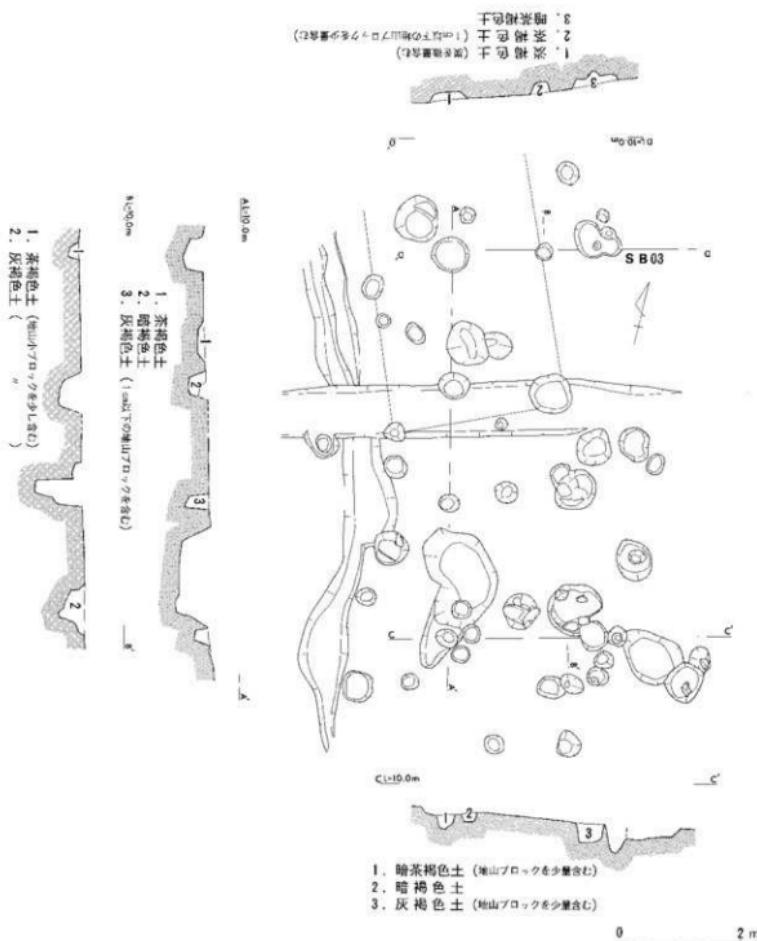
2も1と同様な形態の甕で、口径

れる S D02の主軸に沿っている点を重視して建物の復元を試みた。

**規模・構造** 当建物址は梁間2間、桁行2間以上の建物と想定され、建物の規模は桁行長6.6m、梁間長3.0m前後を測る。柱間距離は梁間が1.1m~1.7m、桁行間が3.3m前後を測る。

**柱穴・区画溝** 柱穴はいずれも不整円形を呈するもので、径25cm~45cm、深さ15cm~35cmを測る。柱穴の覆土は暗褐色~暗茶褐色の粘質土である。

建物の西には長さ1.9m、幅20cm前後を測る溝（S D02）が認められた。先に触れたとおり、この溝は S B04の主軸にはば沿っており、S B04の区画溝である可能性がある。



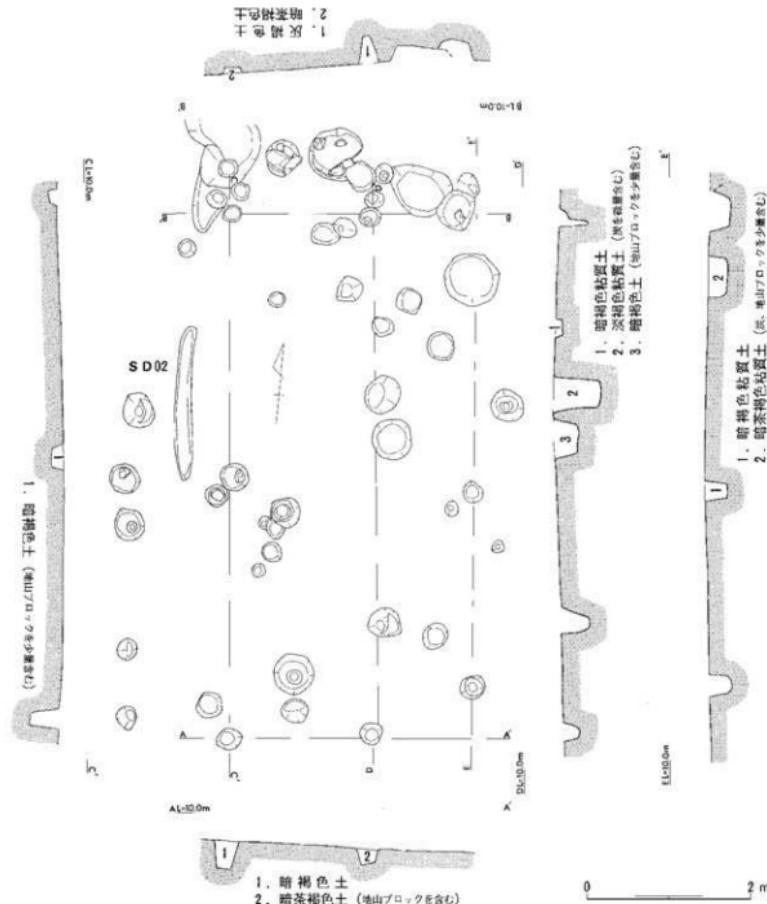
第18図 I-N区SB03実測図 ( $S = 1/80$ )

**炉・焼土面** 建物内からは炉・焼土面は検出していない。

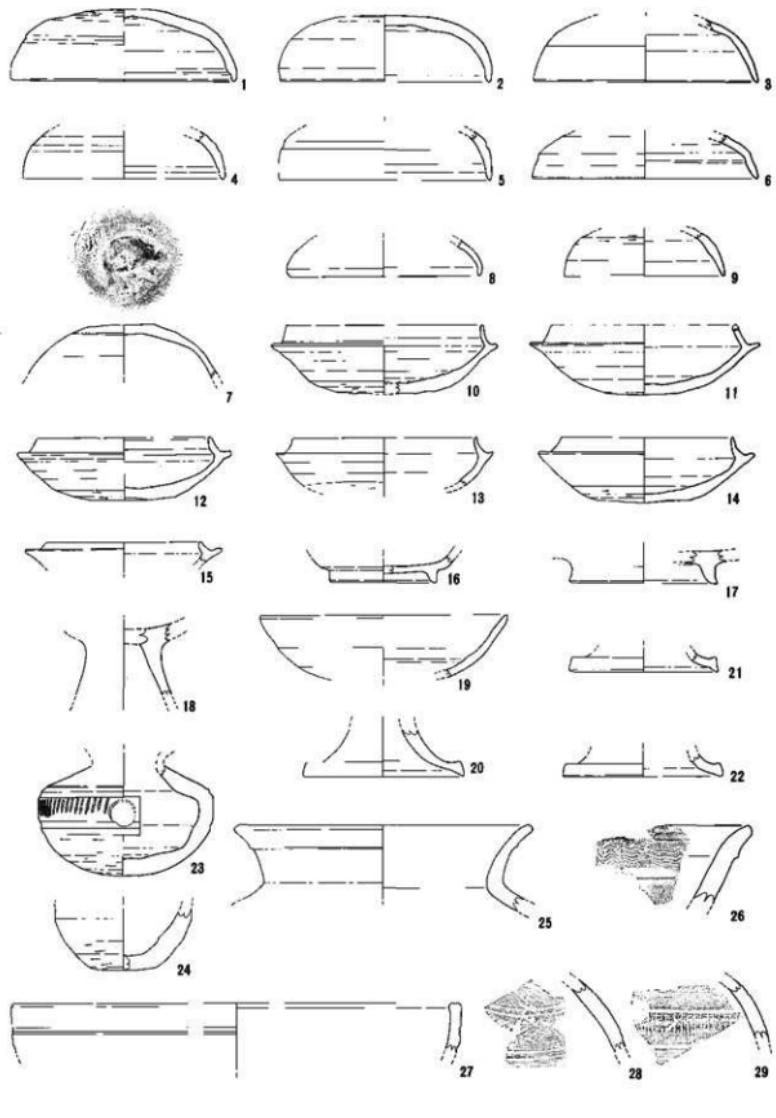
**年代** S B02・03と同様、大谷編年4～5期を中心とする時期のものであると考えられる。

#### I - N区 S B02・04付近出土遺物 (第20～22図)

第20～22図はS B02～04周辺の覆土から出土遺物で、前述のとおり大谷編年4～5期を中心としたものである。第20図1～9は須恵器坏蓋である。1は天井部に丁寧な回転ヘラケズリを施し、口縁端部内面に段状の沈線を有するもので、大谷編年3期まで遡る可能性があり、S B02～04付近出土遺物の中では最も古いものである。2は天井部に周辺へラケズリのみられる坏蓋で肩部に沈線をもたない。3は口径13.8cmを測り、肩部に1条の沈線をめぐらす。4は口縁端部内面に沈線を入れ

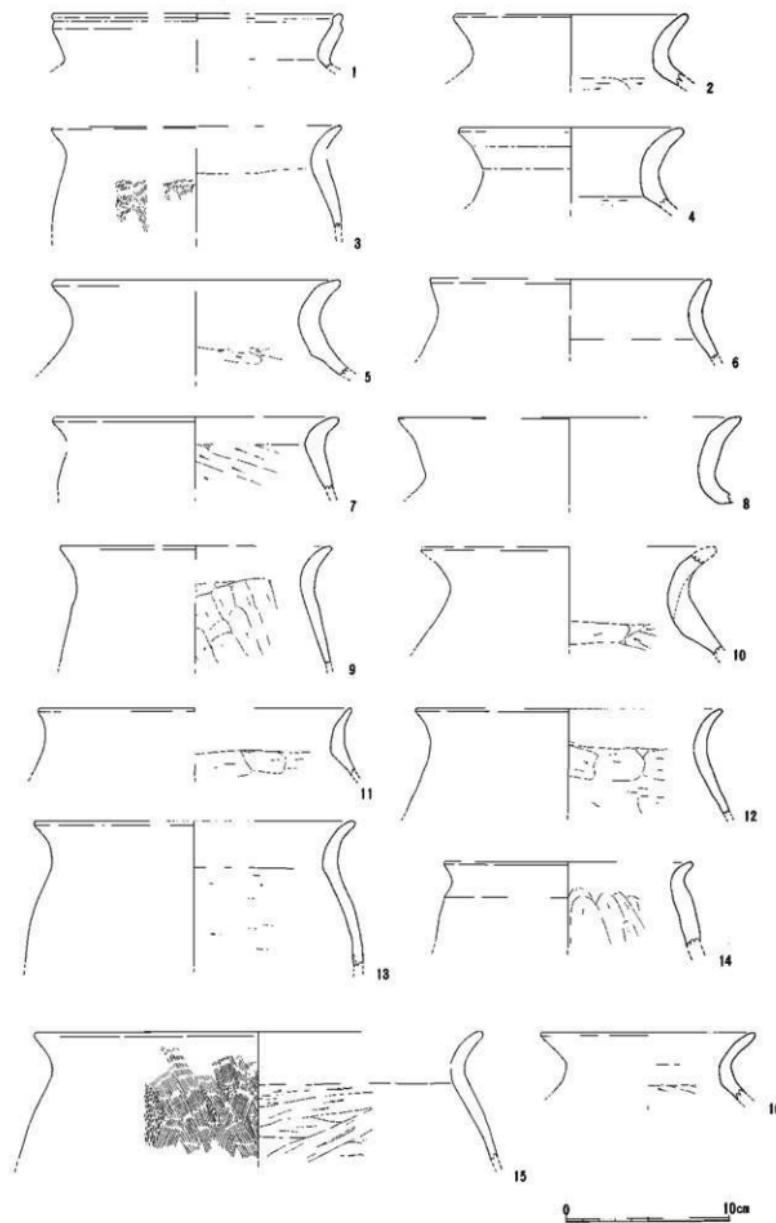


第19図 I - N区 S B04実測図 (S = 1/60)



0 10cm

第20図 I-N区SB02~SB04付近出土遺物実測図(1)(S=1/3)



第21図 I-N区 SB02~SB04付近出土遺物実測図(2) (S=1/3)

ている。6はやや特異な形態を呈し、別の器種かもしれない。2～5は大谷編年4～5期に相当する資料と考えられる。

7は天井部ヘラ切り未調整の杯蓋である。8は天井部の調整は不明だが、口径11.6cmを測り口縁部は丸く内湾している。大谷編年5～6A期のものだろう。9は口径10.0cmの小型の蓋だが天井部に回転ヘラケズリが認められ、短頸壺等の蓋と思われる。

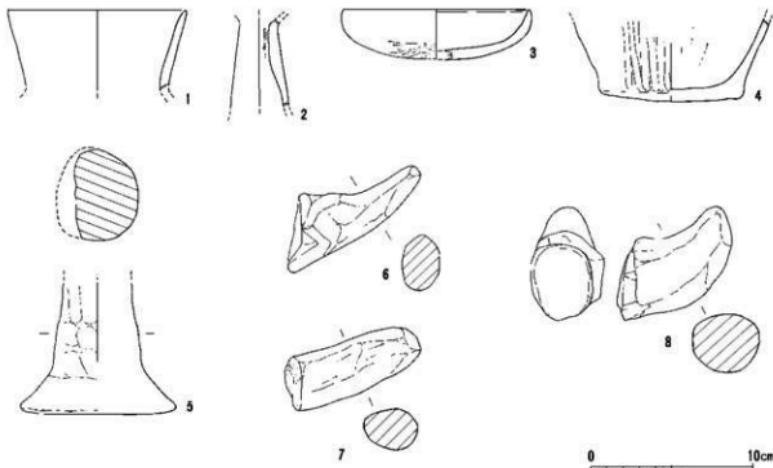
10～15は杯身である。10は比較的ヘラケズリが丁寧な杯身で、大谷編年3期に遡る可能性がある。

12～14は立ち上がりがやや低く内傾度が強くなっている段階の杯身で、大谷編年4期前後のものと考えられる。15は口径9.4cmを測り、大谷編年5～6A期のものだろう。16・17は高台付杯で大谷編年6B期以降の資料である。

18～21は須恵器高杯である。19は杯部が浅く単純な形態のもので大谷編年4～6期のものであろう。23は甕で、底部に回転ヘラケズリを施し体部は2条の沈線で区画した中にハケ状工具による連續刺突文を施している。25・26は須恵器甕で、26は口縁部段部下に退化した波状文を巡らす。28・29は壺の肩部の可能性のある資料で、28は羽状文状の文様、29は2条の沈線間に押引刺突文を施す。

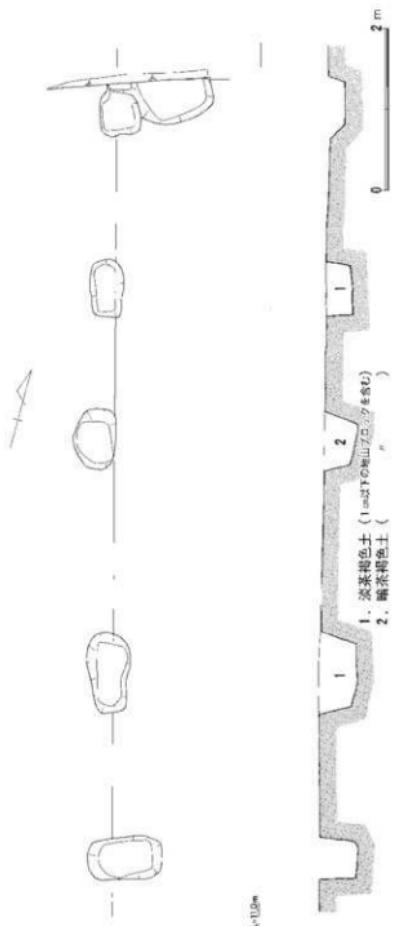
第21図は土師器甕である。1は口縁部端部外面に幅広の沈線を施す特異な口縁形態の甕である。複合口縁を意識したものであろうか。2～16は単純口縁の甕である。4・8を除くといずれも口縁部が比較的短く、外反度も比較的弱い形態で器壁が厚いのが特徴である。14は頸部に強いナデを加え、肩部に弱い稜が認められる小型の甕で、後述するI-S区S R01からもこのタイプの甕が多く出土している。15は口径27.7cmを測る大型の甕で、胴部外面のタテハケ、内面ヘラケズリがよく観察できる。

第22図1は壺で、口縁部は長く直線的に若干開く形態を呈する。5世紀代のものであろうか。2は古墳時代前期の高杯でS I 02と関連するものであろう。3は口径11.4cmを測る杯で、底部に手持



第22図 I-N区S B 02～S B 04付近出土遺物実測図(3)(S=1/3)

ちヘラケズリを施す。1と同じく5世紀代のものだろう。4は弥生土器底部で外面に縦方向のヘラミガキが認められる。5は土製支脚で底部が中実で平底のタイプのものである。6～8は樋及び土製支脚の把手で、6・8は心棒に粘土帯を巻き付けて把手を作り出す製作技法が接合痕から観察される。



第23図 I-N区SB08実測図 ( $S = 1/60$ )

## B. その他の掘立柱建物跡群

### SB08 (第23図)

SB08はI-N区西側では唯一確認された建物址で標高10.2m前後の緩斜面に位置する。

**規模・構造** SB08は調査区西端付近に位置しており、現状では桁行部分しか確認しない。

桁行は4間分を確認し、長さ9.2mを測る大型の建物址で、柱間距離は約2.0m～3.0mを測る。また建物の主軸はN-15°-Wを指向している。

なお、当建物址が調査区外西側に続くと想定されたため、2ヶ所トレンチ状の調査区を設けて掘り下げたが、搅乱が著しく対応する柱穴等は確認できなかった。

**柱穴** 柱穴はいずれも平面形が隅丸長方形状を呈し、長径75cm～100cm、短径45cm～50cm、深さ30cm～45cmのもので、規格性の認められるピットである。

柱穴の並びは柱穴の主軸が桁行の軸と平行するものが大半だが、南端の柱穴のみ桁行主軸に対して直交している。

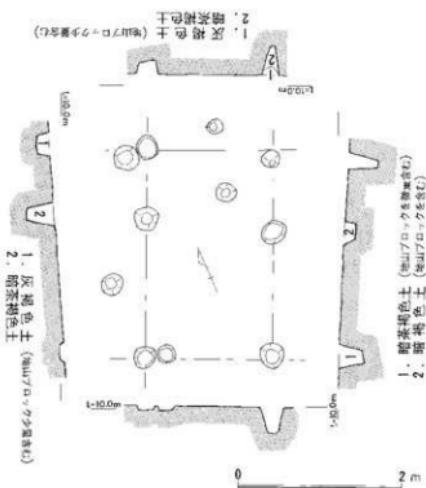
また柱穴の覆土は地山ブロックを多く含む茶褐色・暗茶褐色の砂質系の土であり、SB02～04の柱穴覆土とは全く異なるものであった。

**炉・焼土面** 当建物に伴う炉・焼土面は確認していない。

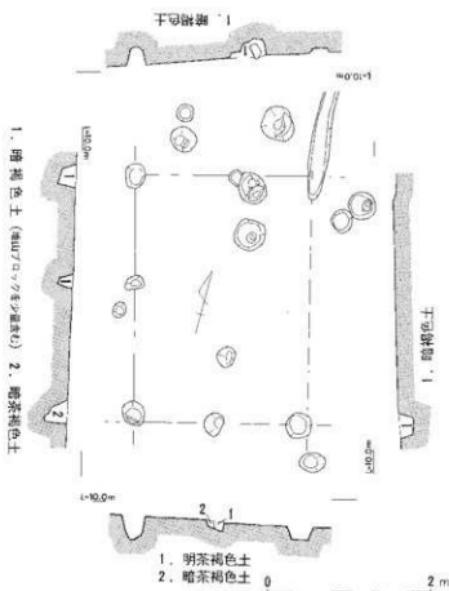
**年代** 出土遺物が無く、年代を決定する材料に乏しいが、柱穴の形態や並びの特徴からみて、近世以降の建物址である可能性が高い。

### SB09 (第24図)

SB04の西側約4m付近に位置する建物址で、付近の標高は10.0m前後を測る。



第24図 I-N区SB09実測図 (S = 1/60)



第25図 I-N区SB10実測図 (S = 1/60)

**規模・構造** 当建物址は梁間1間×桁行2間の小型の建物址と想定され、梁間の長さ約1.5m、桁行2.55m前後を測る。

桁行の柱間距離は北側が約85cm、南側が170cmとかなり片寄った位置に東西桁行の中間の柱穴が存在している。建物主軸はSB02～04と大きく異なり、等高線に若干斜行する形でN-23°-Eの方向を指向している。

**柱穴** 当建物の柱穴は径20cm～30cmとかなり小さく深さも浅いものが多く、あまりしっかりした建物ではなかったと推定される。柱穴内の覆土は灰褐色～茶褐色系の粘質土で、SB02～04の柱穴覆土に類似するものである。

**年代** 確実に建物址に伴う遺物がないため明言できないが、柱穴覆土の類似性からみて、SB02～04に比較的近い時期のものと推察される。

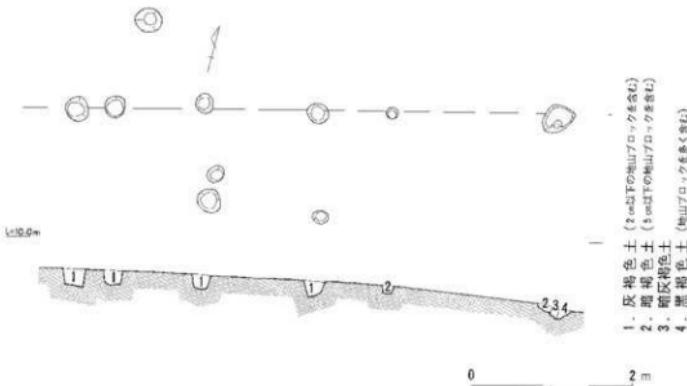
#### SB10 (第25図)

SB04南側の西に隣接する掘立柱建物で、床面付近の標高は9.7m～9.8m前後を測る。

**規模・構造** SB10は梁間2間、桁行2間の小型の建物と想定される。建物の規模は梁間が2.1m、桁行が3.1m前後を測る。柱間距離は梁間が1.0m～1.2m、桁行が1.3m～1.7mである。なお、東側桁行の中間の柱穴は確認できていない。北西隅の柱穴はSD02によって切られている。

建物の主軸はSB02～04の主軸に比較的近く、特にSB03の桁行軸とほぼ一致しており、N-15°-W前後を指向する。

**柱穴** 柱穴の規模は径30cm前後、深さ10～30cmと簡易なもので、SB09と共通

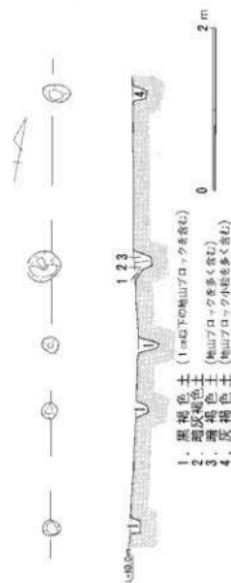


第26図 I-N区S A01実測図 ( $S = 1/60$ )

する。柱穴の覆土も S B09 に比較的近い土質のものであった。

また当建物址に伴うと考えられる炉・焼土面などの火処は検出していない。

**年代・性格** S B09 と同様当建物に確実に伴う遺物は無いが、建物主軸が S B02~04 の主軸にはば対応することからみて、同様な年代のものであると考えられる。当建物や S B09 はその構造・規模からみて居住用建物ではなく、主家屋に付随する建物址であったと想定される。



第27図 I-N区S A02実測図 ( $S = 1/60$ )

### C. 棚列

#### S A01 (第26図)

S B02~04 建物の北約 3 m、S I 02 との間に位置する遺構である。

**規模と構造** S A01 は現状で 5 間分のはば直線的な柱穴の配列が確認でき、棚列の全長は 6.0 m を測る。中間距離は 0.4 m ~ 2.1 m とかなりばらつきがあり、特に西端の柱穴間の距離は特に短く、このどちらかの柱穴は当遺構に伴わないものかもしれない。

また棚列の主軸は N - 103° - W を測り、S B02~04 の建物主軸とはおおよそ直交する位置関係にある。

**柱穴** 柱穴の規模は、径 15 cm ~ 35 cm、深さ 10 cm ~ 20 cm とかなり小規模なものであった。柱穴内の覆土は S B02~04 と類似する土質のものである。また東端の柱穴はやや大型で柱の抜き取り痕が断面で観察できた。

**年代・性格** 共伴遺物が無く、細かな年代については不明であるが、S B02~04との位置関係からほぼ同時期の6世紀末~7世紀前半の遺構と考えられる。

またこの柵列より北は当該期のピットが殆ど認められず、また前述した建物群との配列関係からみても、S A01は建物群と外界を区画する機能をもつ遺構であった可能性が高い。

#### S A02 (第27図)

I-N区の南端、S B10の西約2.5mに南北に延びる柵列で、標高9.8m前後に位置する。

**規模と構造** S A02は現状で4間分が確認でき、全長5.4mを測る。柱間距離は0.85m~2.15mであり、S A01と同様それぞれの柱間ごとのばらつきが著しい。

柵列の主軸はN-11°-Wを指向し、S B02~04の建物主軸方向とはほぼ平行する位置関係にある。

**柱穴** 柵列の柱穴の規模は径20cm~40cm、深さ15cm~25cmを測り、比較的小形の柱穴のものが多い。柱穴内の覆土はS B02~04と同様灰褐色系の土である。

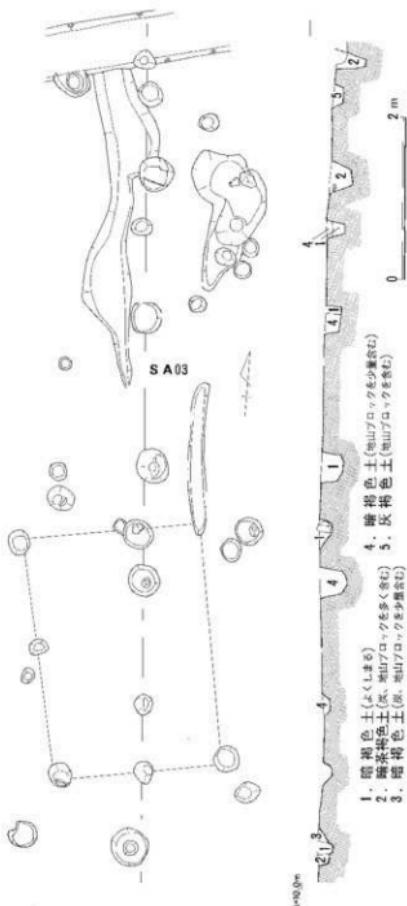
**年代・性格** 当柵列より西には殆どピットが存在しない点、S B02~04建物群の主軸と当柵列の主軸がほぼ平行する点などからみて、当柵列は建物群西側を画する役割をはたしていた可能性が高いものと推察される。

#### S A03 (第28図)

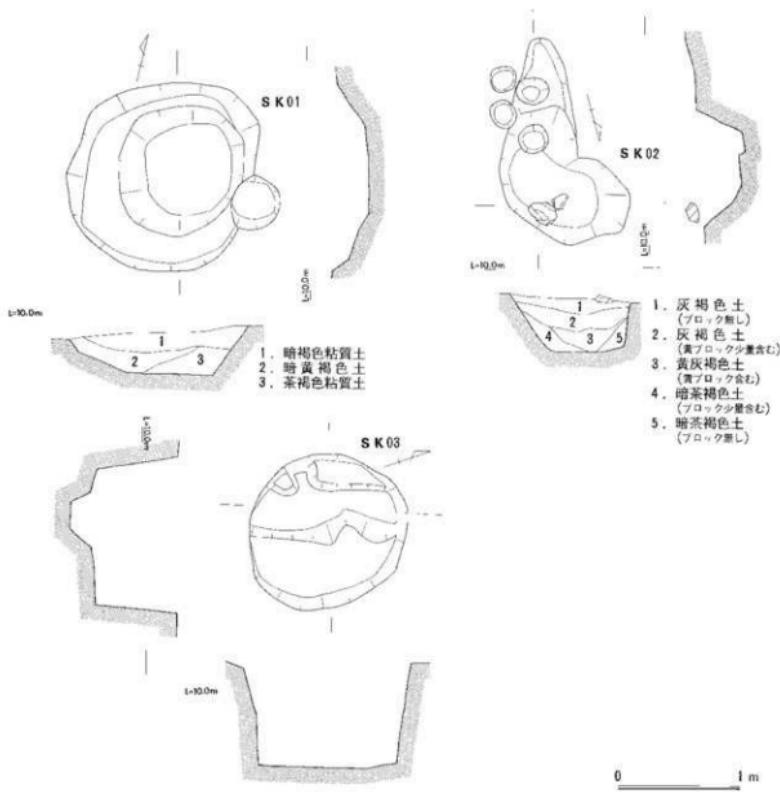
I-N区南側、S B04の西に隣接し南北方向に延びる柵列で、標高9.8m前後に位置する。また柵列に伴う一部の柱穴はS B10の柱穴と切り合い関係にある。

**規模・構造** S A03は現状で10間分の柱穴がほぼ一直線に並んでいる状況が観察できるが、この中には柵列と無関係の柱穴も幾つか含まれている可能性がある。

柵列の規模は長さ9.7mとやや長いもので、柱間距離は最大1.8m前後に測る。柵列の主軸はN-11°-Wを指向し、S B04の建物主軸に近い。



第28図 I-N区 S A03実測図 (S = 1/60)



第29図 I-N区SK01~03実測図 (S=1/40)

**柱穴** S A 03の柱穴の規模は径約40cm前後、深さ30cm前後の他の柵列より比較的大型の柱穴のものが多い。柱穴内の覆土は灰褐色系の色調の土のものが多く、南端の柱穴では柱の抜き取り痕が断面観察で確認できた。

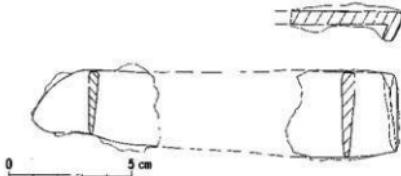
**年代・性格** 柱穴内出土の遺物はなく、細かな年代については言及できないが、配置関係からみてS B 04の付随的な性格の遺構であった可能性が高い。

#### D. 土壌

##### SK01 (第29図)

**規模と形態** S B 02の西約3mで検出した上層で、平面形は不整椭円形を呈し、比較的浅い皿状の断面形をなす。規模は径約1.6m、深さ40cmを測る。

**土壤** 土壌内の覆土は3層に分かれ、いずれも灰褐色・黒褐色系の粘質土である。



第30図 I-N区 S K 03出土遺物実測図 (S = 1/2)

**規模と形態** S B03の南西隅に位置する土壌で、S B03の柱穴と切り合っている。平面形は長楕円形の土壌にステップが取り付いたような形状をなしている。土壌の規模は長径1.3m、短径0.75m、深さ48cm前後を測る。

**覆土** 土壌内の堆土は灰褐色・黒褐色系の粘質土が堆積しており、覆土中から若干の遺物と共に礫が複数認められた。

**出土遺物** 須恵器・土師器細片が若干出土しているが、図化可能なものはなかった。

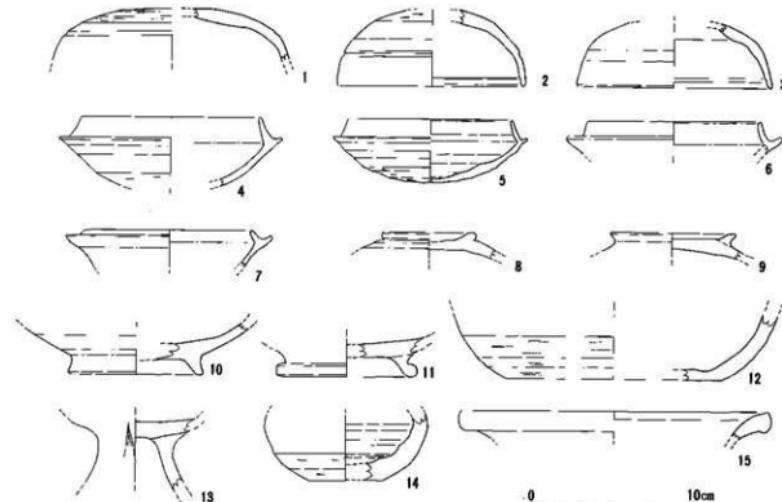
**年代・性格** 建物群のいずれかに付随する施設と想定されるが、詳しい性格は不明である。

#### S K 03 (第29図)

**規模と形態** 他の造構群から離れて調査区西端のS B08の北西約2.5mで検出した土壌である。平面形はほぼ円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。土壌底面には溝状の落ち込みが認められた。土壌の規模は径1.3m前後、深さ0.9mを測る。

#### S K 03出土遺物 (第30図)

S K 03内からは須恵器・土師器細片が若干出土したほか、鉄鎌が出土している。鉄鎌は中央部を欠損しており、基部と先端部を残すのみである。刃部はやや内湾し、切先付近は嘴状の形態を呈す。



第31図 I-N区造構外出土遺物実測図 (1) (S = 1/3)

折り返し部の角度からみて若干鈍角気味に柄と装着するタイプのものと考えられる。刃部幅5.1cm、棟の厚さ4mm前後を測る。

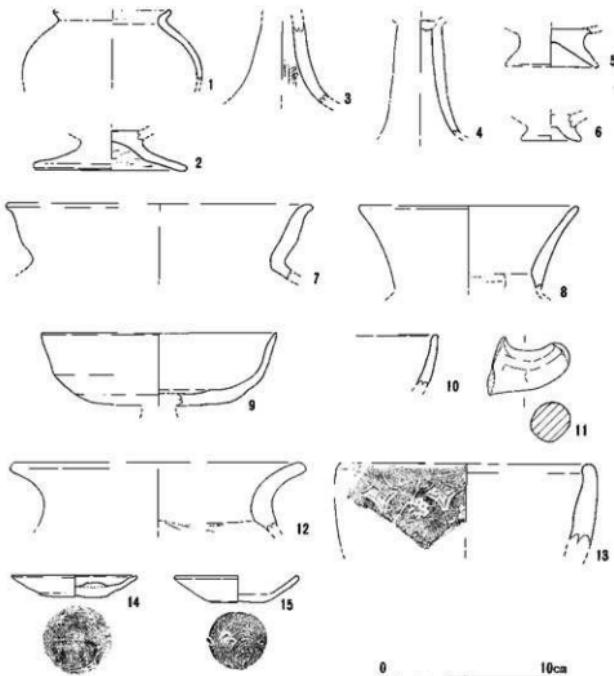
**年代・性格** 出土遺物からS B02~04建物群との近い時期のものと考えられるが、他の当該期の遺構群からかなり離れた距離に位置していることからみて、S B08が営まれた頃に掘り込まれ、覆土中に遺物が混入した可能性も否定できない。

#### I - N区遺構外出土遺物（第31~33図）

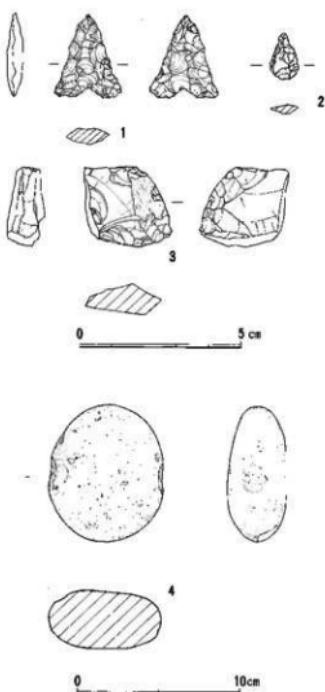
第31~33図は、S B02~04付近以外で出土した遺構外の遺物である。1~3は須恵器杯蓋である。1は比較的大型で肩部に1条の沈線を施し、天井部の回転ヘラケズリが丁寧なものである。大谷編年3~4期のものであろう。

2は現状で口径11.6cmを測るが、歪みの為正確な口径は不明。口縁端部内面は沈線を入れてヨコナデを施し、段状に仕上げている。3は口径12.0cmを測る杯蓋で、肩部に稜がないタイプのものである。口縁部内面には沈線を巡らしている。調整は磨滅が著しく不明である。

4~6は杯身である。4は口径11.2cmを測り、底部に向転ヘラケズリを施す。出雲4期頃のものであろう。5は口径10.2cmを測り、やや薄手の資料である。底部の回転ヘラケズリは比較的丁寧に



第32図 I - N区遺構外出土遺物実測図(2) (S = 1/3)



第33図 I - N 区遺構外出土遺物実測図(3)  
(1~3・S = 2/3 4~1/3)

7は土師器甕の口縁で、若干複合口縁部の稜の痕跡を残し、口縁端部は外向きに突出する。8は直口壺で、赤褐色を呈し胎土が精緻なものである。7・8はS I 01付近から出土しており、ほぼ同時期のものであろう。12は古墳時代後期の土師器甕で、器壁が厚く強く外反する。

13は黒灰色を呈する瓦質の火鉢状のもので、口縁部外面に印花文状のスタンプ文が施されている。14・15は土師質器皿で口径7.7cm~9.6cm、器高1.4cm~1.6cmをはかり、底部に回転糸切り痕を残す。

第33図はI - N区遺構外出土の石器である。1はI - N - 5区から出土した黒曜石製の石鎌である。四基無茎式のもので、全長2.5cm、幅2.1cm、厚さ5mm、重量2.0gをはかる。片面に素材面を残す。

2はI - N - 3区出土の黒曜石製石鎌で、長さ1.4cm、幅0.9cm、厚さ3mm、重量0.32gをはかる。形状は円基無茎式状を呈するが、欠損品を再加工したものと想定される。

3は試掘調査時に出土した黒曜石製の楔形石器である。長さ2.5cm、幅2.7cm、厚さ1.0cm、重量7.8gを測る。上・下端につぶれ痕が認められ、片側側面が裁断面である。

4は河原石を転用した石錘で、長さ8.4cm、幅7.1cm、厚さ3.6cm、重量270gを測る。長辺両側に打ち欠きが認められる。

施してあり、大谷編年3~4期のものである。7は口径10.4cmをはかり、出雲5~6A期の坏身である。8・9は輪状つまみタイプの坏蓋と思われるが、9は天地逆の可能性もある。

10は高台坏の底部と考えられるもので、底径8.2cmとかなり大型のものである。高台は比較的高く、内外面はヨコナデ調整で仕上げている。11は脚付壺の脚部資料で、高台は外反し端部を丸く収める。12は底径13.2cmのかなり大型のもので、外面に回転ヘラケズリを施す。鉢形のものであろうか。

13は須恵器高坏で三角形2方透かしのタイプのものである。14は雖もしくは小型壺の底部で、底部外面には回転ヘラケズリを施している。15は壺口縁部と考えられるもので、口縁端部は玉縁状形態を呈している。

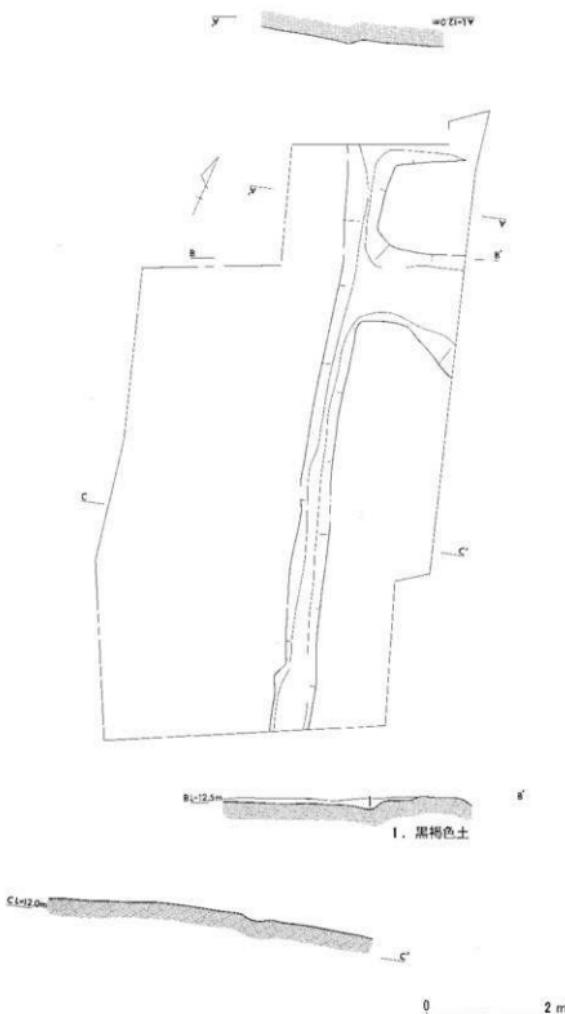
第32図1~6は古式土師器で、S I 02とはほぼ同じ時期の資料である。1は短頸壺で口径7.2cmの小型のものである。口縁部は短く外反し端部はやや跳ね上げ状を呈する。2は脚付壺または鉢の脚部で、大きく直線的に開き、端部は若干面をもつ。3・4は高坏脚部、5・6は低脚坏脚部でいずれも淡黄色を呈する当地通有のものである。4は円盤充填による接合で、円盤の下面には刺突痕が認められる。

## E. 街道状遺構（第34図）

調査前の聞き取り調査の段階で、II区の位置する丘陵斜面下方に、南北に旧街道が走っていたとの言い伝えがあることが判明した。このためI-N区とII区との間にトレンド状の調査区(I-N'区)を設定し、街道址の検出に努めた。

調査区は丘陵から平坦地にかかる傾斜変換点付近に南北方向に設定した。この付近は調査前の段階で加工段状の細長い平坦地が認められた地点で、標高12.50m付近に位置する。

調査は、表土を数cm剥ぐとすぐ地山に達する状況であった。地山面はほぼ平坦で、東側に幅50cm~60cmの極めて浅い溝がほぼ南北に走っている状況が確認できた。この溝は北側部では東西に走るやや幅広の溝とつながり、さらに北へ延びている。この溝が、例えば街道両脇の排水溝にな



第34図 I-N'区街道状遺構実測図 (S = 1/80)

る可能性も否定はできないが、現状では判断できない。ただし表土の堆積が非常に浅いことからみて、比較的新しい時期の遺構であると想像される。

## 2節 I-S区の調査

I-S区はI-N区の南に位置し、I-N区より、より川岸寄りの、御茶屋川が谷から小平野へ出て流路を変える変換点左岸に位置している。調査区内東側に御茶屋川の旧流路と想定されるSR01が存在することからみても、川には接する集落であったと言うことができる。

当調査区はI-N区と同様調査前までは宅地として利用されていた地区である。このため各所に搅乱が及んでいたが、平面的な削平はI-N区に比べて比較的浅い状況であった。

### 遺構の分布状況（第35図）

遺構の分布状況は、調査区西側にI-N-3・5区とほぼ同時期と考えられる掘立柱建物跡群が分布している。これらの掘立柱建物跡のうち、SB05とSB06はI-N区SB02～04と建物主軸をほぼ平行するもので、互いの有機的関係が想定されるものである。

古墳時代後期と考えられるピット群は、調査区南端のSB07付近においても比較的密度が高く、当該期の集落はさらに南へ広がっていたものと想像される。

また調査区南西には縄文時代中期末～後期初頭の住居址と想定されるSI03が存在している。この他にも埋土の特徴から縄文時代のものと想定されるピットが幾つか存在していたが、建物を復元するには至っていない。これらの特徴的な覆土をもつピットや縄文時代出土遺物の分布状況は、現状ではSI03周辺の調査区南西部分に限定されている。

調査区東側には前述のとおり御茶屋川の旧河道と想定されるSR01が存在する。このSR01は、後述するように大谷編年3～4期に埋め立てられてその上には建物址が存在したものと想像され、埋め立て時に投棄したと考えられる多量の遺物が出土している。

### 基本層序（第7図）

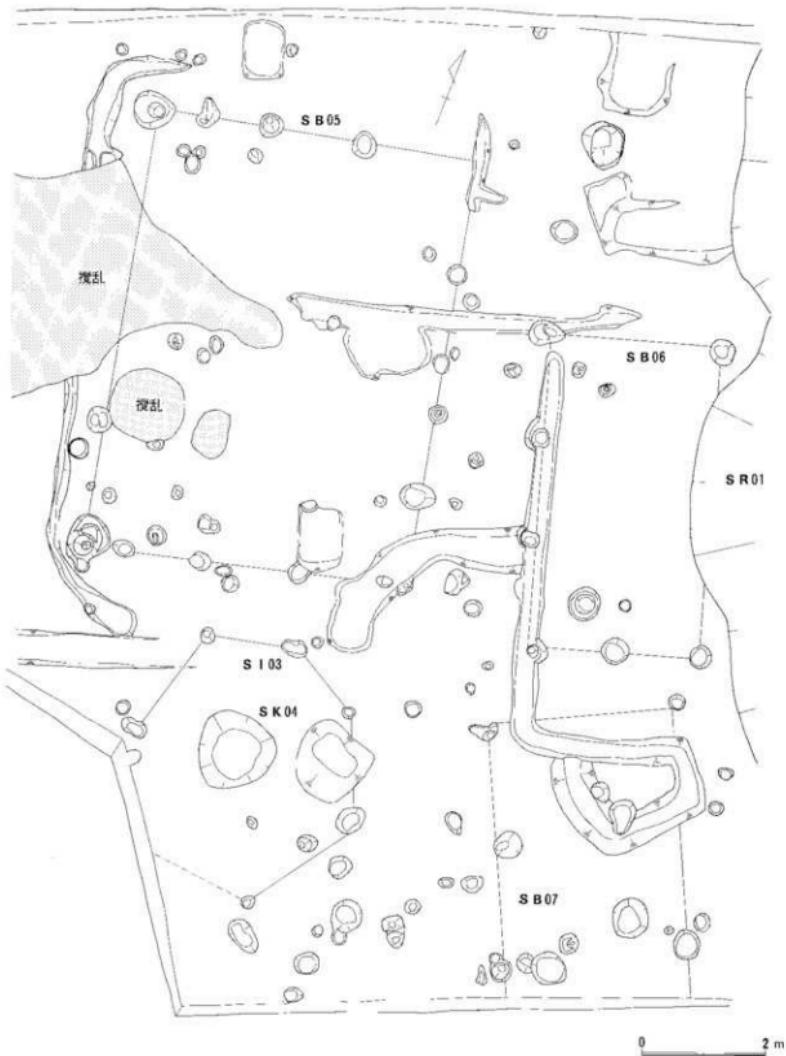
I-S区の基本層序について述べておくと、まず表土下に厚さ約20cmの灰褐色土が堆積している（第7図D-D'断面図8層）。この土層は炭化物を若干含む土層で、I-N区の掘立柱建物群の



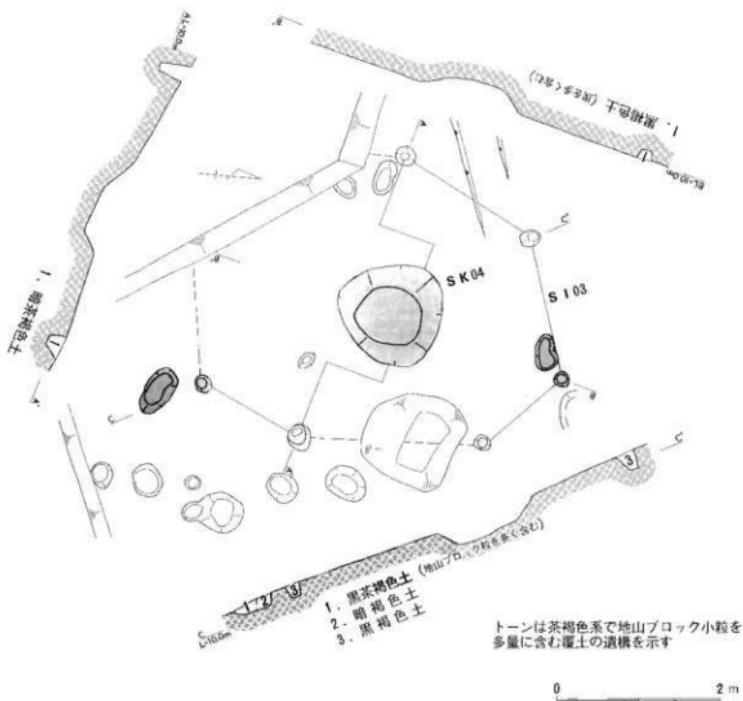
I-S区 SR01調査風景

覆土と同様な土層で、遺物もほぼ同様な時期のものを含んでいる。

この灰褐色土層の下に厚さ約10cm～15cm前後の比較的薄い茶褐色土（同断面図9層）が堆積して



第35図 I-S区遺構配置図 (S = 1/80)



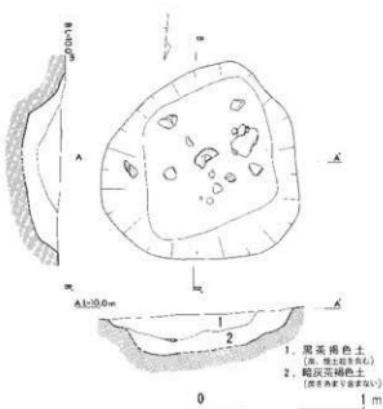
第36図 I-S区S I 03実測図 ( $S = 1/60$ )

いる。この土層は炭化物とともに地山ブロック小粒を多量に含み、一見ゴマダラ風に見える十で、非常に硬く縮まっている。この十層から前述の縄文時代の遺物が出土している。このゴマダラ状の茶褐色土の分布範囲は調査区南西部の S I 03周辺に限定されており、他の場所では既に削平されてしまったものと考えられる。

地山はこの茶褐色土の下に位置している。地表から地山までの深さは、調査区西側で約50cm前後である。I-S区の地山はローム状の黄褐色粘土であり、遺構の検出は比較的容易であった。

先に触れたように、建物の位置関係からみて S R 01は埋め立てられたのちに何らかの遺構が存在したものと想像された。しかし、S R 01埋め立て後の遺構面は柱穴埋土と類似する暗灰褐色土であり、折しも調査期間が8月で乾燥が著しかったことによって遺構の検出は極めて困難な状況であり、結局このS R 01上層では明確な遺構は確認するには至らなかった。

以下、各遺構について、住居址、掘立柱建物跡、自然河道の順で報告する。



第37図 I-S区SK04実測図 (S=1/30)

土壌 (SK04) と周辺のピット群のみである。

現状で住居址と想定されるピット群は SK04を取り囲むように不整椭円形（多角形）状を呈し、対角線上の柱穴間の距離は長径5.0m以上、短径3.7mを測る。柱間距離は1.2m～1.8m前後を計測し、ややばらつきが認められる。

**覆土** 床面を覆う覆土は先述のゴマダラ状の地山ブロック小粒を多量に含む茶褐色土であり、覆土中より縄文土器、石錐が出土している。

なお、この十層上面での明確な遺構は調査時には確認できなかった。

**床面** 床面はほぼ残存しているものと思われ、ほぼ水平である。

**柱穴** 縄文時代と考えられる柱穴は、径20cm前後、深さ15cm前後で、古墳時代後期の柱穴と比較するとかなり小規模なものである。これらのピットの埋土は、先に調査区土層の説明の際に述べたゴマダラ状のよく縮まった茶褐色土を覆土とする点で共通している。この土層は後述する炉と想定される SK04の埋土と全く同じであり、同時期の遺構であろう。

第36図のトーンの掛かっている遺構がこれらの覆土を有するピット・土壤である。建物を復元したピットのうち西側の2基の柱穴にはトーンが掛かっていないが、これは調査時に柱穴覆土の土層を十分記録していなかったためで、柱穴の規模や配置から当該期のものと考えて建物の復元を行っている。

**炉・焼土面** 当該期と想定されるピット群の中心部に、炉と想定される土壌 (SK04) を1基検出した。土壌のプランは不整円形で、断面はやや深い皿状を呈する。規模は長径1.24m、短径1.2m、深さ24cmを測る。

土壌内の覆土は2層に分かれており、上層は炭化物・燒土粒を含む黒味の強い黒茶褐色土で、下層は炭化物をあまり含んでいない。

**遺物の出土状況 (第37図)** 遺物は覆土である茶褐色土中から若干出土しているほか、SK04内からも縄文土器が出土している。

## A. 積穴住居址

### S 103 (第36図)

I-S区南西部で検出した住居址である。調査当初は後述するSK04のみが縄文時代の遺構であると考えていたが、同様な特徴の埋土をもつピットが土壤周辺に複数存在しており、調査後の整理段階で住居址である可能性が高いという結論に至った。

**規模・形態** 以上のように、当住居址は調査当初住居址である認識がなかったため、土壤周辺の十分な精査ができていない。よって、本来は壁をもつ積穴住居であった可能性も十分に考えられるが、調査時にそうした落ち込みは確認できなかった。現状で確認できたのは、炉と想像される中心部の

### S I 03出土遺物（第38・45・46図）

第38図はSK04内から出土した縄文土器である。いずれも風化が著しく、文様・調整とも不明な部分が多い。

1は深鉢の口縁部である。色調は暗茶褐色を呈し、頸部は外反して立ち上がり、口縁部は内側に屈折している。小片のため不明であるが、おそらく波状口縁になるものと思われる。口縁部外面には幅4mm前後の幅広の沈線と連続刺突文をめぐらしている。

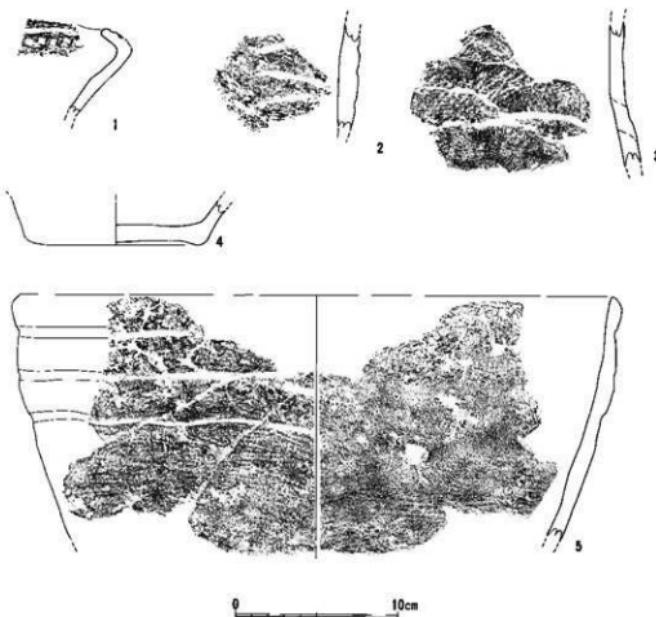
2は深鉢胴部の資料で風化が著しいが、外面には2条の沈線が微かに認められる。内面には一部二枚貝条痕調整が観察される。

3も同じく深鉢胴部から頸部にかけての資料で、色調は暗茶褐色を呈し、2mm前後の白色砂粒を多く含む胎土のものである。胴部と頸部の境には浅い幅広の沈線をめぐらす。地文はLRの縄文地にみえるが、風化が著しく定かでない。内面はヨコナブ調整で仕上げている。

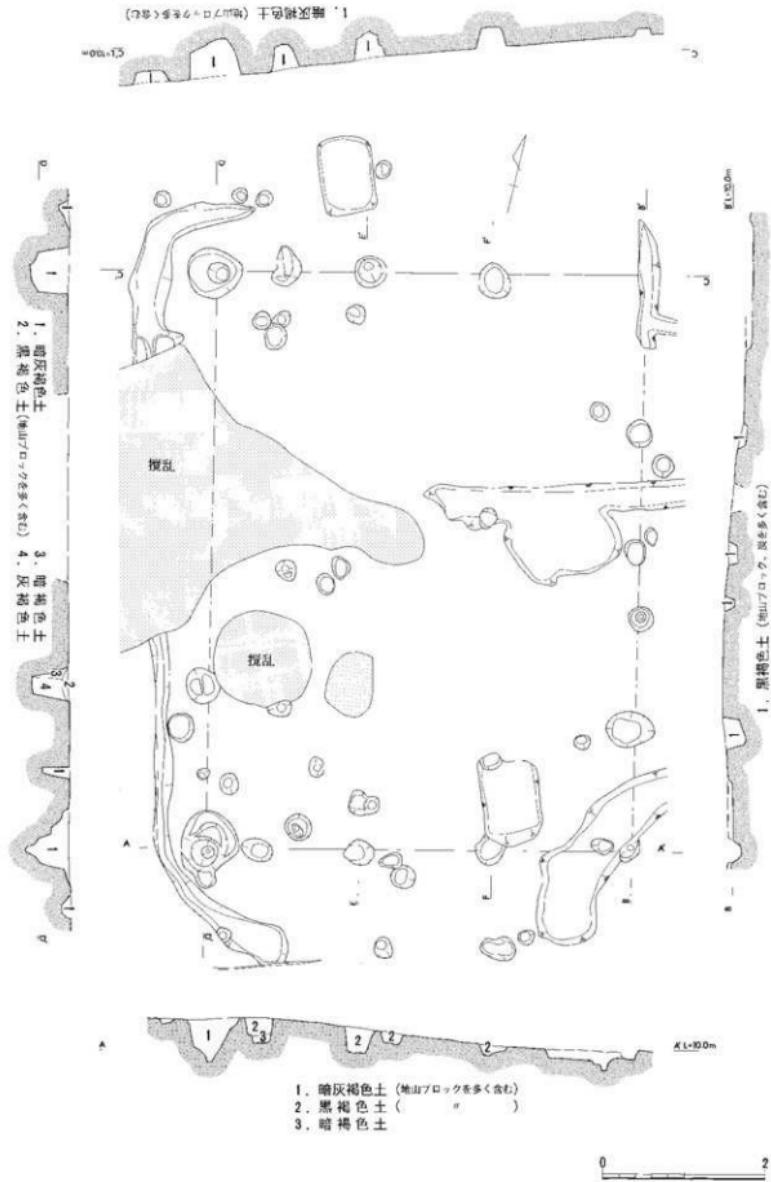
4は深鉢の底部資料で、色調は淡黄褐色を呈する。浅い上げ底状を呈し、底径11.4cmを測る。調整は風化が著しく不明である。

5は深鉢で口径36.6cmを測る。器形は砲弾状を呈するもので、内外面を二枚貝条痕で仕上げている。口縁部下には幅広で浅い沈線が3条横走している。このうち下の2本の沈線はゆるやかな波状文状を呈している。

以上がSK04出土の縄文土器であるが、周辺覆土の調査中及び試掘調査時に当住居址に伴うと想



第38図 I-S区S I 03内SK 04出土遺物実測図 (S = 1 / 3)



定される遺物が若干出土している（第45・46図）。

第46図1は試掘調査時出土した灰茶褐色を呈する深鉢口縁部で、第38図1とほぼ同形態の口縁部が内側に屈折する波状口縁のものである。口縁部屈折部外面には2条の沈線がめぐり、波頂部付近で巻き込み収束している。内外面の調整は風化が著しく不明である。2は二枚貝条痕地の深鉢で、口縁部端部を欠損している。

第45図1～3・7はS I 03付近から出土した石器である。1は黒曜石製の凹基無茎式の石鏃で、長さ1.25cm、幅0.9cm、厚さ2.5mm、重量0.19gを測り、非常に小型の石鏃である。2は黒曜石製石鏃の欠損品で、背面に加工前の素材面が残存している。3は安山岩製の平基式石鏃である。長さ2.1cm、幅1.5cm、厚さ3mm、重量1.3gを測る。両面に素材面が残る。

7は黒曜石製のスクレーパーで、長さ4.6cm、幅4.7cm、厚さ1.0cm、重量16.75gを測る。縦長剥片の片側に両面加工を加え、刃部状に仕上げている。

**年代** 横文土器は細片が多い上に風化が著しく、細かな検討は困難である。当住居址資料に類似する資料は県内では極めて乏しいが、第38図5のような竹管状の工具により3条の波状文状の幅広の沈線をめぐらす深鉢は、安来市島田黒谷I遺跡<sup>(8)</sup>や松江市才ノ岬遺跡<sup>(9)</sup>において比較的の近い例が知られており、從来の福田C式もしくは船元III式E類、里木III式との親縁性が指摘されている。こうした点からみて当住居址の年代を縦文時代中期～後期初頭前後の時期と考えておきたい。



第40図 I-S区S B 05実測図(2)  
(S=1/60)

## B. 掘立柱建物跡

### S B 05 (第39・40図)

調査区西側に位置する掘立柱建物跡で標高10.0m～10.4mの緩斜面上に立地する。

**規模・構造** S B 05は区画溝を伴う掘立柱建物跡である。建物の規模は、現状で東西5.25m、南北7.35mを測り、かなり大規模なものである。建物の構造は搅乱が各所に及んでおり詳細は不明だが、桁行3間、梁間3間の建物であったと推定される。柱間距離は、梁間部分では1.6m～1.9m、桁行で2.1m～2.9mを測る。

建物主軸はN-12°-Wであり、I-N区S B 03のそれとは同じ向きを指向している。

**覆土** 覆土は炭化物を含む灰褐色土で、須恵器・土師器が出土している。

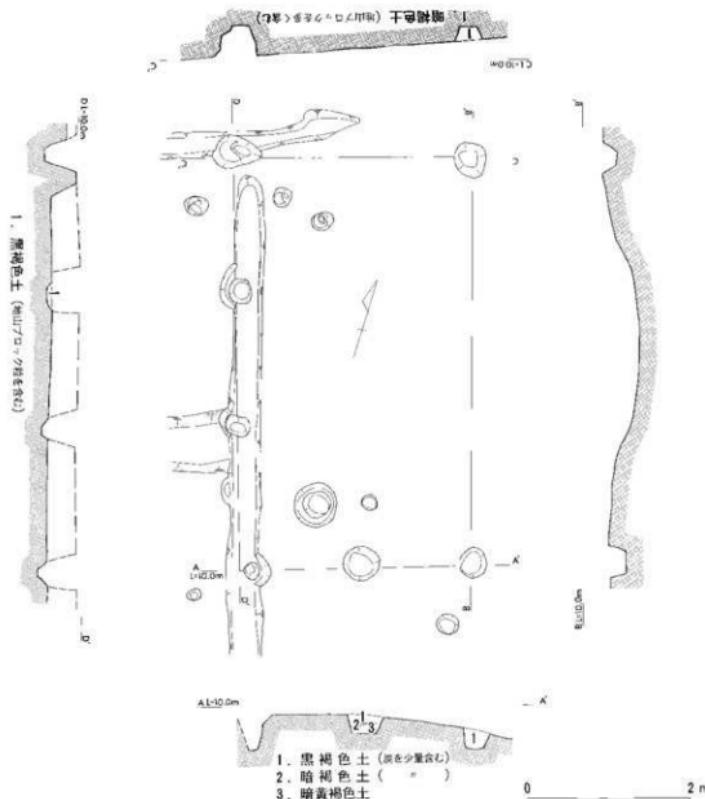
**柱穴・区画溝** 柱穴の規模は径35cm～75cmとややばらつきがあるが、建物の北西・南西隅の柱穴は径70cm前後の二段掘りを呈する掘り方を用いている。柱穴の深さは15cm～55cmとばらつきが認められるが、柱穴底面レベルは比較的整っている。

建物の西側には「コ」字状に区画溝がめぐっている。区画溝の規模は、長さ9.5m、幅15cm～40cm、深さ15cmであり、中央部分は擾乱により失われてゐる。

**戸・焼土面** この建物に伴うと考えられる火焔は確認できていない。

**年代・性格** 建物付近の覆土中から須恵器・土師器が出土している。建物の性格上この建物に確実に伴うものとは断定できないが、これらの遺物は大谷編年4～5期のものでSB05の年代もほぼこの時期前後に比定できる。遺物については後述する。当建物址はI区当該期の建物では最大規模のものであり、当時の集落の中では中心的存在であったものと推察される。

#### SB06 (第41図)



第41図 I-S区 SB06実測図 ( $S = 1/60$ )

S B05の東に隣接する掘立柱建物で、東側はS R01の上場端付近に位置し、標高9.6m～10mの緩斜面上に立地している。

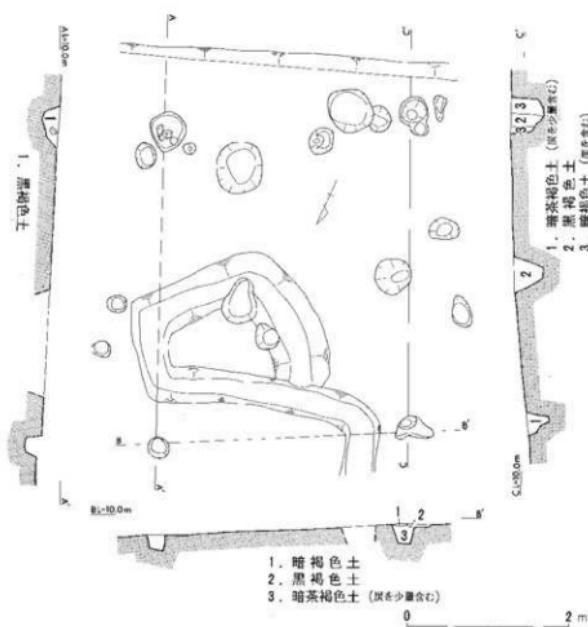
**規模・構造** 調査で確認できた建物の規模・構造は、桁行3間(5.3m)、梁間2間(2.9m)分である。北側の梁間柱間の柱穴は確認できていない。柱間距離は桁行が1.7m～1.8m、梁間が1.3m～1.4mを測る。建物主軸はN-17°-WでS B05の主軸とほぼ一致する。

この建物はS R01の岸に殆ど接して位置しており、両者が共存してたと考えるのは極めて不自然である。のことからS B06が建てられた時点ではS R01は既に埋め立てられ、流路はより東側にあったものと想定される。のことからS B06の梁間がより東へ延びる可能性も考慮されるが、前述のとおり調査時点では確認することはできなかった。

**柱穴** 柱穴の規模は径45cm～60cm前後、柱穴底面のレベルは9.5m前後で比較的整っているが南側梁間中間の柱穴のみが浅く、このピットは当建物に伴わない可能性もある。

**灰・焼土面** この建物に伴うと考えられる火灰は確認できていない。

**年代・性格** S B06に確実に伴う遺物はないが、周辺覆土出土遺物やS B05との関係からみて大谷編年4～5期前後のものと想定され、建物の配置関係からみてS B05と密接な関連のある建物と考えられる。

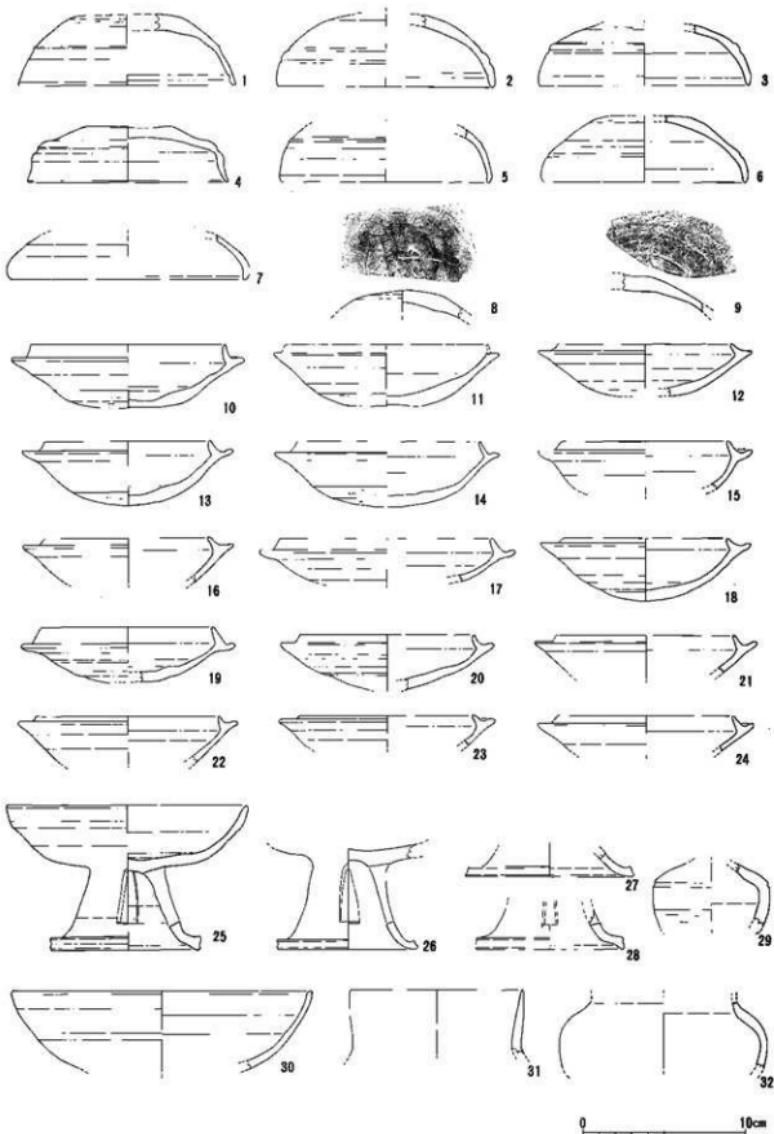


第42図 I-S区S B07実測図 (S=1/60)

#### S B07 (第42図)

S B06とほぼ同じレベルで同建物南に隣接する形で検出した掘立柱建物で、南側は調査区外へ延びている。

**規模・構造** S B07は梁間1間、桁行2間以上の建物であったと推定され、現状での規模は梁間3.2m、桁行3.9m以上を測る。桁行の柱間距離は2m前後を測る。建物の主軸はN-25°-W前後で、S B05・06より若干西へ振っており、I-N区S B02の主軸にはほぼ一致す



第43図 I-S区遺構外出土遺物実測図(1) (S=1/3)

る。

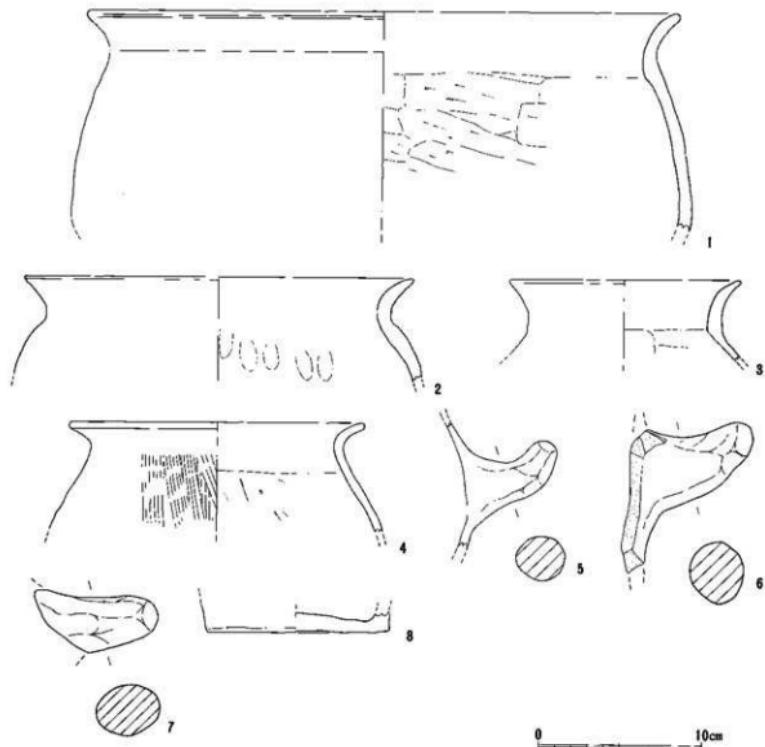
**柱穴** 柱穴の規模は、径25cm～50cm、深さ20cm～40cmとかなりばらつきが認められる。柱穴の覆土は黒褐色土系のもので、柱の抜き取り痕が観察されるものも認められた。

**炉・焼土面** この建物に伴うと考えられる火処は確認できていない。

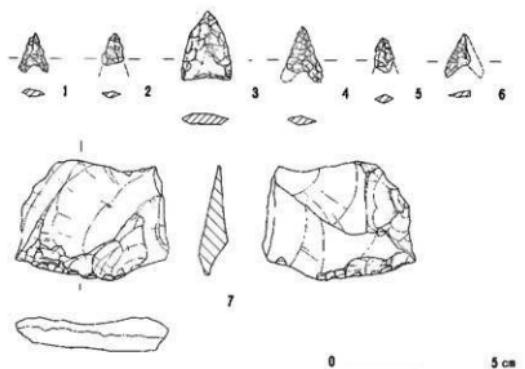
**年代・性格** S B06と同様、確実に伴う遺物がないが、周辺出土遺物からみて大谷編年4期～5期前後のものと考えられる。

#### I-S区遺構外出土遺物（第43～45図）

第43～44図は主として掘立柱建物跡の覆土である灰褐色土中からの出土遺物である。第43図1～9は須恵器坏蓋である。1～4は天井部に浅い回転ヘラケズリが認められる資料で、口径12.4cm～13.4cmを測る。1は肩部に鈍い稜をもち、口縁部内面に幅広の浅い沈線をめぐらす。2は肩部に2条の沈線が認められる。4はやや特異な形態の坏蓋で、口縁部はやや外反気味に開き、肩部に1条の沈線を巡らせ、天井部は平坦で丸みを帯びない。焼成は極めて良好で断面セピア色を呈する。1



第44図 I-S区遺構外出土遺物実測図(2)(S=1/3)



第45図 I-S区遺構外出土遺物実測図(3)  
(1~3.7 S 103付近出土 S=2/3)

い周辺へラケズリを施している。1~5と同様大谷編年4期でも比較的新しい時期のものと思われる。15は受部が内湾状を呈するもので、同様な受部の形態は17、19にもみられる。18~20は口径10.2cm~10.6cmとやや小型化して底部が尖り気味となり、ヘラケズリが認められない資料で、大谷編年5期に相当する資料である。21~24もほぼ同時期のものであろう。

25~28は高杯である。25は口径15.0cm、器高9.0cmを有する低脚無蓋高杯で、杯部は綾をもたず内湾する単純な形態を呈し、脚部には逆台形の透かしを2方に穿つ。大谷分類低脚無蓋高杯A 5型に属するもので、大谷編年4期の資料である。26も同様なタイプの高杯の胸部と考えられ、2方透かしで、脚端部は外面はほぼ直立する凹面をもつ。

29は鷹と思われる資料で、肩部に沈線をめぐらし胴部下半には回転ヘラケズリが認められる。30は25の高杯部と類似する資料だが、口径が18.6cmとやや大型で鉢と考えた方が良いかもしれない。31は短頸壺の口縁部で、口径10.6cmを測る。口縁部はほぼ直立気味に立ち上がり、口縁端部は先細り状に収めている。32は小型の壺と思われる資料であるが、詳細は不明。胴部はよく張り最大径12.8cmを測る。

第44図は土師器である。1は口径36.6cmを測る大型の壺で、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く收める。胴部は肩があまり張らないタイプのものと考えられる。内面頸部以下には左方向のヘラケズリを施す。2も1とほぼ同形態の壺で、口径24.0cmを測る。3は口径14.3cmを測り、口縁部は緩やかに長く外反するタイプの壺で、壺に近い形態を呈するものである。4は外面に粗いタテハケが観察される。

5~7は楕の把手で、外面は粗い指ナデで仕上げている。胴部との接合法が観察できるものはない。8は繩文土器の底部で、底径11.4cmを測るわずかに上げ底状を呈するものである。風化が著しく調整は不明。

第45図はI-S区遺構外覆土中出土石器で、このうち1~3、7はS 103付近で出土したものでその概要は先に記した。

4はピット内から出土した黒曜石製の凹基無茎式石鏃であり、片脚を欠損している。長さ1.7cm、

~5は大谷編年4期に相当する。

6は天井部外周のみに浅いヘラケズリを施すもので、大谷編年4期でも新しい時期のものである。8・9は天井部にヘラ記号を有するもので、大谷編年5期の壺蓋と思われる。

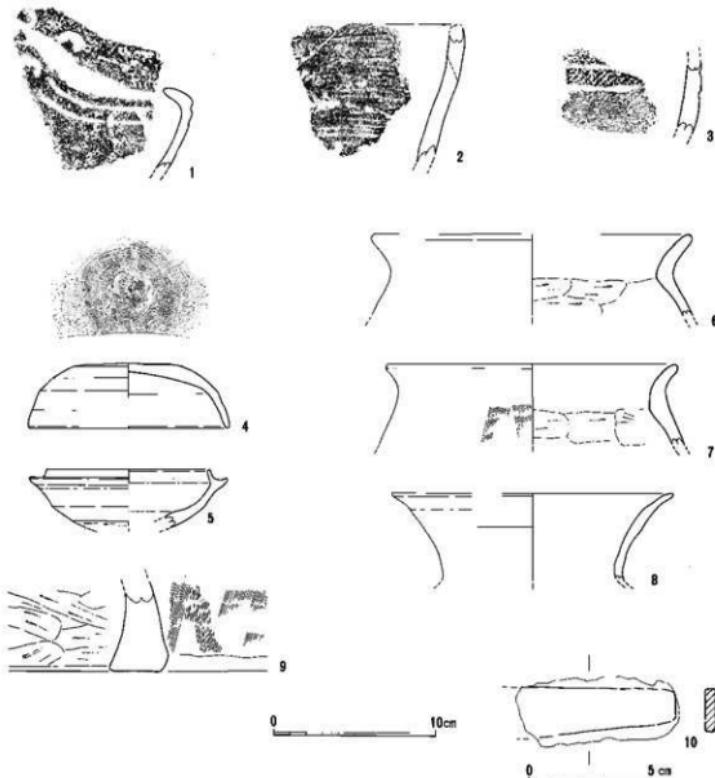
10~24は杯身である。10~14は口径10.4cm~12.8cmを有り、立ち上がり部は内傾気味に短く立ち上るるもので、いずれも底部は浅

厚さ3mm、重量1.3gを測る。5は黒曜石製の石鎌で先端部のみ残存する。6は黒曜石製の石鎌で、半分を欠損している。復元長1.4cm、幅1.2cm前後のものと思われ、非常に小型のものである。これらのI-S区出土の石鎌は後述するIII区のものに比べて小型のものが多い。

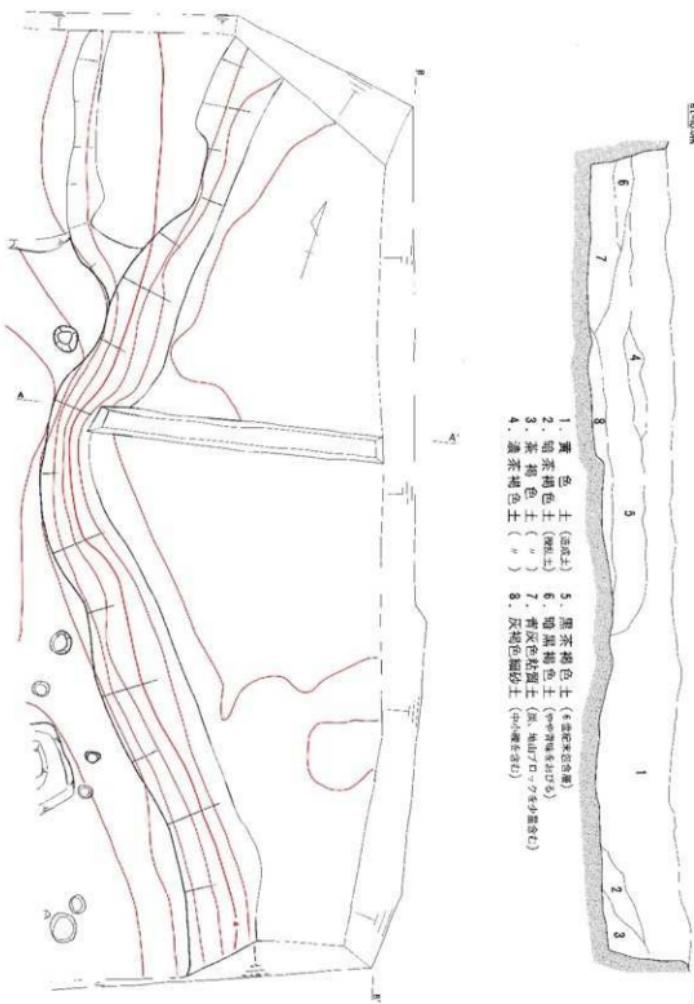
第46図はI-S区トレーニチ調査時の出土遺物である。3は繩文土器で、R Lの磨消繩文縄文帯のある胴部資料である。内面はナデ調整を施しているように見える。

4は須恵器壺蓋で、口径12.6cmをはかり、肩部に沈線を持たない。天井部は周辺部のみヘラケズリを施し中央部はヘラ切り後ナデている。5は壺身で口径10.1cmを測り、底部に浅いヘラケズリが観察される。4・5は大谷編年4期のもので、他のI-S区出土須恵器とほぼ同時期のものと考えられる。

6は土師器甕で、色調は淡橙色を呈し、器壁は他の当該期の甕に比べてやや薄手である。口縁部は「く」字状単純口縁である。7は厚手で口縁部が短くゆるやかに外反するタイプの甕で、外面はタテハケ、内面には横方向のヘラケズリが認められる。古墳後期末前後のものであろう。



第46図 I-S区トレーニチ出土遺物実測図 (1~9…S=1/3 10…S=1/2)



第47図 I-S区SR01実測図 ( $S = 1/80$ )

8は明褐色を呈する薄手の壺で、口縁部は長くゆるく外反し、口縁部端部は先細り状に丸く收める。形態や色調からみて古墳時代中期のものであると想定される。

9は移動式壺の底部である。器壁が3.3cm前後を測る分厚いつくりで、外面にタテハケ、内面にヘラケズリが認められる。10は刀子の基と考えられる鉄器片で残存長6.5cm、最大幅2.1cm、厚さ4mmを測り、茎尻へ向けて直線的に細くなる形態のものである。S B05・06に伴うものであろう。

### C. 自然河道

#### S R01（第47図）

調査区東側で検出した自然河道で、御茶屋川の旧河道と考えられる。調査区内では河道の西側部分を調査したのみで、東側の岸の検出には至っていない。

**規模と形態** S R01は、現在の御茶屋川の流路とほぼ平行して北から南へと流れている。細かくみると、調査区南側では南東から北西へ向けて流れしており、調査区中央部付近で流路を変え南西から北東へと流れている。従ってこの流路屈曲部付近の川岸は水勢のため抉れ、他の川岸部分より急傾斜をなしている。

河道の幅については、調査区内の所見のみでは不明と言わざるを得ないが、現在の御茶屋川の川幅（5～10m前後）と想定される。

川岸はかなりの急傾斜を呈し、前述のとおり流路変換点付近の川岸はほぼ垂直気味に立ち上がっている。遺構面から川底までの高さは約1.7mを測り、川底の標高は8.4m前後である。

**覆土** S R01の南東側は、隣接する道路の改良工事の際に削平されており、多量の造成土が堆積していた。この土層を除く本来のS R01内の覆土は、およそ3層に分かれれる。S R01の底面基盤層は、青灰色細砂土で、その上に、青灰色粘質土が厚さ約15cm前後堆積している。この土層中からは弥生土器のほか、6世紀後半の土器を若干含んでいる。

この青灰色粘質土の上層に地山小ブロックを多量に含む暗灰茶褐色粘質土が約50cmの厚さで堆積している。この土層からの出土遺物は、繩文土器細片が若干出土した他はほとんどが古墳時代後期の遺物である。

河道の上層は最大1m近くの厚さで黒茶褐色土が堆積している。この土層は地山中小ブロックを多く含んでいる。この土層中の細分は困難な状況であり、6世紀末から7世紀前半にかけての多量の須恵器・土師器が出土している。こうした様相からみて、この黒茶褐色土及びその下層の暗灰茶褐色粘質土は人為的に一時に埋め立てられた可能性が高いと考えている。

#### 遺物の出土状況（第48～50図）

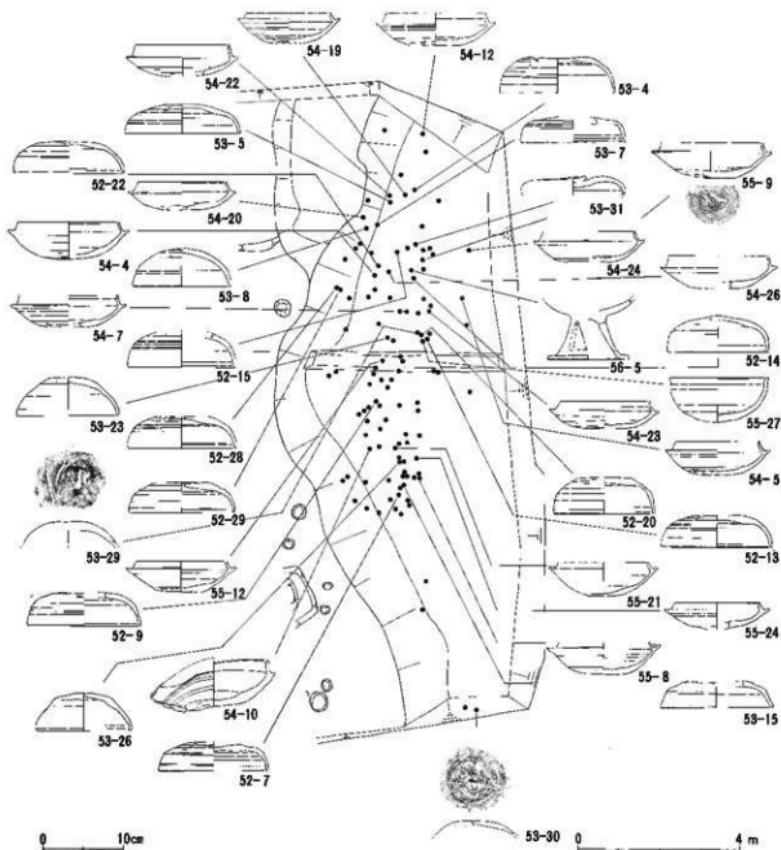
第48・49図はS R01内から出土した須恵器のうち、主として坏蓋・坏身の平面分布・垂直分布を示した。まず平面分布（第48図）を検討すると、遺物は流路屈曲部付近に集中して出土していることがわかる。特に中央東西サブレンチ北側に集中して出土している。こうした遺物の集中状況は、単なる流れ込み遺物が屈曲部に集中して堆積したとは考えにくく、意図的な廃棄による集積によるものと考えたい。

後述するようにS R01出土遺物は大谷編年3期～5期のものが大半であるが、時期別の平面分布状況について検討してみると、大谷編年3期～4期古相の資料は流路北側のブロックに比較的集中しているのに対し、大谷編年5期の資料は比較的まばらで均質な分布状況を示している。こうした

状況から、少なくとも大谷編年3～4期の遺物群については、先に述べた意図的な廃棄行為が行われた可能性が高い。

第49図は須恵器のうち主として壺蓋・壺身の垂直分布状況を示したものである。この図での土層表現は調査区東壁の断面図を投影したものであり、必ずしも実際にドットで示した遺物がそれぞれの層位から出土したことを示すものではないが、各層位ごとの出土傾向を大まかには傾向は反映しているものと考えられる。

垂直分布図の上段に主として大谷編年5期、下段に大谷編年3～4期のものを載せているが、これらの時期別の出土傾向をみると、大谷5期の遺物はほぼ上層に限定されており、河道底面付近出土遺物は全て大谷編年3～4期の遺物であることが窺える。こうした垂直分布状況からみて、SR

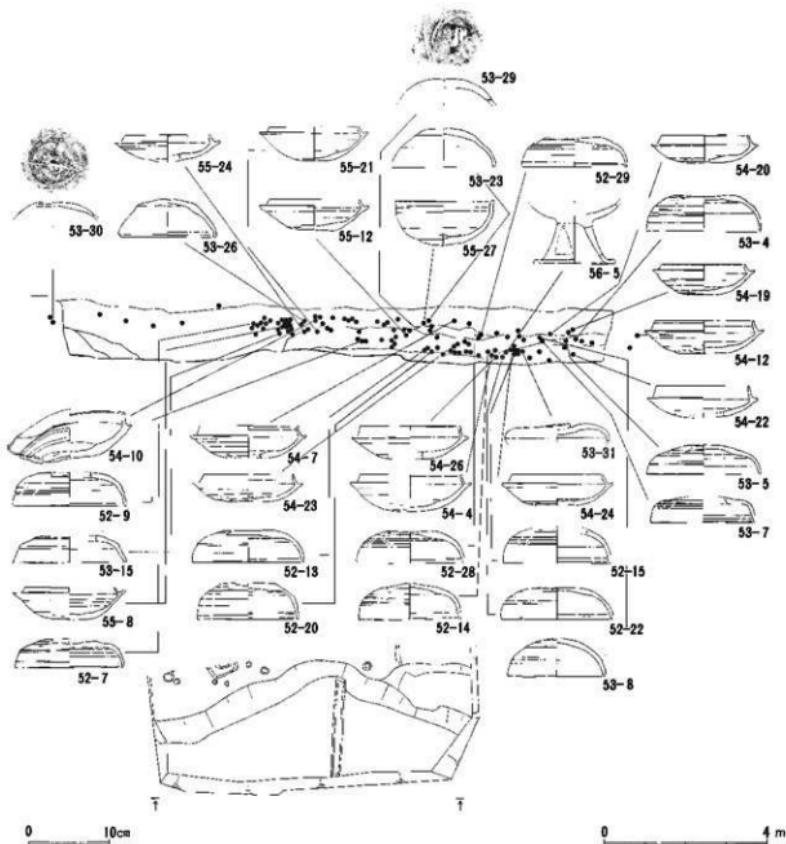


第48図 I-S区SR01遺物出土状況図(1) (遺構 S=1/120 遺物 S=1/6)

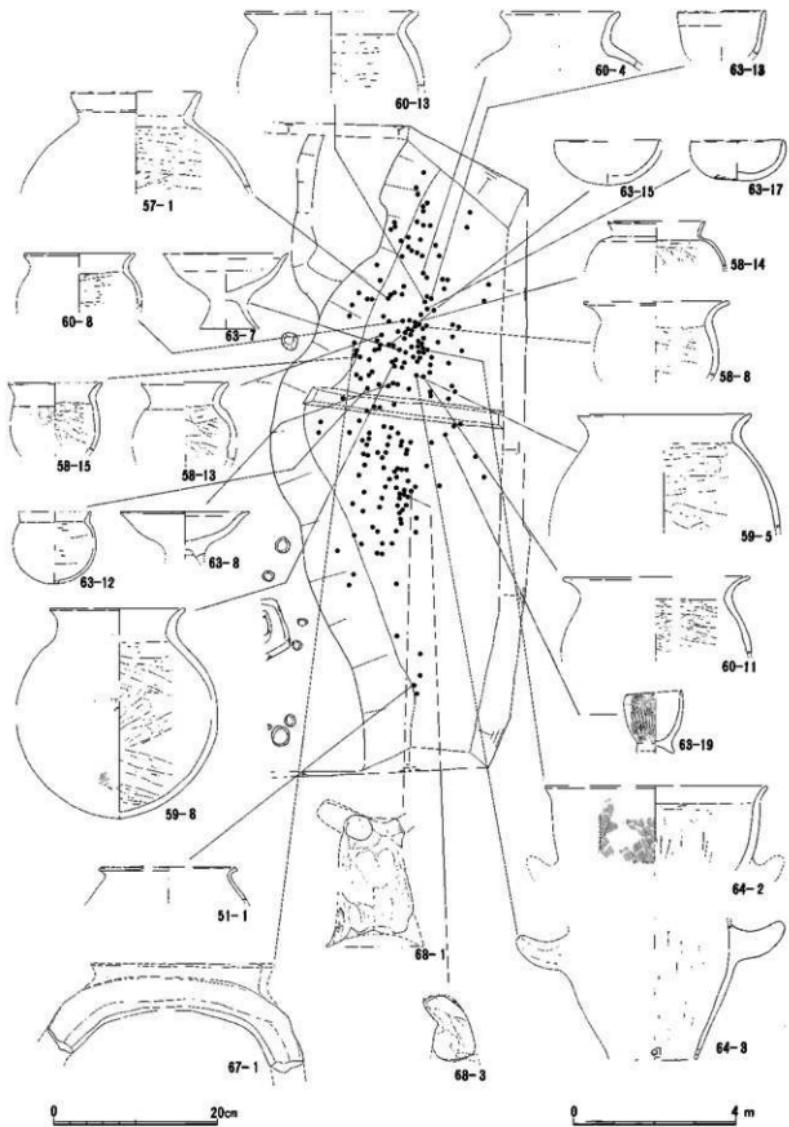
01は大谷4期の段階で比較的短期間に埋め立てられたものと想定される。

また、上層出土の遺物は、掘立柱建物群を覆う覆土中の遺物の新相の年代と一致しており、また前述したように下層のような集中的な平面分布状況をみせず、均質的な分布状況を示していることからみて、既にSR01が埋没しその上面が生活面として利用されていた段階以降に堆積した遺物であると判断できる。

第50図は弥生土器・土師器の平面分布状況である。土師器のうち一部のものしか掲載していないが、須恵器と同様に河道屈曲部付近に集中していることがわかる。また図示していないが、弥生土器の分布は河道屈曲部には集中せず、大谷編年5期の須恵器と同様河道全体にまばらで均質な出土状況を示している。



第49図 I - S 区 SR01 遺物出土状況図 (2) (遺構 S = 1/120 遺物 S = 1/6)



第50図 I-S区SR01遺物出土状況図(3)(遺構 S=1/120 遺物 S=1/6)

土器の分布状況には特に器種ごとの片寄りは認められず、高坏・坏が多いといった傾向も認められない。こうした点から土器群の集中廃棄行為には特に祭祀的色合いは認められず、集落を拡張する際に、それまで使用していた日常什器類を一齊に片付けるといった、通常の廃棄行為であったと推察される。

#### S R01出土遺物（第51～69図）

**A. 弥生土器** S R01からは縄文時代から古墳時代後期にかけての多量の遺物が出土しているが、その大半は6世紀後半から7世紀前半にかけての遺物である。

第51図はS R01から出土した弥生土器である。1は弥生中期の甕で、小片であるが復元口径17.0cmを測る。色調は淡橙灰色を呈し、非常に薄手のつくりである。口縁端部は若干肥厚し、外面に凹線文状の沈線を1条めぐらす。外面にはタテハケが観察される。

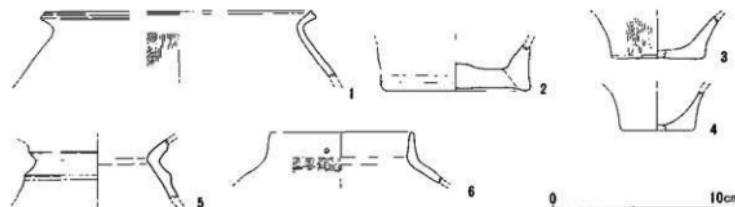
2～4は底部資料である。2は底径8.5cmを測る若干上げ底気味の底部で、接合痕が観察される。3は平底の資料で底径5.5cmを測る。外面に縦方向のヘラミガキが認められる。

5は鼓形器台である。磨滅のため調整及び正確な天地は不明であるが、形態からみて草田5～6期のものであろう。6は短頸壺で口縁部は短く直立し、円孔が穿たれている。肩にはヨコハケが観察される。

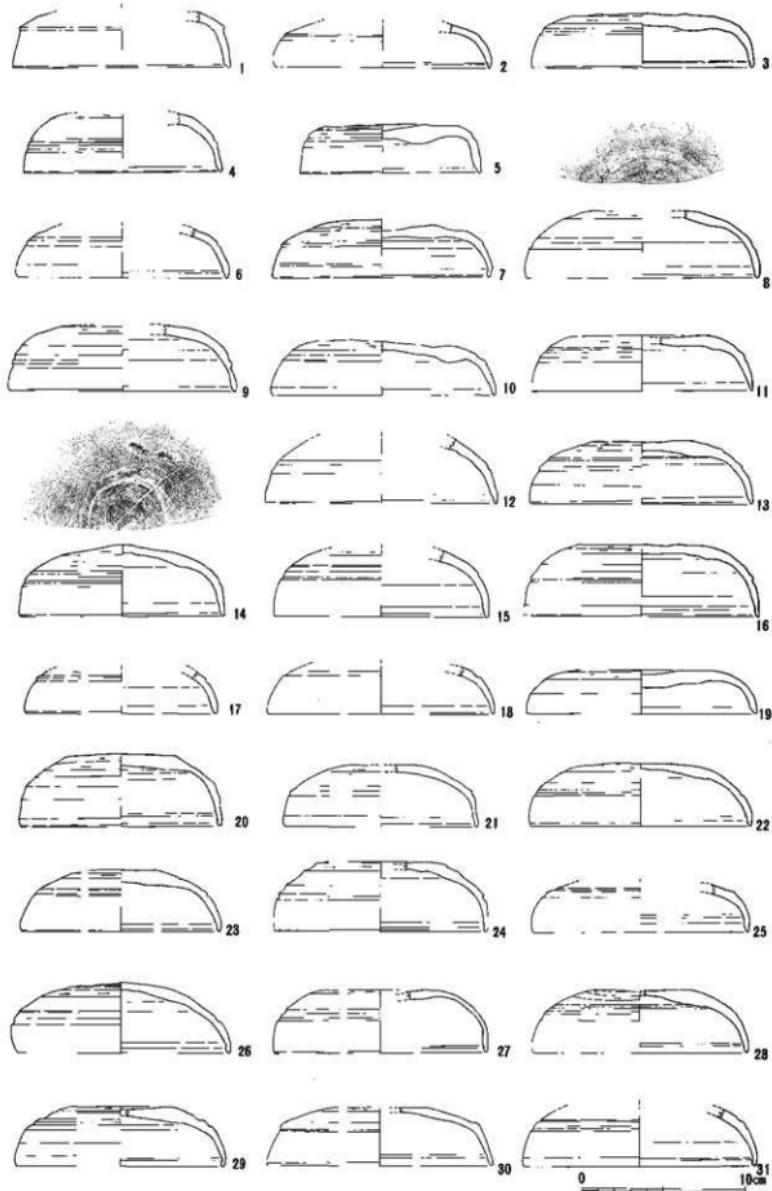
**B. 須恵器** 第52・53図は須恵器杯蓋である。第52図はすべて天井部に回転ヘラケズリを有するもので、大半が大谷編年3～4期に属するものである。1は口径はやや不正確だが、やや厚手で肩部の稜がしっかりしており、口縁端部に凹面を持つものである。他の杯蓋より古いものと思われる。2は口径13.2cmを測り、肩部には1条の沈線をめぐらし突帯を表現している。口縁端部内面は段状を呈する。

3は口径13.7cmを測り、天井部に丁寧な回転ヘラケズリを施している。肩部の沈線は2条存在するが、上側の沈線はやや曖昧である。肩の二条沈線が曖昧な点は当遺跡出土杯蓋の共通した特徴と言える。口縁端部内面は段状気味となる。大谷分類A 3 a型に相当するものであろう。4は肩部の二条沈線が比較的しっかりしている杯蓋で、他の須恵器片が付着している。

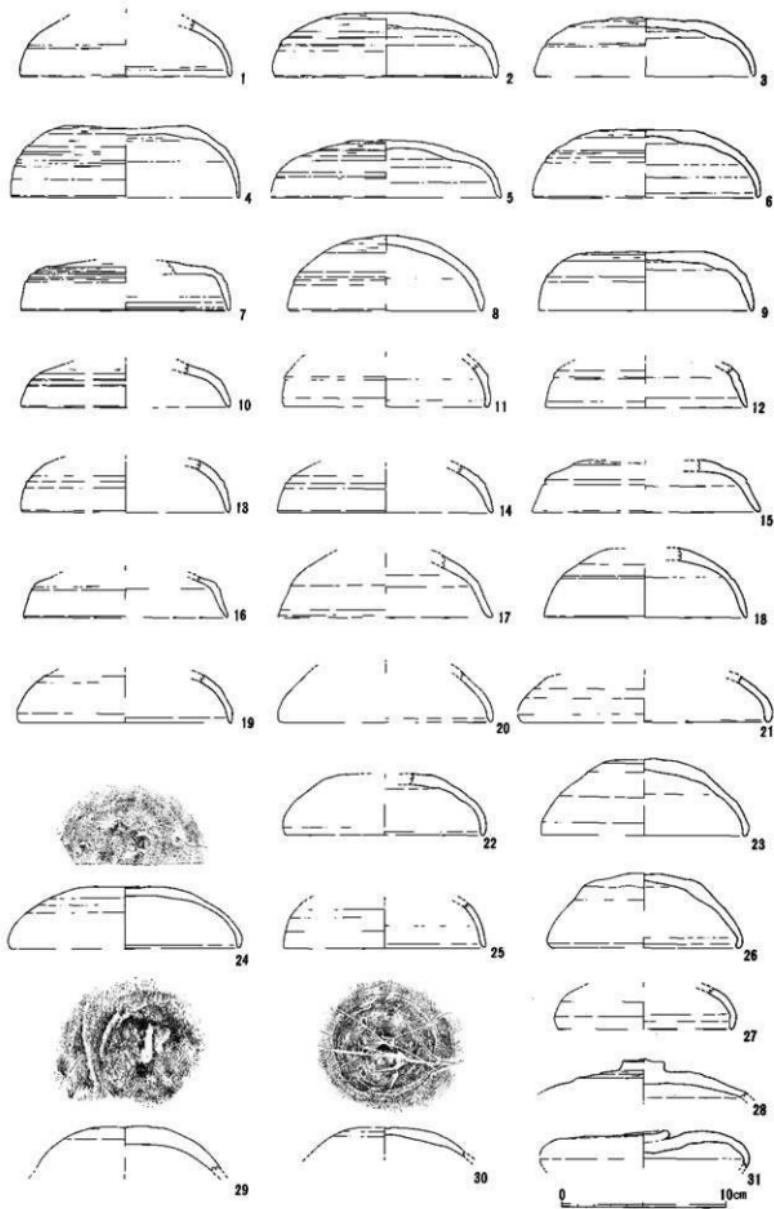
7は天井部の回転ヘラケズリはしっかりしており、肩部は沈線1条でシャープな稜を作り出している。口径13.3cmを測り、大谷編年3期の資料だろう。13は大谷編年3期の資料と考えられるが、口縁端部内面は沈線入れた後なでゆるい凹面状を呈する。14は天井部に丁寧な回転ヘラケズリを施し、肩部に幅広の2条沈線をめぐらす。天井部にはヘラ記号が認められる。16は口径12.7cm、器高3.9cmをはかり、全体的に偏平な印象を与える杯蓋である。肩部の2条沈線は上側沈線が幅広で暖



第51図 I-S区 S R01出土遺物実測図(1)



第52図 I-S区SR01出土遺物実測図(2) (S=1/3)



第53図 I-S区SR01出土遺物実測図(3) (S=1/3)

味なものである。口縁部内面はゆるい段状を呈する。

19は口径14.2cmとやや大型のもので天井部に回転ヘラケズリが認められるが、肩部の沈線が無いタイプの坏蓋である。20も19と同様、天井部に回転ヘラケズリを施すが、肩部に沈線の無いタイプである。口径12.2cmを測り、口縁端部内面に幅広の沈線を施す。22は天井部の回転ヘラケズリが中心部を削り残している坏蓋で、口径13.5cmを測り、肩部に1条の沈線を施す。口径はやや大きいが大谷編年4期に近い資料である。

第53図2は口径13.5cmを測り、天井部回転ヘラケズリはやや粗雑なもので、口縁部端部は丸く収める。3は2とほぼ同様な口径で肩部が1条沈線のものである。5は器高が低く、肩部の沈線も1条で曖昧なものである。口径14.0cmを測る。6は天井部のケズリが浅いもので口縁部端部は丸く収める。大谷編年4期のものだろう。8は口径12.0cmをはかり、口径に対して器高が高い。大谷編年4期に相当する。15は口縁部が内湾せずや開くタイプのもので、肩部に1条の太い沈線を入れる。高坏の可能性がある。

23は口径12.7cmで天井周辺部に微かに回転ヘラケズリが観察される。大谷分類A 6型と思われる。24は口径が14.2cmとかなり大きいが、天井部はヘラ切りのちナデを施す。大谷編年5期の資料である。26は口径12.0cmを測り、口縁部は内湾する形態を呈する。27は口径が10.8cmと小さく、出雲6期まで降る可能性がある。30は天井部に「×」印のヘラ記号のある坏蓋である。28はつまみの付く蓋でS R 01出土遺物では最も新しいものである。大谷編年6B期前後のものであろうか。

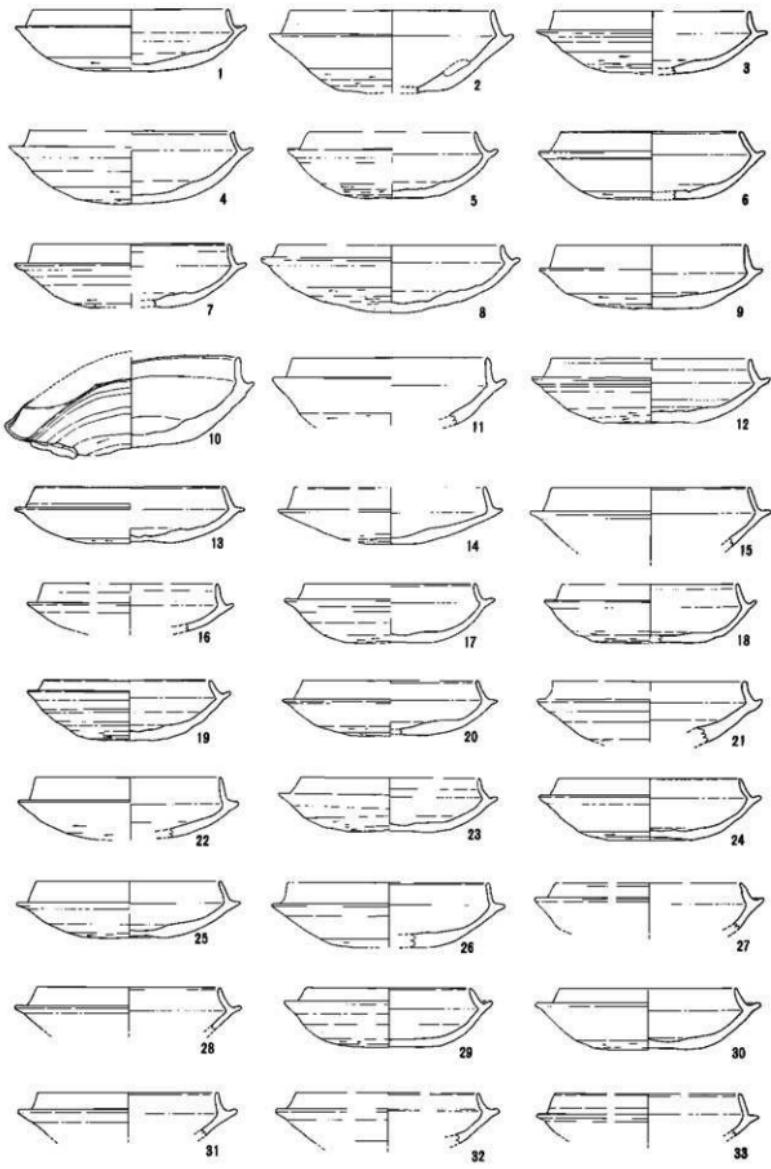
第54図は須恵器坏身のなかでも比較的古い資料で、大谷編年3～4期のものと考えられる。2は口径12.4cmを測り、立ち上がり部も比較的長く立ち上がる。4は口径12.6cmをはかり、底部には回転ヘラケズリを施すが中心部のケズリはやや浅い。立ち上がり端部は平坦面を形成する。9は口径11.7cmを測り、立ち上がり部は長く直立気味に立ち上がるが、底部のヘラケズリは比較的浅いものである。

10は焼き歪みのため著しく変形しており、他の個体の須恵器片が溶着している。ヘラケズリはやや浅いが大谷編年3期のものと思われる。12も大谷編年3期と思われる資料で口径12.2cm、器高4.0cmを測る。13は口径11.6cm、器高3.5cmを測るが、受部は外反気味の形態を呈する。14は立ち上がり部が長く、底部に丁寧なヘラケズリを施しており、やはり大谷編年3期と考えられる。

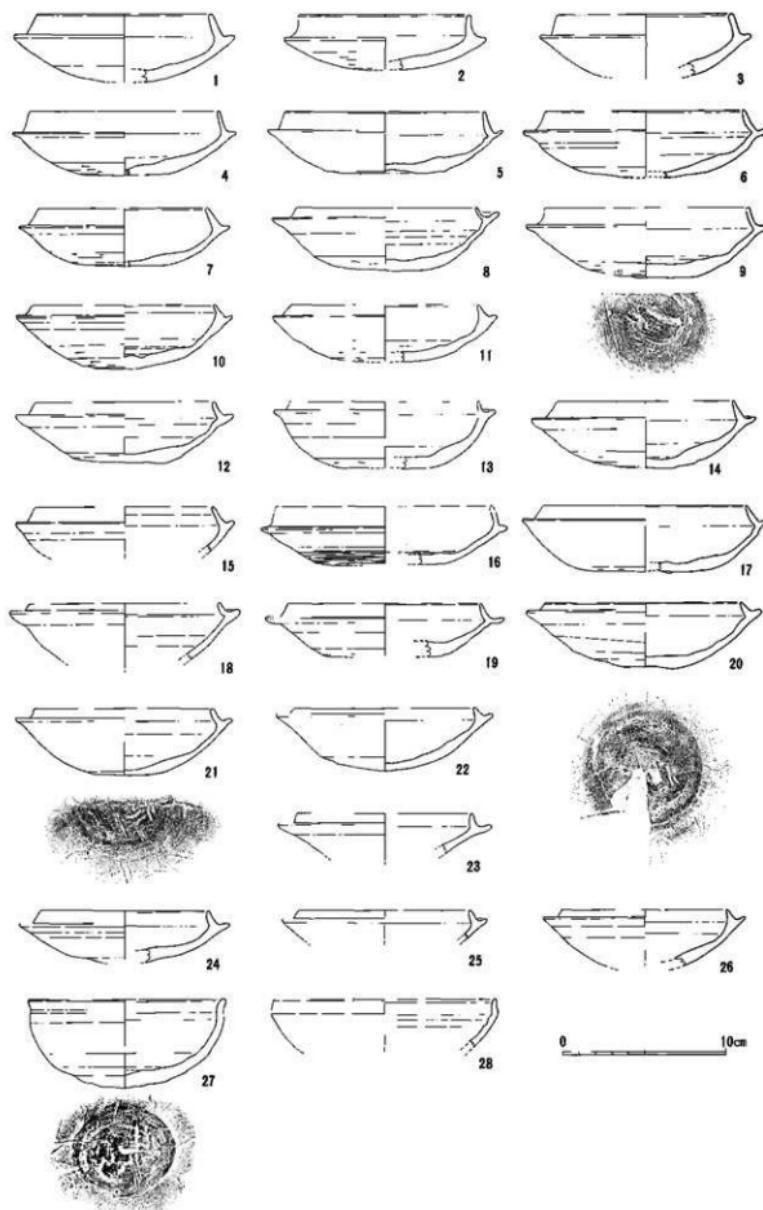
17は口径が10.6cmとやや小さく、底部のケズリの範囲も狭まっており、前述の坏身よりやや新しい様相を示す。20は口径10.8cmを測る坏身である。焼成は良好で断面セピア色を呈する。25は口径11.5cmを測り、底部に丁寧な回転ヘラケズリを施し、受部は横方向に突出している。29は口径10.2cm、器高3.7cmをはかり、立ち上がり部はやや内傾度が強い。焼成は良好で、断面セピア色を呈する。

第55図1は口径10.8cmを測る坏身で、全体的に厚手でつくりが鈍い。胎土は2mm以下の砂粒を多量に含み、調整は風化が著しく不明である。2は当地ではやや特異な形態の坏身で、口径は10.6cmを測る。1と同様全体的に厚手でつくりが鈍い。受部は横方向へ鈍く突出し、底部には回転ヘラケズリを施す。胎土はやや粗く、2mm以下の砂粒を多量に含む。このようにこの坏身は在地のものとはかなり特徴を異にし、搬入品である可能性がある。

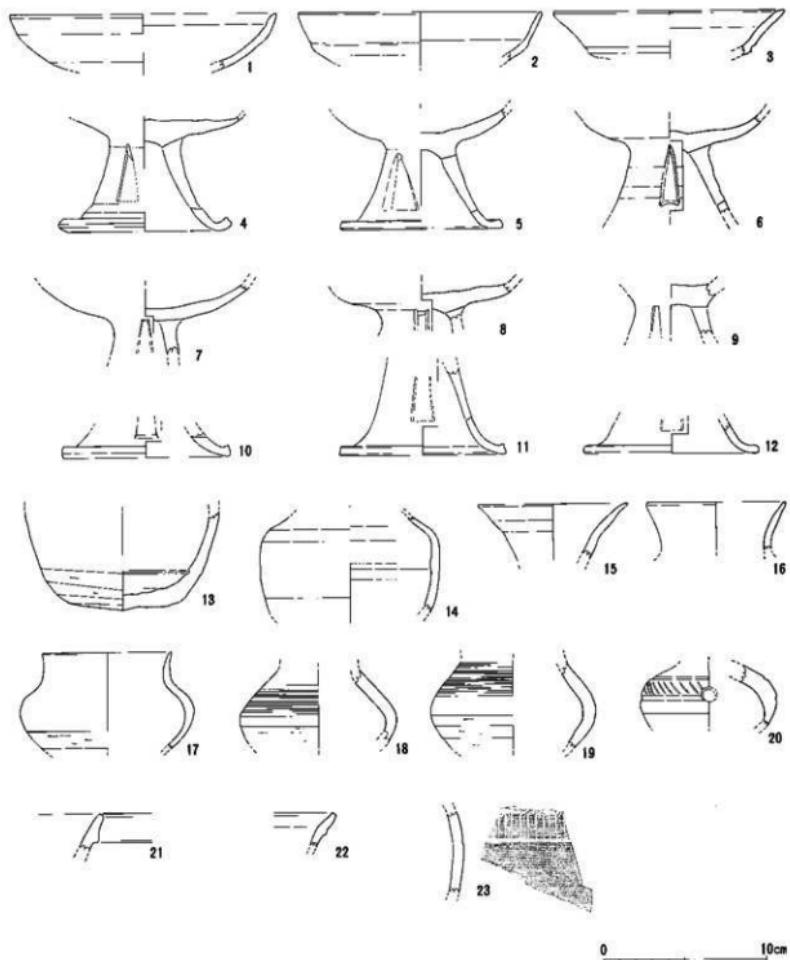
7は口径10.4cm、器高3.6cmを測り、立ち上がり部は内傾している。底部の回転ヘラケズリは周辺部のみであり、大谷編年4期に属するものと考えられる。8も底部周辺部に浅い回転ヘラケズリ



第54図 I-S区S R01出土遺物実測図(4)(S=1/3)



第55図 I-S区SR01出土遺物実測図(5) (S=1/3)



第56図 I-S区S-R01出土遺物実測図(6)(S=1/3)

を施し、中心部はヘラ切り後ナデで仕上げている。大谷分類A 5型に相当するものと思われる。9は口径12.4cm、器高4.3cmを測る坏身で、8と同様底部は周辺ヘラケズリであり、中心部にハケ状工具で撫でた痕跡が認められる。

12は底部最外周のみ浅い回転ヘラケズリを施したもので、ヘラケズリの退化がより進行した資料である。口径11.2cmを測る。13・14も大谷編年4期に属する資料と考えられる。

16は坏身體部にカキメを施す特異な資料で、受部も斜め下方向に突出している。このような特徴か

らみて 2 と同様搬入品である可能性がある。

20は口径12.0cmを測り、立ち上がり部は著しく内傾する。底部はヘラ切り後ハケ状工具でなでつけている。大谷編年5期の資料である。21・22も同様な時期のものと考えられる。

27は口径12.1cm、器高5.4cmを測る坏身である。口縁部は若干くびれ口縁端部は丸く収める。第53図28と同様、S R01出土遺物の中では最新相の遺物で、高広ⅢA期<sup>(12)</sup>に比較的近いタイプのものが認められるが、同種のものかは定かではない。

第56図は須恵器高坏・壺・甕等である。1~12は高坏である。1は高坏の坏部と考えられる資料で口径16.4cmを測り、浅い椭形の形状を呈する。2・3は坏部に屈曲部の稜を持つタイプで、2は坏蓋かもしれない。

4は高坏脚部で、底径9.2cmを測り、脚部に長三角形1段2方透かしを穿つ。5・6も4とほぼ同形態の高坏と考えられ、大谷分類A4・A5型に属するものと考えられる。7~9も2方透かしの資料で、S R01中からは透かしが切れ目となるタイプのものは出土していない。10~12は高坏脚端部で、いずれも脚端部外面にしっかりと直立する平坦面を持つものである。

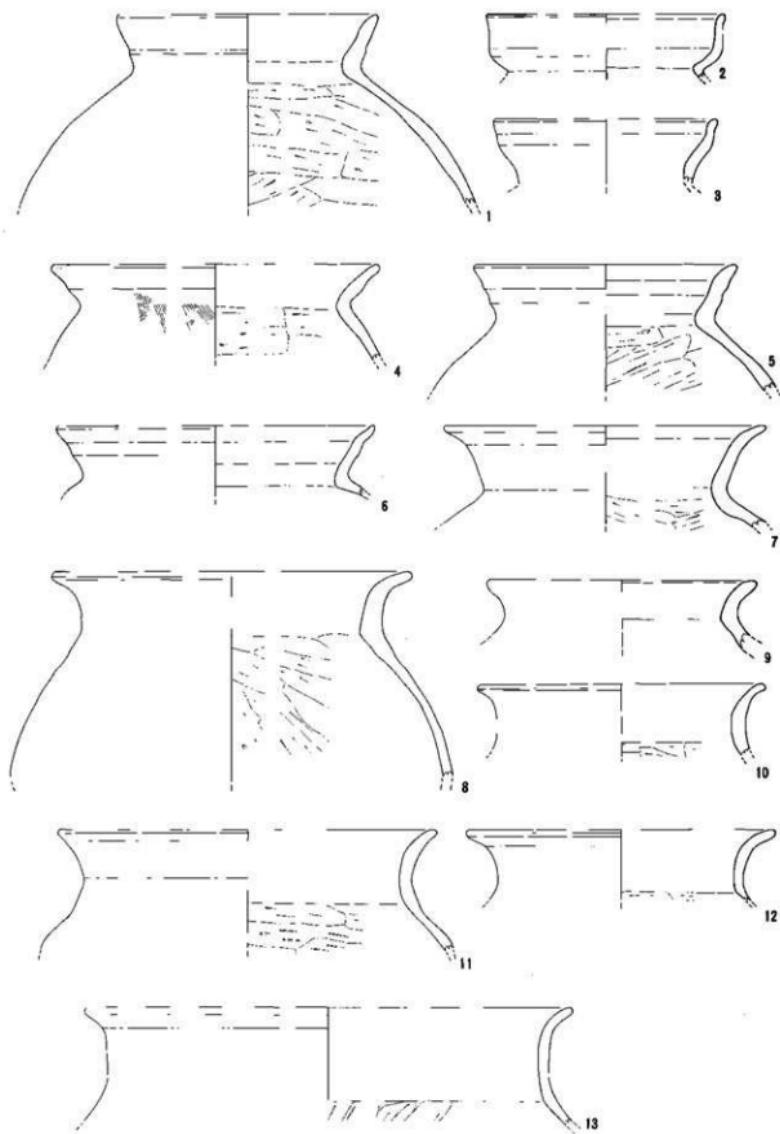
13は壺底部で、底部中心部にはハケ状工具によるなでつけが観察され、胴部下半に回転ヘラケズリを施す。14は肩部から胴部にかけての資料で、短頸壺と想定される。内外面ヨコナデ調整を施す。17は小型の短頸壺と考えられ、口縁部はほぼ直立し口縁端部は先細り状に収める。底部には回転ヘラケズリを施す。18・19は小型の壺で最大径9.6cm~10.2cmを測り、肩部にカキメ、胴部下半以下を回転ヘラケズリを施す。20は甕で、体部に2条の沈線をめぐらし、その中に刺突文を施す。21、22は甕口縁部でいずれも小片である。23は壺の体部と思われ、外面にはカキメが認められ沈線で区画した中に櫛状工具による縱方向の刺突文を施している。

**C. 土師器・土製品** 第57図~62図はS R01から出土した土師器甕である。当遺構内出土遺物では最も多量に出土しており、その大部分は大谷編年3期~5期のものである。このように、これらの土師器はかなりの時間幅をもつ資料と想定されるが、その大半は単純な形態を呈しており、また完形の資料も殆ど無いことから、時期的な変遷を追うことは現状では不可能である。ただ口縁形態には幾つかバリエーションが認められそうであり、そのうちの幾つかについては今後年代限定できる可能性があるかもしれない。ここでは口縁形態を中心に大まかな分類を試みてみた。

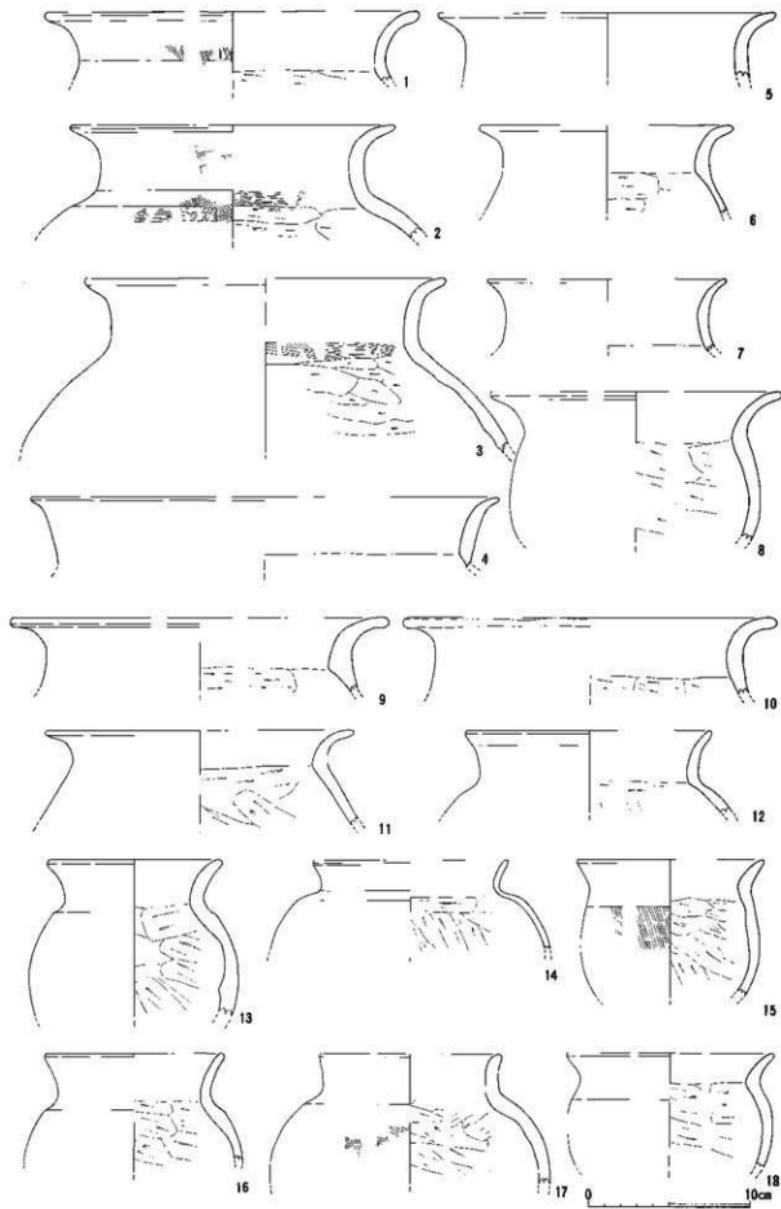
第57図1~6は退化した複合口縁状の形態を呈するものである。今までこれらタイプの甕は古墳時代中期までのものと考えられてきたが、最近の調査で人谷編年3期の須恵器に共伴する事例が安来市徳見津遺跡などで確認されるようになってきた。<sup>(13)</sup> S R01内では少なくとも須恵器に関してはでは古墳時代中期まで遡るものは無いことからみて、これらの甕も古墳時代後期、人谷編年3期前後に属するものである可能性はある程度考慮されるが、土師器では5世紀代まで遡る資料が認められ、所属年代については現状では比定できない。

1は口径15.8cmを測り、体部はやや撫で肩であるが比較的胴部の張る資料である。口縁部は複合口縁段部の痕跡を示すアクセントがわざかに認められる。2・3は複合口縁部の形状が比較的残っているものである。いずれの甕も口縁部段部は丸みを帯び、口縁端部は丸みを帯びやや外反する。

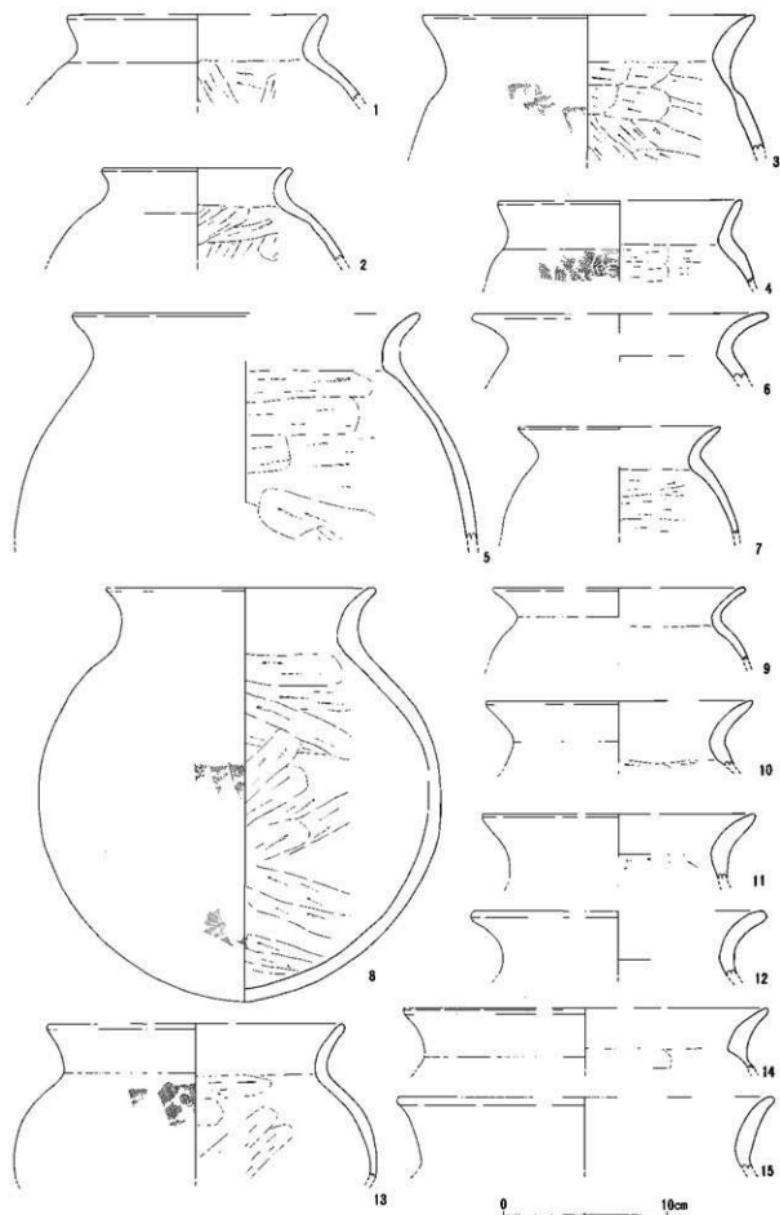
5は口径16.0cmを測り、口縁部は複合口縁部段部の痕跡的な鈍い稜を残す。胴部内面は右方向へのラケズリを施す。



第57図 I-S区SR01出土遺物実測図(7)(S=1/3)



第58図 I-S区S R01出土遺物実測図(8) (S=1/3)



第59図 I-S区 S R01出土遺物実測図 (9) ( $S = 1/3$ )

第57図7～第58図4は口縁部が比較的長く立ち上がり、中途で外方へ強く屈曲するタイプの口縁部を図示した。これらの中にはさらに幾つかバリエーションが認められる。

7は口径19.8cmをはかる甕で、口縁部は「ハ」字状に開き、中途でさらに外方へ屈曲しており口縁端部は丸く收める。胴部外面には煤痕が認められる。8は胴部上半部まで残存する資料で、口径は小片のため不正確であるが、22.2cmを測る。7と異なり口縁部は、一旦直立気味に立ち上がった後強く外反する形態を呈する。

11はやはり口縁部が長く立ち上がるタイプの甕であるが、中途の屈曲変換点は認められず、ならかな弧状を呈して外反する形態の甕である。口径23.4cmを測り、内面には左方向のヘラケズリを施す。12・13は8に近い形態の口縁部の甕である。13の胴部内面は縱方向のヘラケズリを施す。

第58図2は第57図8に似た形態の甕で、口縁部はやや内傾気味に立ち上がったのち、強く外反する。肩部はタテハケの後、ヨコハケが一部に認められる。胴部内面に左方向のヘラケズリを施す。3は2とほぼ同形態の甕で、頸部内面に横ハケが一部観察され、胴部内面には左方向のヘラケズリを施す。

第58図5～11は口縁立ち上がりが比較的長く、強く外反するタイプの甕を図示した。6は口径15.6cmの甕で、先に分類した甕の口縁形態に比較的近い。8は口縁部が長く且つ強く外反する小型の甕で、口径18.0cmを測る。9・10は水平気味に強く外反する甕で、口縁端部は丸く收め若干肥厚する。10は口径23.0cmを測る。

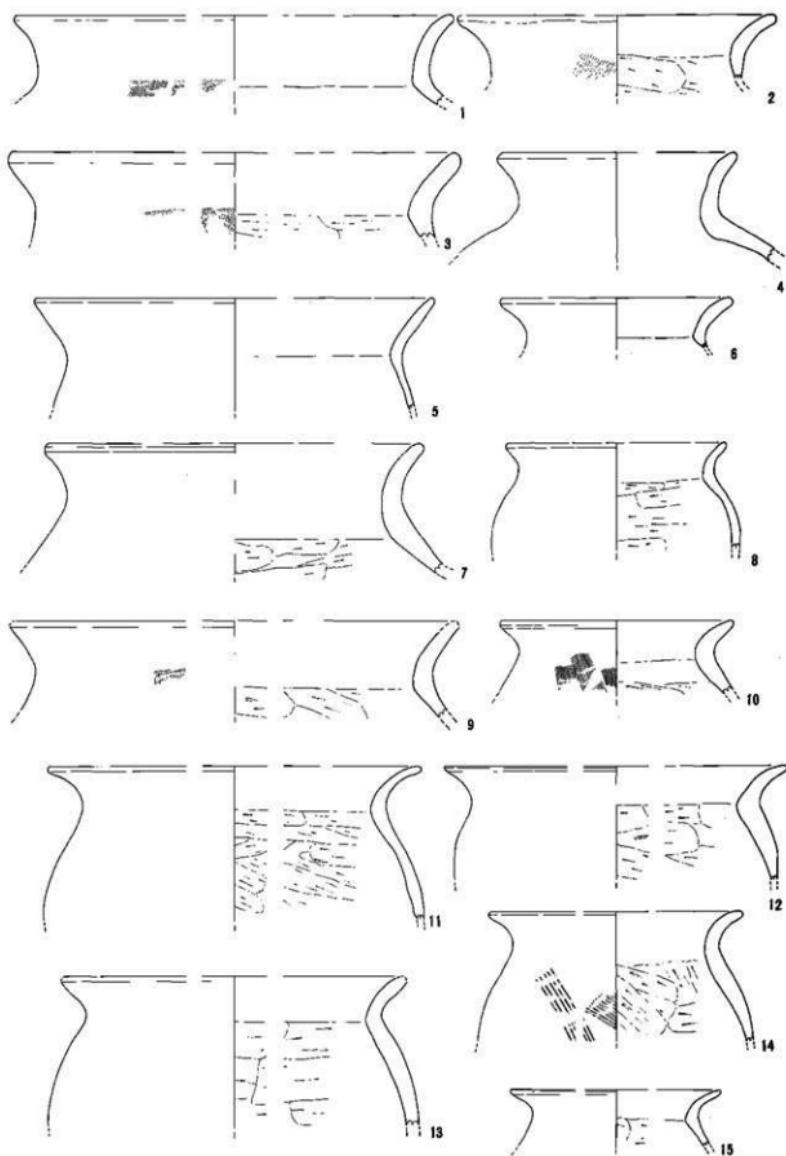
第58図12～第59図4は口縁形態は様々だが、頸部に強いヨコナデを加え肩部に弱い稜を持つタイプを図示した。このタイプの甕は基本的に口径10cm～12cmの小型のものが多い。

第58図13は口径部10.4cmを測り、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。前述のとおり頸骨部に強いヨコナデを加え肩部は段状を呈する。胴部内面のヘラ削りは左方向に施している。14は口縁部が短くやや直立気味に立ち上がり、口径12.0cmを測る。胴部外面には煤痕が認められる。15は11.6cmの小型の甕で、口縁部は「く」字状に弱く屈曲する。胴部外面のタテハケを頸部の強いヨコナデが切っている。17は口縁部がほぼ直立し、胴部が比較的張るタイプのもので、肩部外面にタテハケが一部観察される。第59図2は口径11.6cmを測り、口縁部は短く外反する。胴部は第58図14・17と同様比較的張るもので、内面ヘラ削りは右方向に施している。

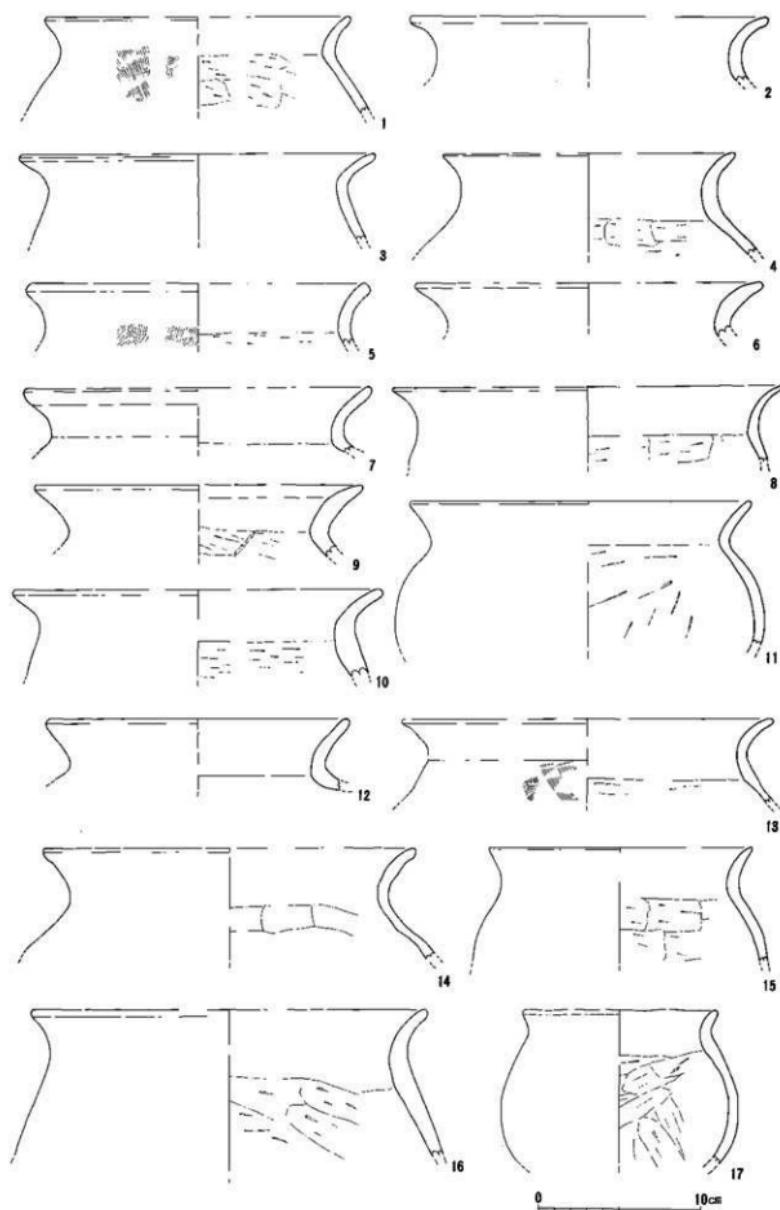
第59図5～第61図14は通常の「く」字状の単純口縁形態のものを一括した。このタイプは最も多く出土しており、時期的な幅をある程度もつものと思われるが、口縁部形態のみでこのタイプのこれ以上の細分は極めて困難である。また甕の法量も前述の頸部を強く撫でる甕と異なり、様々な大きさのものが認められる。

5は胴部上半まで残存する資料で、口径21.4cmを測る。プロボーションは撫で肩であるが、胴部はなお張りを残している。胴部内面のヘラケズリは上半部は右方向へ施している。

8はS R01出土土師器甕のなかでは唯一完形のもので、口径16.5cm、器高25.5cmを測る。口縁部はやや弱く外反する。胴部は比較的張りを保っており、底部は丸底を呈す。胴部外面は非常に平滑で、タテハケののち、ナデを施したものと思われる。胴部外面にはタテハケを施し、煤痕が一部に認められる。第60図4は壺状の形態のもので口径14.9cmを測る。14は口径15.8cmを測り、外面に粗いタテハケが観察される。第61図11は胴部がよく張り現状ではやや偏平状を呈する「く」字口縁の甕である。概してこのタイプの甕は、胴部が比較的よく張るタイプのものが多い傾向が認められる。



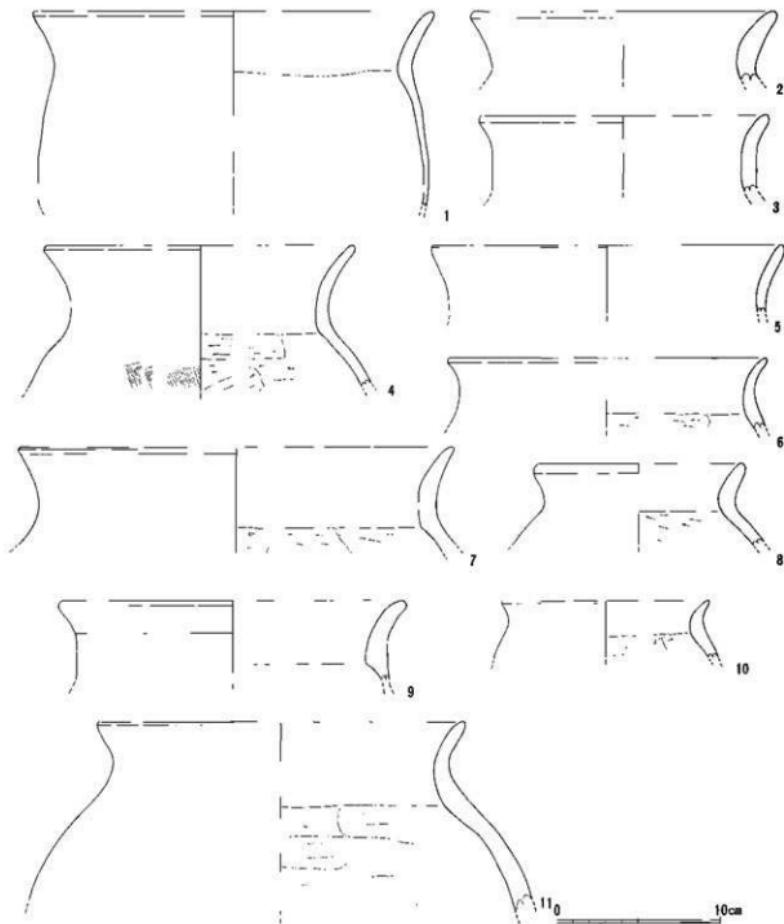
第60図 I-S区S R 01出土遺物実測図(10)(S=1/3)



第61図 I-S区S R01出土遺物実測図 (11) ( $S = 1/3$ )

第61図15～第62図には口縁部の外反度が比較的弱いタイプの甕を図示した。第61図17は口径11.8cmの小型の甕で口縁部は弱く外反し、プロポーションは下膨れ状を呈する。第62図1は口縁部がほぼ直線状に立ち上がり、胴部の張りは弱くプロポーションは長胴形を呈するものと思われる。

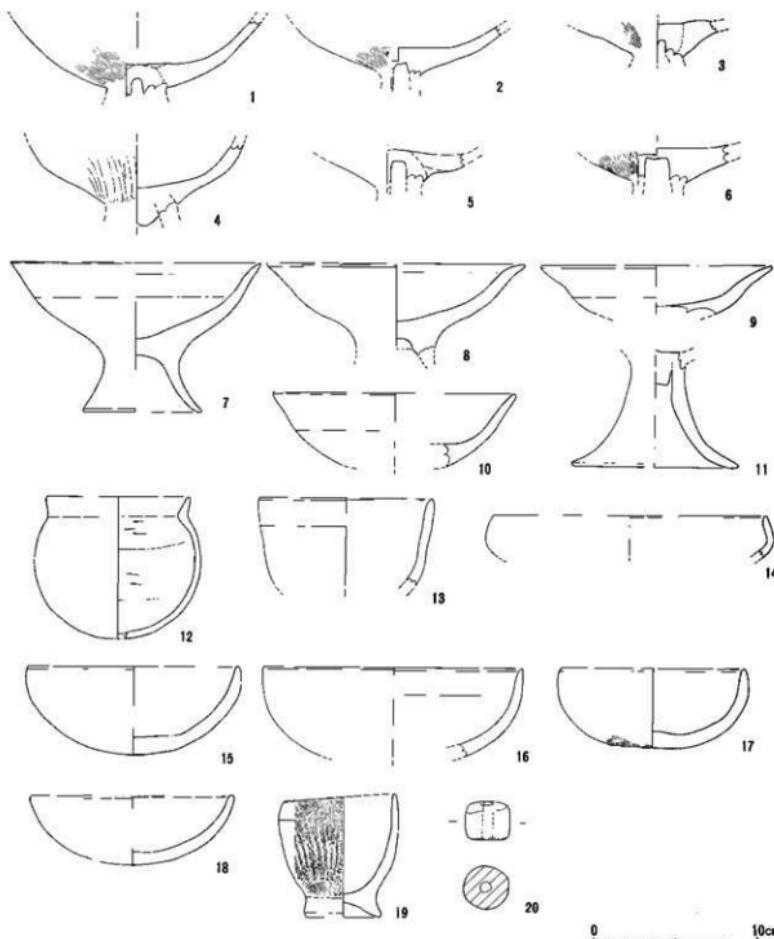
4は口縁部が長く立ち上がり、口径19.2cmをはかる。胴部はやや張るタイプのものと思われる。外面にタテハケが一部観察される。8は口径12.4cmの小型の甕で、口縁部はやや厚手で短く直立気味に立ち上がる。10も小型の甕で、口縁部はわずかにくびれるもので、口縁部端部は先細り状に収めている。11は口径22.6cmを測り、胴部は比較的よく張り胴部内面に左方向のヘラケズリを施している。



第62図 I-S区S R01出土遺物実測図(12) (S = 1/3)

第63図はその他の土師器を図示した。1～11は高杯である。1～3は橙色系の色調を呈し椭形の坏部を呈するものである。坏部と脚部との接合は差し込み式で松山分類接合法7手法をとるものであり、古墳時代中期後半のものであろう。坏部下外面には坏部と脚部との接合時に撫で付けたハケが認められる。4は同様に椭状の坏部形態のものと思われるが、脚内上面には脚部との接合時の粘土の隆起が認められる。坏部外面にはヘラミガキ風のオサエが観察される。5・6の高杯は1～3と同じタイプのものである。

7はほぼ完形の高杯で、口径15.4cm、器高9.2cmを測る。坏部はわずかに稜をもって緩やかに外



第63図 I-S区SR01出土遺物実測図(13) (S=1/3)

反し、端部は先細り状に収める。脚部は短脚のもので、「ハ」字状に開く形態のものである。調整は風化のため不明。8は7と同タイプの高杯坏部であるが、7に比べてやや浅い。7~10は大谷3~4期前に属する杯と考えられる。11は高杯脚部で、底径10.3cmを測る。脚内上面には4と同様な粘土の張り出しが認められる。

12は口径8.8cm、高さ8.8cmを測る小型の鉢で、口縁部は短くほぼ直立し丸底を呈する。外面には煤痕が観察される。13も小型の鉢と思われるもので、砲弾状を呈し口径10.6cmを測る。12~18は杯である。いずれも碗状の形態を呈し、色調は橙色系で胎土は砂粒を殆ど含まないものである。古墳時代中期後半のものと考えられるが、後期まで降るものも含む可能性もある。

19は製塙土器と考えられるもので、口径6.6cm、器高7.7cmを測る。底部は上げ底状を呈し、外面にはタタキが観察される。現状では特に火を受けた痕跡は確認できず、製塙土器と断定するにはやや疑問が残る。このタイプのものは当遺跡ではこれ1点のみしか出土していない。大谷編年3~4期併行のものであろう。20は丸型土錠で径2.7cm、幅2.4cmを測る。

第64・65図は瓶である。第64図1はほぼ完形の瓶で口径28.4cm、器高31.6cmを測る。この瓶はSR01上層から出土したもので、大谷5期前に属すると考えられる。口縁部はゆるやかに外反し、把手はほぼ胸部中位に位置している。外面はタテハケ、内面には縦方向のヘラケズリを施す。底部には焼成後の穿孔が認められる。把手部と体部との接合は現状では不明である。

2は口径27.2cmを測り、口縁部はわずかに外反する。外面にはタテハケが顕著に観察でき、1とほぼ同様な法量の瓶と考えられる。内面調整は口縁部付近はヨコナデ、その下は上方が左方向の横ヘラケズリ、下に縦方向のヘラケズリを施す。3は瓶の底部資料で、底径10.7cmを測る。底部には4方向の円形透かしが認められる。4は瓶の口縁部と思われ、小片であるが復元口径26.6cmを測る。1~3と異なり口縁部はほぼ直線状に「ハ」字状に開くタイプと思われる。

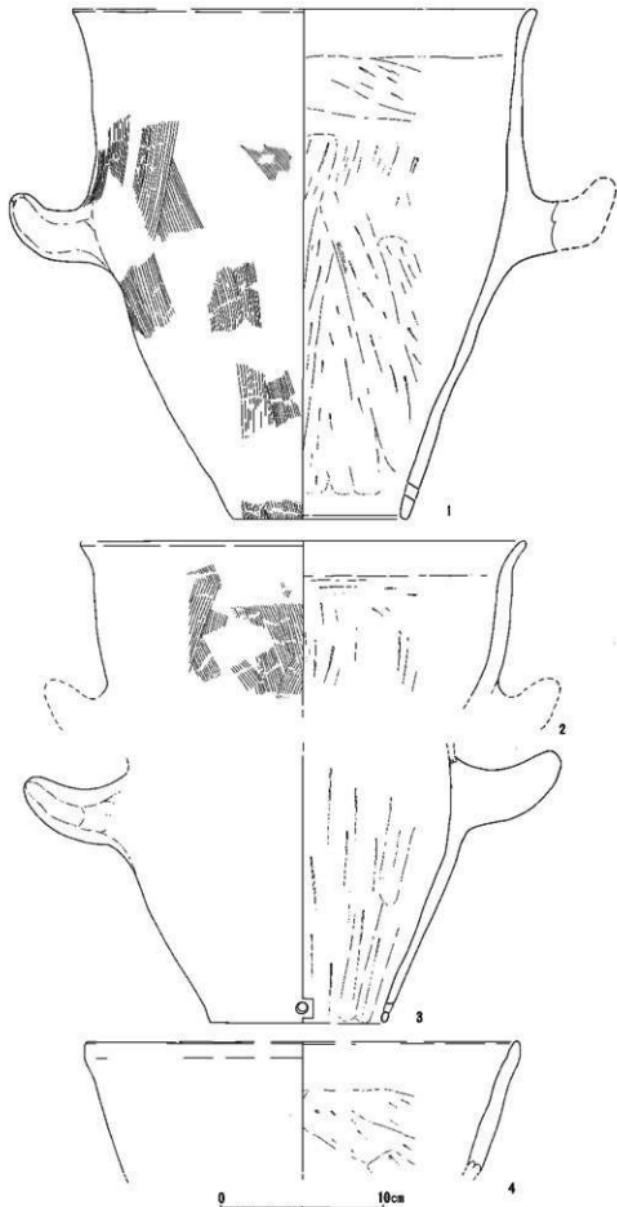
第65図1はやや特異な形態を呈するが、瓶と考えた。口縁部は通常の甕と同様「く」字状を呈し、口径19.6cmを測る。胸部は比較的よく張り、把手部は胸部上半に接合している。2は瓶底部で、底径10.2cmを測る。底部付近には円形の穿孔が認められるが何方向に穿つかは不明である。内面には横・斜方向のヘラケズリが認められる。

3、5~9は瓶の口縁部と考えた。3はやや大型の瓶と考えられるが、正確な口径は不明である。頸部はわずかにくびれ、口縁部は緩やかに外反する。胸部外面には縦ハケ、内面には左方向のヘラケズリが顕著に観察される。5はやや厚手の瓶口縁部と考えられ、不正確であるが口径24.0cmを測る。6は口径21.0cm前後の小型の瓶と思われ、口縁部がほぼ直線状に開くタイプのものである。

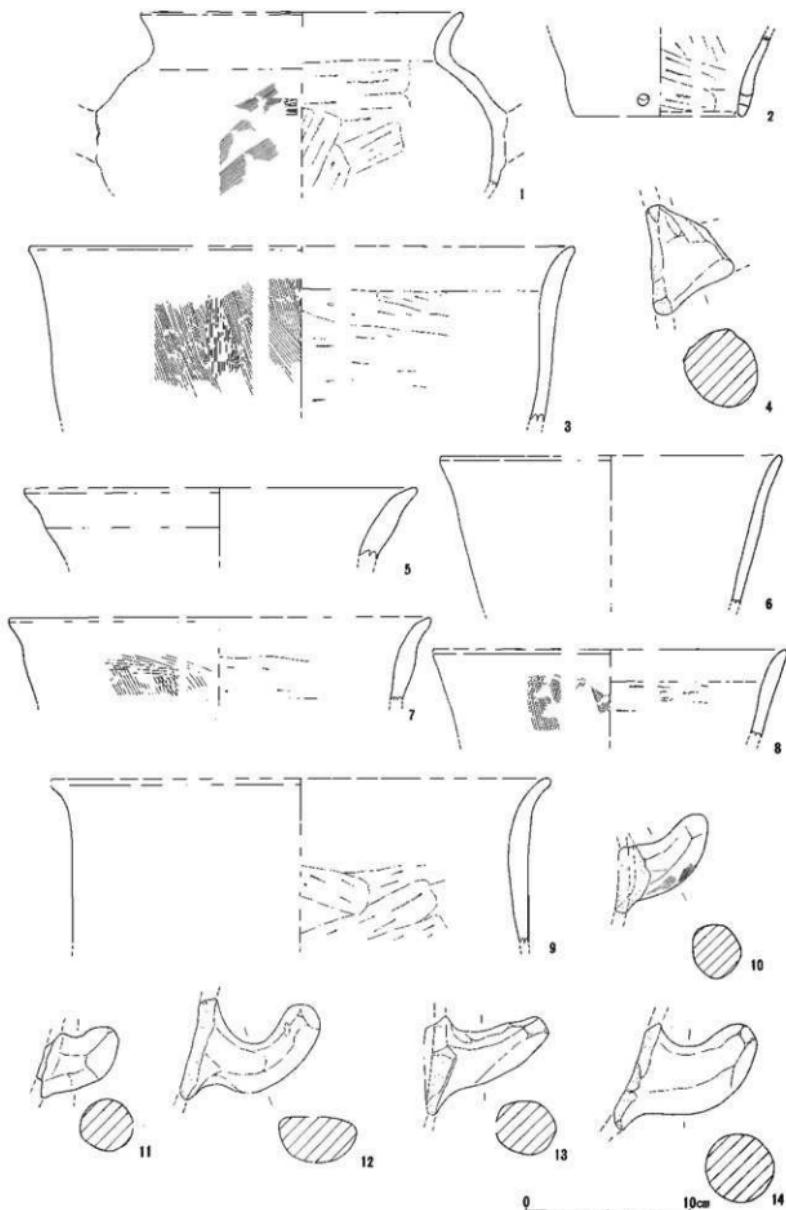
7は口縁部がわずかに屈曲し口縁端部を先細り状を呈する。外面にはタテハケ後頸部付近に一部横ハケを施している。8も頸部がくびれず口縁部が直線状に開くタイプの瓶で、口縁部端部は先細り状に収める。調整は外面にはタテハケ、内面には左方向のヘラケズリを施す。

9は口径30.6cmを測る瓶で、口縁部はゆるく外反し、胸部は膨らみをもたず円筒状のプロポーションを呈するタイプのものである。外面の調整は風化の為不明であるが、内面にはヘラケズリが観察される。

第65図4、10~14、第66図は瓶の把手資料である。10は全長5.3cmの把手で、外面に一部ハケメが観察され、断面形が梢円形状を呈する。11はやや小型の瓶把手である。12は把手部が比較的長く、鉤手状に強く湾曲するタイプのものである。外面は粗いナデで仕上げており、断面形は偏平な半円



第64図 I-S区SR01出土遺物実測図(14)(S=1/3)



第65図 I-S区S R01出土遺物実測図 (15) (S = 1 / 3)

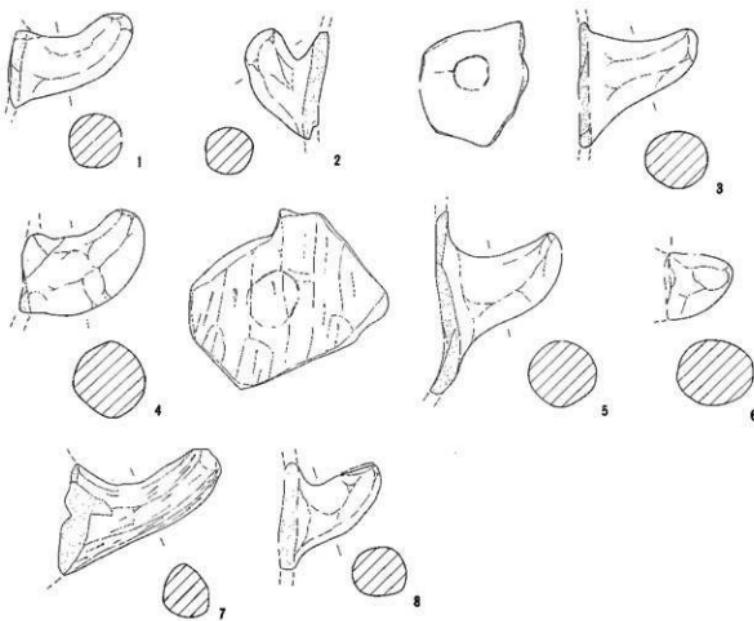
形状を呈する。

第66図3の瓶把手部はほぼ直線状を呈し、全長7.1cmを測る。胴部との接合は、胴部を穿孔した後把手の基軸部を差し込み、接合部外面に粘土紐を巻き付けて粗いユビナデによって仕上げている。胴部内面には把手基軸部の差し込み時の接合痕が観察できる。4は全長8.0cmをはかるやや太い形態の把手で、断面は不整円形で径4.5cmを測る。瓶本体との接合法は確認できない。

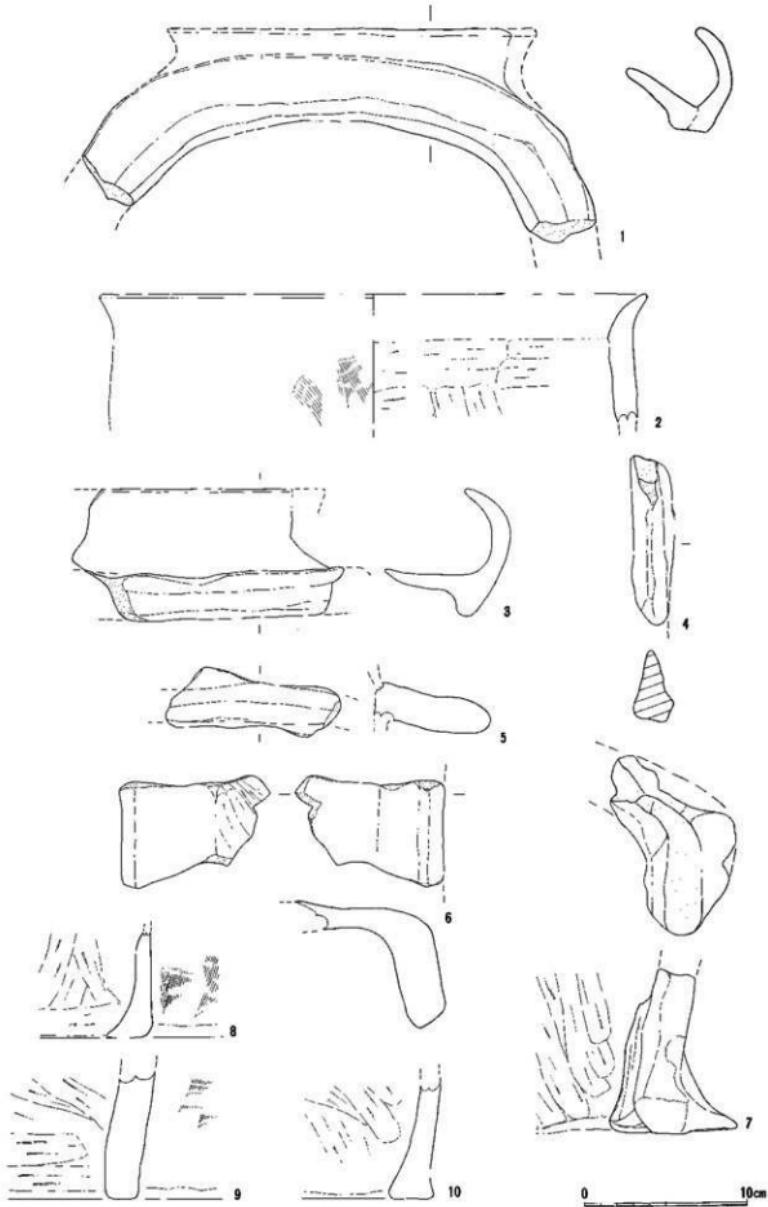
5は3と同様な差し込み式の接合方法が確認できる瓶把手資料で、体部内面には径3.2cmの円形の接合痕が観察される。体部内面は縦方向のヘラケズリを施す。6は把手先端部で断面形は橢円形状を呈し、長径4.7cmを測る。

7はやや長い把手で全長10.6cmを測る。把手外面には主軸方向の軽いヘラケズリによって仕上げている。8は外面に粗いナデが認められ、断面橢円形状を呈し長径3.4cmを測るやや小振りの把手である。

第67図は移動式竈を図示した。1は底正面部から口縁部にかけての資料である。軒庇は幅5.0cmを測り、本体との接合痕が観察される。2は移動式竈の口縁部と考えられる資料で、器壁が1.5cmとかなり分厚いつくりのものである。口縁部はわずかに外反し、体部外面にはタテハケ、内面にはヘラケズリが施される。



第66図 I-S区SR01出土遺物実測図(16)(S=1/3)



第67図 I-S区S R01出土遺物実測図 (17) ( $S = 1/3$ )

3は1と同様、焚口上部の軒庇から口縁部にかけての資料である。軒庇の幅は5.0cmを測り、ほぼ本体からほぼ水平に延びている。内外面はナデで仕上げている。4、6は軒庇の側部の資料と考えられ、6は内面へラケズリの方向から、正面から見て焚口左側の軒庇部と考えられる。軒庇の幅は5.5cm、厚さ2.6cmを測り、本体との角度は鈍角をなす。7は焚口正面から見て軒庇右側部から脚端部にかけての資料である。軒庇の先端部は欠けており、幅については不明。脚端部は裾広がり状の形状を呈しており、内面には縦方向へラケズリが認められる。

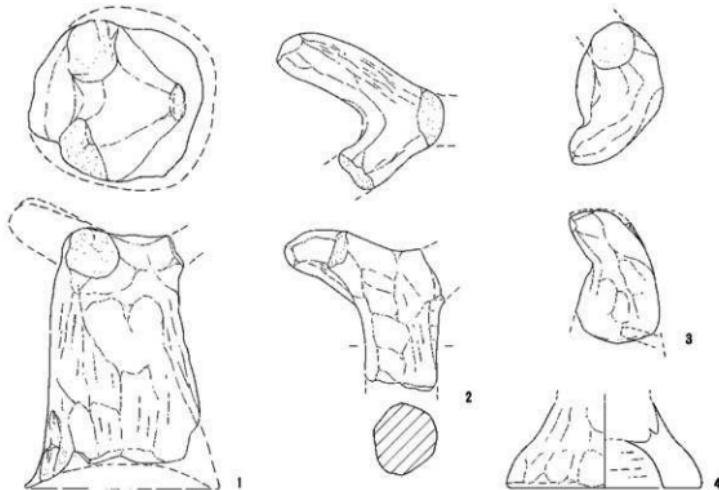
8～10は脚部の資料である。いずれも内面にはヘラケズリ、外面上には縦ハケが認められるが、端部の形状には内側に肥厚するもの（8）、肥厚しないもの（9）、内外面両側に肥厚するもの（10）など幾つかのバリエーションが認められる。

第68図は土製支脚を図示した。第68図1は三又突起タイプのもので、突起部は全て欠けている。脚部は中央で脚端部は開き、底部は上げ底状を呈している。脚部外面には縦方向のヘラケズリで成形を行っている。

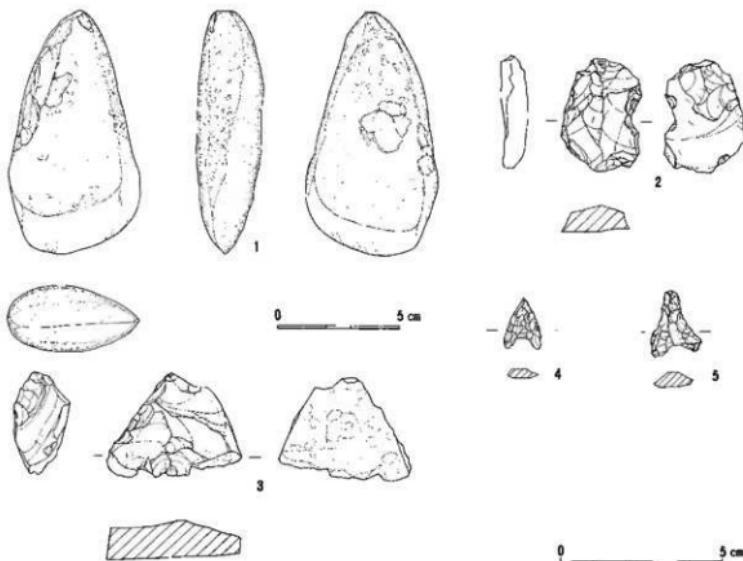
2は1と同様三又突起のものであるが、一突起分しか残存しておらず、脚部も欠いている。突起部は比較的長く伸び、外面上にはヘラケズリ風の粗いナデによって表面を整えている状況が観察される。

3は小型の土製支脚で、二又突起タイプのものである。突起部は短く斜上方へのびる。図右側の脚部の背面側には斜上方に向けての穿孔が認められる。

4は脚部の資料で、顯著な上げ底状を呈するもので、底径11.7cmを測る。脚端部外面には指頭压



第68図 I-S区SR01出土遺物実測図 (18) (S=1/3)



第69図 I-S区SR01出土遺物実測図(19) (1…S=1/2 2~5…S=2/3)

痕が認められ、脚部内面は横方向のヘラケズリによって仕上げている。

#### D. 石器（第69図）

第69図はSR01出土の石器類を図示した。1は定角式の石斧である。石材は緑灰色を呈する石材で、長さ10.1cm、幅5.5cm、厚さ2.7cm、重量189.8gを測る。刃部は使用により片側がすり減り左右非対称の両刃を呈しており、刃部付近には刃部主軸と斜交する方向に使用痕と想定される擦痕が観察される。こうした状況から伐採用の縦斧として使用されたものと考えられる。また側面部には整形時の敲打痕が顕著に認められる。

2は抉り入り石器で、長さ3.5cm、幅2.5cm、厚さ8.5mm、重量7.37gを測る。打点は残存していないが、縦長剥片を使用したものである。正面図右側側面のみに、主要剥離面側からノッチを加えている。

3は2次加工のある剥片で、長さ3.2cm、幅4.2cm、厚さ1.8cmを測る。三角形状の平面形をなし、側面に急角度の二次調整を加えている。背面に自然面を残す。

4・5は石鎌である。4は黒曜石製の凹基無茎式の石鎌である。長さ1.6cm、幅1.15cm、厚さ3mm、重量0.45gを測る。背面側は周辺加工を施し、一部に素材面を残す。

5も黒曜石製の凹基無茎式石鎌で、長さ4.1cm、幅3.2cm、厚さ4.5mm、重量0.89gを測るものである。

## 2章 II区の調査

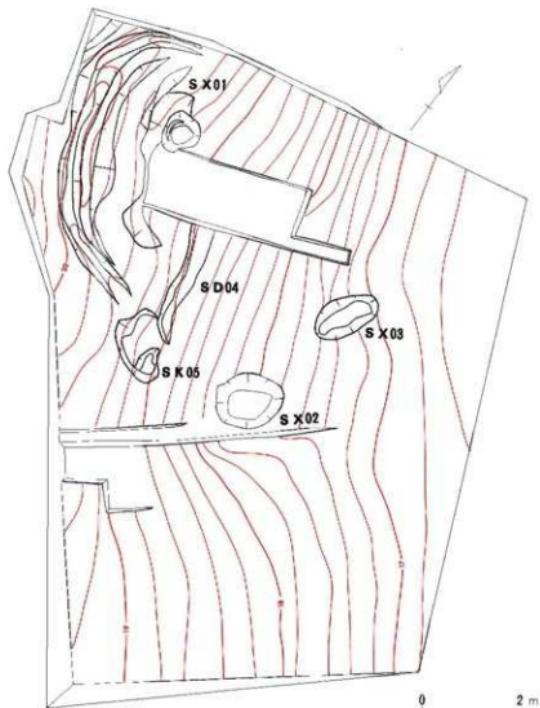
II区はI区西側の標高17m～20mの丘陵斜面に位置する。同一丘陵西側約300mには穴神横穴墓群が位置し、北側には油田古墳群が隣接する。

油田古墳群は現状で径10m前後の円墳2基が確認されており、当調査区と同様斜面上に立地している。この古墳群の詳細な内容については不明であるが、周辺より大谷編年2期の須恵器が採集されており<sup>[40]</sup>、後期古墳群であることは疑いない。

調査区はこの油田古墳群の南に隣接しているが、かなりの急斜面であり調査前には起伏の高まりなどは全く確認できない状況であった。しかし調査の結果、古墳1基とこれに伴う土壌状遺構を数基確認し、当調査区が油田古墳群の墓域の一角を占めていた状況が明らかとなった。

### 遺構の分布状況（第70図）

遺構はII区の北側に集中しており、標高19m～20mの最も高い場所に終末期円墳と想定されるS X01が位置している。土壌状遺構であるS X02・03はS X01の南東部の、標高17m～18m前後に立地している。以下、各遺構について順次報告する。



第70図 II区遺構配置図 ( $S = 1/100$ )

#### S X01（第71図）

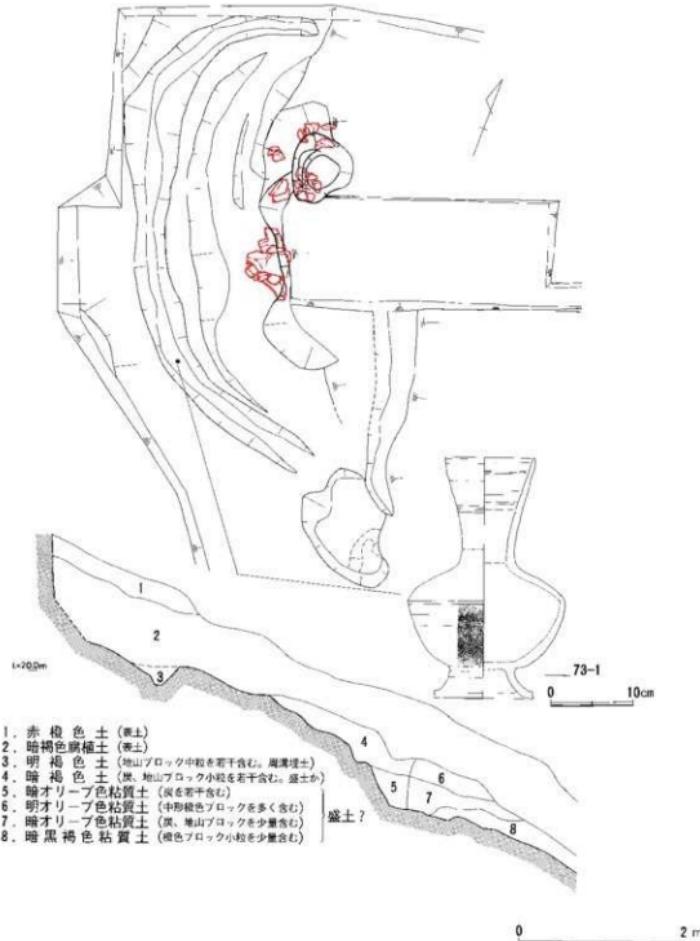
**規模と形態** S X01は前述のとおり比較的急な東向き斜面上に立地するいわゆる山寄せの古墳であると考えられる。急斜面上に立地していることと、試掘調査時に墳丘のかなりの部分を抜いてしまったため全容は明らかでないが、斜面上方に残る周溝から想定すると、南北方向の規模が径5.5m程度の小円墳であったと推定される。

**周溝** 周溝は斜面上方に円弧状に残存しており、やや不整な形態を呈する。周溝の規模は長さ5.7m、幅40cm～70cm、深さ20cm前後を測る。周溝内には暗褐色系の土が堆積しており、周溝のほぼ中央部

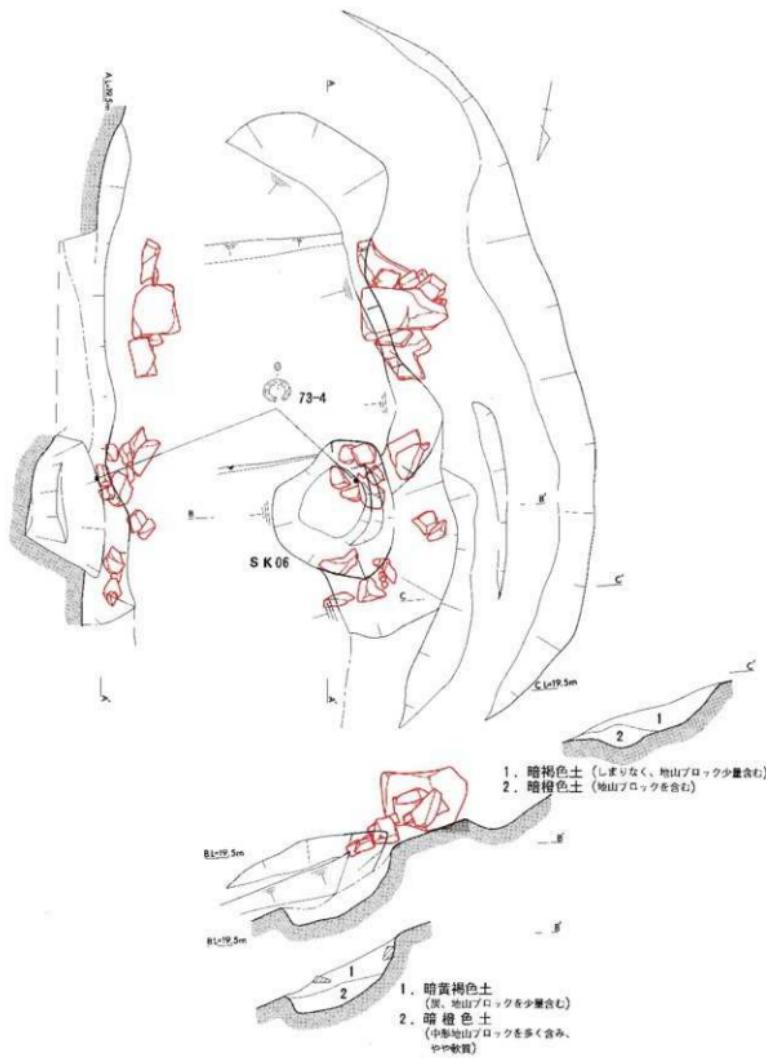
付近から完形の長頸壺がほぼ原位置で出土した。

**盛土・埴丘構築過程** S X01付近の斜面部は後世の植林等で、かなりの深さまで搅乱が及んでおり、表土である暗褐色腐食土の厚さは約50cm近くを測る。斜面上方部では、表土直下に赤褐色粘土の地山があり、周溝はこの赤褐色粘土に掘り込まれている。

この赤褐色粘土の地山ラインは、埋葬施設と想定される石列付近で土壤状に落ち込んでやや平坦



第71図 II区S X01実測図 (遺物…S = 1 / 6 遺構…S = 1 / 60)



第72図 II区SX01主体部実測図 ( $S = 1/30$ )

面を形成した後、斜面下方へと傾斜している。この土壤状の落ち込みの上には暗黒褐色粘質土（8層）が堆積しており、その上に炭・地山ブロックを含む暗オリーブ色粘質土（5・7層）、暗褐色土（4層）が堆積していた。4・6層は地山ブロックを多量に含んでいる点からみて盛土であった可能性が高いと考えている。こうした墳丘構築手法は平ラⅡ遺跡S X01に類似している。<sup>(13)</sup>

**埋葬施設（第72図）** 墳丘中心部において埋葬施設と想定される石列状遺構を1基検出した。石列状遺構は、南側で50cm近い角礫を使用しているほかは、20cm前後の石材が使用されている。

石材は標高19.0m～19.6m付近に南北2.3mの範囲で散乱しており、現状では有為な並びを確認することはできない。この石列状遺構の大半は表土である暗褐色腐食土層中に含まれており、後世の改変でかなり原位置を動かされたものと判断される。

この石列状遺構の西側には、周溝とはほぼ平行するよう長さ4.5mの浅いテラス状の面が認められた。埋葬施設構築時の掘り方状の痕跡と想定される。この石列状遺構の下には、先述した南北に軸をとる長径3.3mを測る土壤状の地山の落ち込みが認められた。石列状遺構のはば直下に位置することからみて、埋葬施設に何らかの関係のある施設と考えられるが、詳細は不明である。また石列北側の直下には径75cm～90cmの不整梢円形の土壤（SK06）が認められた。この土壤覆土上面からは耳環が1点出土している。

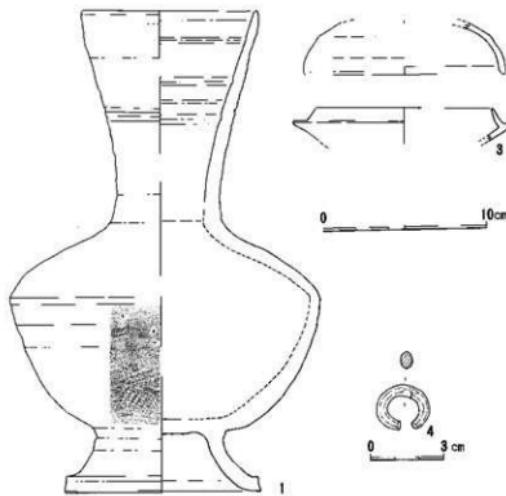
当埋葬施設は遺存状況が悪く、その構造について十分把握することができなかったが、耳環の出土レベルからみて、当埋葬施設の床面はSK06覆土の直上と想定される。掘り方状の落ち込みが南北方向を示し、且つ耳環の出土位置からみて北頭位であったと想定される。石列状遺構については

石室の残存部とするには石材が小型であり、元来は平ラⅡ遺跡S X01のような箱式石棺状の施設であった可能性が高い。

#### S X01出土遺物（第73図）

第73図1は周溝中から出土した完形の脚付長頸瓶で、口径10.7cm、器高29.5cmを測る。口縁部はやや内湾状に長く延び、中位に2条の沈線をめぐらす。胴部は肩がよく張り鈍い稜を形成し、胴部下半外面には格子目タタキがかすかに観察される。脚は比較的高く、脚端部は上下に面をもつ。大谷分類長頸瓶3型に属するものと考えられる。

2は試掘調査時に石列状遺構から出土した壊蓋で、小片



第73図 II区 S X01出土遺物実測図 (1～3…S = 1/3 4…S = 1/2)  
1…周溝内 2.3…石列付近 4…石列下土塙内出土

だが復元口径12.4cmを測る。肩部に沈線は認められず内外面ヨコナデで仕上げている。3は周溝付近の表土から出土した坏身で、口径10.8cmを測る。比較的薄手のつくりで、立ち上がり部は強く内傾している。

4は耳環である。金箔が比較的良好な状態で残存している。長径2.2cm、短径1.9cmを測る。

**年代と性格** 須恵器壺蓋・坏身は大谷編年5期前後のものと考えられるが、長頸瓶はやや時期の降り6～7期のものと考えられる。このように出土土器にかなり時期幅が認められ、周溝出土の長頸瓶は追善供養的な供献土器であった可能性も考慮される。既に述べてきたとおり、当古墳は立地や規模からみて平原Ⅱ遺跡S X01に類似する点が多く、埋葬施設の構造等に不明点も多いが終末期の山寄せの円墳と考えて大過無い。

SK05 (第74回)

**規模と形態** S X 01の南で検出した径1.5m、深さ15cm前後の不整楕円形の土壙で、

土壌内の覆土は3層に分かれ、草褐色土系の土が堆積している。遺物は出土していない。

**年代と性格** 出土遺物が無く年代については不明と言わざるをいいが、層位的にはS X01の下に位置していることからそれ以前の遺構と考えられる。

SD04 (第75図)

**規模と形態** S X01の東で検出した加工段状の溝で、等高線とほぼ平行して南北に延びている。北側は試掘トレンチによって切られており、南端は S K01と切り合っている。溝の規模は現存する長さで2.5m、幅15cm～50cm、深さ15cm前後を測る。

**覆土** 溝内の覆土は暗褐色土の単一層で、遺物は出土していない。

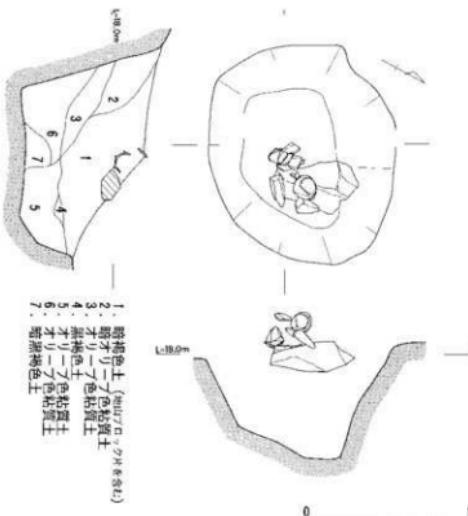
**年代と性格** 層位関係からS X01に先行し、SK01に後出す。位置関係からみて、S X01の墳丘構築時に関わる施設であった可能性も考慮される。

S X02 (第75図)

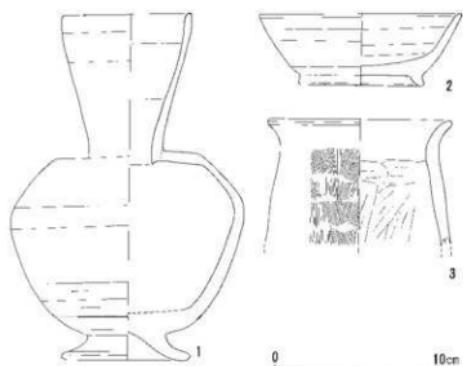
**規模と形態** S X01の南東約5mの標高18m付近の斜面上に立地する土壌である。土壌の平面形は橢円形状を呈し、規模は長径1.4m、短径1.15m、深さ約90cmを測る。土壌は比較的急角度で掘り込まれており、底面はほぼ水平となっている。



第74図 II区SK05:SD04実測図 (S=1/40)



第75図 II区S X02実測図 (S = 1/30)



第76図 II区S X02出土遺物実測図 (S = 1/3)

り、底面にはヘラケズリが認められる。

3は口径11.4cmを測る小型の壺である。口縁部はゆるく外反し、肩部は肩が張らず長胴形を呈する。外面には綫ハケ、内面には綫・横方向のヘラケズリが観察される。

**年代と性格** 長頸瓶は大谷分類3型に属する点や、坏身の特徴からみて大谷編年7期に属するものと考えられ、S X01とはば同時のものと判断される。遺構の性格としてはS X01との関連からみて土壤墓もしくは木棺墓の可能性が想定されるが、土壤の形状がやや不自然である等疑問点も多く、

**土壤** 土壇内の覆土は細かく見ると7層、大まかにみて2層に分かれており、上層に暗褐色土、下層にオリーブ色粘質土が堆積していた。なお、木棺状の痕跡は検出していない。遺物は土壇検出面である暗褐色土上面においては原位置で検出した。こうした点からみてこの土壤は人為的に埋め戻されたものと判断される。

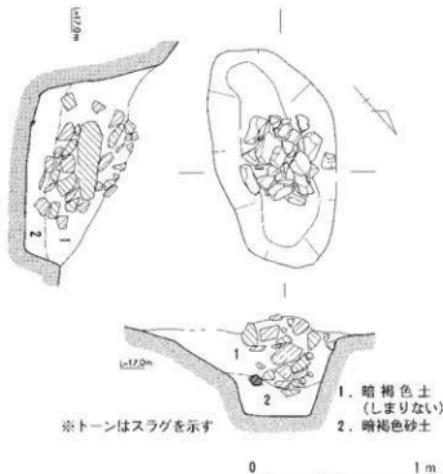
**遺物の出土状況** 前述のとおり土壇上面で供獻状の土器群を検出した。供獻土器群は土壇中央やや東寄りに位置し、50cm前後の標石状の角礫を配置しその上に土器群が置かれており、あたかも弥生時代木棺墓の供獻土器の出土状況を見るかの状況であった。

#### S X02出土遺物（第76図）

第76図1は脚付長頸瓶で、口径8.0cm、器高21.3cmを測る。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、肩部は肩部はよく張るが稜を形成しない。胴部下半には回転ヘラケズリを施している。高台部は比較的低く短く外反し端部は丸く收めている。

2は高台の付く坏身で口径12.4cm、器高4.5cmを測る。坏部はやや内湾気味に立ち上がり

明言は避けておきたい。



第77図 II区 SX03実測図 ( $S = 1/30$ )

### S X03 (第77図)

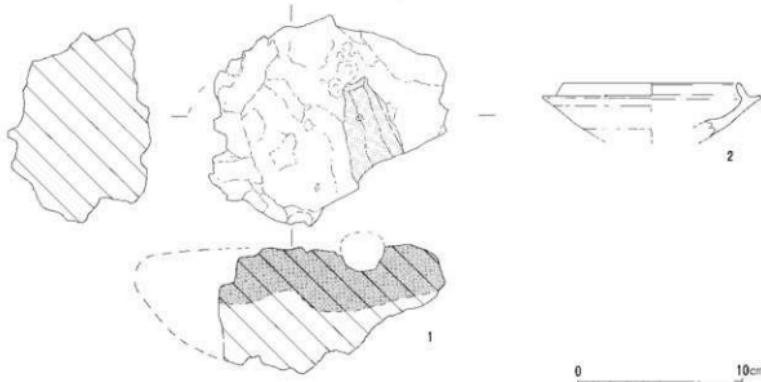
**規模と形態** S X02の北東に位置する土壤で、標高17m付近の斜面上に位置する。土壤の平面プランは長楕円形状を呈し、規模は長さ1.4m、幅0.8m、深さ約60cmを測る。土壤壁面は比較的急傾斜に掘り込まれ、土壤底面はほぼ水平で断面形箱形を呈する。

**覆土** 覆土は2層に分かれ、下層は暗褐色砂質土、上層にはしまりのない暗褐色土が堆積している。

**遺物の出土状況** 土壌のほぼ中央部付近に10cm～50cmの角礫が多数集積されている状況が認められた。これらの角礫群はほぼ上層内に限られており、下層の暗褐色砂質土を埋め戻した後集積したものと想定される。これらの角礫群の中には鉄滓（第77図トーン部分）が使用されていた。また下層の砂層中からは須恵器坏身片が出土している。

### S X03出土遺物（第78図）

第78図1は角礫群中に使用されていた製練滓である。図の断面中濃いトーンで示した部分は比較的純粋な滓の部分で、その下は土が付着している部分である。断面形は緩いU字状を呈し、滓部分表面には図中上から下の方向へ滓が流出したような痕跡が認められる。こうした点からみてこの鉄



第78図 II区 SX03出土遺物実測図 ( $S = 1/3$ )

滓は炉内から炉の外へかけての付近の排滓溝内流动滓であったと推定され、図中上が炉内部分、下部が炉外部分であったと考えられる。滓表面には炉外から炉内へ向けて窪み（図中薄いトーン部分）が認められ、滓の出をよくするために炉外から棒状の工具で突いた痕跡と想定される。なおこの鉄滓の分析については本書巻末に分析結果を掲載している。

2は口径10.8cmを測る須恵器坏身である。立ち上がり部は強く内傾し、内外面はヨコナデで仕上げている。

**年代と性質** 須恵器坏身は大谷4～5期に属するものと考えられ、SX01の古相遺物群に近い年代のものであり、土壤の年代もこの年代に比較的近い時期のものと考えられる。土壤の性格についてはSX01との関係から墳墓関連の

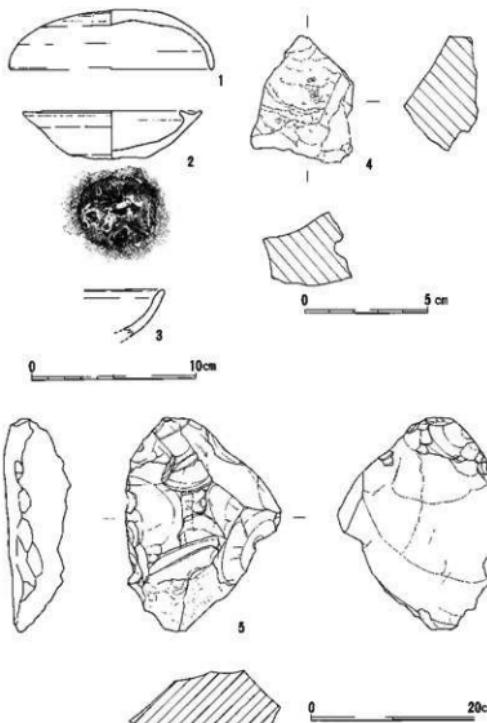
遺構である可能性が想定されるが、当該期の類似例が無く、今後の類例の増加を待つて改めて検討したい。

#### II区遺構外出土遺物（第79図）

第79図はII区の遺構外から出土した遺物である。1は口径12.3cmを測る須恵器坏蓋で、天井部最外周に浅いヘラケズリを施す。大谷4期でも新しい段階のものである。2は表土中から出土した完形の坏身で口径10.9cmを測る。立ち上がり部は著しく内傾し、底部はヘラ切り未調整のもので大谷編年5期に属するものである。3は高坏の口縁部で単純な浅い椭形の形態のものと考えられる。

4は試掘調査時に出土した鉄滓で、表面に船状の平滑な面が認められ滓が流出した痕跡が確認できる。製錬流动滓と考えられる。

5は玉龍製の二次加工のある剥片で試掘トレンチ中から出土した。長さ6.5cm、幅4.7cm、厚さ1.8cm、重量51.0gを測る。縦長剥片を利用した石器で、打点部分は再調整により落としている。正面図左側辺に主要剥離面側からの細かな二次加工が認められる。



第79図 II区遺構外出土遺物実測図  
(S = 1 ~ 3 … S = 1 / 3 4 … S = 1 / 2 5 … S = 2 / 3)

### 3章 III区の調査

III区は御茶屋川を挟んでI区の対岸に位置しており、標高8m～9.5mの低地に立地している。III区の東には第1次調査II区がほぼ同様な立地条件のところに位置している。

I区の記述で述べたように、この部分は御茶屋川が狭い谷から吉佐の小平野へ出て、流路をやや左へ振る地点の右岸に位置する。従って水流の影響をもろに受けやすい立地条件にある場所といえる。実際調査してみると旧水田層の直下には疊層が厚く堆積しており、幾度となく土石流の被害を受けた場所であることが窺え、遺跡名であるところの石出という小字名もここに由来していることは明白である。

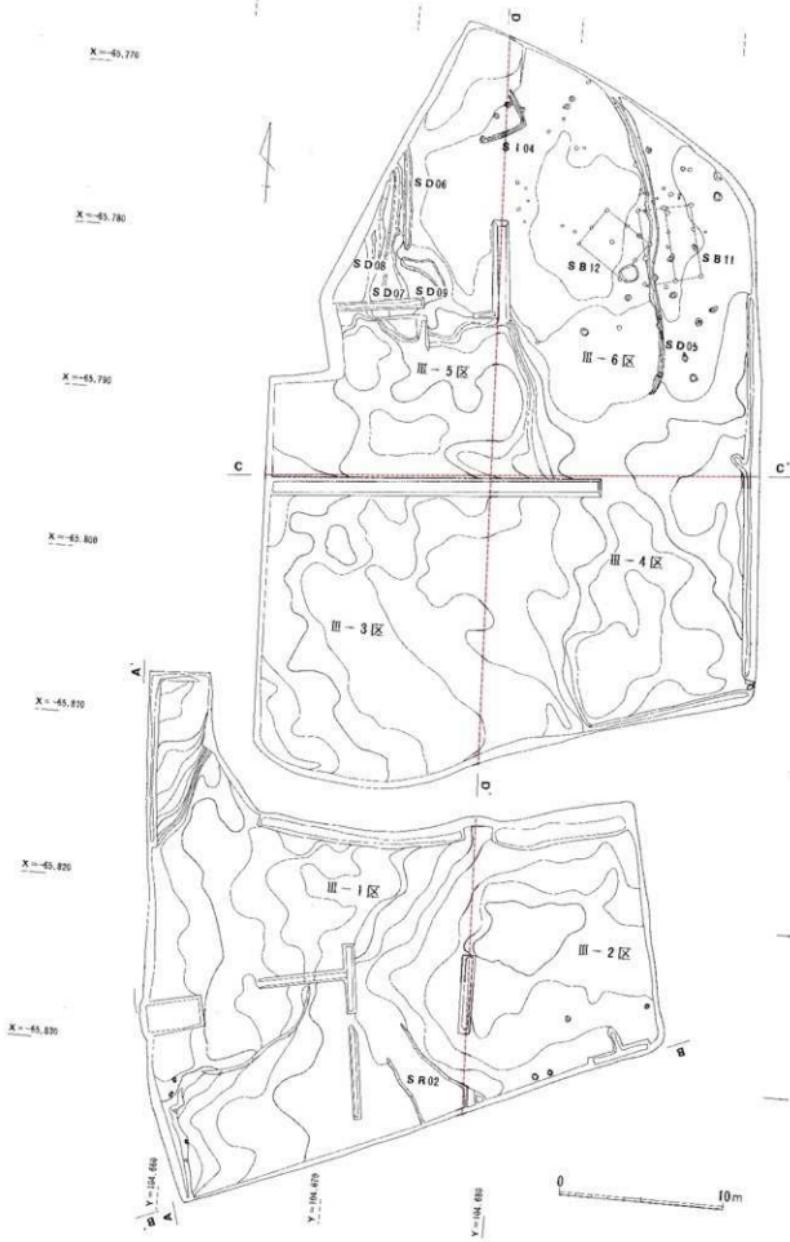
III区は中央部を東西に農業用水路が存在しており、調査区はこの水路を境に南北二ヶ所に大きく分けられる。このうち、南側の調査区では南北に1本土層観察用のベルトを設定し、西側をIII-1区、東側をIII-2区と呼称して調査を実施した。水路北側の調査区では南北に1本、東西に2本のベルトを設定し、都合6ヶ所に区切って調査を実施した(第80図)。本報告では、南側のIII-1・2区と北側のIII-3～6に分けて各遺構・遺物について報告する。

**遺構の分布状況(第80図)** 以上のように当調査区の大半は御茶屋川の氾濫原となっているため遺構は少ない。特にIII-1区からIII-3区にかけては分厚く疊層が堆積しており、度重なる河川の氾濫があったことが窺える。この氾濫原部分は調査区南西から北東へ向けて広がり、III-3区と4区との境界付近まで入り込んだ後、北西へ向けて進路を変えている。

この氾濫原東側は微高地部分に相当するが、疊層を基盤層とするIII-2・4区では、III-2区でピットを数個確認した他は遺構は確認できず、基盤層が黄灰褐色細砂質粘土であるIII-6区においてのみ堅穴住居址、掘立柱建物跡、溝等の各種遺構を確認した。本来はIII-2・4区にも同様な基盤層があり、その上に遺構が存在していたものと想定されるが、後世の改変によって細砂質粘土の基盤層は削り取られ、調査区ではその下の疊層が露出しているものと推測された。



III区疊層調査風景



第80図 III区全体図 ( $S = 1/300$ )

**基本層序（第81図）** III区の基本層序は、上から造成土、耕作である暗褐色土、水田床土である灰褐色粘質土が存在しており、ここまでが近年までの水田関係の上層である。なおIII-1区西壁では数回にわたって水田床土である黄灰褐色粘質土を貼り変えた痕跡が認められた。この水田床土からは須恵器、土師器類が若干出土しているほか、管状土錐がこの土層より上からのみ多量に出土している。

この床土の下には灰褐色系の粘質土・細砂土・粗砂土が互層状に堆積したのち、基盤層である灰褐色（青灰色）礫混合土に至る。基本的に東から西へ傾斜して堆積しているが、細かな層序は調査区の各部分で異なる。

III-2区・4区では造成土・耕作土を取り除くとすぐに無遺物層である青灰色礫混合土が露出している。前述のとおり、本来はこの上に黄灰褐色細砂質粘土があったものが削平されたものと考えられる。III-1区ではこの基盤層である青灰色礫混合土は西へ落ち込み、この上に灰褐色粘質土・細砂土が堆積しており、この粘質土・細砂土中からは縄文時代から奈良・平安時代にかけての多量の遺物が出土している。

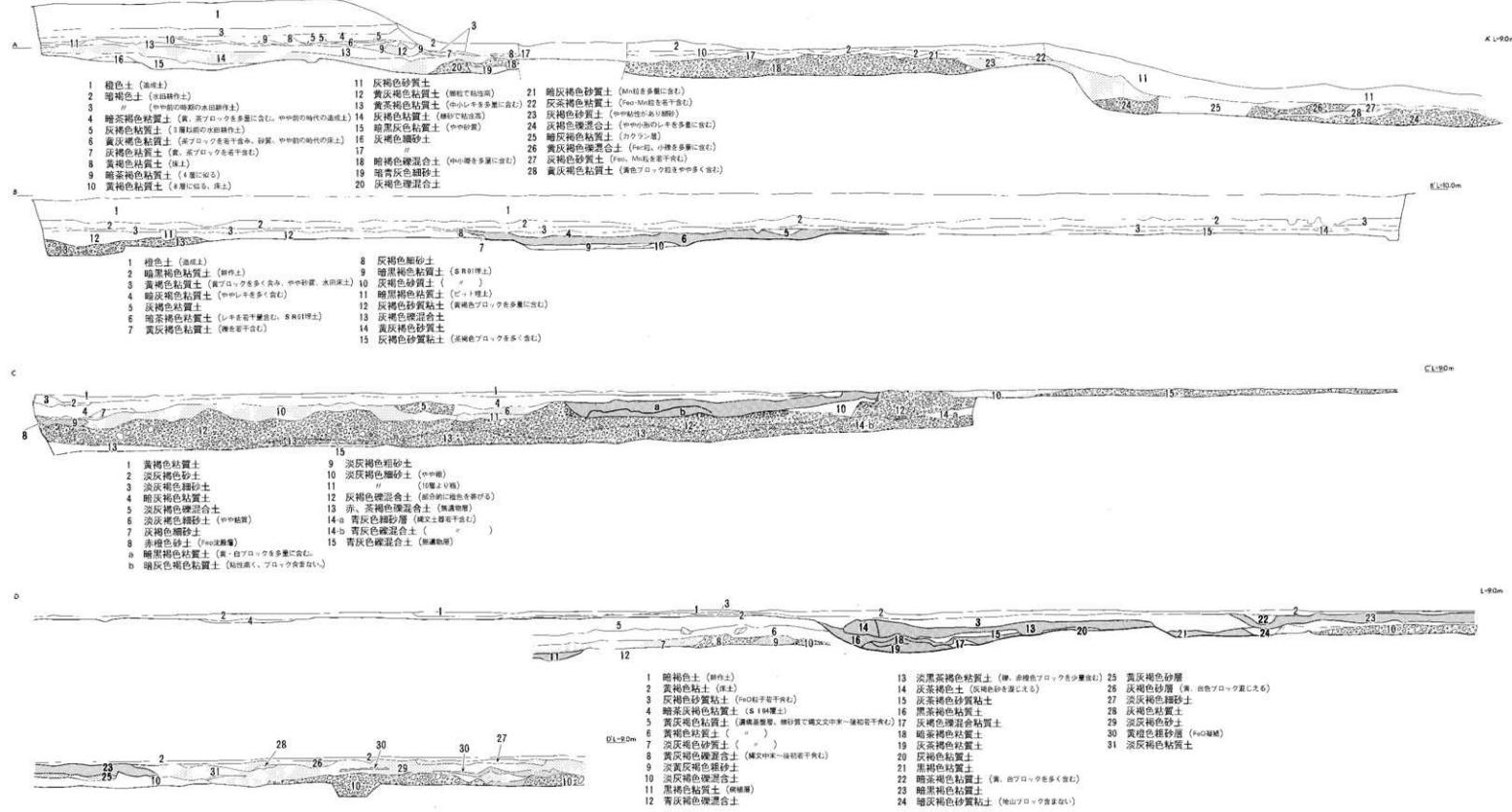
III-1区の調査当初においては、第1次調査II区の知見からこの青灰色（灰褐色）礫混合土を基盤層と考え、この層の上面を検出した時点で掘り下げを停止していた。しかし、この礫混合土層にサブトレンチを入れたところ多量の遺物が検出された。このことから、III-1区においては同じ灰褐色礫混合土のうち、上に包含層、下に無遺物層が存在することが判明したが、これらは全く同じ堆積状況を呈し、両者を分層することは極めて困難な状況であった。よって、この土層の掘り下げについては、まずサブトレンチを調査区各所に設けて遺物の出土状態を把握し、次に遺物の出土が止まったレベルまで全面を下げていく方法をとった。こうした礫混合土層中の遺物出土状況はIII-3区においても同様であったため、III-3区においても同様な方法で礫混合土層の掘り下げを進めていった。従って第80図の調査後地形測量図は、III-1・3区においては層位的に把握できたものではなく、あくまで礫混合土層中の遺物の出土が止まった時点での測量図であることを付記しておく。

これらの礫混合土層及びその上層に堆積する粘質土・細砂土中の出土遺物は各時期のものが出土しているが層位的秩序は認められず、弥生土器の下から奈良時代の須恵器が出土する状況であった。III-1・3区の礫混合土層最下層付近からは奈良時代の須恵器が出土しており、少なくともこの礫混合土層の堆積がこの時期以降のものであることが窺える。

またIII-3・4区境界附近では灰褐色礫混合土の上に、暗黒褐色粘質土が南北に堆積している部分が認められ、一時期河道として機能していたことが窺える。この河道の時期については、前述の礫混合土層中出土の最新遺物（奈良～平安時代）以降のものとしか現状では言えない。

なお、遺構の存在するIII-6区の黄灰褐色細砂質粘土を南北ベルト沿いに部分的に断ち割ったところ、その下層の黄褐色粘質土及び黄灰褐色礫混合土層中（図中D-D'断面図6・8層）より縄文後～晩期の土器が若干出土した。このうち8層はIII-3・4区で無遺物層とした青灰色礫混合土の一部に対応するものと考えられ、この礫混合土層の堆積が縄文後～晩期に形成された可能性が考えられる。この縄文土器の出土する地点はこのトレンチ以外の礫混合土層の断ち割りトレンチでは認められなかっただため、面的な調査は行っていない。

**遺物の出土状況** 遺物は前述のとおり、灰褐色粘質土・細砂土・礫混合土中より多量に出土してい



第81図 III区調査区土層図



第82図 Ⅲ区遺物出土状況図 ( $S = 1/300$ )

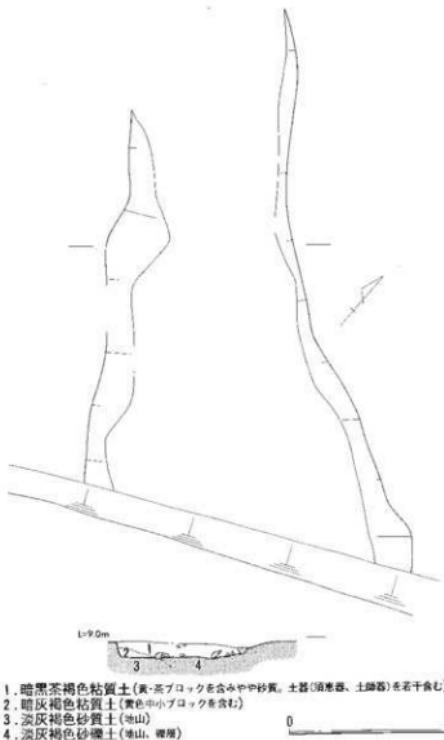
るが層位的な秩序は認められない。第82図は遺物の平面分布状況を示したものである。これをみると一目瞭然でわかるように、遺物は調査区西側の御茶屋川の氾濫原に相当するIII-1・3・5区に集中していることがわかる。調査区東側からの遺物の出土は極めて少ないが、これは後世に包含層及び遺構面を削平してしまったためであると推定される。

これら氾濫原土層中からの出土遺物は、I区と同様6世紀末から7世紀代のものが最も多く、またI区では認められなかった奈良～平安時代の遺物も比較的まとまって出土している。これら奈良～平安時代の遺物はIII-1区では比較的少なく、北側のIII-3・5区からまとまって出土している。このことからみて、本来この氾濫原付近に立地していたと想定される、6世紀末～7世紀代の集落と8世紀代以降の集落は立地を異にしていたものと想定され、奈良時代以降の集落は下流の北側に立地していた可能性が考えられる。なお、この奈良時代以降の遺物群の中には墨書き土器やヘラ書き土器が含まれており、単なる農耕小集落ではなく官衙的施設が存在した可能性も考慮される。

なお縄文時代～弥生時代の遺物は比較的少なく、疎らな分布を呈している。また中世期の遺物に

ついてはIII-6区から陶磁器類が若干出土しているのみであり、第1次調査II・III区で比較的まとまった量の当該期の遺物が出土しているのと対照的である。第1次調査の報告では上流域に当該期の寺院址が存在した可能性を指摘しているが、当調査区の状況からみて、より東寄りの位置に当該期の遺構が存在していたものと想定される。

以下、III区南半のIII-1・2区と北半のIII-3～6区に便宜上分けて、各遺構・遺物について報告していきたい。



第83図 III区 S R 02 実測図 (S = 1/60)

## 1節 III-1・2区の調査

### A. 自然河道

#### S R 02 (第83図)

**規模・形態** III-1・2境界付近で検出した流路で、南から北へと流れている。検出できた河道の規模は長さ7.0m、幅2.0～3.7m、深さ20cm前後を測る。

**覆土** この河道は前述の灰褐色疊合土をベースとするもので、覆土は

黒褐色系の粘質土が堆積していた。遺物は覆土中から弥生土器や6～7世紀代の須恵器が若干出土している。

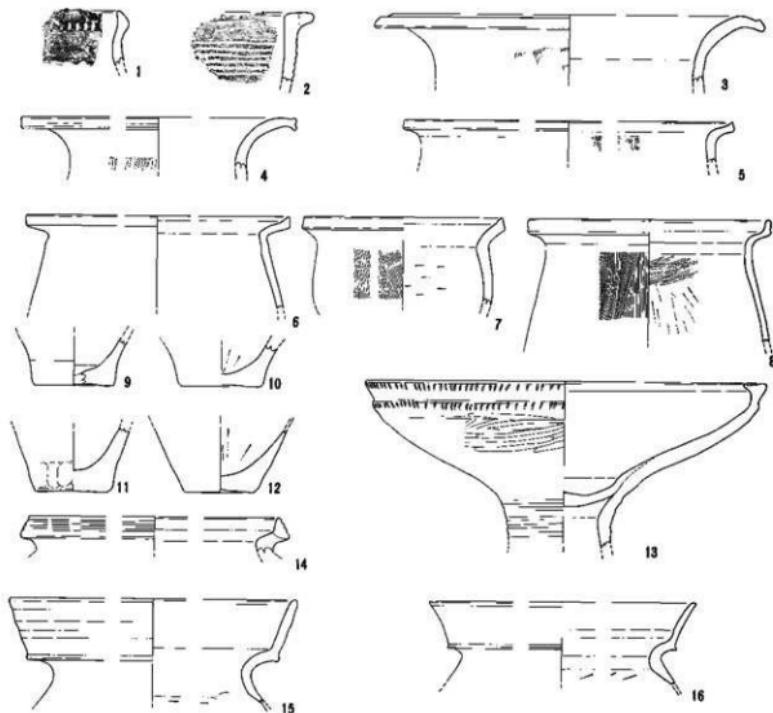
年代 基盤層である灰褐色礫混合土中は前述のとおり6世紀末～7世紀代の遺物を含んでおり、この時期より降る時期の河道であるとしか現状では言えない。

なお、III-1区からピットを4基検出しているが、年代については不明である。

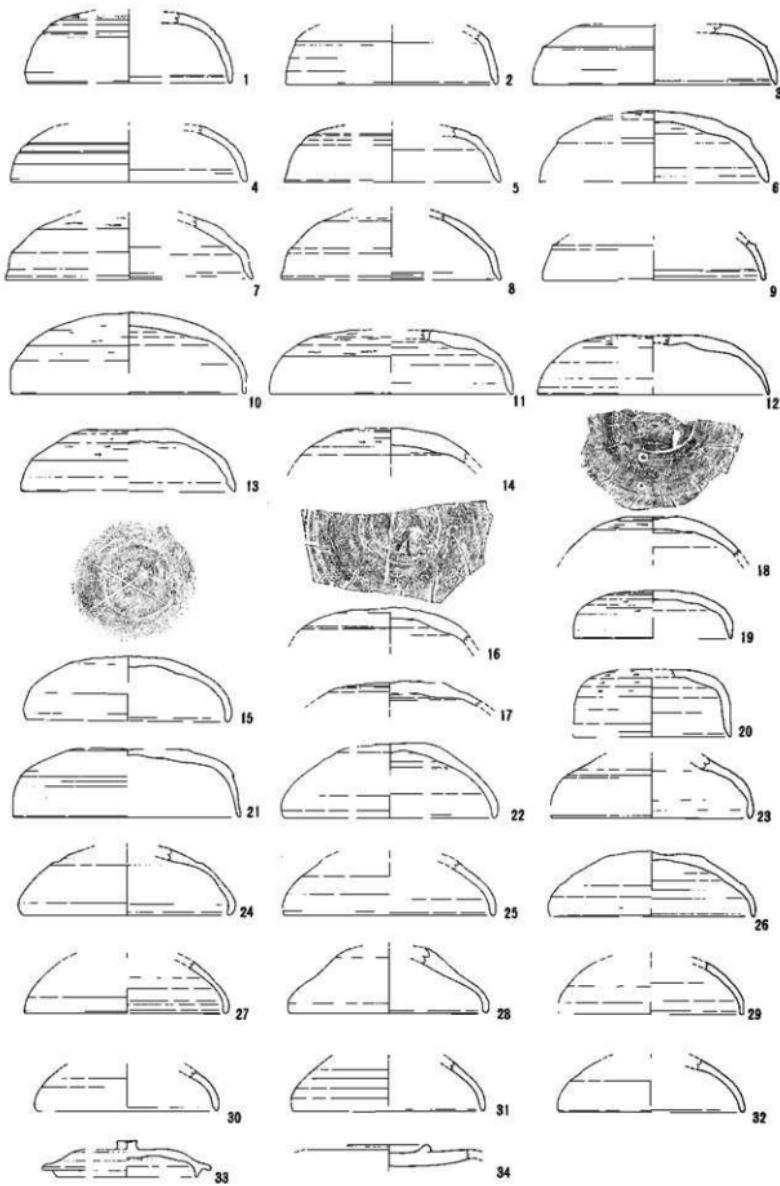
### III-1・2区出土遺物（第84～94図）

A. 繩文土器・弥生土器 第84～94図はIII-1・2区から出土した遺物で、主としてIII-1区の礫混合土中から出土したものである。

第84図には縄文土器～古式土師器を図示した。1は縄文晩期の突帯文土器である。突帯部は口縁端部とは接し、突帯上面に板状工具による刻目を施している。2は弥生前期後半の甕である。口縁部はいわゆる逆L字状口縁で、頸部に現状で6条のヘラ描平行沈線文が認められる。口縁部端部



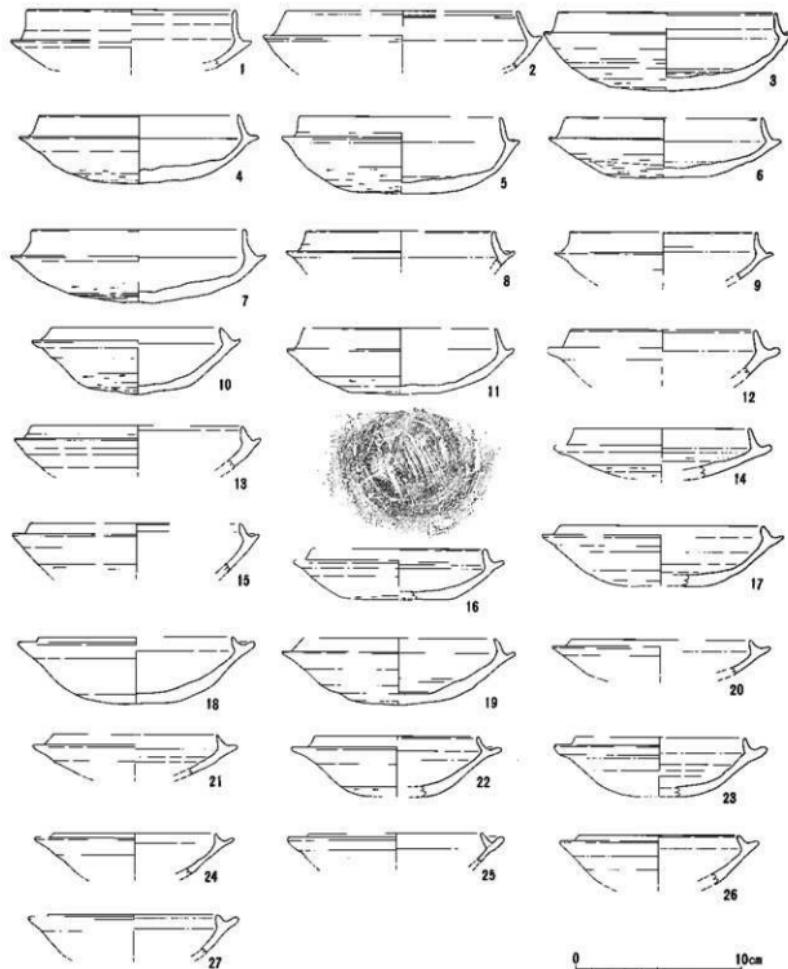
第84図 III-1・2区出土遺物実測図(1)(S=1/3)



第85図 III-1・2区出土遺物実測図(2) (S=1/3)

には刺突状の痕跡がみられるが、風化が著しく詳細は不明である。

3は口径23.8cmを測る弥生中期の壺である。口縁部は大きく開き口縁端部はやや垂れ下がる。4も弥生中期の壺で口径16.8cmの比較的小型のものである。3と同様口縁部は大きく開き、口縁端部は上下に拡張し端面に1条の凹線文を施している。5～8は弥生中・後期の甕である。7は口径12.0cmの小形の甕で、口縁部はわずかに上方に拡張し、内面のヘラケズリは頸部屈曲部まで及んでいる。中期末～後期初頭の資料と考えられる。



第86図 III-1・2区出土遺物実測図 (3) (S = 1/3)

8は口径14.6cmの甕である。口縁部は上方へ短く直立し、外面はヨコナデで仕上げている。肩部は肩が殆ど張らないタイプのもので、外面には縦ハケ、内面には頸部付近は横方向のヘラミガキ、胴部中位以下にはヘラケズリを施す。中期末の甕であろう。

13は口径24.4cmを測る高环である。口縁端部は内面に肥厚し平坦面を形成する。口縁端部とやや下がった位置にめぐらされた突唇には刻目文が施されている。脚部外面には沈線がめぐり、円盤充填法によって製作されている。14は後期初頭の甕で口径15.2cmを測る。口縁部は内傾し拡張部外面には3条の凹線文が施されている。15・16は弥生終末期の壺・甕である。15は口縁部がほぼ直線的に延び端部は丸く收める。16の甕は口縁部段部が水平方向に突出し、口縁端部はわずかに外方へ折れ曲がる。塩津山編年5期前後の資料であろう。

**B. 須恵器** 第85～89図には須恵器を図示した。時期的には6世紀末から7世紀代にかけてのものがほとんどである。

第85図は坏蓋である。1～14は大谷編年3～4期に属するものと考えられる。1は肩部に2条の沈線をめぐらす蓋で、口径12.4cmを測る。口縁端部内面は段状を呈しており、大谷3期でも古相のものと考えられる。2は口径12.8cmを測り、口縁端部内面の端部付近に沈線をめぐらす。3は肩部に稜をもつ口径14.8cmを測る比較的大型の坏蓋である。

7・8は肩部に沈線をめぐらさず口縁部が外方にやや折れ曲がる坏蓋で、7は口径15.0cmを測る。10～13はいずれも肩部に沈線が認められず且つ天井部に比較的丁寧な回転ヘラケズリを施す坏蓋である。口径は13.0cm～14.2cmを比較的大型のものである。これらの坏蓋は大谷編年3～4期併行のものと考えられるが、出雲地方ではあまり見かけないタイプの蓋であり、搬入品である可能性がある。

14は天井部中心部にヘラケズリを施さず外周のみにヘラケズリを施すタイプである。15は口径12.1cmの坏蓋で、天井部はヘラ切り後ナデを施す。天井部には「×」印のヘラ記号が施されている。16・18も天井部にヘラ記号が認められる資料で、18は「=」状のヘラ記号のものである。年代は16が大谷編年5期、18が大谷編年4期新相に属するものと考えられる。

19・20は口径9.5cm～9.6cmを測る小形の蓋で、いずれも肩部に沈線を施し天井部に回転ヘラケズリを施す。大きさからみて短頸壺等の蓋と考えられる。

22～32は天井部に回転ヘラケズリを施さないタイプの坏蓋で、22～28は口径12.0cm前後を測り大谷編年5期に属するものと考えられる。30～32は口径11.0cm～11.6cm前後の坏蓋でより小型化の進行したものである。

33はつまみの付く蓋で最大径10.3cmを測り、つまみ部は天井部が窪んでいる。大谷編年6B期のものである。34は輪状つまみの付くタイプの坏蓋である。天井部にはヘラケズリを施している。

第86図は坏身である。1は立ち上がり部は長く上方に立ち上がり、端部内面に段を有するものである。大谷編年2期まで遡る資料と考えられる。2も小片であるがかなり大型の坏身で、立ち上がり部内面に沈線を1条めぐらせている。やはり大谷編年2B期まで遡る可能性がある。

3～7は大谷編年3期の坏身と考えられる資料である。3は口径13.1cmを測り底部には丁寧な回転ヘラケズリを施している。6は口径11.9cmを測り、やや器高が低いものである。底部には1/2にわたって丁寧な回転ヘラケズリを施している。9はIII-1区のSR02から出土した坏身で、口径11.4cmを測る。薄手で非常に焼成の良好なもので、断面セピア色を呈す。

10は口径10.2cmとやや小型化が進行したもので、立ち上がり部はかなり内傾度が強いもので大谷編年4期に属するものと考えられる。11は天井部外周部にヘラケズリを施し天井中心部にはヘラ切り後ハケを施した痕跡が認められる。12はやや厚手の坏身で、S R01出土の第55図1・2に類似する資料である。

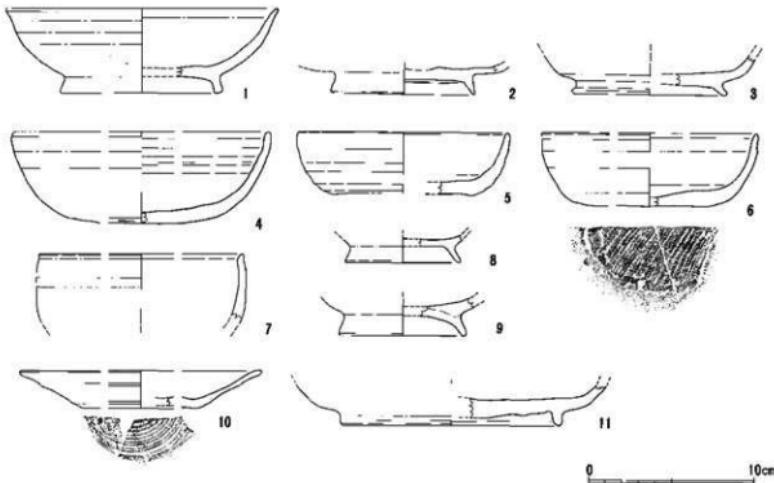
13~16は大谷編年4期の坏身である。14は底部が丸みをもたず尖り気味になり、受部は水平方向に内湾気味に延びるタイプのもので、S R01出土の第55図19・23に類似するものである。

17~20は底部にヘラケズリがみられず、口径11.0cm~12.0cmを測る資料で、大谷編年5期に属するものと考えられる。18は口径11.9cmを測り、立ち上がり部は短く著しく内傾している。底部には「×」印のヘラ記号が認められる。

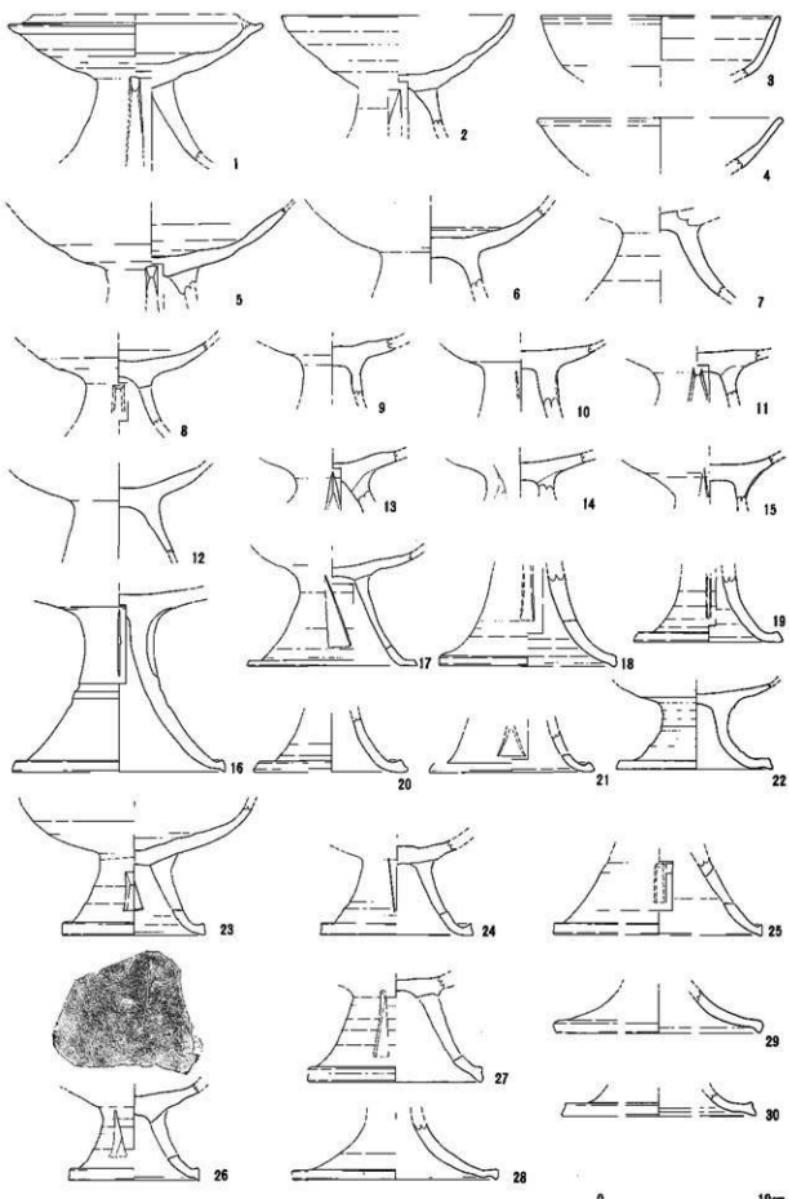
21~27は口径10cm前後の小形の坏身で、大谷編年6期前後のものと考えられる。22は底部外周に浅いヘラケズリが認められる。24は口径9.8cmを測り、立ち上がり部は極めて短く、内外面をヨコナデ調整で仕上げている。

第87図1は高台付坏身で、口径16.6cm、器高5.2cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上がり口縁部端部はわずかに外反する。底部には静止糸切りの痕跡が認められる。大谷編年7期のものである。3も高台付坏身で、脚端部は外反気味となり面をなす。底部には糸切り痕は認められず、ナデ調整を施す。4は口径15.8cm、器高5.6cmを測る坏身で、体部は内湾気味に立ち上がる。底部には回転ヘラケズリが認められる。

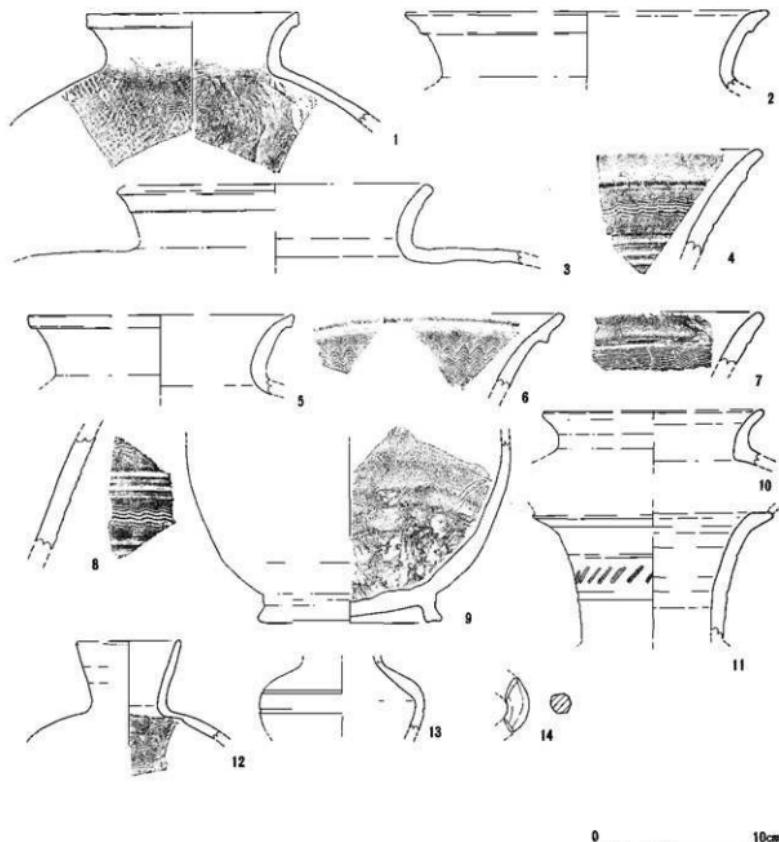
5は口径12.8cmの坏身で、底部に回転糸切り痕が認められる。高広ⅣA期に属するものである。6も5と同タイプの坏身であるが、口縁部が若干くびれ、底部には回転糸切りの後ハケ状工具による粗いナデを施している。7は坏身または小形の鉢と考えられるもので、口縁端部がわずかにくびれる。10は色調が灰色を呈する皿で、口径14.8cm、器高2.3cmを測る。口縁部は外反気味に大きく開



第87図 III-1・2区出土遺物実測図(4)(S=1/3)



第88図 III-1・2区出土遺物実測図(5) (S=1/3)



第89図 III-1-2区出土遺物実測図(6)(S=1/3)

き、底部に回転ヘラケズリ痕を残す。高広V期に属し10世紀代のものであろう。11は高広N期に属する大型の皿である。

第88図は高杯である。第88図1は有蓋高杯で立ち上がり部は欠損している。脚部は長方形4方透かしの資料である。

2は単純な浅い椀形の杯部を呈する高杯で、口径14.1cmを測る。色調は灰褐色を呈し1~2mm前後の砂粒を含む。3・4は杯部で、2と同様椀形の単純な形態のものである。

5~15は杯部と脚部の接合部付近の資料である。透かしの数が確認できるものはすべて2方透かしで、透かしの形態は長三角形のものが多い。10は透かしが直線状の切れ込みに退化しているものである。

16~30は高杯脚部の資料である。16は長脚タイプの高杯で、脚部中央部に2条の凹線がめぐり、

上部に2方の直線状の切れ込みが認められる。脚端部は上下につまみ出して上下に拡張し、丸みを帯びた面をもつ。17は底径10.4cmを測る高杯で、長三角形の2方透かしを穿ち、脚端部は水平に折れ曲がり端部は面をもつ。18は底径10.8cmを測り、脚端部は下方につまみ出し外面に凹面をもつものである。

22は焼成が甘く軟質を呈する底径9.5cmの高杯である。かなり脚の短いタイプのもので透かしは認められない。脚端部は強く折れ曲がり、端面は外傾する平坦面を有する。23は台形透かしを2方に穿つもので、杯部は単純な浅い椀形を呈するものと思われる。24は脚部に直線状の切れ込みを2方に穿っており、両方とも脚部内面まで達している。

26は脚部に長三角形透かしを2方に穿ち、脚端部を上下に拡張し凹面をもつもので、杯部内面には「×」印のヘラ記号が認められる。

第89図は須恵器壺・甕類である。1は口径12.8cmを測る壺で、口縁部は段状を呈しほぼ垂直の面をもち、肩部がよく張る器形のものである。2は甕の口縁部で、口径22.2cmを測る。

4は甕の口縁部で、頸部文様帶に退化の進行した波状文を施している。7・8も同様なタイプの波状文を施している。6は4と同様に甕口縁部だが、波状文は振幅が大きくしっかりしたものである。

9はIII-1区から出土した壺の底部で、底径11.3cm、胴部最大径19.6cmを測る。胴部は下半部が比較的よく張っている。高台部は端部を外方につまみ出すように成形されている。調整は外面がヨコナデ、内面は銀杏葉状のタキ当て其痕が観察される。10は口径13.4cmを測る単純口縁の壺で、口縁部は比較的短く外反し、端部は丸く收めている。

11は長頸壺の頸部または甕の大型品と考えられる資料である。頸部は若干上方に向けて「ハ」字状に開き、口縁部は有段状を呈する。頸部には2条の浅い凹線文により文様体を区画し、内部にハケ状工具による連続「ノ」字刺突文を施している。12は直口壺である。口径は6.2cmを測り、口縁部はほぼ直線的に立ち上がるものである。肩部には「×」印状のヘラ記号が認められる。

13は甕の胴部と考えられる資料で、胴部最大径10.0cmを測る。胴部には2条の沈線をめぐらせているが区画内の刺突文等は認められない。14は提瓶の把手と想定され、断面多角形条を呈する。

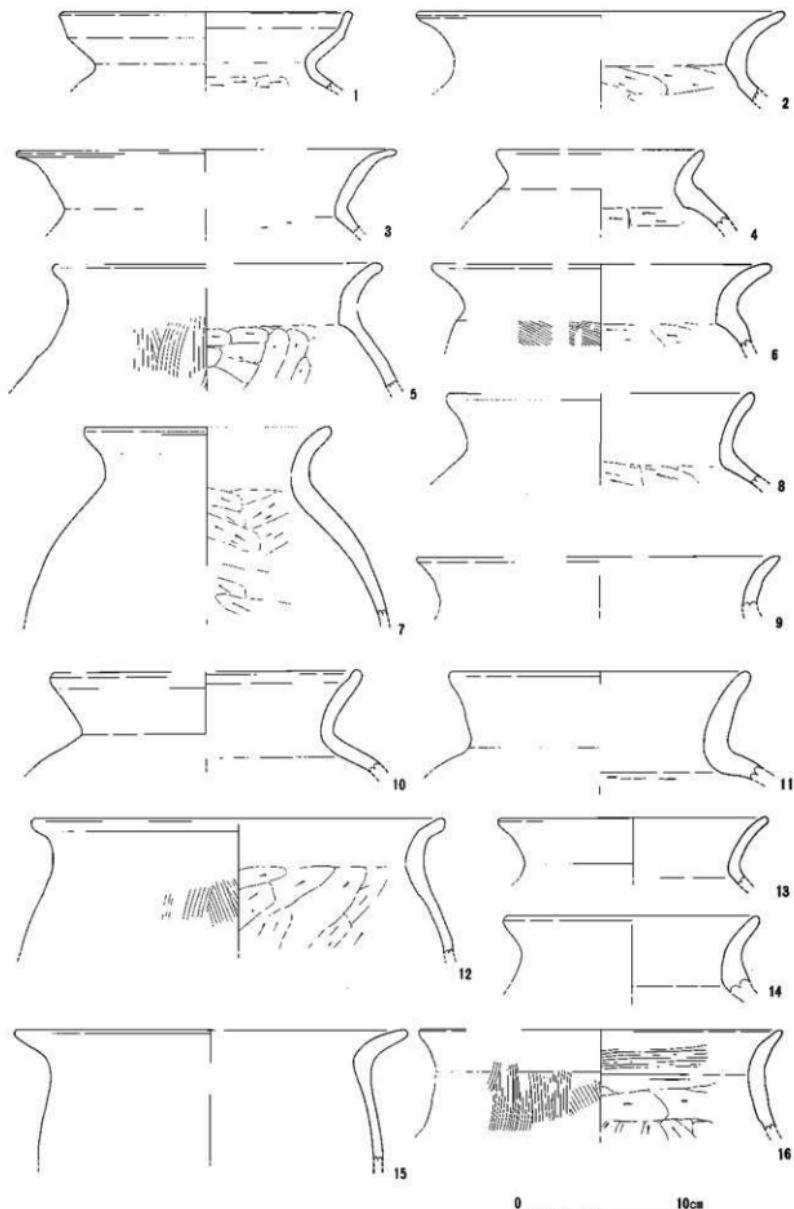
**C. 土師器** 第90~94図はIII-1・2区から出土した土師器を図示した。1は退化した複合口縁を呈する甕で、口径17.8cmを測る。複合口縁部は短く直線的に開き、口縁部段部に痕跡的な稜を残している。頸部内面以下のヘラケズリは右方向に施している。

2・3は口縁部が比較的長く立ち上がり、中途で強く外反するタイプの口縁部である。3は口径23.2cmを測り、頸部外面に稜をもつ。

4~6は頸部に強いヨコナデを加え、肩部に弱い稜を呈するタイプの甕である。6は肩部外面にヨコハケが観察される。

7~11は口縁部が比較的長く外反するタイプの甕である。7は口径に対して胴部がよく張るタイプの甕で、下膨れ状のプロポーションを呈するタイプのものと想定され、器壁が1.4cm前後とかなり厚いつくりのものである。10は口縁部が直線的に開き、口縁部端部内面に沈線を有するものである。11は口縁部の外反度が弱い甕で、口径18.4cmを測る。

12~15は比較的短く外反する口縁部をもつ甕である。12は口径25.1cmを測り、口縁端部にゆるい平坦面をもつ。16は頸部の縮まりが甘い甕で、胴部外面にタテハケ、口縁部内面にヨコハケが認め



第90図 III-1・2区出土遺物実測図(7) (S=1/3)

られる。

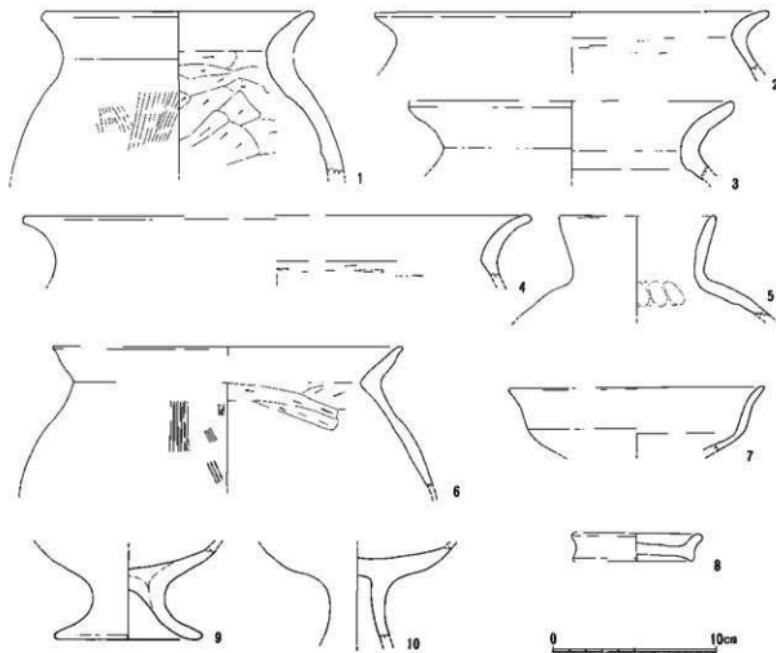
第91図5は直口壺で、口径9.6cmを測る。口縁部はほぼ直線的に延び、端部は丸く収めている。頸部内面には胸部と口縁部との接合時の指頭圧痕が観察される。8は土師質土器の灯明皿で、底部は上げ底状を呈し、糸切り痕が認められる。

9・10は高杯の脚部である。9は底径9.0cmで短脚タイプのものである。円盤充填法的な製作技法が接合痕から観察される。10はやや長脚タイプのものである。9・10は古墳時代後期のものと考えられる。

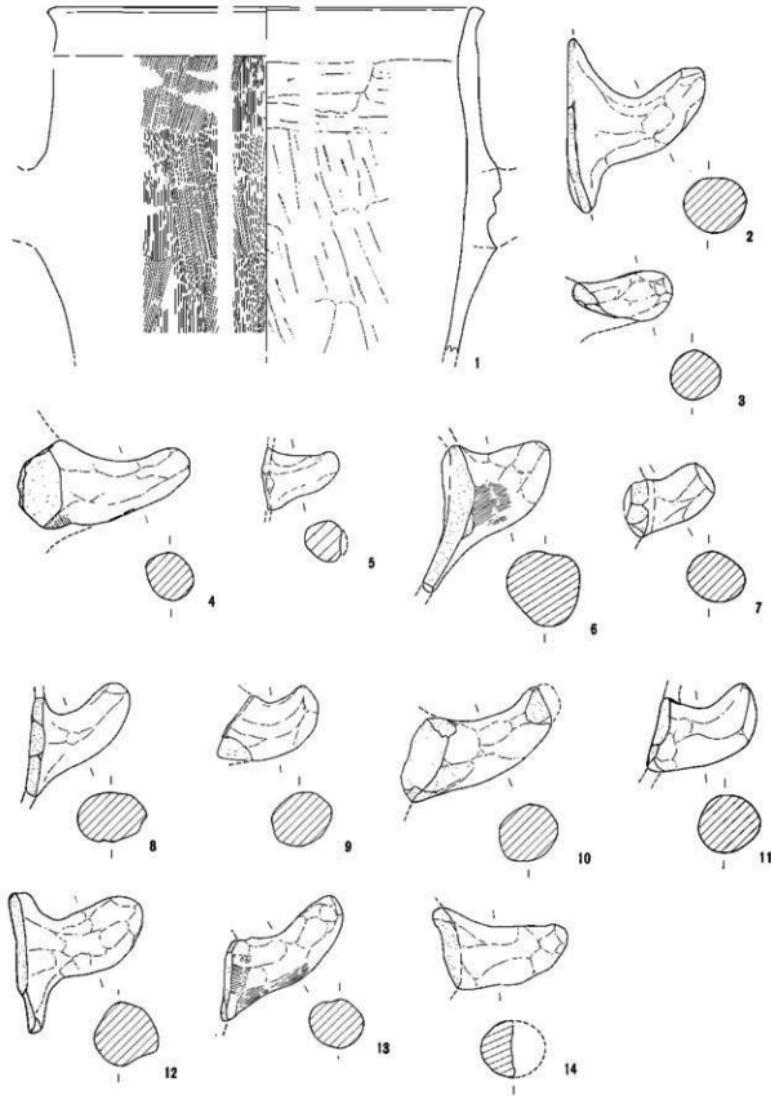
第92図は瓶を図示した。1は口縁部に強いヨコナデを加えてややくびれ、口縁端部は平坦面を形成する。調整は外面がタテハケ、内面は頸部付近が左方向のケズリ、それ以下が縦方向のヘラケズリを施している。

2～14は瓶把手の資料である。基本的には、形態はわずかに上方に屈曲する鉤手状を呈し、断面は不整円形または橢円形を呈し、外面を指ナデで仕上げるタイプのものが大半である。2は外面指ナデで仕上げ、断面長径3.9cmの橢円形を呈する。6は把手がやや短く、外面にハケが及んでいる資料である。7は胸部と接合する際の胸部穿孔部に差し込む基軸部から剥離している状況が観察できるものである。

第93図は土製支脚資料である。大谷編年3～4期を主体とするI-S区S R01出土資料では土製

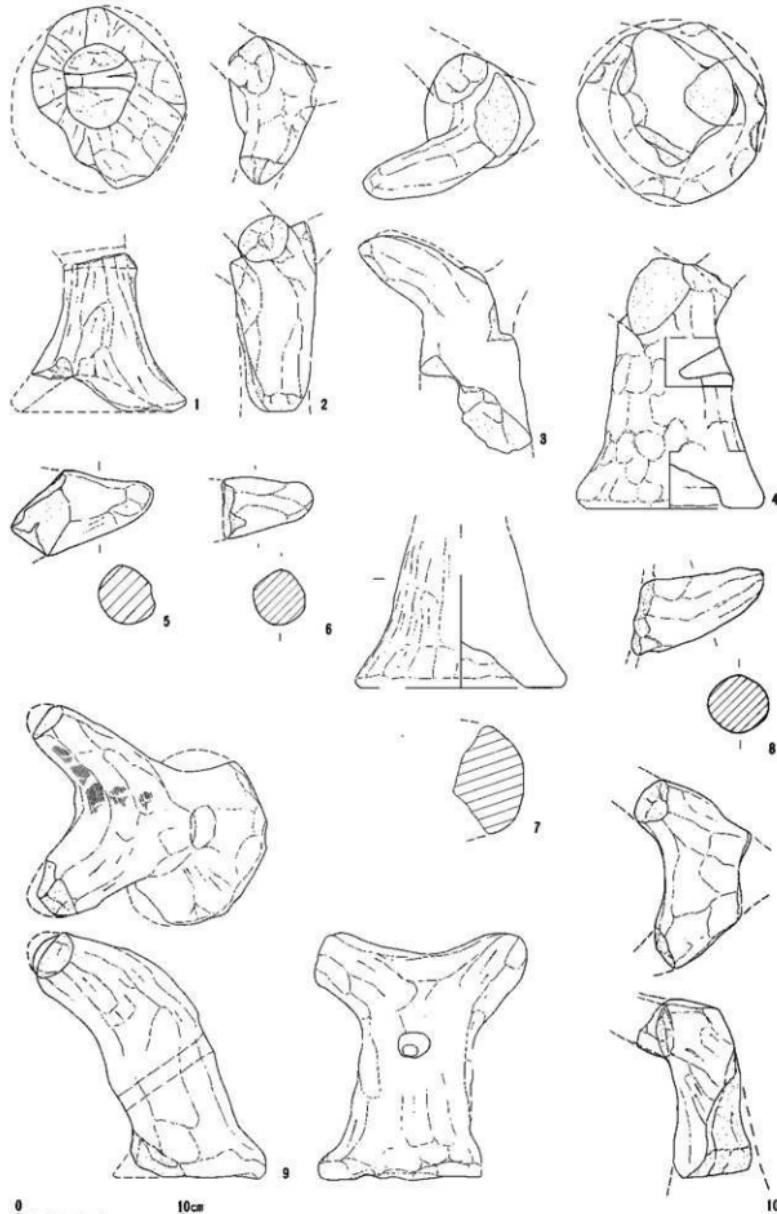


第91図 III-1・2区出土遺物実測図(8)(S=1/3)

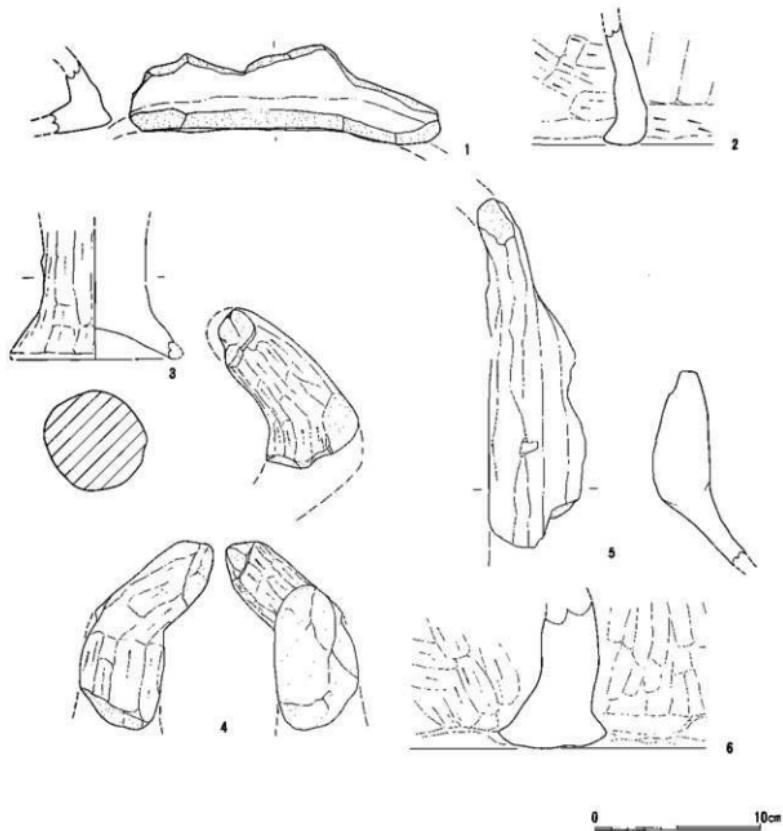


0 10cm

第92圖 III-1・2區出土遺物實測圖(9) (S=1/3)



第93図 III-1・2区出土遺物実測図 (10) ( $S = 1/3$ )



第94図 III-1・2区出土遺物実測図(11)(S=1/3)

支脚の資料は極めて僅かであったことから、これらの資料の大半は大谷5～6期に属するものである可能性が高い。

1は突起部を欠損している資料で、脚部は中実で若干上げ底状を呈している。外面は縦方向のケズリ風の粗いナデによって仕上げており、脚部中央には貫通孔のあった痕跡が認められる。2は脚端部、突起部を欠損しているが、三又突起タイプのものである。

3は1本しか突起が残っていない三又突起タイプのもので、残存する突起は比較的長い。4も三又突起タイプで、脚部背面中央には正面に向かって斜下へ穿つ長さ2.8cmの孔が認められる。底部は上げ底で、脚端部外面には指頭圧痕の痕跡が明瞭に観察される。

5・6・8は突起部の破片資料で、瓶把手のように屈曲せず先細り状を呈するものである。

9は突起先端部と脚端部の一部を欠損するが、ほぼ完形の土製支脚で、底部径9.6cm、高さ15.0cmを測る。二又突起タイプのもので、かなり前傾姿勢の強い形態のもので底部はわずかに浅く窪ん

でいるものである。背面には正面に向けて傾斜する径1.0cmの貫通孔が穿たれている。外面の調整はケズリ状の粗いナデ及び上面にはハケが認められる。

10は三又突起タイプの資料で、突起部、脚端部は欠損しており、背面の孔は認められない。外面の調整は9とはほぼ同様なものである。第94図3は土製支脚の脚端部で外面には縦方向のヘラケズリが認められ、底部は若干上げ底状をなす。4は二又突起タイプのもので、突起部は比較的長くやや上方へ向けて立ち上がっている。現状では背面の貫通孔は認められず、外面は縦方向のヘラケズリで器壁を整えている。

第94図1・2、5、6は移動式甌の破片資料である。1は焚口上部の軒庇部と考えられ、本体内側はナデ、軒庇部下面にはハケが観察される。5は焚口に向かって右側裾部の軒庇資料と考えられる。軒庇の幅は現状で6cm前後を測り、前方へややむけて内湾している。

2・6は移動式甌の脚端部資料で、2は内側に、6は内外両側に肥厚している。2は外面には脚端付近には横方向の軽いケズリを施し、それより上には板状工具によるナデを施している。6も外面は2と同様な調整を施し、内面にはヘラケズリによって仕上げている。

## 2 節 III-3~6 区の調査

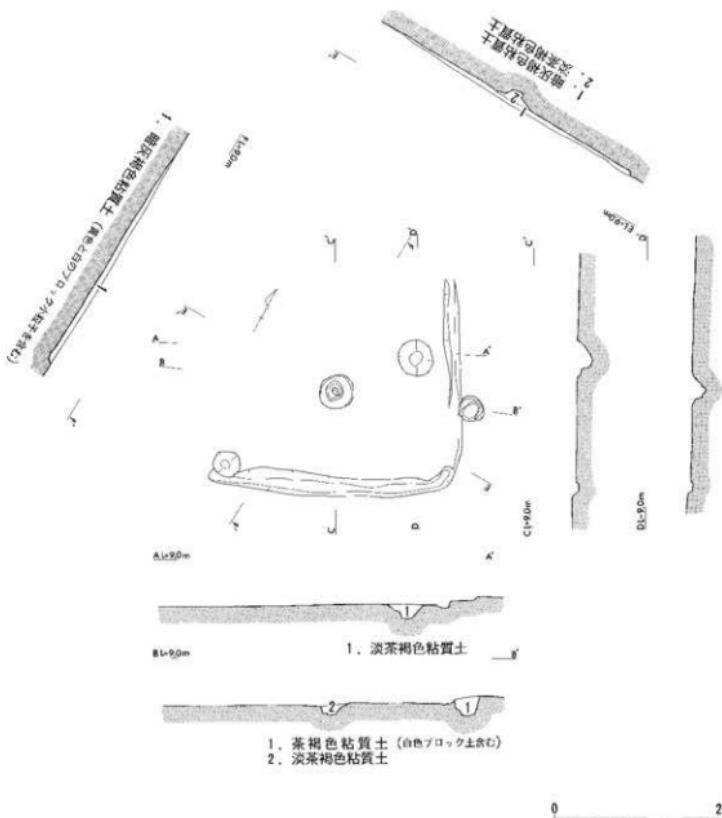
### A. 壑穴住居址

#### S I 04 (第95図)

III-5・6 区境界付近で検出した壙穴住居址で標高9.0mの微高地に立地している。

**規模・形態** 後世の削平によってかなりの部分が失われており、検出し得たのは住居址の2辺分とピット3基のみである。

当住居址の平面プランは隅が若干丸みを帯びた方形のものであり、現存する範囲での規模は2.6m × 3.1mを測り、比較的小形の住居址である。住居址壁はその大半が失われており、比較的残りの



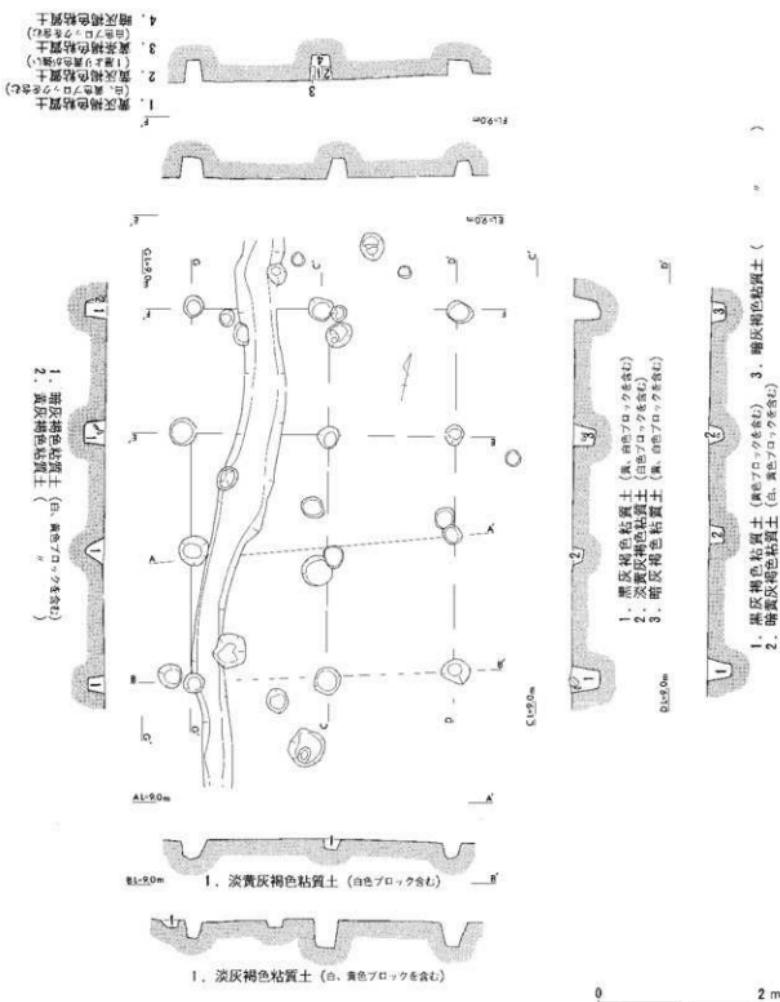
第95図 III区 S I 04実測図 (S = 1/60)

良い部分での壁高でも5cm前後を残すのみであった。

**覆土** 住居址内の覆土は地山ブロックを含む暗灰褐色粘質土の1層のみであり、覆土中からの出土遺物は細片が若干出土したのみである。

**床面** 床面についてはかなりの部分が残存していたが、貼床などは確認できていない。

**柱穴・壁体溝** ピットは床面からは3基検出したのみである。ピットの規模は径30cm~45cm、深さ



第96図 III区SB II実測図 (S=1/60)

20cm弱のもので、比較的小規模のものである。ピットの並びも不規則であり、明確に主柱穴と判断できるものは無い。ピットの覆土は茶褐色系の土が堆積しており、特に柱痕らしき痕跡は認めるることはできなかった。また住居址の壁際には幅15cm～25cmの壁体溝が壁が残存する範囲ではほぼ全周している。

**炉・焼土面** 明確に炉と推定されるピットは確認しておらず、また焼土面も床面からは検出していない。

#### S I 04出土遺物（第98図）

住居址覆土中からの遺物は細片が若干出土しただけで、このうち図化できたのは1点のみである。第98図1は床面付近から出土した中形の須恵器壺である。小片のため正確な口径は不明だが、推定口径13.6cm前後を測る。口縁部は有段状を呈し内外面はヨコナデを施す。

**年代** 出土遺物が乏しく時期決定の材料に欠けるが、須恵器壺は6世紀後半～7世紀前半代のものと考えられる。後述するように、出雲東部の平野部においては大谷編年4期以降の堅穴住居址は激減することからみて、大谷編年3～4期前後のものと考えておきたい。

### B. 挖立柱建物跡

#### S B 11（第96図）

III-6区で検出した掘立柱建物跡で、S I 04の南東約10mの平坦な微高地上に位置しており、一部のピットは後述するS D 05と切り合っているが、前後関係については確認できていない。

**規模・構造** S B 11はS I 04と同様上部をかなり削平されているが、柱穴の大半は確認することができた。建物は3間×2間の総柱建物と考えられ、桁行4.4m、梁間3.2mを測る。柱間距離は桁行で1.2m～1.7m、梁間で1.5m～1.7m前後で、およそ1.5m前後の柱間距離を指向していることが窺える。

建物の主軸はN-13°-W前後を指向しており、I-N区S B 03やI-S区S B 05、06のそれとほぼ同様な方向を示す。

**柱穴** 柱穴の規模は、径25cm～37cm前後と比較的小規模なものである。柱穴の深さは上半はかなり削られているが、現状で10cm～35cm前後を測り、柱穴の床面レベルは8.3m前後の高さを指向しているものが多い。

柱穴の覆土は灰褐色系の覆土のものと茶褐色系の覆土のものの両者が認められ、一部の柱穴では断面観察で柱の抜き取り痕跡のものが観察できたものもある。

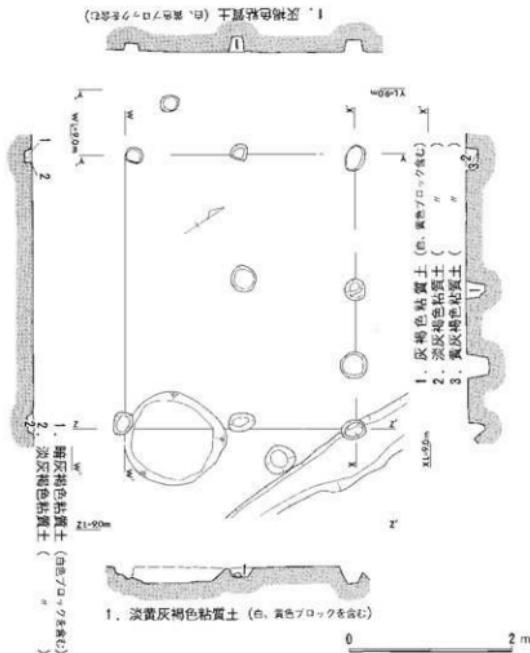
**炉・焼土面** この建物に伴う火廻は検出していない。

**出土遺物** 建物付近からは古墳時代後期と考えられる須恵器・土師器細片が若干出土しているが、この建物に確実に伴うものはない。

**年代・性格** 出土遺物が殆ど無く、年代決定の根拠に欠けるが、付近からの出土遺物からみて古墳時代後期頃のものと推測される。

また前述のとおり、この建物の主軸はI区S B 03・05・06とは同一方向を指向している。S B 11は地形的制約を受けないほぼ平坦な地に立地しており、その主軸についてはかなり恣意的な要因により決定されたものと想定される。こうした点からみて当建物はI区S B 03やS B 05とは同じ年代、大谷編年4～5期前後のものである可能性が高い。建物の性格としては柱穴の規模はやや小

さいものの、その構造からみて倉庫的性格の強い建物であったと考えている。



第97図 III区 S B 12実測図 (S = 1/60)

建物の主軸はN-56°-W前後を指向しており、S B 11やI区の掘立柱建物跡の主軸とは大きく異なっている。

**柱穴** 柱穴の規模は径20cm~30cmとかなり小さなもので、深さもばらつきが認められる。柱穴の覆土は灰褐色系の粘質土が堆積していた。

**灰・焼土面** この建物に伴う火焔は検出していない。

**出土遺物** 付近からは須恵器・土師器細片が若干出土しているが、当建物に確実に伴う遺物はない。

**年代・構造** 年代決定資料に欠くが、当建物はS B 11やI区掘立柱建物群と建物主軸を大きく異なることから、これらの建物群とはやや異なる年代のものである可能性が高い。

## C. 溝

### S D 05 (第99図)

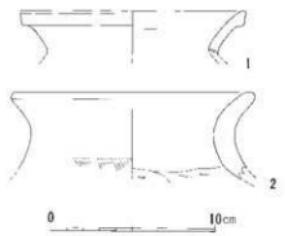
**規模・形態** III-6区で検出した溝で、南から北へ向けて緩やかに蛇行しつつ調査区外へと続いている。溝の規模は、現状で19.4m、幅25cm~74cm、深さ20cm~30cmを測る。

S D 05はS B 11・12を中心とするIII-6区ピット群中を南北に貫流している。建物の柱穴そのものとの切り合い関係は前述のとおり不明であるが、他の切り合いの認められるピット群との前後関

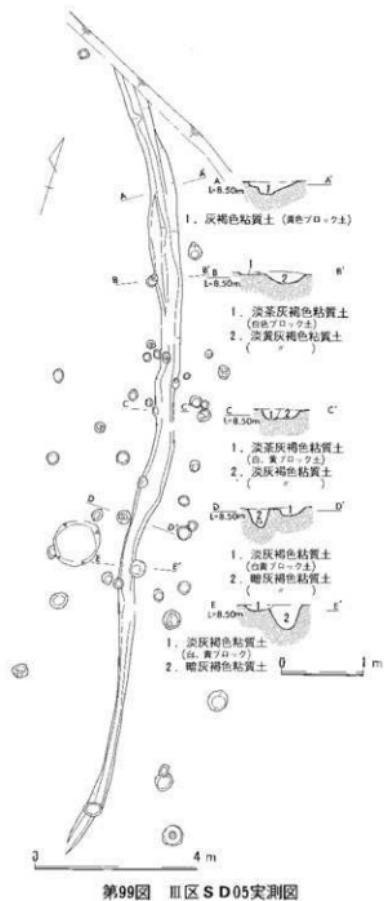
### S B 12 (第97図)

S B 11の西側において一部が重複する形で検出した掘立柱建物跡である。S B 11との前後関係はピット間の切り合いかが無く不明である。

**規模・構造** S B 11と同様、上部は後世の削平を受けているが、規模・構造の大体を把握することは可能である。建物の構造は2間×2間構造のものであったと推定され、規模は桁行長が3.4m、梁間長が2.9mを測る。柱間距離は桁行で1.2m~1.6m、梁間が1.3m~1.5m前後で桁行間の柱間距離の方がやや長い。また桁行南側の中間の柱穴については検出できていない。



第98図 III区 S I 04、S D 05出土遺物実測図  
(S = 1/3 1…S I 04 床面付近出土  
2…S D 05出土)



第99図 III区 S D 05実測図

係は新旧両者が認められる。このことからみて、S D 04はこれらのビット群と相前後して掘削された溝と考えられる。

**覆土** 溝の覆土は地山ブロックを若干含む淡灰褐色粘質土であり、覆土中からは須恵器・土師器細片が若干出土している。

#### S D 05出土遺物 (第98図)

S D 05中の出土遺物で図化し得たのは第98図 2 の 1 点のみである。2 は土師器甕の口縁部で口径14.8cmを測り、色調は橙色を呈する。口縁部は分厚いつくりで、緩く外反し口縁端部は丸く收めている。胴部外面にはタテハケ、内面には左方向へのラケズリが認められる。

**年代・性格** 切り合ひ関係からみてこの溝はIII - 5 区ビット群とはほぼ同時期の 6 世紀末～7 世紀前後のものと考えられ、溝覆土内出土土器もこの頃のものとして大過ないと思われる。

#### S D 06 (第100図)

**規模と形態** III - 5 区では、灰褐色礫混合土が厚く堆積する旧河道の右岸沿いを南北に走る溝数条を検出した。S D 06はこれらの溝の最も東よりに位置し、北は調査区外へと続いている。

溝の規模は、現状で長さ6.65m、幅30cm～60cmを測る。

**覆土** 溝の覆土は地山ブロックを含む暗灰褐色系の土で、須恵器・土師器細片が若干出土している。

**年代と性格** 遺構の年代については出土遺物の特徴から古墳時代後期前後と考えられるが、詳細は不明である。

このS D 06は河道沿いに営まれていることから、集落の立地する微高地と河道周辺の低地とを画するとともに排水的役割を担う性格の溝であったと考えている。

#### S D 07 (第100図)

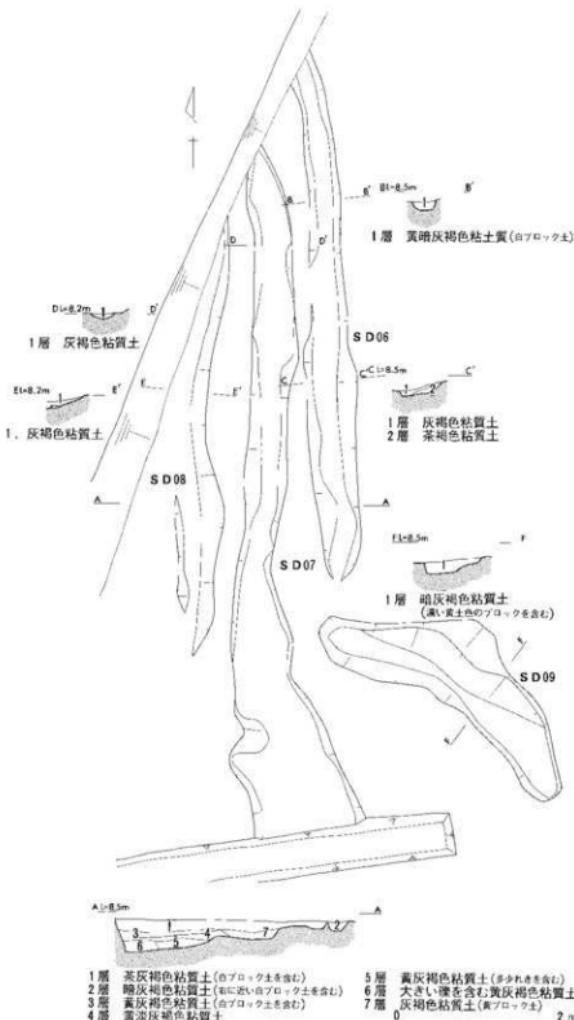
**規模と形態** S D 06と平行して南北に走る溝である。溝の北側はS D 06と同様調査区外へと続いている。現状での規模は、長さ8.6m、幅0.4

m~1.3m、深さ5cm前後を測る。

**覆土** 溝の覆土は灰褐色粘質土の単一層である。

**年代と性格** 遺物が無く、年代については不明と言わざるを得ないが、形態や立地条件からみてS

D06とほぼ同様な年代  
・性格のものであった  
と推察される。



第100図 III区 S D06~09実測図 (S = 1/60)

#### S D08 (第100図)

**規模と形態** S D07の西側に隣接して南北に延びる溝である。この付近は西側の河道方面へ向けて傾斜しているため、溝の西側部は一部分しか残存していない。

S D08はS D06・07と同様北側については調査区外へと続いている。現状での規模は、長さ5.5m、幅45cm~60cmを測る。

**覆土** 溝の覆土は灰褐色粘質土の単一層で、遺物は細片が少量出土したのみである。

**年代と性格** 出土遺物が僅少であり、正確なことは不明だが、S D05・06とほぼ同時期で同様な性格のものと考えられる。

#### S D09 (第100図)

S D06の南に位置している溝である。他の溝とは異なり南東から北西へ向けて弧状を呈

しているが、この付近は旧河道が屈曲する部分であり、河道沿いに走る溝という点では他の溝と同様な立地条件のものである。現状での規模は、長さ3.55m、最大幅1.05m、深さ15cm前後を測る。

**覆土** 溝内の覆土はSD06~09とほぼ同様な土である。

**年代と性格** 遺物は出土していないが、立地からみて他の溝と同様な年代・性格のものであったと推察される。

### III-3~6区遺構外出土遺物（第101~131図）

前述のとおり、III-3・5区を中心とした旧河道の氾濫原に相当する部分から各時期の遺物が多量に出土している。出土遺物の大半はIII-1・2区と同様に6世紀末から7世紀にかけてのものであるが、縄文・弥生時代の遺物の他、奈良・平安時代の遺物も一定量認められる。

これらは既に述べたとおり、繩文土器を除いては層位的に混在した状況で出土していることから、以下各時代別・器種別にその概要について述べる。

#### A. 縄文土器（第101図）

第101図1~5は縄文土器である。このうち1~3は灰褐色疊混合土の断ち割りトレンチ中から出土したものである。1は縁帶文期の深鉢で、口縁端部を欠損している。口唇部は外面が肥厚し、1条の沈線を施している。外面は粗いナデ、内面には横方向のケズリが認められる。2は内面肥厚タイプの深鉢で、内外面には横方向の粗いナデを施しており、肥厚部に縄文等は認められない。1と同様縁帶文期の資料である。

3は粗製深鉢の肩部の資料で、胴部と頸部との境界は比較的明瞭な段状を呈している。胴部外面には横方向のケズリ、内面には横方向のミガキが認められる。4は粗製深鉢の口縁部で、口縁部は若干内湾気味に立ち上がり、端部は先細り状に収めている。3・4は明確な時期は不明だが、縄文後期のものと考えられる。

5は浅鉢で、偏平な胴部を呈し、胴部と頸部の境界は明瞭な段によって表現されている。風化が著しく、現状では胴部外面には縄文地は認められない。胴部内面には横方向のミガキが認められる。胴部に縄文地はないが、器形そのものは縁帶文期によくみられる鉢であり、1・2とほぼ同時期のものと考えられる。

#### B. 弥生土器（第101・102図）

第101図6~18、第102図には弥生土器～古式土師器を図示した。第101図6は弥生中期の甕である。非常に薄手のつくりで、口径は13.2cmを測る。口縁部は縁り上げ状にやや上方へ立ち上がり、端面はヨコナデで仕上げている。

7は高杯の杯部である。口縁部は強く内傾し口縁端部は内側に肥厚し、上面に平坦面を形成する。口縁部外面には5条の凹線文をめぐらせている。8も7と同様なタイプの高杯で、弥生中期末の資料である。9は高杯脚部で脚部下半に円形の透かしが認められる。

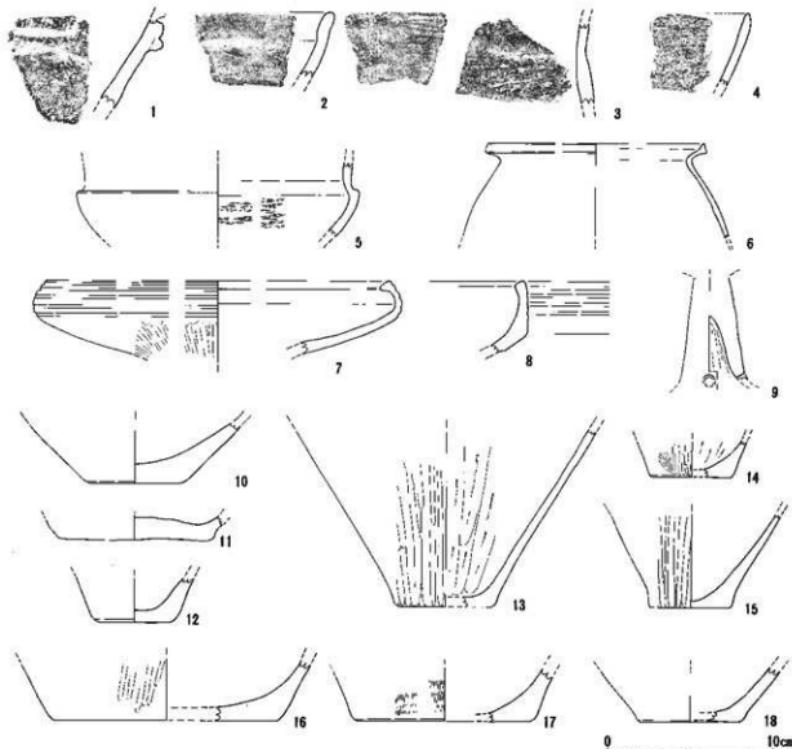
10~18は底部資料で、いずれも平底を呈するものである。10はかなり厚手のつくりの底部で、色調は淡灰色を呈し、胎土はやや大型の砂粒を多量に含んでいる。こうした特徴から弥生前期に属するものと考えられる。11の底面には初期らしき圧痕が認められる。13は底径5.6cmを測り、外面に

は縦方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラケズリが観察される。弥生中期末のものであろう。

第102図は弥生終末期～古墳時代前期初頭の資料である。1は口径19.0cmを測る甕で、口縁部はやや厚みがあり、端部は先細り状に取めている。口縁部外面には擬凹線文を施した後ナデ消している。頸部にはピッチの短いややだれた波状文をめぐらせていている。草田編年4期古、塩津山編年3期に属する資料と考えられる。

2はやや薄手の甕で、口縁部段部はヨコ方向に鋭く突出し、口縁端部は僅かに外方へ折れており、口縁端部調整の初期段階のものである。頸部には1と異なり比較的ピッチの長い櫛描波状文をめぐらせていている。内面ヘラケズリの方向も1とは逆方向の右方向になっている。草田編年5期、塩津山編年5期に属するものである。3は風化が著しいが薄手の甕で、口縁部はほぼ直線状に立ち上がりっている。

4は甕または壺で、口縁部はやや内傾し口縁端部は肥厚し丸く取めている。口縁部外面には櫛描状の細い沈線が數条めぐらしている。当地では類例の少ないタイプのものである。5は口縁端部調整が定型化した段階の甕で、口縁端面には平坦面を形成する。草田7期の資料である。6は壺で口縁

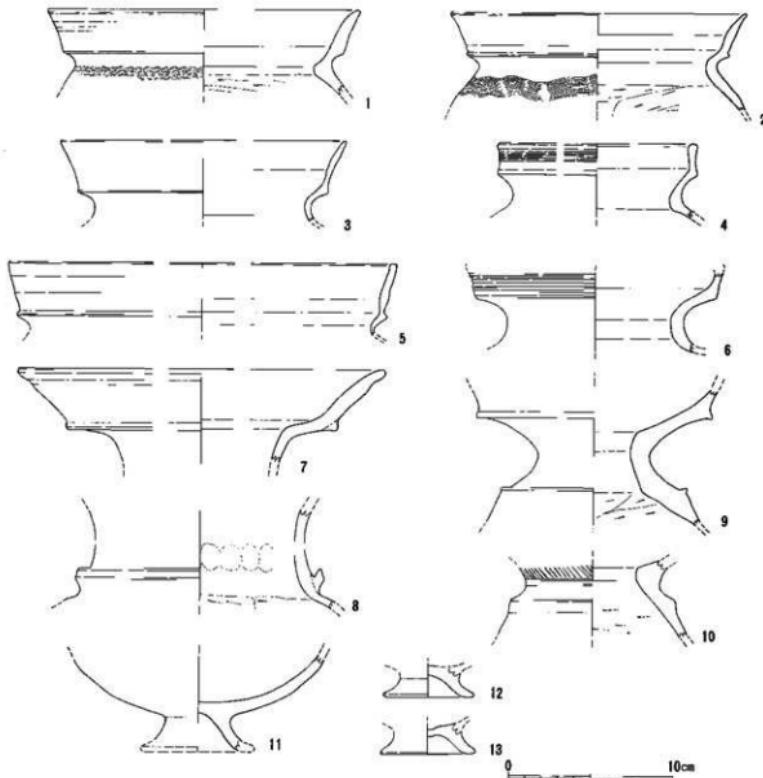


第101図 III-3～6区出土遺物実測図 (1) (S = 1/3)

端部を欠損している。口縁部段部は突出せず、口縁部外面には貝殻腹縁によるものと思われる擬凹線文がめぐらしている。草田2期の資料であろう。

7は2重口縁壺で、小片だが推定口径22.4cmを測る。口縁部段部は突帯を貼り付けて斜下方向に突出し、口縁部は大きく直線的に開き口縁端部はやや外へ折れ曲がっている。色調・胎土は在地のものとはほぼ同じものであるが、畿内系2重口縁壺と思われる。草田6～7期のものであろう。8は壺の頸部で、胴部と頸部との境界にタガ条の突帯を貼り付けている。この頸部に突帯を貼り付けるタイプの壺は、当地では草田7期から一般的にみられるようになることから、この資料も草田7期前後のものと考えられる。

9は鼓形器台で、文様は風化が著しく不明。草田3期前後のものだろう。10も鼓形器台の筒部から脚部にかけての資料で筒部には2条の沈線とその上に「ノ」字状の細かな刺突文が認められる。脚部外面の文様は風化のため判然としない。11はやや大型の低脚壺で脚付鉢と呼んだ方がよいかもしない。壺部はやや深い碗形を呈しており、内外面の調整は風化の為不明である。12・13は低脚



第102図 III-3～6区出土遺物実測図(2)(S=1/3)

坏の脚部で、底径5.5cm～5.8cmを測る。

#### C. 須恵器（第103～112図）

第103～112図には須恵器を図示した。第103図は須恵器坏蓋である。1は口径14.2cmを測る大型の坏蓋で、天井部には丁寧なヘラケズリを施している。肩部は形骸化しているがなお稜を残している。口縁部内面には段状の沈線を1条めぐらせてある。大谷編年3期に属する。4は天井部周辺に回転ヘラケズリを施し、中心部はナデを施している。口縁部内面は段状を呈している。

5は口径11.6cmを測り焼成はやや甘いものである。肩部に1条の沈線をめぐらせてある。6は口径13.8cmを測り、やや偏平な形態を呈する坏蓋である。天井部には回転ヘラケズリを施し、肩部には1条の沈線をめぐらす。口縁部はやや外に折れ曲がる癖をもつものである。大谷編年3期併行のものであろう。

7はやや器高の高いタイプの坏蓋で、口径12.9cmを測る。肩部には2条の沈線をめぐらし、口縁部内面に浅い凹線が認められる出雲通有の坏蓋で、大谷A4型に属する。8～10もほぼ同様なタイプの坏蓋である。12は歪みの著しい坏蓋で、口径12.3cmを測る。天井部のヘラケズリは比較的丁寧なものである。14は口径13.2cmを測るやや大型の坏蓋であるが、天井部がヘラ切り未調整のものである。口縁部は内湾度がやや強く肩部には痕跡的な沈線がわずかに観察される。大谷編年5期の資料である。15も14と同様な資料であるが、口径が12.2cmと小型化の進行したものである。

16は天井部が周辺回転ヘラケズリを施す大谷編年4期の資料である。天井部に直線状のヘラ記号が認められる。

18は口径10.7cmを測り、小型化がいっそう進行したタイプの坏蓋であるが、天井部周辺にわずかに軽い回転ヘラケズリの痕跡が認められる。20～22は口径11.0cm前後の坏蓋で天井部はいずれもヘラ切り未調整のものである。大谷編年6期の資料である。23はヘラ切り未調整の坏蓋天井部である。天井部に「×」に横一を加えた形態のヘラ記号が認められる。

24～32はつまみのつくタイプの坏蓋である。24は擬宝珠形のつまみの付く蓋である。26はつまみが偏平な円柱状を呈するものである。

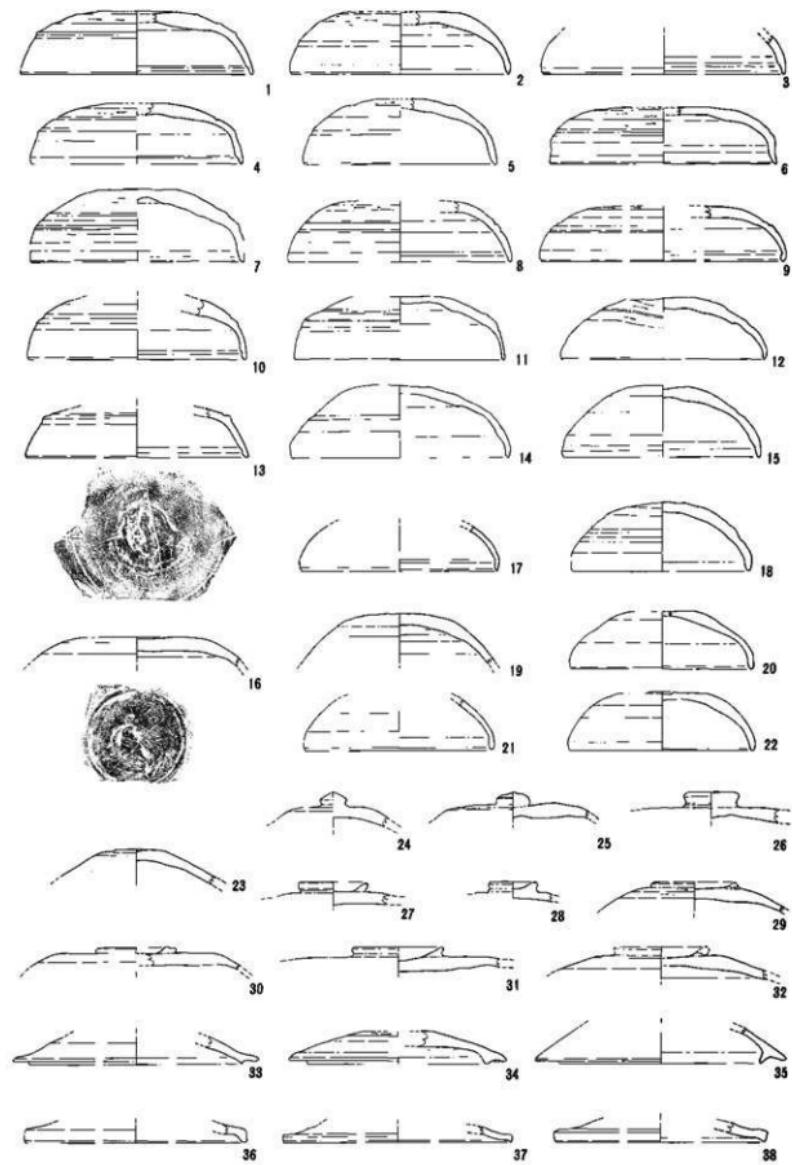
27～32は輪状つまみの付く蓋である。27はつまみ部径4.2cmを測る。30はかなり偏平な輪状つまみの付く坏蓋で天井部には回転ヘラケズリが認められる。

33～35はつまみの形態は不明だが、かえりの付くタイプの坏蓋である。34は口径11.0cmを測る。35は坏身の可能性がある。

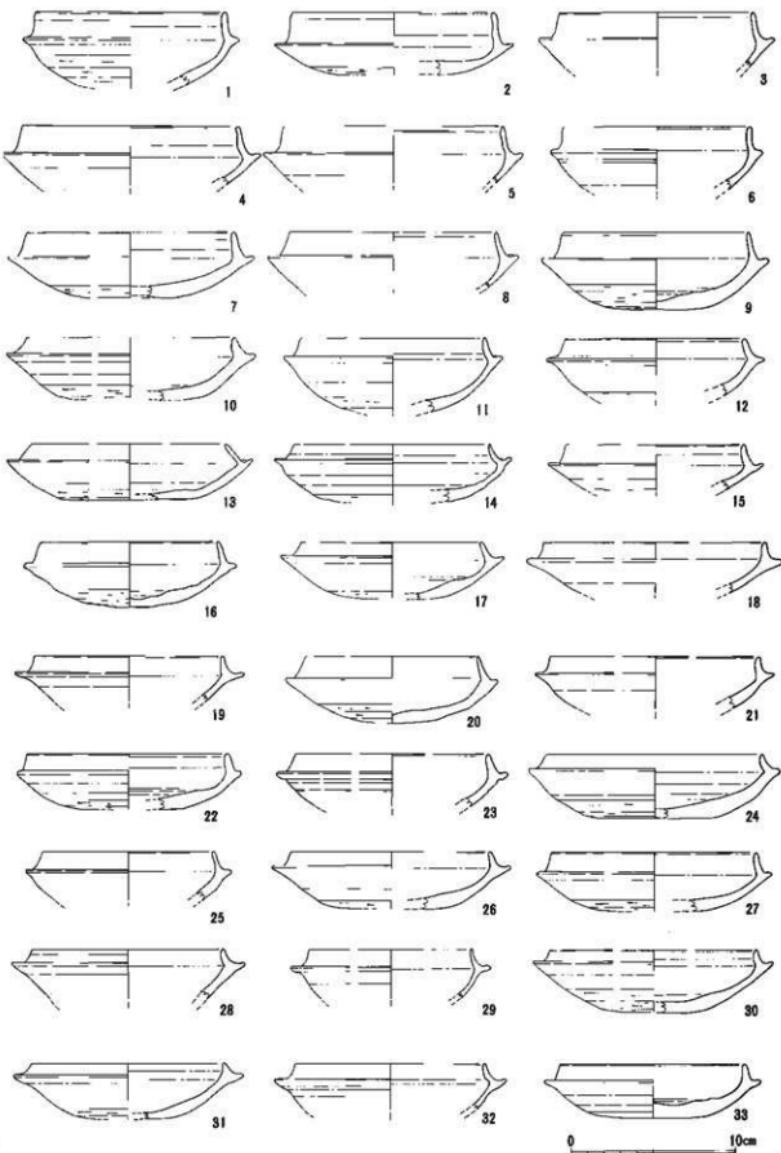
36は口縁端部が垂直に折れ曲がるタイプの坏蓋で、大谷分類B2型に属するものである。37・38は口縁端部がわずかに下垂するタイプの坏蓋で、高広IVB期に相当するものと考えられる。

第104～106図は坏身・坏である。第104図1は口径11.6cmを測る坏身で、立ち上がりは比較的高く受部は横方向に突出する。底部には丁寧な回転ヘラケズリが施されている。大谷編年2期まで遡る可能性がある。2は口径12.2cmを測り、立ち上がり部は若干内傾気味に長く立ち上がるタイプの坏身である。受部は1と同様横方向へ突出する。

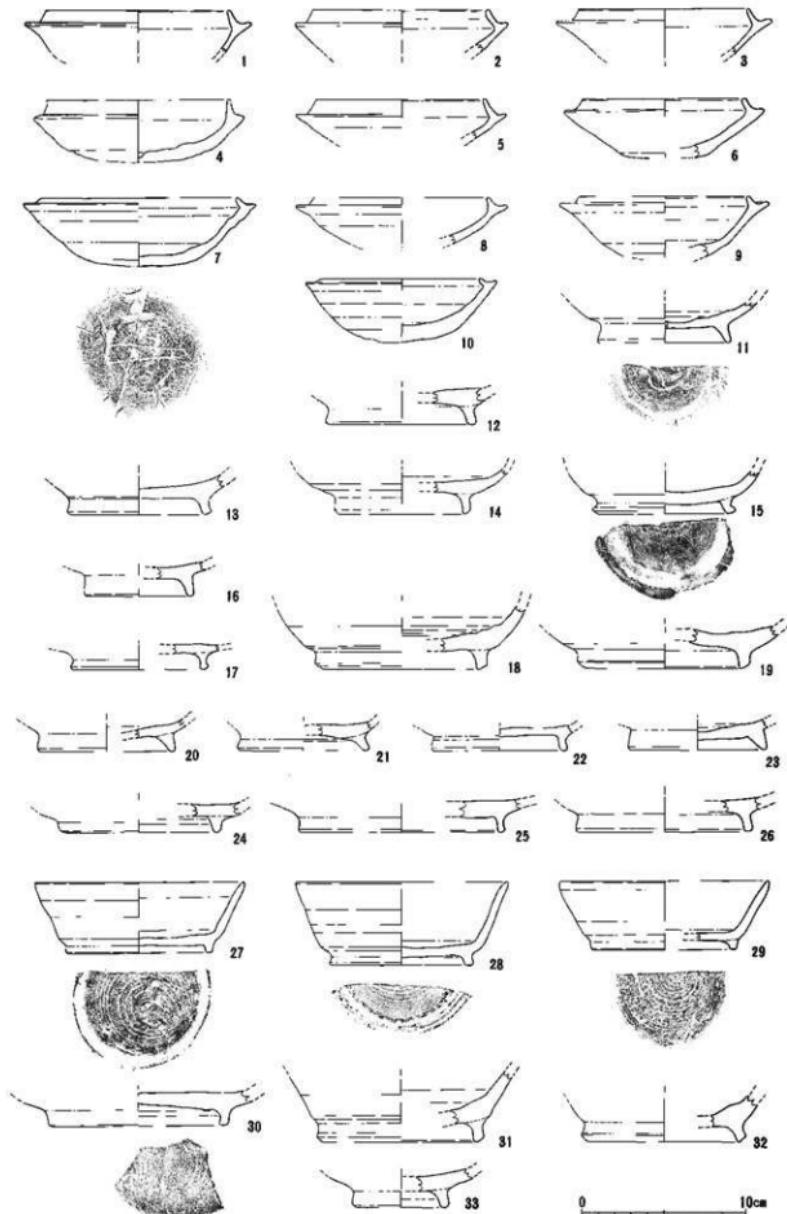
5は口径13.4cmを測る坏身で、器壁は薄くシャープなつくりを呈する。立ち上がり部は比較的長く立ち上がり、端部内面には段を形成する。大谷分類A2a型に相当し、大谷編年2期に属するものである。



第103図 III-3~6区出土遺物実測図(3) (S=1/3)



第104図 III-3~6区出土遺物実測図(4) (S=1/3)



第105図 III-3~6区出土遺物実測図(5)(S=1/3)

7は口径12.6cmのやや厚手の印象を受ける坏身である。底部には比較的丁寧な回転ヘラケズリが施されている。8は立ち上がり部端部に面をもつ。9は口径11.2cmを測る坏身である。立ち上がり部は比較的長いタイプであり、底部の回転ヘラケズリの様相からみて、大谷編年3期の資料と考えられる。

10は全体的に器壁が厚く、鈍い印象を受ける坏身である。11は口径11.2cmを測り立ち上がり部内面の折り込みの稜が比較的明瞭な資料である。12は口径11.1cmで受部がやや斜下方向へ下垂するタイプの坏身である。全体的に焼き歪みによる歪みが認められる。

13は立ち上がり部の内傾度がかなり強くなった段階の坏身で、口径は11.8cmを測る。底部には残存する範囲では回転ヘラケズリを施している。14も13とはほぼ同じタイプの坏身である。16は口径10.8cm、器高4.0cmの坏身で、色調は青灰色を呈し比較的焼成の良好な資料である。底部には丁寧な回転ヘラケズリが施されており、大谷編年3期の資料と考えられる。

17は立ち上がりがやや低く内傾し底部の回転ヘラケズリが浅くなつたもので、大谷編年4期の資料と考えられる。口径11.1cmを測る。20は受部の短い坏身で、口径10.5cmを測る。底部には周辺部に回転ヘラケズリを施し、中心部はナデを施している。

22は口径12.2cmを測る坏身である。全体的にローリングが著しいが、全体的に鈍い印象を受ける坏身である。大谷編年4期併行の資料であろう。23は口径11.8cmを測る坏身で、受部下側に太い沈線を入れて屈曲する受部を作り出している資料である。24は口径13.3cmを測る坏身である。全体的に厚手で22に類似する坏身である。これらは当地ではあまり見かけないタイプの坏身であるが、大谷編年4期併行のものと考えられる。

31は口径12.7cmを測る坏身で、立ち上がり部は内傾度が強く短い。底部周辺部に浅い回転ヘラケズリを施している。大谷編年4期でも新しい段階のものである。

第105図6は口径10.0cmの坏身で、底部はヘラ切り未調整で大谷編年6期の資料である。7は口径12.0cmの坏身で大谷編年5期の資料である。底部には3条の沈線によって構成されるヘラ記号が認められる。9・10は口径10.0cm前後の小形が最も進行した段階の坏身で、大谷編年6期に属するものである。

11～33は高台付坏の資料を図示した。11～26は高台部分の資料である。11は高台部分が比較的高いもので、底径8.0cmを測る。底部には「×」状のヘラ記号が線刻されている。13は底径8.8cmを測る高台部で、高台はやや外に張り出し端部に平坦面を形成する。底部には糸切り後ナデを施した痕跡が認められる。14は高台部がやや高くほぼ垂直気味に立ち上がっている。

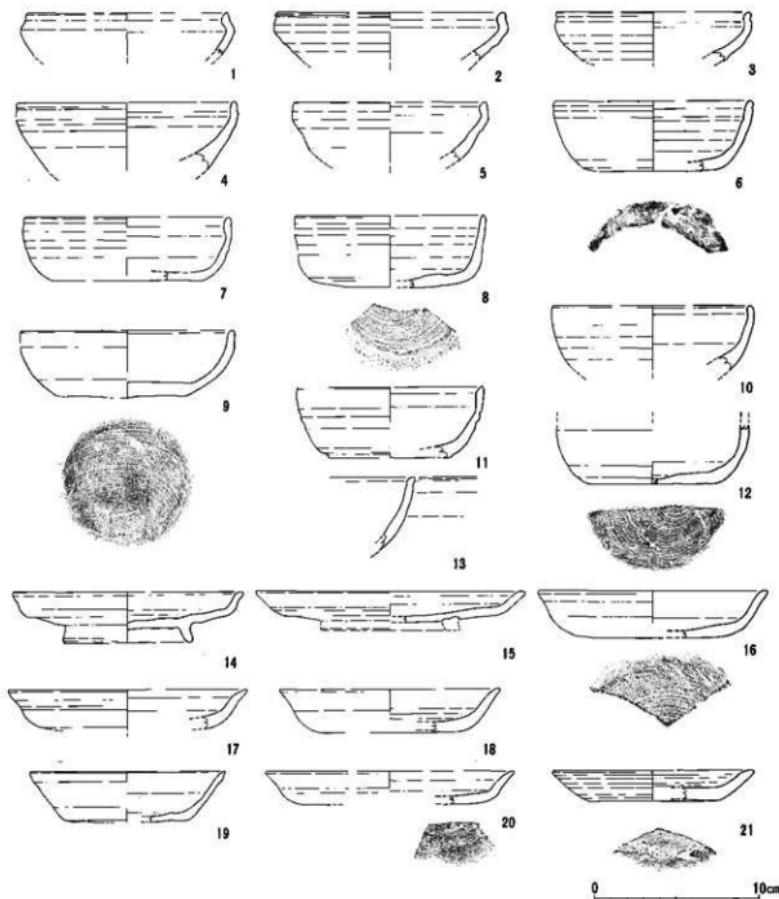
15は底径8.8cmを測る高台付坏で、高台部は垂直に落ちた後、強く外へ張り出す形態のもので、端部は丸く取めている。底部には回転ケズリ風のナデが施されており、ヘラ記号状の線刻が現状で1本認められる。16～23の底部は基本的にナデ調整で仕上げているものである。18は底径10.5cmを測るやや大型の高台付坏で、別の器種である可能性がある。高台部は比較的厚いつくりで端部に平坦面を形成し、坏部は高台接合部からやや外側の箇所から内湾気味に立ち上がっている。25・26はやや大型の高台部資料である。

27～29は坏部が直線状に開く形態の高台付坏である。27は口径12.8cm、器高4.35cmを測る。坏部は高台接合部付近からほぼ直線的に延びている。底部には回転糸切り痕がみられる。28・29も27とほぼ同型のものである。29の底部には回転糸切りのちナデを施している。27～29は高広N A期に相

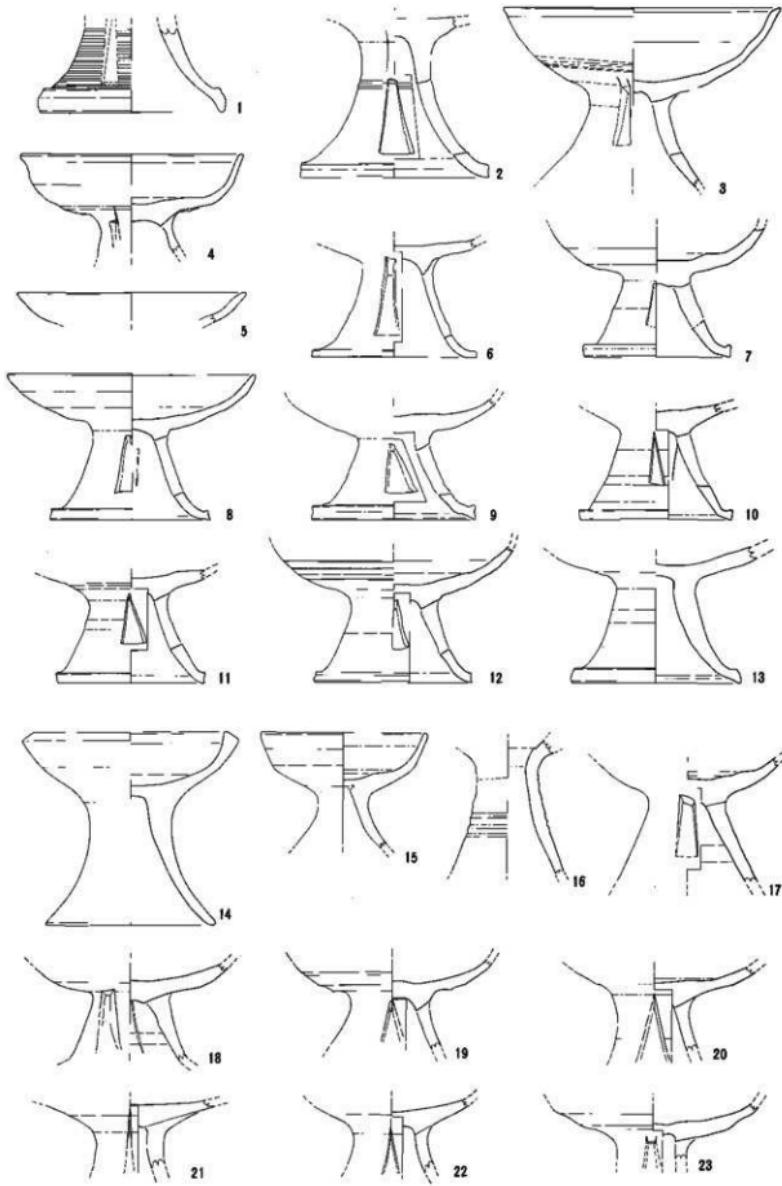
当する資料と考える。

31はやや大型の高台付坏で底径10.2cmを測り、比較的厚手の資料である。坏部は底面外周部付近から直線的に立ち上っている。32は31に比較的近い資料だが、高台部がやや外向きに張り出し端部に平坦面を形成している。

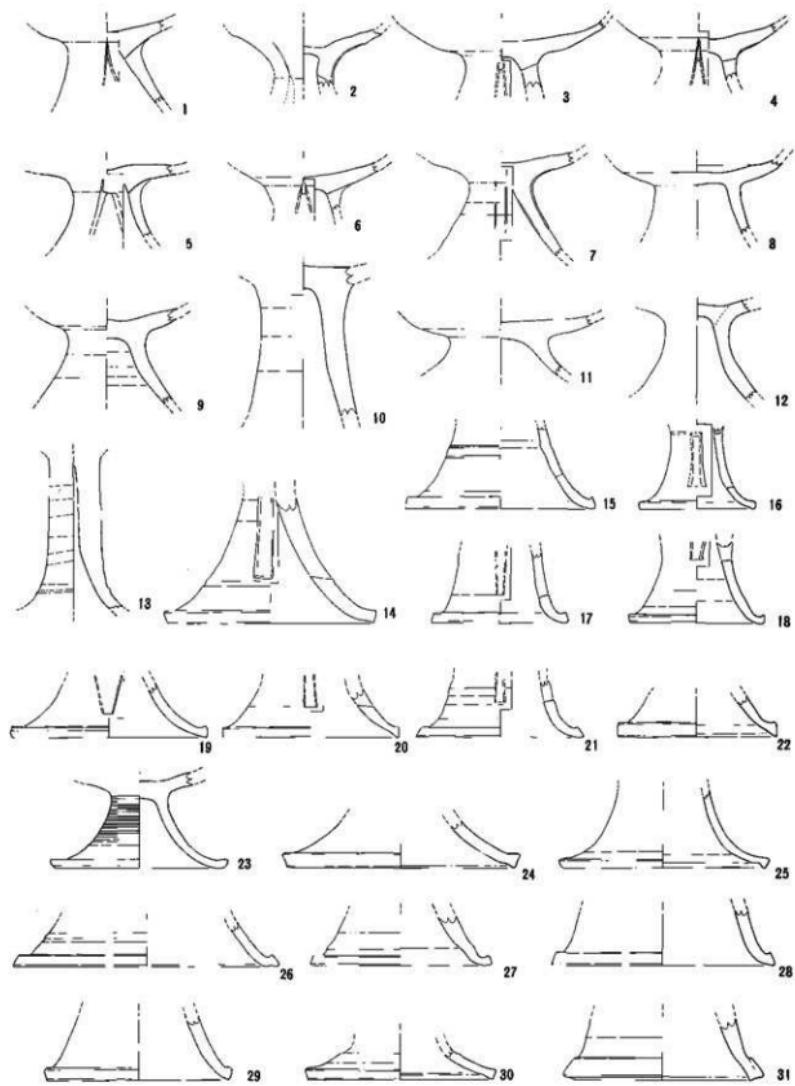
第106図1～12は高台の付かないタイプの坏であり、I-S区SR01上層出土例（第55図27）の系譜を引くものと想定されるが、他の遺跡での出土状況をみると時期的な空白期が認められ、直接結びつくかどうかは再検討を要す。1は小片だが口径12.2cmを測る坏で、口縁部がくびれる形状をなす。2・3もほぼ同様な資料で、3は口縁端部外面直下に沈線を入れた後横ナデを施し、くびれ



第106図 III-3～6区出土遺物実測図(6)(S=1/3)



第107図 III-3～6区出土遺物実測図(7) (S=1/3)



0 10cm

第108図 III-3~6区出土遺物実測図(8) (S=1/3)

部をつくり出している。

4は口径13.4cmを測り、1～3と同様に口縁部がくびれる坏だが、口縁部の内湾度がやや弱い資料である。6は口縁部が内湾せず、口縁部がわずかにくびれる。底部には回転糸切り痕が認められる。8は口径11.6cmを測る坏である。底径の大型化が進行し、口縁部のくびれは消失している。底部には回転糸切り痕を残す。9は口径13.0cm、底径7.6cmを測り、8と同様口径に対する底径比が増大し、口縁部は内湾気味に立ち上がっている。1～12の坏は高広編年ⅣA期に相当する資料であるが、やや幅をもつものと考えられる。

14・15は高台坏皿である。14は口径13.8cm、器高3.1cmで、焼成が甘く色調は淡橙色を呈する。坏部は水平方向に開いたち屈曲し、口縁部はやや外側に折れ曲がり上面に平坦面をもつ。底面には不定方向のナデを施している。15は14とはほぼ同じタイプの高台付皿であるが、14より器高が低く口縁端部は丸く収めている。14・15は高広ⅣA期に属するものと考えられる。

16～21は皿である。17は口径14.0cm、器高2.9cmを測る。口縁部はやや外反して丸く収め、底部には回転糸切り痕が認められる。17・18も16とはほぼ同じタイプの皿と考えられるが、高台の付く可能性もある。17は底部にケズリ痕が観察される。16～18は14・15と同様高広ⅣA・B期前後のものと考えられる。

19は口径11.7cm、器高3.1cmを測る焼成のやや甘い坏である。口縁部はほぼ直線的に開き、底部にはヘラケズリを施している。高広Ⅴ期に相当する資料と考えられる。20・21は器高の低い皿類で、高広ⅣB期前後のものであろう。

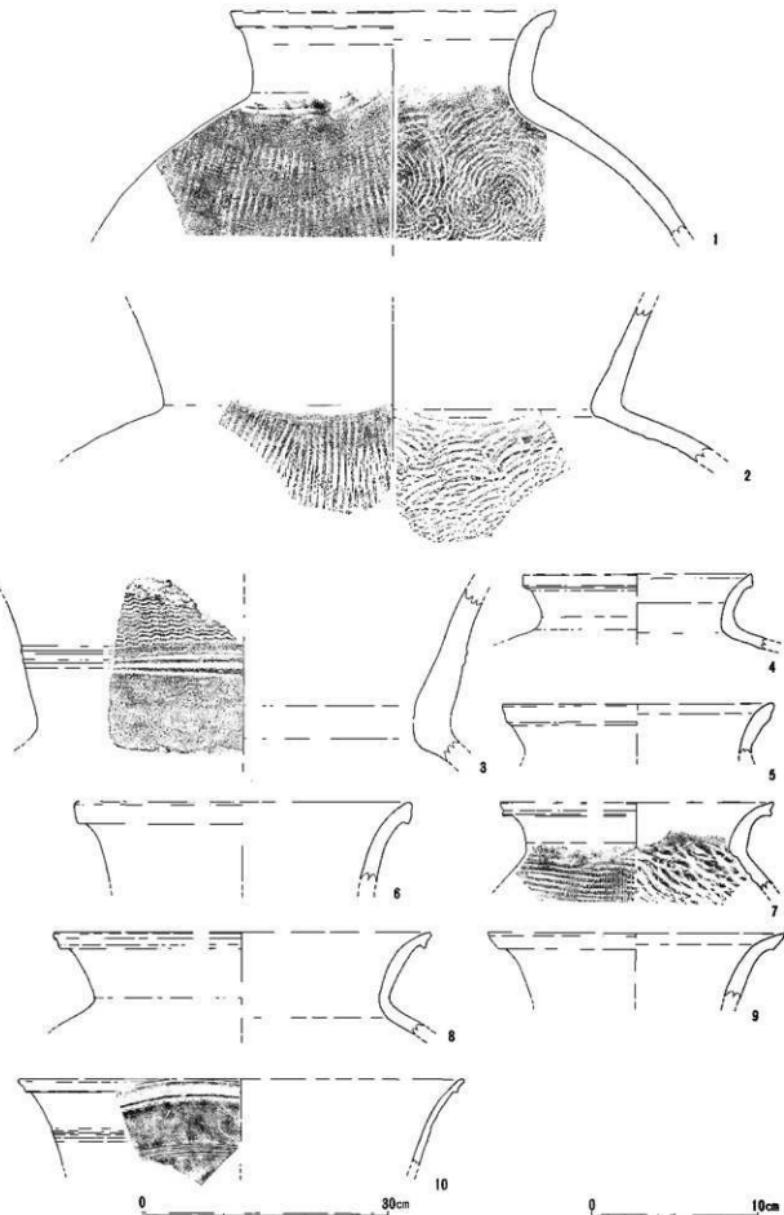
第107・108図は高坏を図示した。第107図1は高坏脚部で、底径11.2cmを測る。脚裾部には長方形透かしを穿ち、カキメ調整を施す。脚台部は「く」字状に内接し、脚端上部は斜上方に向てやや突出するが、全般的に丸みを帯びた印象を受ける。大谷編年1期まで遡る資料である。2は長脚タイプの高坏で、脚部中央に2条の沈線を施して上下に区画し、下段に長三角形状の透かし、上段に切れ込み状の透かしを穿つ。脚裾はゆるやかに広がり、脚端部は上下に平坦面を形成する。

3は焼成のやや甘い無蓋高坏で、口径16.8cmを測る。坏部はやや深い椀形を呈し、坏部下半にめぐらす沈線は浅く形態化している。脚部には長方形1段透かしを2方向に穿つ。大谷分類低脚無蓋高坏A4型に相当し、大谷編年4期のものである。4は3と同様なタイプの高坏坏部であるが、口縁部が若干外反するものである。

8は口径15.0cm、器高8.9cmを有する高坏で、3に比べより坏部が浅くなっている段階の資料である。脚部には長三角形透かしと切れ込み状の透かしを2方向に穿ち、脚端部は上下に面を形成する。大谷分類低脚無蓋高坏A5型に属するものである。9～12は2方向の透かしを穿つ高坏脚部で、10は長三角形と切れ込み状の透かしを穿つ脚部である。13は9～12と同様な形態の脚部であるが、透かしの認められないタイプの高坏で、大谷分類低脚無蓋高坏A7型に相当し、大谷編年5～6期に属するものと思われる。

14はやや異形の高坏で、焼成がやや甘く口径11.8cm、器高10.3cmを測る。坏部は椀状のものだが中途でやや屈曲している。脚部はやや長くゆるやかに開き、端部は拡張せず単純に丸く収めている。

15は小形の高坏で、口径10.2cmを測る。坏部は椀状のものだが中途でやや屈曲している。色調は淡灰色で焼成は良好である。16は高坏脚部として復元したが、長頸瓶の頸部である可能性がある。



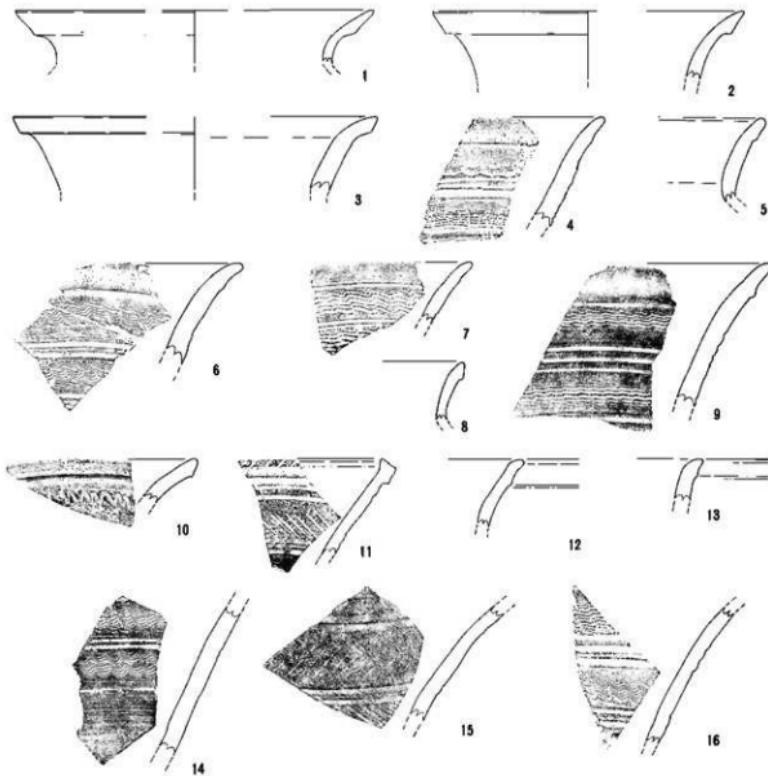
第109図 III-3~6区出土遺物実測図(9) (1~9···S=1/3 10···S=1/6)

第107図17～第108図12は高杯脚部と坏部との接合部付近の資料である。第107図17～第108図6は基本的に低脚2方透かしタイプの高杯と考えられるが、第108図2は3方向透かしの資料である。7は2条の平行沈線状の切れ込みを脚部表裏に入れているが貫通していないものである。

13は器壁が厚く柱状の形態を呈する脚部で、色調は淡灰色を呈する。外面は横ナデによる凹凸が著しい。形態や色調などからみて他の高杯より時期の降る資料と考えられる。

第108図14～30は高杯脚端部の資料である。14は底径15.0cmで復元したが歪みが著しく、正確な底径は不明である。長脚二段タイプのものと考えられ、下段には長方形透かしを4方向に穿つ。15は長脚二段タイプの退化したものと思われる、区画文の2条の沈線のみが現状では確認できる。

23はやや特異なタイプの高杯で、脚部は比較的短脚でゆるやかに大きく開き、脚端部はやや反り気味に丸く収めている。脚裾部にはカキメ調整を施す。出處地方ではあまり見かけないタイプの高



第110図 III-3～6区出土遺物実測図(10) (S=1/3)

坏で搬入品である可能性がある。31は高坏脚部として復元したが、別の器種かもしれない。脚裾はあまり広がらず円筒状の形態を呈し、脚端部は幅広の有段状を呈している。23と同様搬入品である可能性がある。

第109・110図には須恵器壺・甕を図示した。第109図1は口径19.8cmを測る甕で、頸部は比較的短くやや開き気味に立ち上がり、口縁部は有段状を呈する。胴部外面には平行タタキ後カキメ調整を施し、内面には同心円当て其痕を残す。3は大甕の頸部資料で、頸部中央部には3条の沈線を施しその上段に退化した波状文をめぐらせている。

4～9は中形の甕または壺の口縁部資料である。4は口径13.8cmを測り、口縁部は短く外反し口縁端部は上下に平坦面を形成する。5の口縁端部はやや幅広の段部を呈している。6は口径20.6cmを測り、口縁端部は丸みを帯びた段部を形成している。

7は口径16.6cmの壺または甕である。口縁部は短く外反し、口縁端部は上下に凹面を形成している。胴部外面には平行タタキ、内面には同心円当て其痕を残す。8は小片だが推定23cm前後の甕で、比較的薄手の資料である。口縁部の形態は7とほぼ同様のものである。口縁部外面に自然釉が付着している。

10は推定口径54.4cmを測る大甕で、頸部は外反し口縁端部は凹面状を呈する段部を形成している。頸部中央位には4条の沈線をめぐらし、その上に比較的のしっかりした櫛描波状文を4段にわたって施している。

第110図1は比較的幅広の口縁段部をもつ甕口縁部である。2は口径19.0cmを測る甕で、内面に自然釉が認められる。4は大甕の口縁部で、口縁端部の段部は退化して凹面を呈する。頸部中位の沈線を挟んで上下に退化が進行した櫛描波状文を施している。6・7・9も4とはほぼ同様な資料であり、9は波状文が直線文状となるまで退化が進行している。5・9は外面の一部に自然釉が付着しているのが観察される。

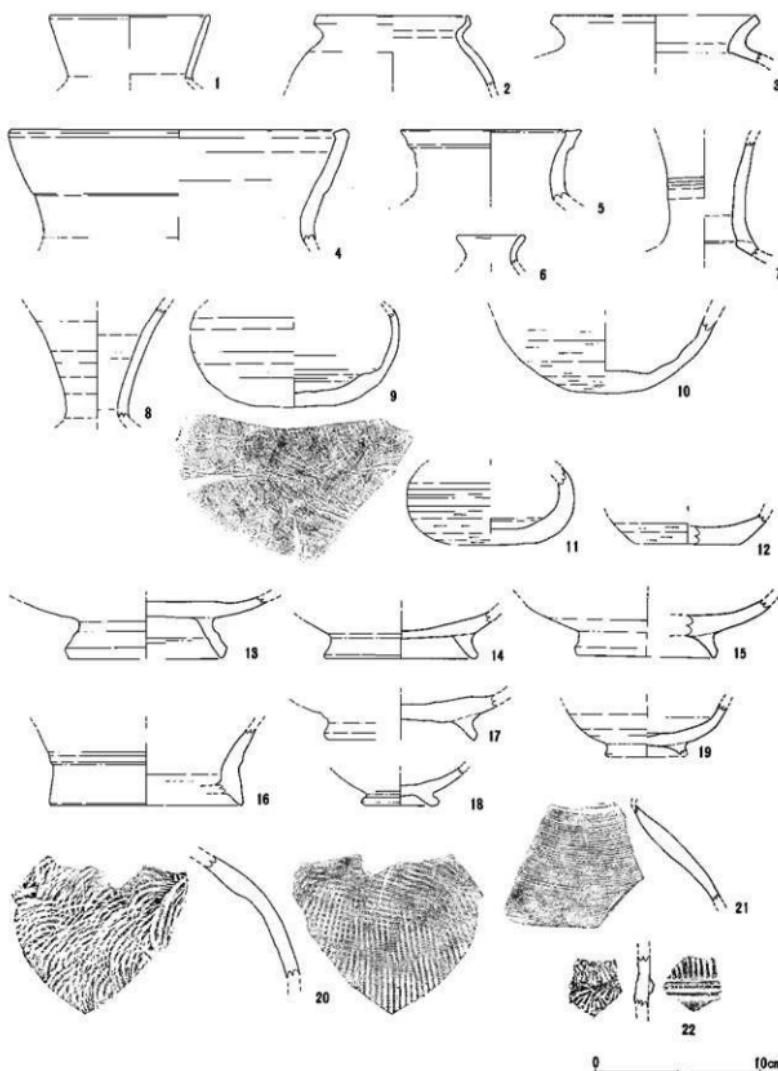
10は口縁端部が断面三角形状を呈し、その直下に振幅の大きい波状文をめぐらせている。11はやや特異な資料で、頸部はほぼ直線状に開き、口縁端部は外側を段状に仕上げているとともに内側に肥厚している。口縁端部外面には「ノ」字状の刺突が施され、その直下に2条の沈線を挟んだ下に右下がりの斜行刺突文を密に配している。この斜行文の下には2条の沈線があることから、15のような綾杉文状の文様になるものと想定される。同様なモチーフは徳見津遺跡Ⅲ区包含層中資料においても認められる。

14～16は大甕頸部の資料である。14は四線文状の沈線と比較的のしっかりした波状文を交互に配している。15は2条の沈線を挟んで板状工具による綾杉文状のモチーフを配する大甕頸部である。外面には自然釉が全面にわたって厚く付着し、文様が不明瞭となっている。16は14とほぼ同様の大甕頸部資料である。

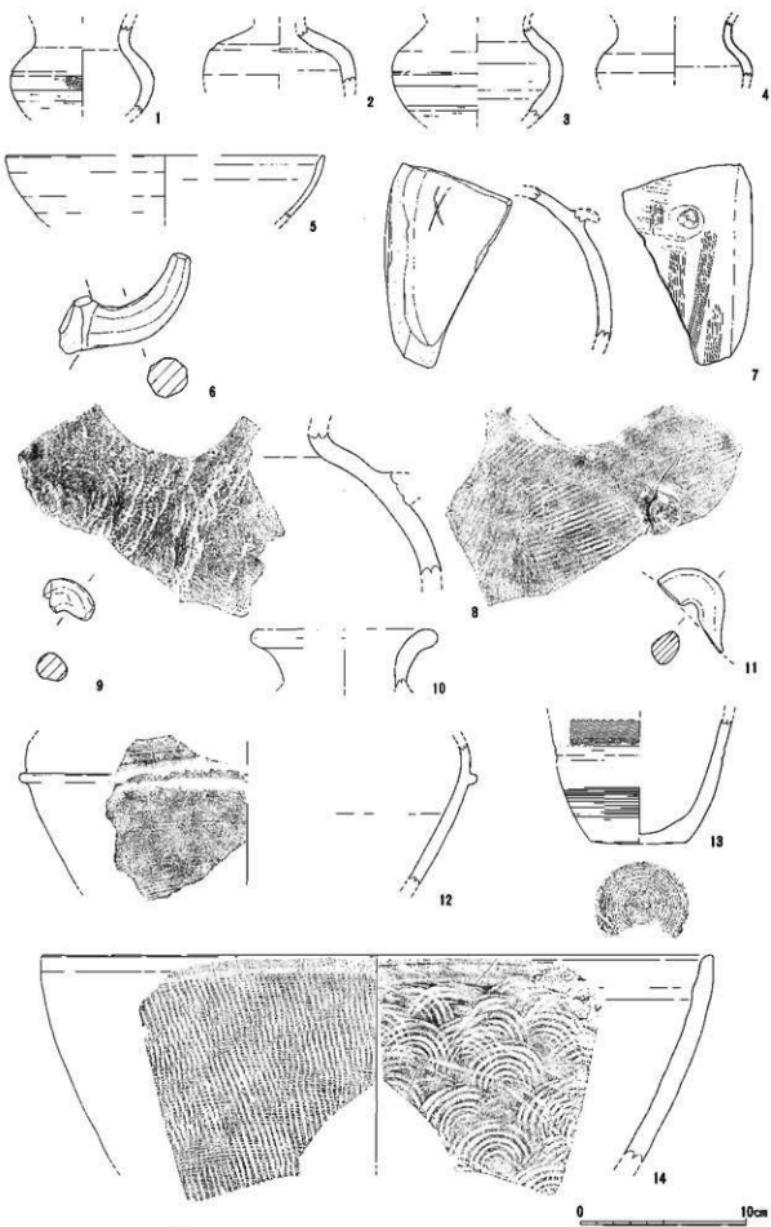
第111・112図には須恵器壺やその他の器種を図示した。第111図1は壺の口縁部で、口径9.9cmを測る。口縁部は直線状にやや外向きに長く立ち上がり、端部は丸く収めている。2は口縁部が複合口縁状を呈する小形の壺で、口径9.2cmを測る。口縁部はやや内傾気味に短く立ち上がっている。内外面は横ナデで仕上げている。3は単純口縁の短頸壺で、口縁部は短く外反し端部に平坦面をもつものである。

4は口径20.2cmを測るやや大型の壺または甕である。口縁部は頸部との境界に沈線を入れること

によって有段口縁を表現している。口縁端部は内側に肥厚し上面に平坦面を形成する。5は4の小型化した壺で、口径11.0cmを測る。口縁部は有段口縁状を呈し、口縁端部は肥厚し上面に平坦面を形成している。6は小形の壺で口径4.2cmを測る。口縁部はゆるく外反し、内外面は横ナデ調整で



第111図 III-3～6区出土遺物実測図 (11) (S = 1/3)



第112図 III-3～6区出土遺物実測図 (12) (S = 1 / 3)

仕上げている。7は長頸壺の頸部で、頸部中位には2条の沈線をめぐらせており、内面には胸部と頸部との接合痕が観察できる。

9は壺の底部で、丸みを帯び偏平な器形のものである。底部外面にはラフな回転ケズリ風の横ナデが認められる。底面には現状で4本の沈線によるヘラ記号が線刻されている。11は9と同様な器形の壺で、底部外面には回転ヘラケズリが施されている。

13~19は高台付壺と考えられる壺底部を図示したが、なかには大型の高台付壺の底部を含んでいるかもしれない。13は底径9.3cmを測る壺高台部である。高台は比較的高いしっかりしたもので直線的に「ハ」字状に開き、端部はややゆるい幅広の段状を呈する。高台部はヨコナデ、壺内面は不整方向ナデで仕上げている。

16は底径11.8cmを測り、高台部と体部との境界が曖昧な資料である。体部外面には回転ヘラケズリが認められる。17は底径9.0cmの壺高台部で、高台部は低く外方へ張り出し端部は平坦面を形成している。

20・21は壺の肩部と考えられる資料で、外面にはカキメ調整を全面に施している。22は壺胴部の突帯部と思われるが定かでない。外面には幅1.0cm、高さ3mmの断面M字状の低い突帯を貼り付け、内面には放射状の当て具痕が観察される。

第112図1~3は甌である。1は最大径8.7cmを測り、全体が丸みを帯びている。胴部には沈線と退化した波状文をめぐらせ、底部には回転ヘラケズリで仕上げている。2はやや角張った形態の甌で、肩部に区画の沈線が認められる。

5は鉢と考えたが、高杯坏部の可能性もある。口径19.2cmを測る。6は牛角状把手で、長さ9.5cmを測る。把手の形態はゆるやかに上方へ長く立ち上がるもので、断面多角形状を呈している。

7は提瓶である。偏平な器形のもので肩部に把手がつき外面にはカキメ調整が認められる。内面には「×」状のヘラ記号が認められる。施文位置からみて、製作途中の段階でつけられたものと考えられる。

9・11は提瓶の把手と考えられるもので、9は退化が進行した短小な鉤手状のものである。11はがっかりとした環状の形態を呈した把手である。10は提瓶の口縁部と考えられ、口縁部は外反し、端部は厚く肥厚し丸みを帯びる。内外面は横ナデで仕上げている。

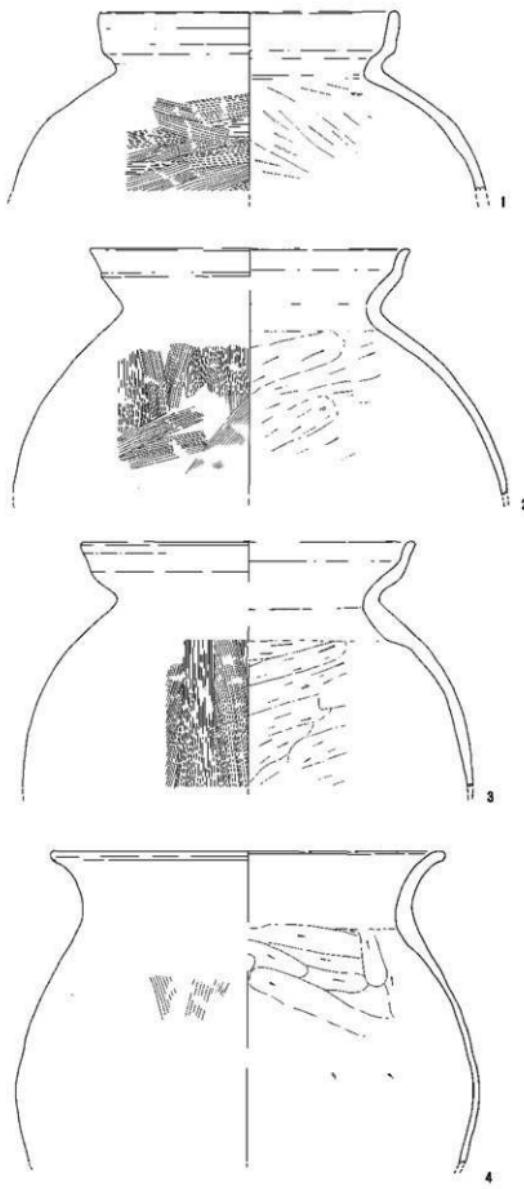
12は平瓶の胴部下半部と考えられる資料で、最大径27.9cmを測る。胴部最大径部に断面「コ」字の突帯をめぐらせ、外面はカキメ調整、内面は横ナデで仕上げている。松江市古首志半廻田遺跡などで近い例がみられる。<sup>(17)</sup>

13はコップ状の形態を呈する鉢で、上からみてやや橢円形状を呈する。胴部中位には2条の幅広の沈線をめぐらせ、その上に振幅の小さい波状文が施されている。底面から胴部下半にかけてはカキメ調整を施し、底部付近は横ナデによりカキメをナデ消している。

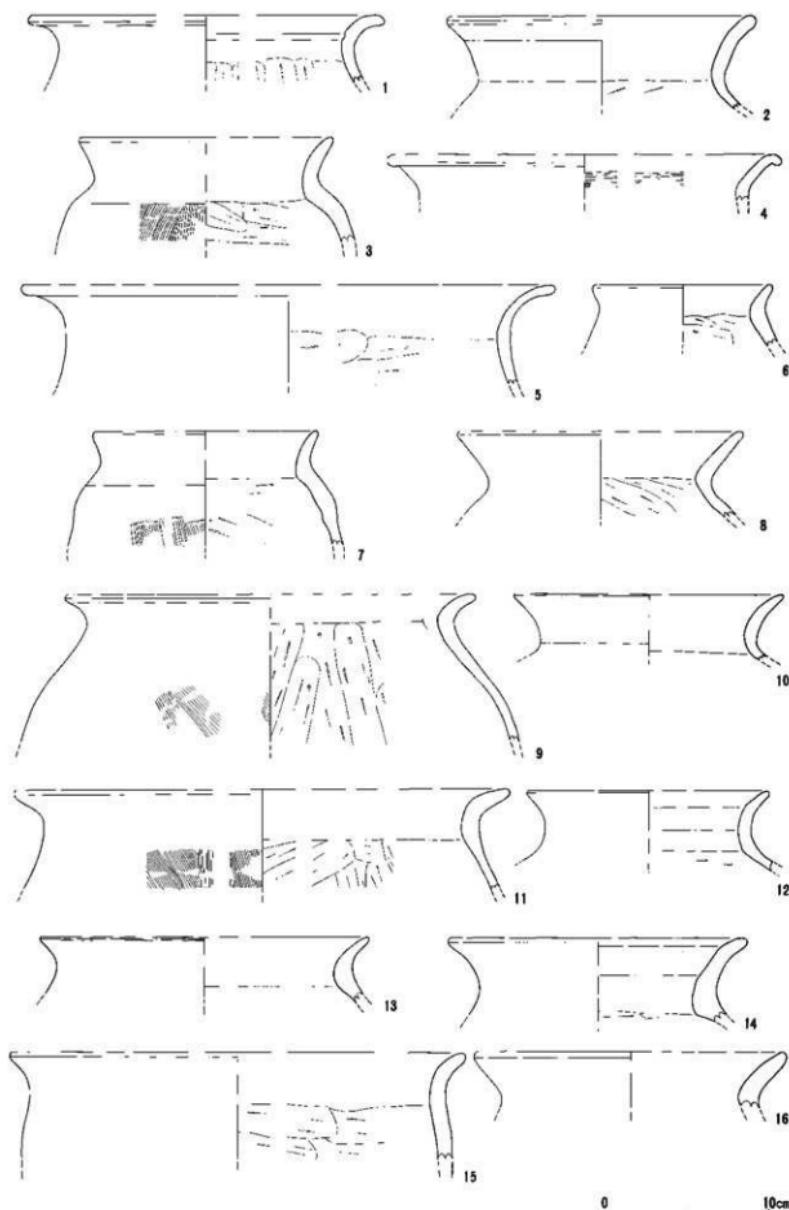
14は大型の鉢と考えられる資料で、口径40.8cmを測る。器形は口縁部が内湾気味に立ち上がる単純なボウル状を呈している。口縁端部には強い横ナデを加え、内面には弱い稜線を形成している。調整は外面が平行タタキが認められ、内面には同心円当て具痕を一部ナデ消している。

#### D. 土師器（第113~124図）

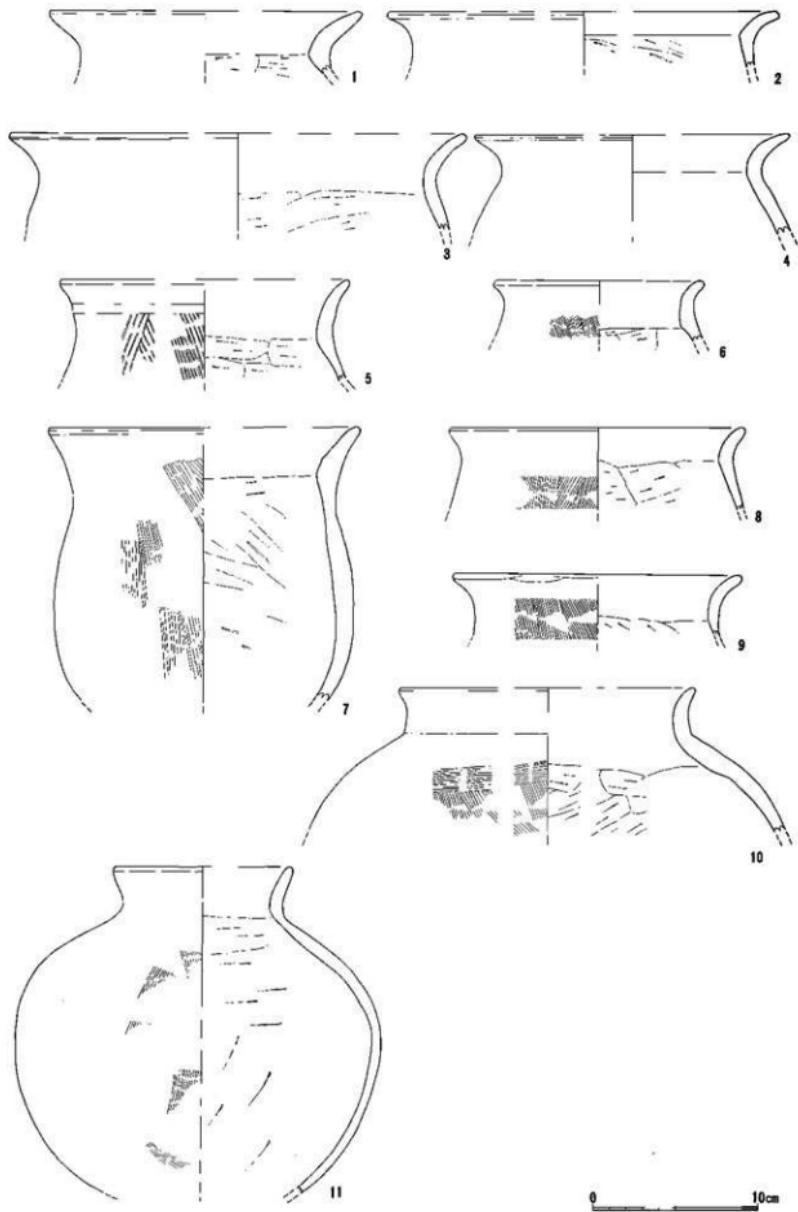
第113図~124図には古墳時代中期以降の土師器を図示した。第113~116図は土師器甌である。



第113図 III-3~6区出土遺物実測図 (13) (S = 1 / 3)



第114図 III-3~6区出土遺物実測図 (14) ( $S = 1/3$ )



第115図 III-3～6区出土遺物実測図 (15) (S = 1/3)

第113図1～3は退化した複合口縁を呈する甕である。1は口径18.0cmを測る甕である。口縁部はほぼ直立気味に短く立ち上がり、器壁は厚手のものである。口縁部段部の稜はまだ比較的しっかりしている。

体部は肩がよく張る器形のもので、外面には断続横ハケ、内面には左方向のヘラケズリが認められる。複合口縁部の形状がなおしっかりしている点や肩部が張り横ハケを有する点から古墳時代中期のものと考えられる。

2は口縁部が短く外反する複合口縁甕で、口径19.4cmを測る。口縁端部はやや外方へ引き出し気味に求めている。

口縁部段部の稜は比較的しっかりしている。胸部外面には縦・斜方向のハケが観察される。

3は1・2より複合口縁の退化がより進行したタイプの甕で、口径20.2cmを測る。口縁部は短く外反し、胸部外面にはタテハケを施す。肩部の張りは1に比べて弱い。

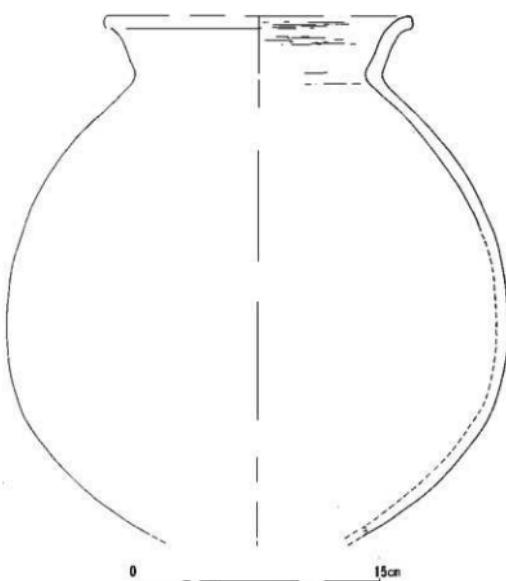
第113図4～第116図は単純口縁の甕である。4は比較的口縁部が長く立ち上がり端部は丸く収めている。肩の張りはやや弱く、外面にタテハケが若干観察される。

第114図1は口縁部が強く外反するタイプの甕である。1はやや不正確だが口径21.6cmを測り、口縁部内面に1条の沈線をめぐらす。頸部以下には縦方向のヘラケズリを施している。2は口縁部が比較的長く立ち上がり、中途で強く外反するタイプの甕で、口径18.8cmを測る。内面頸部以下には右方向のヘラケズリを施す。

3は頸部に強い横ナデを加え、肩部に弱い稜を有するタイプの甕で、口径15.4cmを測る。口縁部の外反度は弱く、端部は丸く収めている。胸部外面にはタテハケを施し、頸部の強いヨコナデによって切られている。4は頸部の屈曲の強い甕で、口縁端部は斜下方向へ屈曲気味に肥厚している。口縁部内面にはヨコハケが認められる。

第114図8～第115図4は通常の「く」字状の単純口縁タイプの甕である。6は小形の甕で口径11.0cmを測る。口縁部は短くわずかにくびれる程度である。7は3と同タイプの甕で、口径13.4cmを測る。

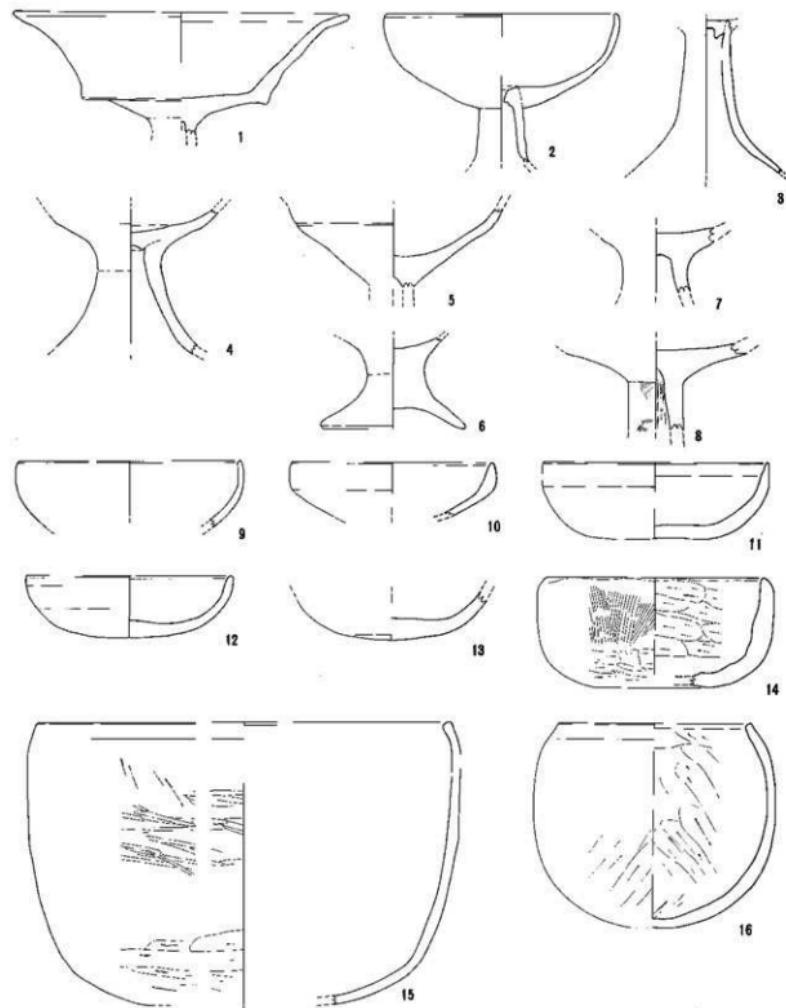
9は口径25.0cmを測る比較的大型の甕で、口縁部は短く強く外反し、肩の張りはやや弱い。胸部外面にはタテハケ、内面には縦方向のヘラケズリが観察される。11は小片であるがかなり大型の甕



第116図 III-3～6区出土遺物実測図(16)(S=1/3)

と考えられるもので、推定口径30.2cmを測る。外面にはタテハケ、内面にはヘラケズリが認められる。14は分厚いつくりの甕で、移動式竈の口縁部である可能性がある。15は肩の張りが弱い甕で、内面に左方向のヘラケズリを施している。

第115図 5～10は口縁部の外反度が弱い資料である。5は口径17.4cmを測り、外面には粗いタテ



第117図 III-3~6区出土遺物実測図(17)(S=1/3)

ハケを施している。7は口径19.0cmを測る甕で、頸部の縮まりは弱くわずかにくびれる程度である。肩の張りはなく、長胴形のプロポーションを呈する。胴部下半には煤痕が顯著に認められる。調整は、胴部外面にはタテハケを施した後一部撫でている痕跡が認められ、内面はヘラケズリを施している。

10は口縁部がほぼ直立する甕で、口径18.0cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がった後、端部付近でやや外反する。肩部はよく張り、外面にはタテハケの後一部ヨコハケを施しており、内面には右方向のヘラケズリが観察される。

11は甕というよりむしろ壺と考えられる資料で、底部の一部を欠くがほぼ完形の資料である。現存規模で口径10.9cm、器高20.0cmを測る。口縁部は外反度が弱く、体部は全般的に丸みを帯びた器形を呈する。

第116図はほぼ完形の土師器甕である。口径18.8cm、器高32.5cmを測る。色調は淡褐色を呈し、口縁部は直線的に外反した後端部は平坦面を形成しており、他の当該期の甕と大きく異なる。最大径は胴部下半部にあり下膨れ状のプロポーションを呈する。調整は風化のため不明だが、口縁部内面にヨコハケが一部観察される。

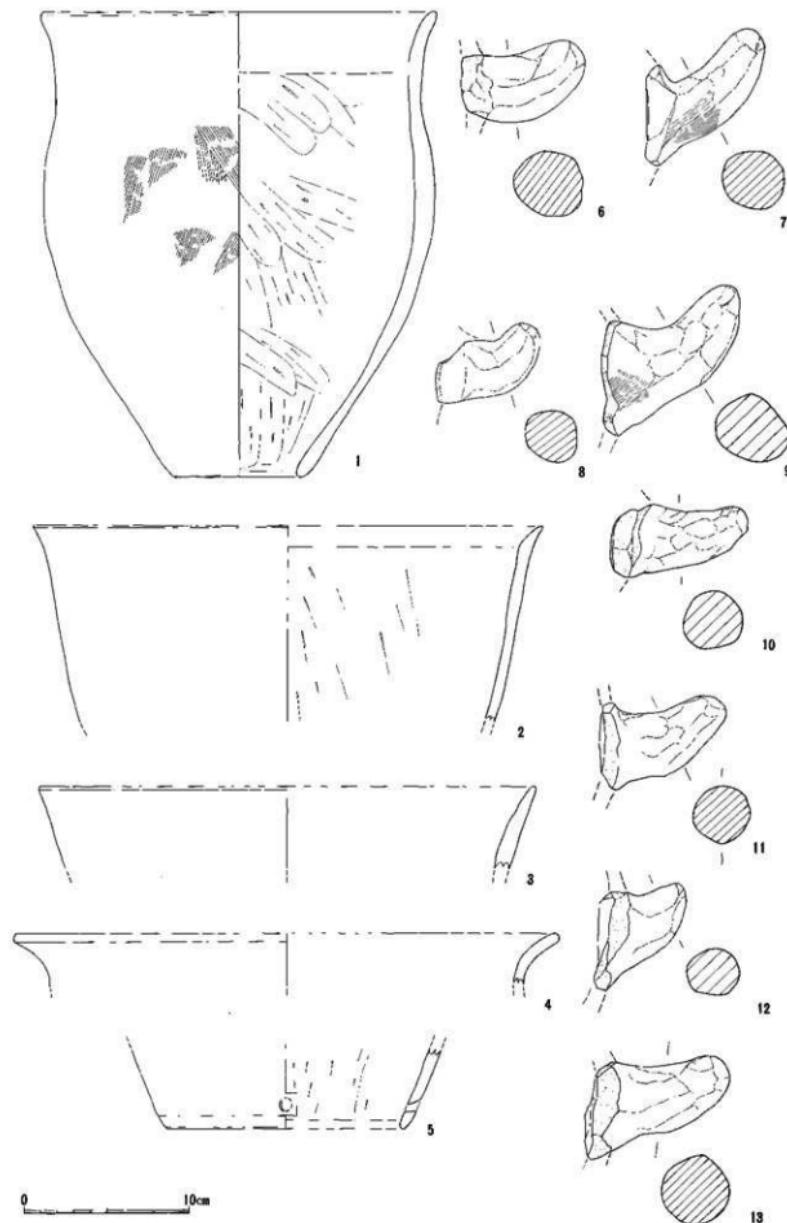
第117図は甕以外の器種を図示した。1～8は高杯である。1は口径20.5cmの高杯坏部で、坏部に稜をもって大きく外反するタイプのものである。色調は淡橙色で胎土が砂粒を殆ど含まない肌理の細かいもので、中期の精製土師器に通有のものである。古墳時代中期前半、松山編年Ⅲ～Ⅳ期のものと思われる。2は椀形の坏部を呈し、口径13.8cmを測る。坏部と脚部とは差しみ式の接合方法による。古墳時代中期後半のものである。

4は色調が赤橙色を呈するもので、坏部と脚部との接合法は円整充填法による。内外面の調整は風化の為不明。色調や接合法などからみて古墳時代後期のものと考えられる。5は高杯坏部片で、坏部下半に沈線を入れ稜を表現している。6は底径8.5cmの高杯で、短脚で中実タイプのものである。色調は赤橙色を呈し、脚部内面は浅く皿状に窪んでいる。形態からみて古墳時代後期のものと思われる。

7・8は坏部と脚部の接合部付近資料である。8は脚柱部外面にタテハケ、内面には絞り痕が観察される。脚部内面上端にはやや怪の大きい刺突痕が認められることから、古墳時代中期のものと考えられる。

9～13は坏である。これらの坏は概して橙色系を呈し、胎土は砂粒を殆ど含まないことから、おそらく水簸によって肌理の細かい粘土をつくり、これを幾つか混ぜ合わせたものと思われる。一部の坏には粘土が混ざり具合が不十分で継状になっているものもある。9は口径13.4cmを測り、単純な椀形を呈する。外面には一部煤痕が認められる。10は口径12.2cmで、器形はやや浅く外面に鈍い稜をもつものである。11は口径13.6cm、器高4.7cmを測り、口縁端部は先細り状に収めている。色調は橙色を呈し、外面に一部赤彩の痕跡が残存している。12は口径12.4cm、器高3.8cmとやや浅い器形のものである。これらの坏は形態や色調・胎土の特徴からみて古墳時代中期後半のものと想定される。

14～16は鉢である。14は分厚いつくりのもので、口径13.2cm、器高6.7cmを測る。全体的に器壁の凹凸が著しく雑なつくりである。調整は外面が上半部がタテハケ、下半部が横方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラケズリが認められる。



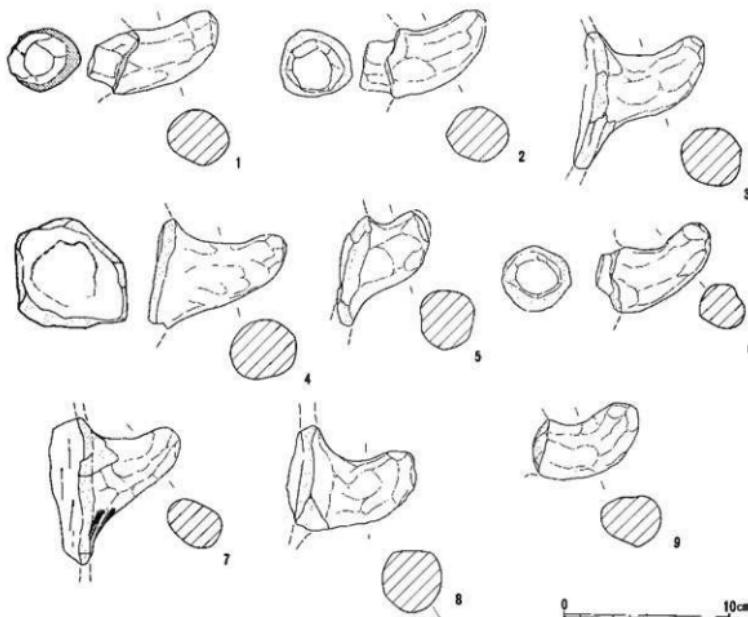
第118図 III-3～6区出土遺物実測図 (18) (S = 1 / 3)

15は大型の鉢で、小片のため正確な数値は不明だが、推定口径25.2cm前後を測る。外面はケズリ風の粗いナデの後横方向のヘラミガキを施し、底部付近には横方向のヘラケズリを施している。16はやや小形の鉢で、口径11.8cm、器高12.5cmを測る。器形はボウル状を呈し、口縁部は内傾し端部に平坦面をもつ。内外面はヘラケズリのうち、外面の一部はナデを施している状況が観察される。14～16のように調整にケズリを多用する鉢は隣接するカンボウ遺跡S I 04で大谷編年4～5期の須恵器と共に伴していることから、これらの鉢の年代については7世紀初頭前後のものと考えておきたい。

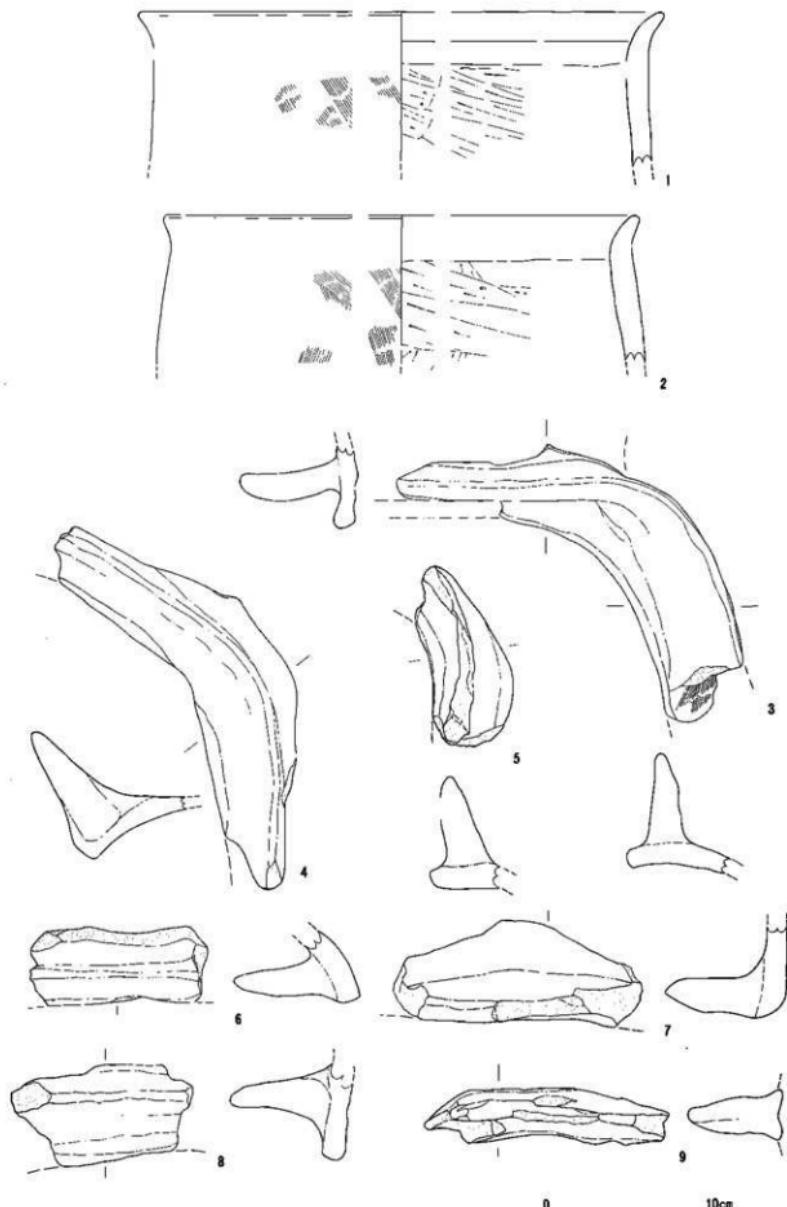
第118・119図には瓶を図示した。第118図1の瓶は約1/4残存する資料で、把手部を欠くが口径24.0cm、器高28.5cmを測るものである。頸部はわずかにくびれ、口縁部はゆるやかに外反し端部は丸く収めている。底部には現存する資料では貫通孔は認められない。調整は外面がタテハケ、内面に縱方向のヘラケズリが認められる。

2～4は瓶の口縁部で、2は口縁部がわずかに外反し、内面に横ナデによる幅広の平坦面をもつものである。3は口径30.2cmを測り、口縁部は外反せず直線的にのびる。4は口径33.2cmを測り、口縁部は強く外反する。やや薄手のつくりで、大型の甕である可能性もある。5は瓶底部の資料で、底径14.4cmを測る。底部付近に径8mm前後の貫通孔が認められる。

第118図6～13、第119図は瓶把手資料である。第118図7は直線状に斜め上方にのびる把手で、胴部との接合部付近にハケメが観察される。9はやや大型の把手で全長10.0cmを測る。7と同様胴部との接合部付近にハケメが認められるほかはユビナデにより成形している。把手断面形は不整な



第119図 III-3～6区出土遺物実測図 (19) (S = 1/3)



第120図 III-3~6区出土遺物実測図(20) (S = 1 / 3)

梢円形状を呈し、長径4.5cmを測る。

12は小形の櫛把手で、全長6.1cmを測る。把手は短く斜め上方に突出し先端部は嘴状の形状を呈している。外面は粗いユビナデによって仕上げている。

第119図1は全長8.4cmを測る把手で、わずかに内湾気味に立ち上がる形態のものである。把手の基軸部と穿孔した胴部との接合部で剥離しており、製作技法がよくわかる資料である。2も同様に胴部との接合部から剥離した資料である。把手基軸部を胴部に差し込んだ後、接合部外面に粘土帯を巻き付けた痕跡が観察される。

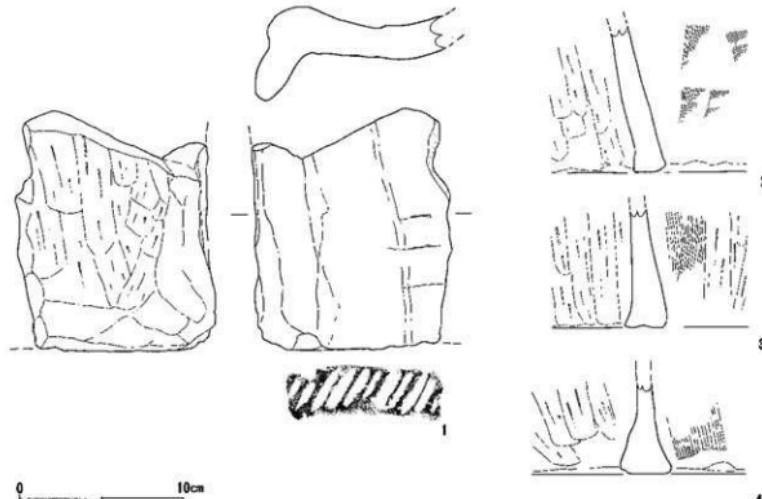
4は基軸部と胴部との接合が胴部内面から窺える資料で、胴部内面には把手基軸部を差し込んだ際の径4cm前後の剥離痕が認められる。7は第118図12と同様、短小なタイプの把手で、胴部との接合後ハケ状工具で接合部を撫でつけた痕跡が観察される。

第120・121図は移動式竈を図示した。1・2は移動式竈の口縁部資料と考えられるもので、甕などに比べて非常に分厚いつくりのものである。2は推定口径29.0cmを測り、器壁は15mm近くあり甕や櫛に比べてかなり厚い。口縁部はわずかに外反し端部は丸く取っている。調整は外面にはタテハケ・ナナメハケ、内面には左方向のヘラケズリが認められる。

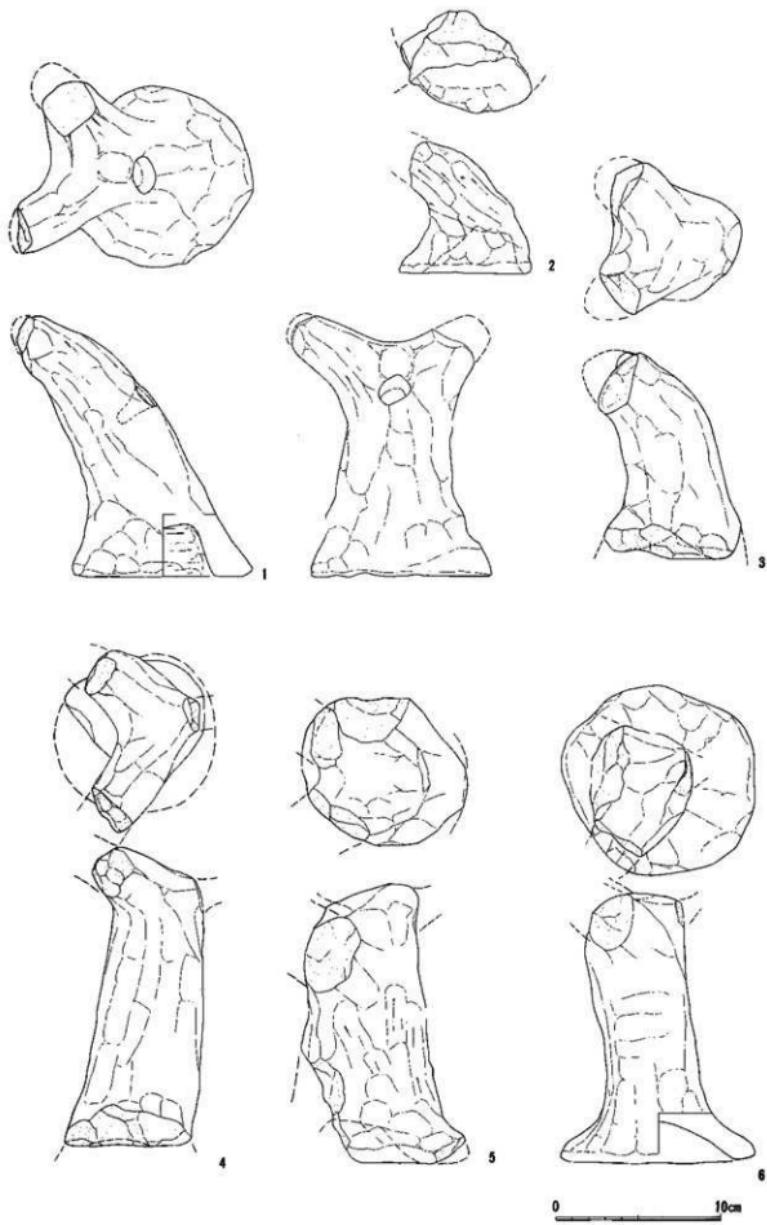
3は移動式竈の焚口上部から正面右側にかけての軒底部の資料である。軒庇の幅は6.0cmを測り、本体との接合前のハケメが右側側部の剥離部分において観察される。色調は淡黄橙色を呈し、胎土はやや大型の砂粒を比較的多く含んでいる。

4はやはり焚口正面右側側部の軒底部で、庇はやや厚いつくりのものである。本体と庇を接合した後、接合部両側に粘土帯を充填して補強したつくりが断面から観察される。

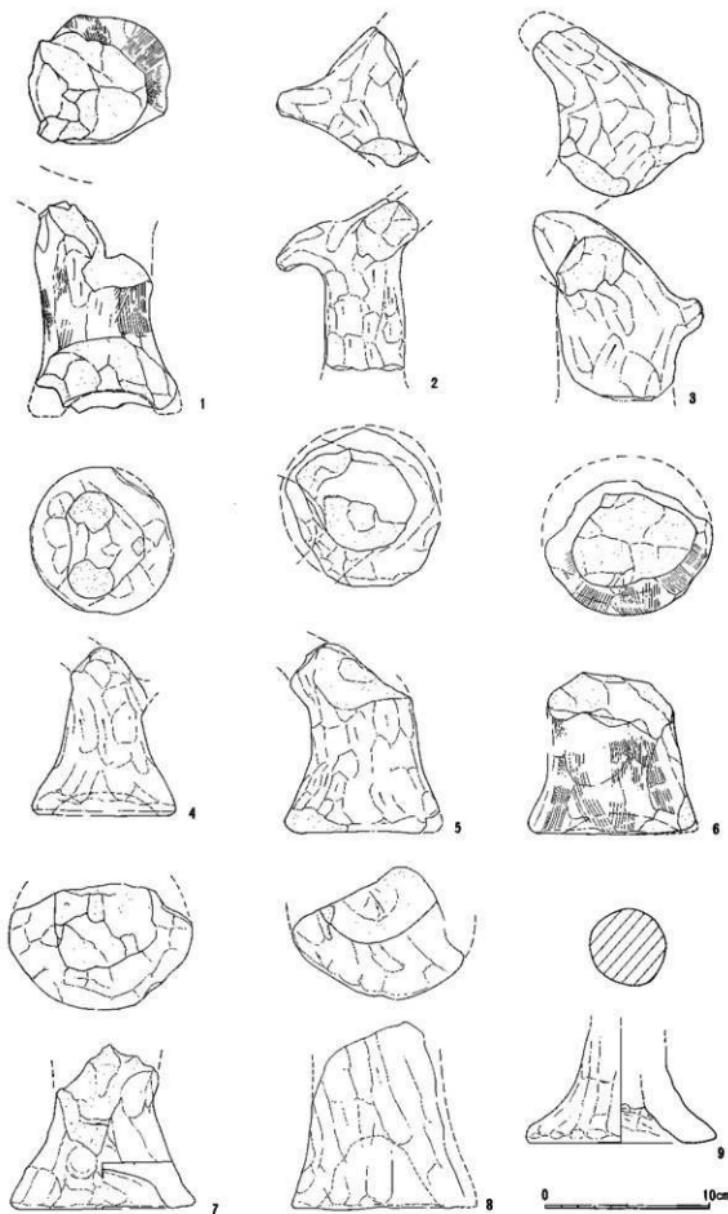
6～9は移動式竈焚口上部の軒庇資料と考えられるものである。9は本体との接合部から剥離している資料である。



第121図 III-3～6区出土遺物実測図(21) (S=1/3)



第122図 III-3～6区出土遺物実測図(22) (S=1/3)



第123図 III-3~6区出土遺物実測図(23) (S=1/3)

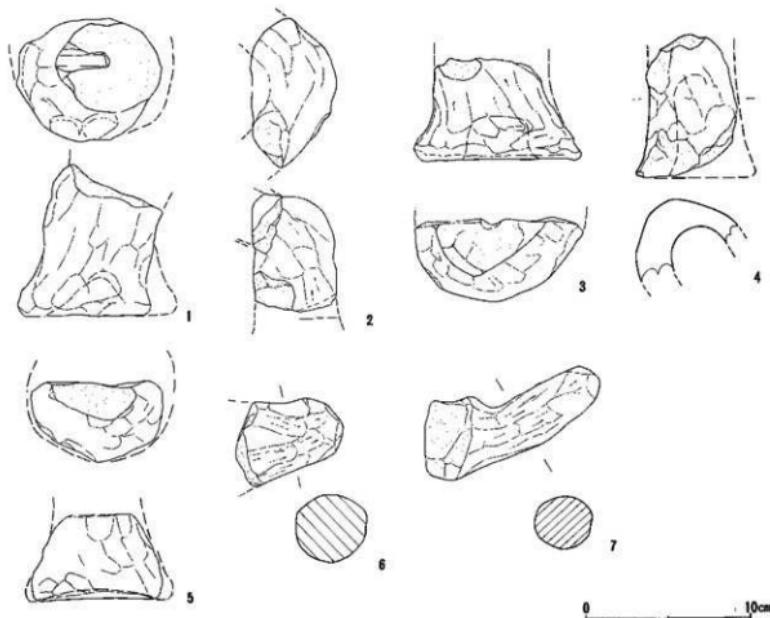
第121図は移動式竈の脚部資料である。1は内面ヘラケズリの方向から正面からみて焚口右側の軒庇部の資料と考えられるものである。軒庇は幅3.5cm、厚さ1.9cmを測り、本体との接合角度は鈍角をなす。本体には粘土紐輪積みの接合痕が顕著に認めら、底面には幅広の連続斜線文状の圧痕が認められる。

2～4の移動式竈の脚部資料は、いずれも底部が外面に肥厚し、外面はタテハケ及び縦方向のヘラケズリ、内面は縦方向のヘラケズリが顕著に観察される。

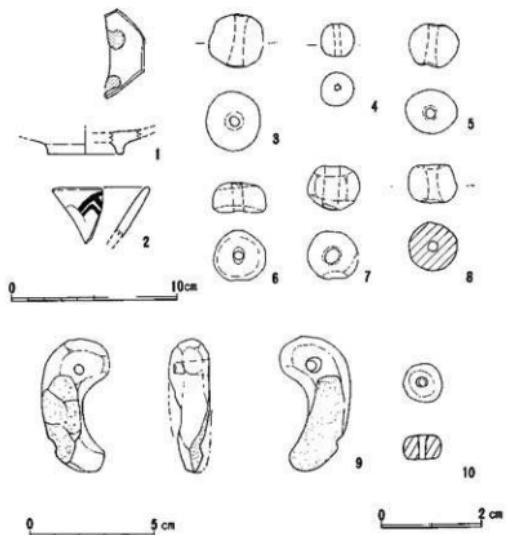
第122～124図は土製支脚を図示した。第122図1はほぼ完形の土製支脚で、二又突起タイプの資料である。形態はかなり前傾姿勢を呈するもので、外面は粗い縦方向のナデ仕上げ、脚端部付近には指頭圧痕が顕著に観察される。背面には正面に向かって斜め下方向へ径2cm弱の孔が約2.5cmの深さまで穿たれている。底部は顕著な上げ底状を呈し、底部内面には横方向のヘラケズリが観察される。

2・3はいずれも二又突起タイプのものであると思われる。2はやや小形のもので、かなり前傾するものである。外面は浅いヘラケズリによって仕上げている。3は突起部と脚部を欠損しており、底部は浅い上げ底状を呈している。背面には孔は認められない。

4は三又突起タイプの土製支脚で、器高がかなり高いものである。底部は浅く窪んでおり、外面は粗い縦方向のユビナデ仕上げている。5・6も三又突起タイプのものであるが、いずれも突起部を欠損している。6は4に比較的近い器高の高いタイプのもので、円柱状の体部から脚端部は大



第124図 III-3～6区出土遺物実測図 (24) (S = 1/3)



第125図 III-3~6区出土遺物実測図(25)  
(1~8…S=1/3 9…S=1/2 10…S=1/1)

きく「ハ」字状に開く器形のものである。第123図1は突起部、脚部を大きく欠損しているが、外面調整に縦方向のヘラケズリを施した後、一部にタテハケを施している資料である。

第123図2~4はいずれも三又突起タイプの土製支脚である。2は背面側に鉤手状の小突起が下方に向けて付くタイプのものである。3は背面側の小突起が2とは逆に上向きに付くタイプの資料である。4は比較的小形の土製支脚で、底径9.0cmを測る。突起部から裾広がりに脚端部に至る形態のもので、底部は上げ底状なす。

第123図5~9、第124図1、3~5は脚部の資料である。第123図5は太くて器高の低い形態の土製支脚である。底部は中実ではほぼ平底状を呈する。6も5と同様やや大型の土製支脚で、外面には粗い縦方向のナデのうちハケメを施している。8は底部にかなり深い抉り込みを有するものである。9は脚部の接合痕が観察できる資料で、筒状の脚部の内面に後から粘土塊を充填したものと考えられる。

第124図1は上部の破損部に、背面側からの穿孔が認められる資料である。2は上半部の資料で二又突起タイプのものである。背面側に穿孔が認められる。4は脚部内面が中空状の資料である。6・7は土製支脚の把手と考えられるもので、外面はヘラケズリ風の粗いナデによって仕上げているのが観察できる。

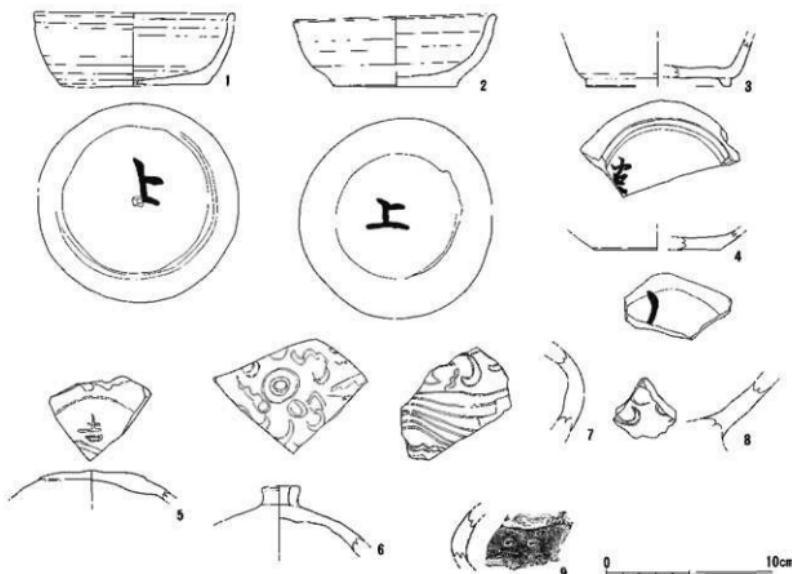
#### E. 陶磁器（第125図）

第125図1・2には陶磁器類を図示した。1は李朝白磁の可能性のある白磁碗の高台部で底径4.6cmを測る。高台まで灰白色の釉薬が及んでおり、見込み及び高台底面には胎土目積みの痕跡が認められる。

2は青磁碗の口縁部資料で、口縁部外面には蓮弁文が認められる。

#### F. 土錐（第125図）

第125図3~8は土錐である。このほか前述のとおり近世水田床土層から大量の管状土錐が出土しているが、時期的に新しいものと判断し図示していない。



第126図 石田遺跡出土墨書、ヘラ描須恵器実測図 ( $S = 1/3$ )

3～5は球形の土錐である。3・5はほぼ同タイプのもので、重量それぞれ32.0gと18.6g前後を測る。4は小形の土錐で径2.0cm、重量8.4gを測る。

6～8は丸型土錐で全長より全幅が広いタイプのものである。重量は16.9～20.8gを測る。

#### G. 玉類（第125図）

第125図9は碧玉製勾玉で、III-3区の礫混合土中より出土したものである。長さ2.7cm、幅1.4cm、厚さ0.8cmを測り、体部の両面はかなり剥離が及んでいる。石材は濃緑色の比較的質の良い碧玉を用いている。穿孔は片面穿孔によるもので、径2～3mmを測る。

10はガラス製小玉で同じくIII-3区の礫混合土中より出土したものである。径8mm、厚さ5mm、孔径2mmを測る。色調はコバルトブルーを呈する。

#### H. 墨書土器・ヘラ書須恵器（第126図）

第126図には文字資料・絵画資料の遺物群を図示した。1は墨書土器で、須恵器坏のほぼ完形品である。口径12.2cm、器高4.5cmを測り、口縁部はわずかに外方に屈曲している。底部には回転糸切り痕が認められ、ややかすれているが、ほぼ中央部に筆で「上」の字が書かれているのが読み取れる。また文字を書いた後に底面ほぼ中央に焼成後穿孔が行われており、何らかの祭祀行為に伴うものであると考えられる。須恵器そのものは高広NA期のものである。

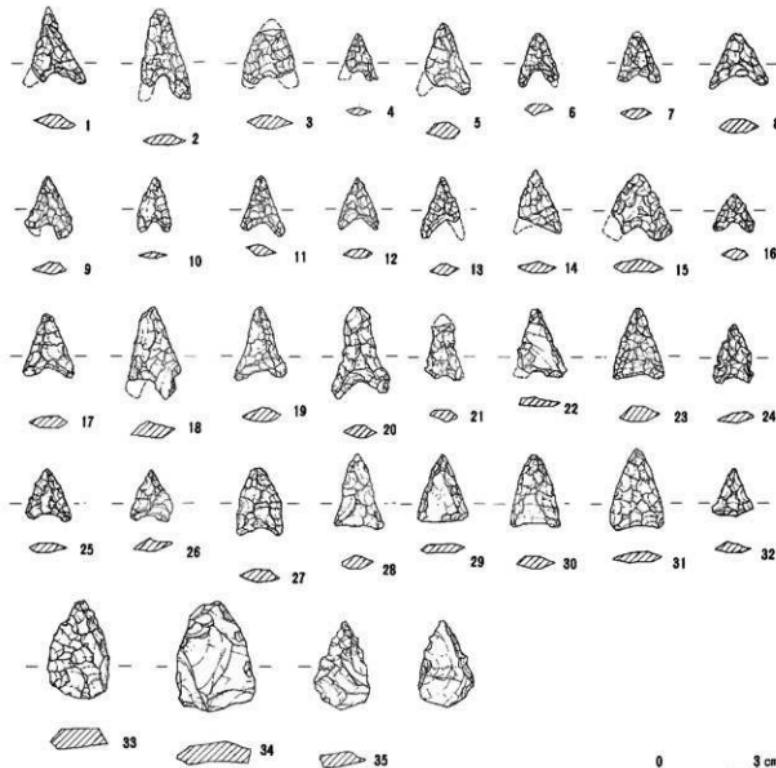
2もほぼ同じタイプの須恵器坏で、口径12.3cm、器高4.3cmの完形品である。底面には1と同じく「上」の字が筆で書かれている。ただ1と異なり底面中央の焼成後穿孔は行われていない。時期

は1と同様高広NA期のものと考えられ、8世紀中頃を中心とする時期のものであろう。

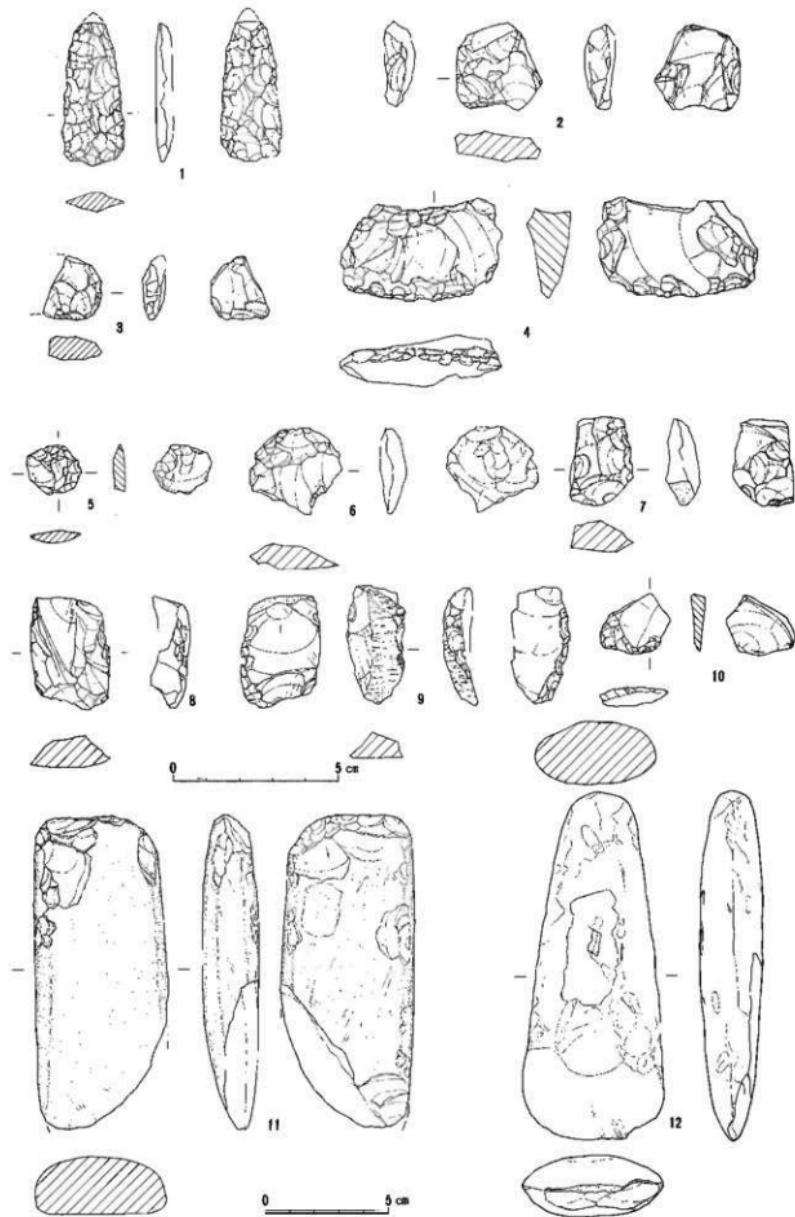
3は高台付杯で、1・2と同じくIII-3区から出土した墨書き土器である。文字は底面の高台部付近に現状で2文字が確認でき、そのうちの1字は「古」と判読できる。文字は模倣などの稚拙なものではなく比較的しっかりとした筆致のものである。須恵器は底部周辺から体部が立ち上がっていいる点や回転糸切り痕からみて高広NA～B期のものと判断される。

4も壺底面に墨により何かが描かれているものだが、小片のため判読できない。底面には回転糸切り痕が認められ、1・2と同様なタイプの杯であると思われる。

5は1～4とはほぼ同じ地点から出土したヘラ書きのある須恵器で、壺蓋として復元したが定かでない。壺蓋は天井部へラ切り未調整のものである。天井部には「吉」の字がヘラ状工具によって線刻されており、墨書き土器と比較してやや稚拙な印象を受ける。「吉」の書き順は上の「土」の部分は最初に上の「一」、次に「丨」が書かれている。下の「一」と「丨」との前後関係は明らかでない。下の「口」部分は「一」と「丨」との部分に分けて書かれているが、上の部分と同様前後関係はない。



第127図 III区出土石器実測図(1)(S=2/3)



第128図 III区出土石器実測図(2) (1~10 S=2/3 11,12 S=1/2)

明らかでない。

5～9はヘラ及びスタンプ状のものにより何らかのモチーフが描かれている須恵器である。灰白色を呈し、胎土が密でない印象を受けるもので、灰釉陶器に近い須恵器である。6は蓋として復元したが、別の器種かもしれない。図正面左はやや上に反り上がり左右非対称である。天井には円筒状のつまみが付いている。外面はナデで仕上げているが、特に内面のナデは蓋としては粗い印象を受ける。内面中心部には自然釉状の付着がみられ、窯内では内面を上にして焼かれていたものと思われる。

天井部には、つまみ部を中心として意味不明のモチーフが同心円状に配されている。モチーフは同心円状のものと2本の弧状の線によって構成されるものがある。何らかのモデルから退化したものと想定されるが、元来のモチーフが何であったかは現状では明確にできない。

7は色調・胎土ともに6と同じものである。壺の胴部と想定して図化したが、胴部のカーブが極めてゆるやかであり別の器種の可能性もある。外面の調整はナデを施すが、内面の横ナデはかなり粗いものである。胴部外面には、一番下に2条のピッチの短い稚拙なヘラ描波状文を描き、その上に7条の沈線による、ゆるやかな波状文が配され、一番上には2本1組の沈線による三日月状モチーフと蛇行状モチーフが配されている。

8は脚付壺の底部付近と考えたが定かでない。外面に2本1組の沈線による三日月状モチーフが描かれている。9は器種は不明だが頸部屈曲部付近の資料と考えられ、外面に竹管状の工具によるスタンプ状文様が横方向に配されている。胎土・色調は6～8と共通するものである。

## I. 石器（第127～131図）

第127～131図にⅢ区出土の石器を図示した。これらの石器の大半は縄文時代のものと考えられるが、層位的には一部のものを除いてはまとまりは認められない。

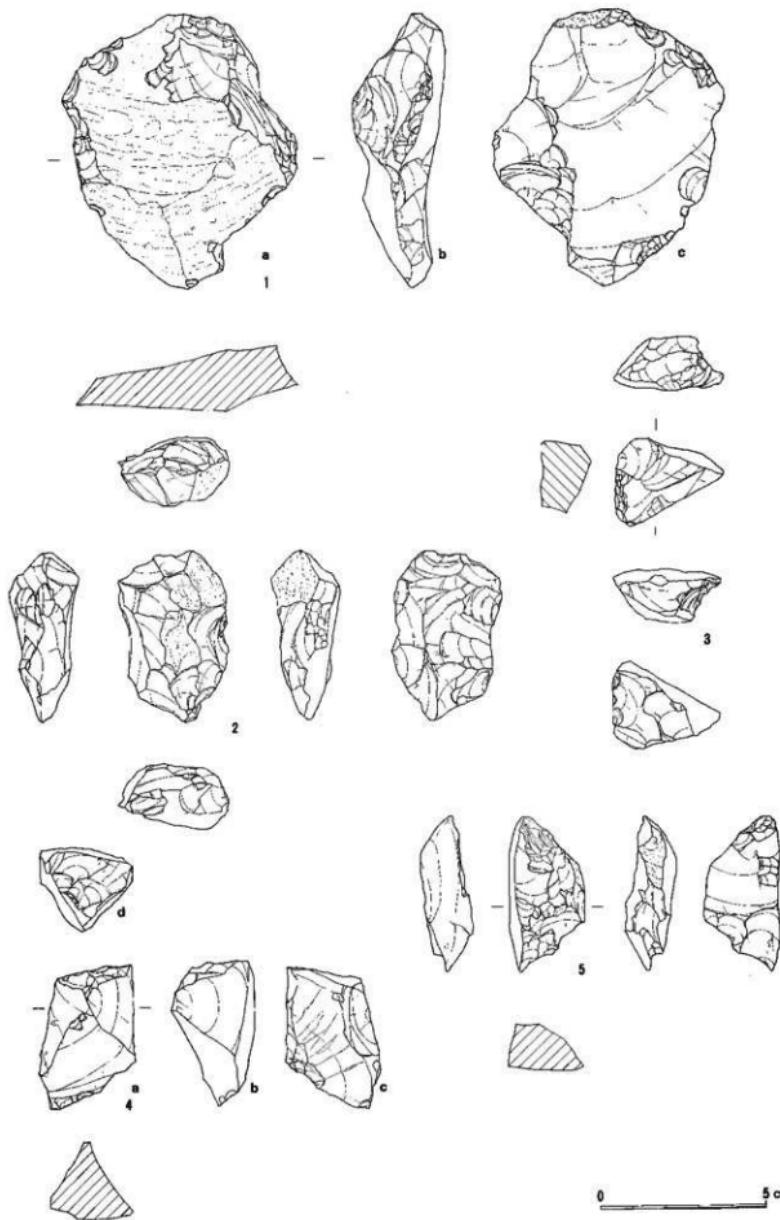
第127図は石鎌である。黒曜石製のものが24点、安山岩製のものが11点出土している。1～27は凹基無茎式のものを掲載した。1～20は基部の抉りが比較的深いタイプである。2は安山岩製の石鎌で、基部の抉りが比較的深いタイプのものである。全長2.63cm、幅1.5cm、重量0.89gを測る。

4はかなり小形の石鎌で、重量0.24gを測る。石材はやや質の悪い黒曜石を使用している。8は幅の広い正三角形状の形態を呈する石鎌で、水和層の発達した黒曜石を石材として用いている。10は長さ1.7cm、重量0.27gを測る小形の黒曜石製の石鎌で、素材の主要剥離面が残存しているものである。

14は片側逆刺を欠損しているが、長さ1.95cm、重量0.56gの黒曜石製の石鎌である。Ⅲ-5・6区間の断ち割りトレンチ中から出土したもので、伴出土器から縁帶文土器段階のものと考えられる。18は長さ2.8cm、重量1.68gを測るやや大型の安山岩製石鎌で、片側逆刺部に素材面を残している。20は刃部両側が内湾し、先端部がやや丸みを帯びる形態の安山岩製石鎌である。

21～27は基部の抉りが比較的浅い凹基無茎式石鎌である。22は全長2.08cm、重量0.66gを測り、片面に素材面を大きく残しているものである。

28～31は平基無茎式石鎌である。これらはすべて安山岩製のもので、両面に素材面を大きく残すものが多い。これはサヌカイトという石材の特性を生かした特定の剥離技術に起因するものと考えられる。31は基部が極めて浅く抉れており、凹基式に分類した方がよいかもしれない。全長2.48cm、



第129図 III区出土石器実測図 (3) ( $S = 2/3$ )

重量1.17 g を測る。

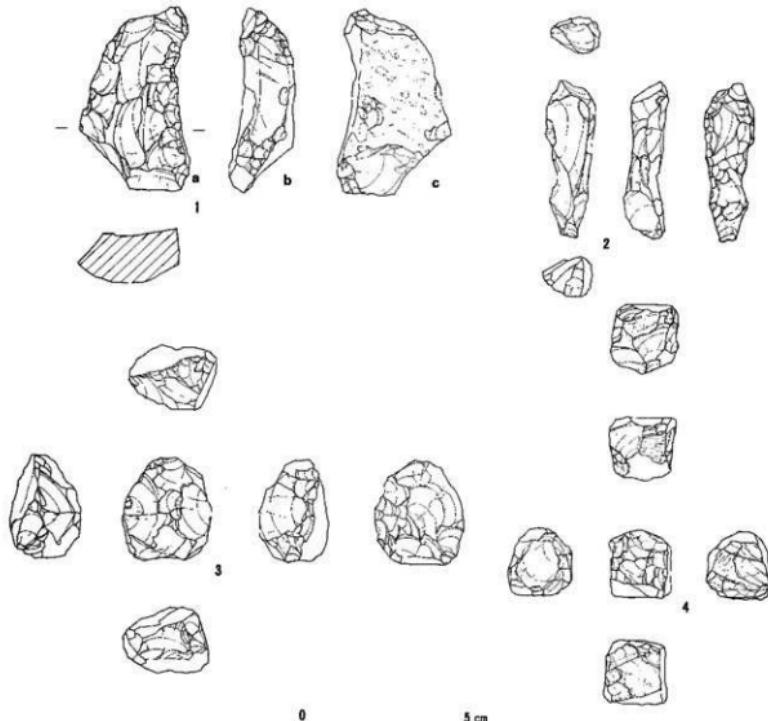
32・33・35は円基無茎式の石鎌である。32は小形のもので重量0.41 g を測る。33は水和層の発達した黒曜石製で、周辺部に急角度の調整を施す。35は素材面を大きく残し、片側刃部に急角度の調整を施して仕上げている。34は黒曜石製石鎌の未成品と考えられるもので、重量2.02 g を測る。

第128図1は安山岩製の有茎尖頭器で、先端部を欠損しているが、現状で長さ4.36cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重量5.03 g を測るものである。両面加工のもので、押圧剥離は比較的丁寧で中央部付近まで達している。基部の抉りは明瞭でなく、わずかに窪んでいる程度である。

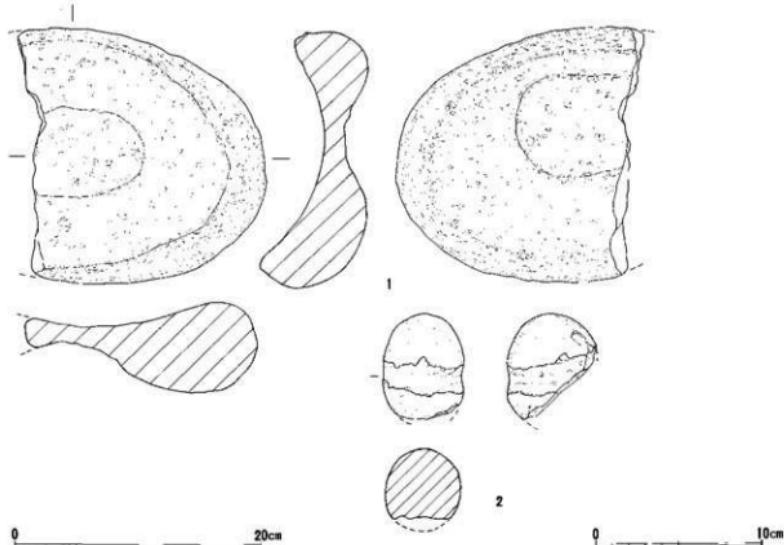
2は黒曜石製の楔形石器で、長さ2.6cm、幅2.6cm、厚さ0.93cmを測る。下端につぶれ痕、正面右側面に裁断面が認められる。

3・4はスクレーパーである。3はスクレーパーの破損品と考えられる資料で、下端から正面円右側縁辺部にかけて丁寧な二次加工が認められる。4は縦長剥片を用いた黒曜石製スクレーパーで長さ3.11cm、幅4.39cm、厚さ1.57cm、重量19.4 g を測る。上下辺に毛として主要剥離面側から丁寧な二次加工を施している。

5～10は二次加工のある剥片で、すべて黒曜石製である。8は縦長剥片を素材としたもので、片



第130図 III区出土石器実測図(4)(S=2/3)



第131図 Ⅲ区出土石器実測図(5) (1…S=1/4 2…1/3)

側側辺に丁寧な二次加工を加えている。9も同じく縦長剥片を素材としたもので、一見ナイフ型石器状を呈するものである。自然面を残し、片側側辺に主要剥離面側からプランティング状の急角度の調整を施している。10はⅢ-3・5区間東西断ち割りトレンチ中から出土したもので、縄文後期のものと想定される。

11・12は磨製石斧である。11は刃部を欠損しているが、現状で長さ12.8cm、幅5.5cm、厚さ2.33cmを測る。両側辺はほぼ平行しており、両側面側には敲打痕が観察される。上端には剥離痕が認められることから、転用されたものと思われる刃部の破損もその際のものと想定される。12は定角式の石斧で、長さ14.4cm、幅5.67cm、厚さ2.5cm、重量282gを測る。刃部は両刃でやや丸整状を呈し、使用痕が刃部主軸と斜行する形で認められる。

第129図、第130図1・2は石核と考えられるもので、すべて黒曜石製のものである。第129図1は石核もしくはスクレーバーの未完成品と考えられるもので、b面にa・c面側から小形の剥片素材を剥ぎ取った形跡が認められる。またc面右上側辺にはa面側から二次加工を施している。

2は長さ5.25cm、幅3.35cm、厚さ2.03cmを測る石核で、ローリングの為磨滅が著しい。打面、作業面は固定されておらず、竹広文明氏の剥片剥離技術<sup>(16)</sup>IIに該当する資料と考えられる。

3も同様に打面と作業面との関係は不安定で、1と同様に剥片剥離技術IIに相当するものである。4はやや大型の剥片を素材とした石核で、主要剥離面を大きく残す。d面では比較的小形の剥片素材を生産している。5はⅢ-5・6区間の断ち割りトレンチ中から出土したもので、縄文後期の資料である。

第130図1は長さ5.63cm、幅3.34cm、厚さ1.98cm、重量31.75gの黒曜石製石核である。c面に自

然面を大きく残し、比較的小形の剥片を生産したものと思われる。2はかなり剥片の生産が進行した段階の残核で、裏面に打面調整が認められる。

3は碧玉製玉未成品で、平面橢円形状を呈する。碧玉はあまり良質のものではなく、何の未成品であるかは現状では明らかではない。

4は水晶製玉未成品で、長さ1.92cm、幅2.09cm、厚さ1.93cmのサイコロ状のもので、一部擦痕が観察されることから研磨段階の資料と考えられる。丸玉未成品と想定されるが、詳細は不明である。

第131図1は石皿である。長さ20.8cm、幅20.0cm、厚さ8.6cmを測る。石材は多孔質のもので、使用による著しい窪みが両面に認められる。

2は有溝石鍤で、一部を欠損している。長さ6.5cm、幅4.9cm、厚さ5.5cm、重量192gを測り、中央部に縄掛けのための溝が認められる。

## 註

- (1) 岩橋孝典他 1994『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 烏根県教育委員会
- (2) 岩橋孝典編 1994『石田遺跡』一般県道米子伯太線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 烏根県教育委員会
- (3) 松山智弘 1991『出雲における古墳時代前半器の土器の様相—大東式の再検討—』『島根考古学会誌』8
- (4) S I 02の小型墓葬については桜井市埋蔵文化財調査センターの橋本輝彦氏にご教示いただいた。
- (5) 赤沢秀則編 1992『南瀬武草田遺跡』県営圃場整備事業発掘調査報告書 5
- (6) 丹羽野裕・守岡利栄・梅木茂雄他 1998『塙津山遺跡群』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地域X9 烏根県教育委員会
- (7) 大谷晃二 1994『出雲地域の須恵器の羅年と地域色』『島根考古学会誌』11  
以下、当該期の須恵器の羅年及び用語についてはこの文献による。
- (8) 大庭俊次他 1995『才ノ神遺跡・普請跡遺跡・島田黒谷I遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 9 烏根県教育委員会
- (9) 烏根県教育委員会 1983『才ノ神遺跡』『国道9号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- (10) 鎌木義昌 1969『纏文中期文化』『考古学講座』3 雄山閣
- (11) 間壁忠彦他 1971『帆木貝塚』倉敷考古館研究集録7
- (12) 足立克己・丹羽野裕編 1984『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会
- (13) 岩橋孝典「第4章 徳見津遺跡の調査」「徳見津遺跡・目郷遺跡・陽徳寺遺跡」一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 烏根県教育委員会
- (14) 安来市教育委員会 1991『安来市内遺跡分布調査報告書』なお、当古墳群から表面採集された須恵器の概要については、島根県埋蔵文化財調査センター椿寅治氏にご教示いただいた。
- (15) 鈴田剛志編 1995『平ラII遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10 烏根県教育委員会
- (16) 鉄滓については島根県埋蔵文化財調査センター 角田篠幸氏にご教示頂いた。
- (17) 足立克己・丹羽野裕編 1989『古曾志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会
- (18) 烏根県教育委員会 1991『主要地方道浜田八重丘部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一堀田上・今佐屋山・米屋山遺跡の調査』

## 5. まとめ

石田遺跡では縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を多数検出することができた。以下、各時代ごとの様相を概観し、まとめとしたい。

### 縄文時代

**住居址状遺構について** 縄文時代の遺構・遺物としてはI-S区で検出した縄文時代中期末～後期初頭の住居址であるS I 03やIII区で出土した縄文土器があげられる。

I-S区 S I 03は中央に炉と想定される土坑を配し、その周間に長径5.0m、短径3.7mの範囲で比較的浅いビットが同心円状にめぐらる構造のものである。竪穴住居であったか平地式のものであったかは調査では判断できなかった。

県内の縄文時代の住居址としては、瑞穂町堀田上遺跡（縄文早期）<sup>(1)</sup>、郷路橋遺跡（縄文早期）<sup>(2)</sup>、湖陵町御領田遺跡（縄文後期）<sup>(3)</sup>、頼原町板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡等の事例があげられる。このうち堀田上・郷路橋遺跡の住居址は簡易な円形住居址であり、御領田遺跡例は方形住居址で頼原町の2遺跡の例は平地式住居例と報告されている。鳥取県の事例をみると、後期段階のものでは比較的明確なものは方形プランのものが多いようであり、御領田遺跡例と合致するものである。<sup>(5)</sup>ただ後期～晚期でも岸本町久古第3遺跡・名和町南川遺跡などで円形プランの住居址の可能性が高いものが報告されている。

このように当住居址の事例もこうした円形プラン住居址の類例に属するものと想定されるがなお類例が乏しく、今後の資料の増加を待って改めて検討を加えてみたい。

**縄文時代の遺物について** 縄文時代の遺物としては先のS I 03及びその周辺の遺物とIII区で若干出土したのみである。III区の砂礫層出土の縄文土器は点数は少ないが概ね縦帶文期のものと思われる。安来東部の調査では、谷部の砂礫層中からこの時期のものが出土する例が目立つ。例としては島田町島田黒谷Ⅰ遺跡、明子谷遺跡、門生黒谷Ⅱ遺跡などがあげられる。このように、当地域ではこの前後の時期から集落が小丘陵間の谷部へ進出していく傾向が窺え、如何なる要因によるもののか今後注意していく必要があるだろう。

### 古墳時代前～中期

**古墳時代前期の住居址について** 古墳時代前～中期の遺構としてはI-N区で検出したS I 01・02の2棟の住居址、その可能性のあるものとしてS B 01があげられる。このうち、S I 02は隅丸方形を呈する2本柱の竪穴住居址であり、長方形の浅い掘り込みを伴う壁際土坑を伴うものである。

当地域における壁際土坑の出現時期については、安来市五反田遺跡、松江市堤廻遺跡などの類例からみて、小谷式新相には確実に出現するものと考えられる。米子市青木遺跡では壁際土坑は青木V・VI期に出現するとされているが、図示されている土器を見る限りでは時期的に降るとと思われる資料が多く、検討の余地があると思われる。

また、当遺跡例の壁際土坑は長方形の浅い掘り込みを伴っていた。弥生時代終末の中央ビットにはしばしば浅い掘り込みを伴う二段掘り状のものが認められ、蓋を使用したと推定される向きもある。ただ当住居址例のような大型で長方形のものはあまり例が無く、機能等の点については今後の課題としておきたい。

**壁際土坑について** I-N区で検出した2棟の竪穴住居址の壁際土坑内からは比較的まとまって土

器が出土しており、いずれも高坏が主体を占めている点は興味深い。また S I 01からは滑石製白玉も出土していることからみて、単なる流れ込みではなく何らかの祭祀を窺わせるものである。特に S I 01の場合は住居址建替え時に壁際土坑に高坏・滑石製白玉を投棄しており、住居址廃絶時に伴う祭祀である可能性が高い。

当地域においては中央ピット、特殊ピットと呼ばれるものが住居址中央から徐々に壁際寄りに移動し、古墳時代前期に壁際に設置される過程が明確に押さえられていることからみて、中央ピット・壁際土坑は基本的に同じ機能をもつたしてい可能性が高い。

堅穴住居址内の中央ピットまたは壁際土坑から土器が出土する例はかなり多く、安来市近辺でも弥生時代のものとしては安来市岩屋口北遺跡 S I 04<sup>(11)</sup>、松江市勝負遺跡 S I 01<sup>(12)</sup>、古墳時代前～中期のものとしては堤廻遺跡 S I 08、門生黒谷Ⅱ遺跡 S I 03<sup>(13)</sup>等があげられる。これらは通常の甕でなく高坏・器台・坏を出土するものが多く、当遺跡の様相と共通する。

中央ピット・壁際土坑（特殊ピット）の性格としては炉と想定する説と、祭祀関連の施設とする説がある。祭祀関連施設説の最大の理由は炭・焼土・灰等の検出される例が乏しいという点と住居址内に他に火処が存在する点が大きな根拠になっている。しかし陰田遺跡群からは中央ピットの大半から炭・焼土が検出されており、門生黒谷Ⅲ遺跡 S I 09、10のように中央ピット付近に炭・焼土面が広がるようなものも多い。都出比呂志氏の指摘するような灰穴炉であれば壁面は焼けることは無く、炭・灰が見つからない点も民俗例からみて住居址の移動の際に灰ごと持つて移動した可能性も考えられる。当地域の弥生時代後期住居址によくみられる中央ピットに取り付き住居址外へ延びる溝も、炉としての役割を十分果たすための通気・換気的性格のものではないだろうか。

こうした点からみて中央ピット・壁際土坑の主たる機能は灰穴炉ないしは火に関する施設であると考えたい。こうした土坑から高坏・器台等の土器や滑石製白玉が出土するのは住居址廃棄時に炉（火処）に関して何らかの祭祀を行った結果ではなかろうか。寺沢知子氏は竈神への祭祀行為の起源が住居址廃棄に伴う大地への鎮魂の意図でなされ始めたものと指摘している<sup>(14)</sup>。こうした後世の竈への祭祀行為の萌芽的段階がこの時期から既に存在していたのではないだろうか。古墳時代中期の住居址内における壁際土坑の位置が、そのまま後期のつくり付け竈（当地域では必ずしも主流を占めないが）の位置に対応している点はこうした点を考える上で極めて示唆的である。

このように中央ピット・壁際土坑の主たる機能を炉と考えると、これとは別に住居址床面にみられる焼土面の性格をどう考えるかが問題となる。これについては様々な可能性が考えられるが、当地域の気候条件などを考慮すれば、主として暖を取るためにものであった可能性が最も高いのではないだろうか。今後の調査でこうした中央ピット・壁際土坑及び焼土面の機能を解明できる資料が検出されることを期待したい。

#### 古墳時代後期

古墳時代後期の遺構としては I 区 S B02～10、S K01～03があげられ、III区 S I 04、S B11・12もこの時期の遺構である可能性が高い。S B02～10は主軸の異なる建物群が認められることから複数時期にまたがるものであると考えられる。年代については加工段を伴わない建物のため確実に伴う遺物が無く確証に乏しいが、周辺の出土遺物から大谷編年4～5期前後に属するものと考えられる。

I 区の古墳時代後期集落は掘立柱建物跡のみによって構成されている。出雲における居住用掘立

柱建物は古墳時代中期後半には出現しているが上流を占めることはなく、7～8世紀代に掘立柱建物のみで構成される集落が安来・松江周辺においては主流を占めるようになる。<sup>(19)</sup>

当調査区周辺では石田遺跡第1次調査I-1区S I 01（大谷5期）、カンボウ遺跡I区S I 01・02（大谷4期）などの竪穴住居址が知られており、この段階までは竪穴住居址が主たる建物構成であったことが窺える。I-S区ではS R 01を埋め立てて整地した面にS B 05・06の建物群を建てている。S R 01の出土遺物は大谷編年3～4期のもので5期のものはない。こうした点からみて、当遺跡周辺では大谷編年5期の段階に竪穴住居址を廃して大規模造成を行い、新たに掘立柱建物のみによって構成される集落へ転換したものと想像される。

周辺遺跡で当該期の集落の動向が掴める遺跡としては渋山池遺跡がある。ここでは大谷編年4期の段階から加工段を伴う掘立柱建物による集落構成が認められ、当遺跡の様相より一段階早い。このように安来平野から松江周辺の地域においては大谷編年4～5期にかけて集落構成が変化する大きな両期が認められそうである。この両期は土製支脚や移動式竈の出現などにみられる炊飯様式の変革とも連動するものであり、どのような社会的事象を反映しているものか極めて興味深い。

I区の集落を考える上で見逃せないのはI区西側の丘陵に位置する穴神横穴墓群の存在である。穴神横穴墓群は人谷編年4期～6期にかけて営まれた横穴墓群であり、I区古墳時代後期集落とは併行する時期のものである。よって穴神横穴墓群首長層を支える集団がこの集落を営んでいた可能性は極めて高い。言うなれば先の竪穴住居址中心から掘立柱建物中心の建物構成へ変化する動きは、吉佐地域において神代塚古墳のような伯耆方面とのつながりが想定される横穴式石室をもつ首長墓から安来平野との親縁性の強い穴神横穴墓群の首長墓へと転換する動きと連動している可能性が高いものと考えられる。今後こうした居住様式や炊飯形態の地域性と横穴墓などの墓制の動向との関わりを総合的に検討することによって、当該期のより具体的な歴史像が浮かび上がる可能性がある。

#### 奈良～平安時代

今回の調査においてはこの時期の遺構は検出していないが、III区砂礫層中からは当該期の遺物がかなりまとまって出土している。中でも注目されるのは墨書き器・ヘラ描土器などの文字資料の存在である。

墨書き器は「上」と読めるものが2点、「古」と読めるものが1点出土している。ヘラ描土器は「吉」という字が読み取れる。「上」の須恵器のうち1点は底部に焼成後穿孔が施されており、何らかの祭祀に関わるものであったと考えられる。これらの墨書き器は高広編年IV A期に属するものと考えられ、8世紀中頃～後半代のものである。またヘラ描土器の「吉」は隣接する米子市陰田遺跡群から数点出土しており、その関係が注目される。<sup>(20)</sup>

こうした墨書き器の存在は何らかの官衙的性格の建物の存在を想起させる。隣接する米子市陰田遺跡群からは墨書き器をはじめ、円面鏡、木簡などが出土しており、官衙的性格の公的機関があったものと考えられている。当地域はまさに出雲・伯耆の国境の接する地域であり、当遺跡の場合も宿泊供給施設など官衙的建物があった可能性は十分考えられよう。今後の調査の進展を期待したい。

またIII区から出土した不規則なモチーフが描かれる一群の須恵器（第126図6～9）も注目される遺物である。これらの須恵器は焼き歪みが著しく、器形もよくわからない。色調や胎土は平安前期の須恵器に比較的類似するが管見の限り類似する例を見いだすことはできなかった。隣接する陰田

遺跡群の性格を考えれば渡来系の遺物である可能性も考えられる。今後の類例の増加を待ちたい。

以上、当遺跡の概要について述べてきたが、今回の調査においては幾つかの点において注目すべき成果が得られたものの、未解決のまま残された課題も多い。今後の研究の進展が期待されるところである。

## 註

- (1) 角田徳幸編 1991『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一・堀田』・今佐屋山・米屋山遺跡の調査一』島根県教育委員会
- (2) 島根県教育委員会 1991『中岡横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
- (3) 角田徳幸編 1994『御領田遺跡』『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』湖陵町教育委員会
- (4) 島根県教育委員会が平成6~8年度に調査を実施した。
- (5) 中原 齊 1989『第1節 鑿文時代の遺構と集落一特に堅穴状遺構について』『長山馬籠遺跡』清口町教育委員会
- (6) 島根県教育委員会 1995『才ノ神遺跡・普請場遺跡・島田黒谷Ⅰ遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9
- (7) 島根県教育委員会 1994『明子谷遺跡・島田黒谷Ⅱ遺跡・島田黒谷Ⅲ遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書6
- (8) 島根県教育委員会 1998『門生一門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡の調査一』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14
- (9) 松江市教育委員会 1986『堤廻遺跡』
- (10) 榎真治氏の御教示による。
- (11) 島根県教育委員会 1997『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡(F区)』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13
- (12) 島根県教育委員会 1990『一般国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書K』
- (13) 註 (8) と同じ
- (14) 鳥取県教育委員会 1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- (15) 米子市教育委員会 1984『陰田』
- (16) 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- (17) 中央ピット付近からはしばしばいわゆる山陰形瓢形土器が出土するが、これは祭祀行為によるものではなく、中央ピットとセットとなりある特定の機能をはたしていた可能性が高いと考えている。
- (18) 地沢知子 1992「カマドへの祭祀の行為とカマド神の成立」『考古学と生活文化』同志社考古学シリーズV
- (19) 池瀬俊一 1996『第3章 柳II遺跡』『柳II遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区IV
- (20) 横真治・林健亮編 1997『浜山池遺跡・原ノ前遺跡』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区VI 島根県教育委員会
- (21) 錦田剛志編 1995『平ラII遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群』一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10 島根県教育委員会
- (22) 足立克己・丹羽野裕編 1984『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会
- (23) (財)鳥取県教育文化財団 1996『陰田遺跡群』

## 6. 自然科学的分析

### 石田遺跡出土鉄滓の調査

日立金属株式会社冶金研究所・和鋼博物館

一般国道9号(安来道路)建設予定地内の事前発掘調査が島根県埋蔵文化財調査センターによって行われた。その結果石田遺跡より鉄滓が出土した。遺跡年代は6世紀末から7世紀ごろと考えている遺跡で、出土した鉄滓について分析調査の依頼があったので金属学的調査を行った。その結果と若干の考察を加えたので併せて報告する。

#### 1. 資 料

資料の明細および外観をそれぞれ表1、写真1~2に示す。

表1 資 料 の 明 細

番号	資 料 名	明 細	重量(g)
No.1	石田遺跡SX03 鉄 滓	表面やや黒色で凹凸状緻密で重たい感じ、底面には手前側で約30mmφ、先端部では約10mmφ、長さ約50mmの半円状の穴あり。	1830
No.2	石田遺跡T-2 鉄 滓	表面黒色で光沢があり流出滓の一部と思われる。厚み約30mmで緻密。重たい感じ。	85

#### 2. 化学組成

資料より試料を採取し化学分析を行った。資料の化学組成を表2に示す。このうち炭素および硫黄は赤外線吸収法により、他の元素は高周波誘導結合プラズマ発光分光分析装置により定量した。

表2 各資料の化学組成 (重量 %)

番号	資料名	C	SiO <sub>2</sub>	MnO	P	S	Ni	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Na	K	CaO	MgO	V <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	TiO <sub>2</sub>	Co	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	T.Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	M.Fe
No.1	石田遺跡SX03 鉄 滓	0.004	25.06	0.63	0.065	0.026	0.05	0.22	0.17	0.70	1.52	1.09	0.68	0.98	0.01	4.04	42.16	47.75	7.36	0.64
No.2	石田遺跡T-2 鉄 滓	0.087	24.50	0.41	0.090	0.037	0.04	0.07	0.39	0.53	1.61	1.20	0.41	7.41	0.01	4.38	42.94	50.39	4.43	0.20

#### 3. 顕微鏡組織

資料の顕微鏡組織を写真3~4に示す。

資料No.1、No.2ともウルボスピネル+ファイライト組織が主体である。

#### 4. 構成相の解析

前項で観察した試料を用い、走査型電子顕微鏡(SEM)による微細組織の観察ならびにEDX(エネルギー分散型X線分析)による局部的な定性分析を、また粉碎試料を用いてX線回折を行い構成結晶の同定を行った。結果を写真5、6、図1、2に示す。またこれ等の結果を総括し、資料の構成相を示すと表3のようになる。

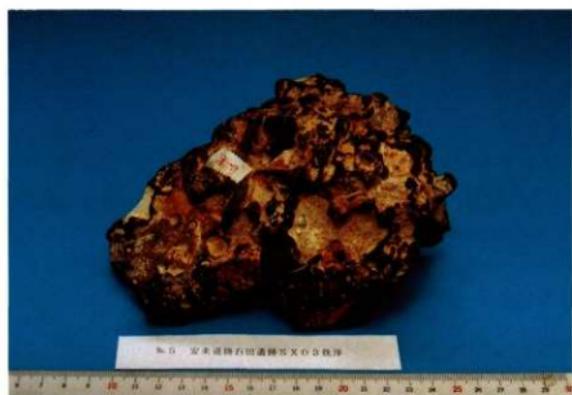


写真1 資料No.1 鉄滓の外観



No. 6 安来道路石田遺跡T-2鉄滓



写真2 資料No.2 鉄滓の外観



(×100)



(×400)

写真3 資料No.1 石田遺跡鉄滓

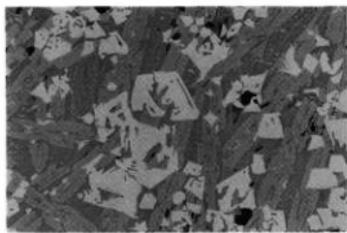
淡褐色の角形結晶はウルボスピネル

淡灰色の棒状結晶はファイライト

表3 資料のX線回折による相解析

番号	資料名	(U) ウルボスピネル $Fe_2TiO_4$	(F) ファイヤライト $Fe_2SiO_4$	基地 (ガラス質)
No.1	石田遺跡SX03鉄滓	◎	◎	Si-Al-Fe-Ca-K-Ti
No.2	石田遺跡T-2鉄滓	◎	◎	Si-Al-Fe-Ca-K-Ti-Mg

注 ◎：多い ○：有り



(×100)



(×400)

写真4 資料No.2 石田遺跡鉄滓

淡泊色の角形結晶はウルボスピネル  
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト

## 5. 考察

大沢正己氏<sup>(1)</sup>が調査された古墳出土鉄滓の化学組成および構成相のまとめを参考に本資料をまとめると表4のようになる。表4によって本資料が製錬滓か鍛冶滓かあるいは使用原料か砂鉄か磁石(岩鉄)かについて考察してみる。

表4 各資料の化学組成と鉱物組織

組成		資料	No.1	No.2
化	全鉄分(T. Fe)		42.16	42.94
学	造滓成分		31.71	31.69
組	二酸化チタン( $TiO_2$ )		8.98	7.41
成	バナジウム(V)		0.381	0.230
鉱物組織			U+F	U+F

注：造滓成分( $SiO_2+CaO+MgO+Al_2O_3$ )

### (1) 資料No.1、No.2 鉄滓について

鉄分42.16~42.94%、造滓成分31.69~31.71%、 $TiO_2$ 量7.41~8.98%であること、それに写真3、4の顕微鏡組織と写真5、6のSEM像にはウルボスピネル+ファイヤライト組織があり、また表3にはウルボスピネルとファイヤライトが同定されていることから鍛冶滓ではなく砂鉄を原料にした精錬滓と判断される。

表5 各種鉄滓の組成と組織の関係

資 料 名	組 成 構 成 比 (%)				組 織
	SiO <sub>2</sub>	FeO	TiO <sub>2</sub>	FeO/SiO <sub>2</sub>	
No. 1 石田 遺跡 SX 03 鉄滓	3.1	5.8	1.1	1.87	U+F
No. 2 石田 遺跡 T-2 鉄滓	3.0	6.1	9	2.03	U+F
倅谷たらから鉄滓(銚押) (1)	2.7	4.9	2.4	1.81	U+F
菅谷たらこもり鉄滓(銚押) (2)	3.7	5.0	1.3	1.35	U+F
菅谷たらから上り(銚押) (2)	3.1	4.7	2.2	1.52	I+U+F
菅谷たらから下り(銚押) (2)	3.3	4.3	2.4	1.30	I+U+F
砥波たらから鉄滓(銚押) (1)	3.2	5.8	1.0	1.81	U+F
靖国たらから鉄滓(銚押) (3)	3.0	6.6	4	2.20	U+W+M+F
復元たら一代下り全平均鉄滓 (4)	2.7	6.2	1.1	2.30	
復元たら二代下り全平均鉄滓 (4)	2.5	6.5	1.0	2.60	
復元たら三代下り全平均鉄滓 (4)	2.6	6.6	8	2.54	

注 (1) 表 国一：古来の砂鉄製錬法，丸善 1933

(2) 和鋼記念館：頼原町泉原たらから遺跡出土鉄片及び鉄滓の調査 昭和58年12

(3) 小塙 寿吉：日本古来の砂鉄製錬法“たら”について鉄と鋼 第58年12

(4) 日本鉄鋼協会：たらから製鉄の復元とその鋼について 昭和46年2月27日

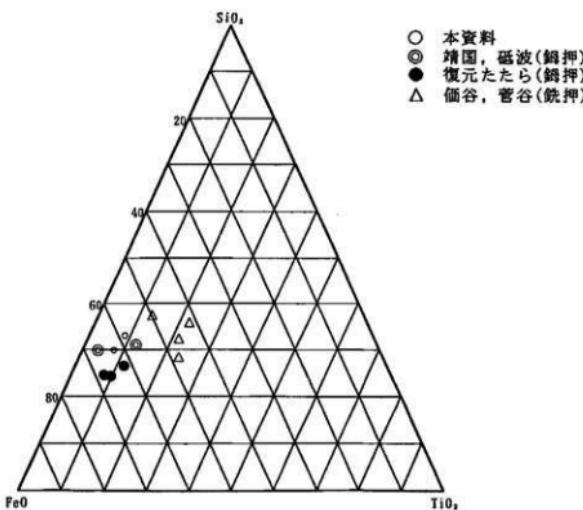
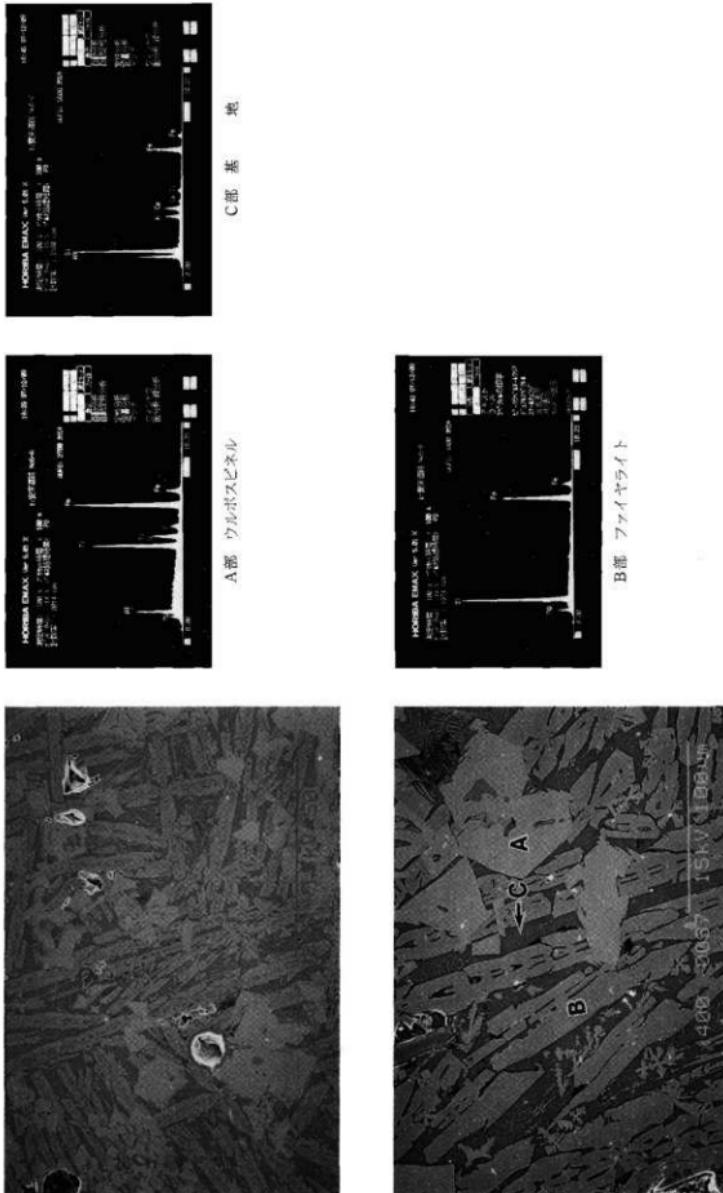


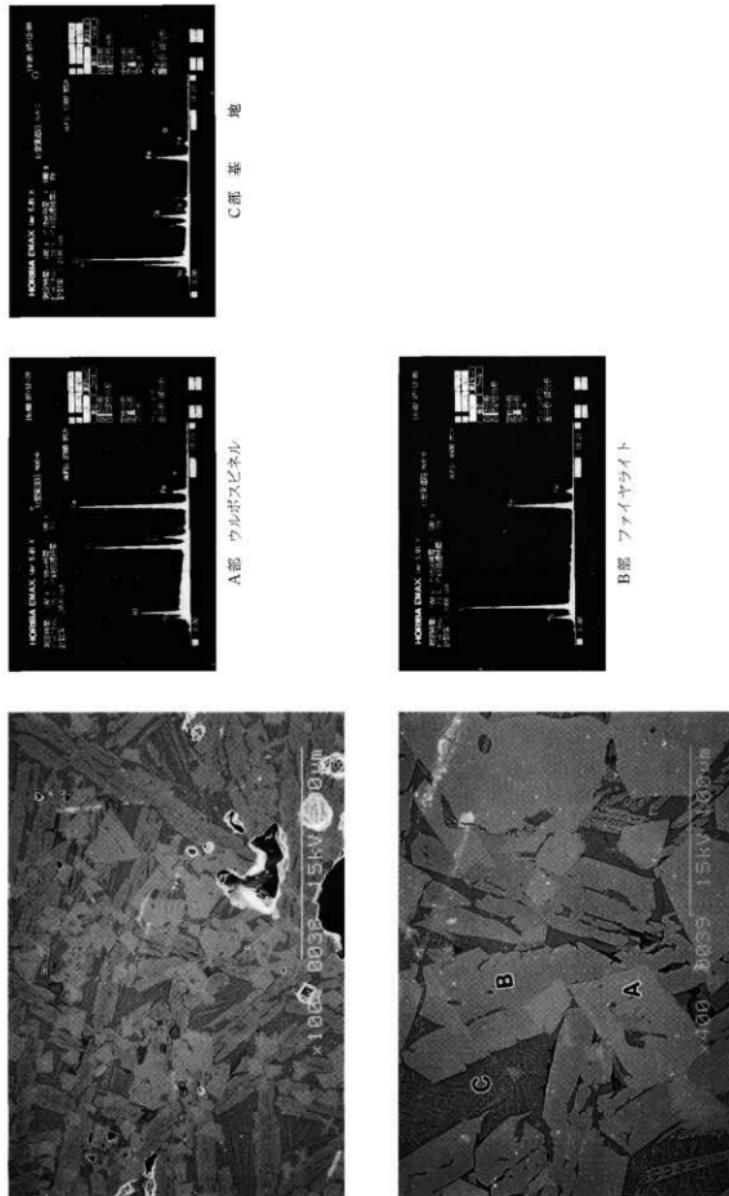
図1 本資料と銚押、鈎押鉄滓の組成位置

写真5 資料No.1のSEM像とEDX分析



資料図2のSEM像とEDX分析

写真6



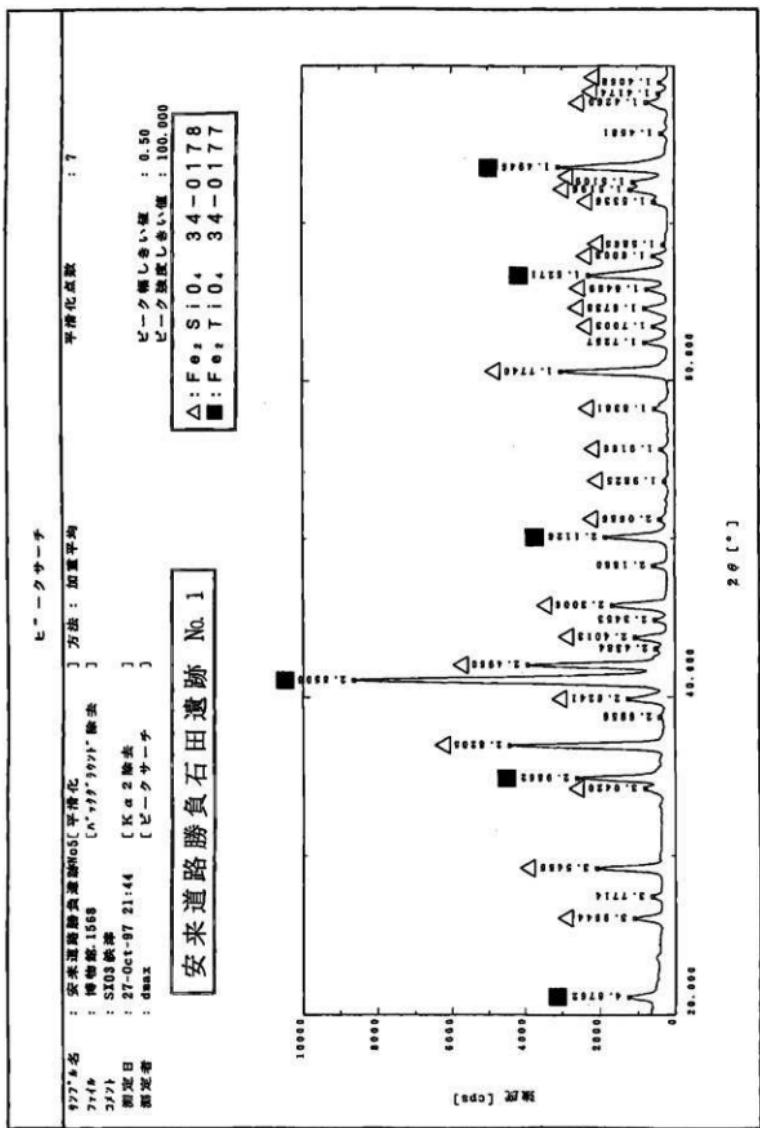
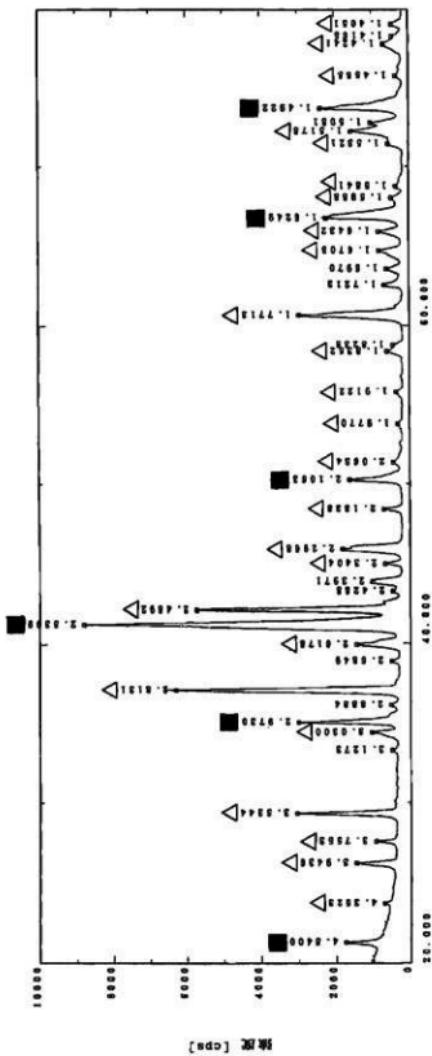


図2 資料地1のX線回折像

## ヒークサーチ

サンプル名 : 安来道路勝負石遺跡 No. 2  
 モード : 平滑化  
 パラメータ : [平滑化] 7  
 フィルタ : [ノーラウド・カット] 滤去  
 計測日 : T-2 時間  
 27/1  
 27/1 : 27-Oct-97 22:45  
 測定者 : daax  
 ピーク検出しきい値 : 0.50  
 ピーク強度しきい値 : 100,000

## 安来道路勝負石田遺跡 No. 2



次に從来調査した鉄滓と本資料No.1、No.2の化学組成の構成比によって技術上の特徴について検討を加えてみる。まず各資料のSiO<sub>2</sub>、FeO、TiO<sub>2</sub>量を100%に換算した構成比と組織を表5に示す。これをプロットしたものを図1に示す。本資料はFeO、TiO<sub>2</sub>比がケラ押と同一レベル付近にあることからケラ押法の操業が行われていたものと推定される。

## 6. 結 言

6世紀末から7世紀ごろといわれる安来道路内石田遺跡出土鉄滓について分析調査を行った。結果を要約すると次の通りである。

(1) 資料No.1、No.2鉄滓は砂鉄を原料にした製鍊滓と推定した。

以上の調査は島根県埋蔵文化財調査センターの依頼により日立金属株式会社冶金研究所で実施し、日立金属テクノクス清永主管コンサルタントに御指導を頂いた。

## 参考文献

- (1) 大沢正己：古代出土鉄滓からみた古代製鉄、日本製鉄史論集 119P (たたら研究会 1984)
- (2) 清永欣吾：瑞穂町田所下締迫および清造山製鉄遺跡鉄滓の調査 平成2年3月30日



# 遺物觀察表



第1表 出土土器観察表（1）

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	法量 (cm)	調整・技法	色調発成	胎土	備考
第9図	I-N区 S101	土師器	甕	15%	口径 13.8		口縁: 内外ココナ 胴部内: ハラタメリ	赤褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-1	I-N区 S101-P7	土師器	甕	20%	口径 17.1		口縁: 内外ココナ 胴部内: ハラタメリ	灰褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-2	I-N区 S101	土師器	壺		口径 11.1		口縁: 内外ココナ 器高: 4.8 底部: 手押しハラタメ	赤褐色 良好	砂粒を殆ど含まず 精緻	
-3	I-N区 S101	土師器	壺	100%	口径 17.6	不明		黄褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-4	I-N区 S101-P6	土師器	壺				口縁: 内外ココナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-5	I-N区 S101	須恵器	甕				外縁: 平行引抜、一部ササ 内縁: 脊付円形	淡灰色 良好	1mm以下の黑色砂粒を若干含む	
6	I-N区 S101	須恵器	甕				外縁: 平行引抜 内縁: 脊付円形	淡灰色 良好	1mm以下の黑色砂粒を若干含む	
-7	I-N区 S101	須恵器	甕				内縁: 手押し凹痕	淡灰色 良好	1mm以下の黑色砂粒を若干含む	
第12図	I-N区 S102	土師器	甕	16%	口径 15.6		口縁: 内外ココナ 胴部内: ハラタメリ	淡黃褐色 良好	1~2mmの砂粒を多く含む	
-1	I-N区 S102	土師器	甕	18%	口径 13.4		口縁: 内外ココナ 胴部内: ハラタメリ	淡黄色 普通	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-2	I-N区 S102	土師器	甕	25%	口径 13.0		口縁: 内外ココナ 胴部内: ハラタメリ	淡褐色 普通	1mmの大砂粒を多く含む	
3	I-N区 S102-底面	土師器	甕				不規	淡黃褐色 普通	1mmの大砂粒を多く含む	
-4	I-N区 S102	土師器	甕				口縁: 外ココナ	淡黃褐色 普通	1mmの大砂粒を多く含む	
-5	I-N区 S102	土師器	甕				口縁: 内外ココナ	淡褐色 普通	1mm以下の砂粒を多く含む	
-6	I-N区 S102	土師器	高环	20%	口径 15.3 器高 5.7		口縁: 内外ココナ 脚部: 脚底直り	淡黃褐色 普通	1mm以下の白色砂粒を含む	
7	I-N区 S102	土師器	高环	16%	口径 16.8	不規		淡黃褐色 普通	1mm人の砂粒を多く含む	
-8	I-N区 S102-底面	土師器	高环脚部				不規	淡黃褐色 普通	1mmの大砂粒を多く含む	
-9	I-N区 S102	土師器	短颈甕	30%			口縁: 内外不規 胴部内: ハラタメリ	淡黃灰色 普通	1mmの大砂粒を多く含む	
-10	I-N区 S102	土師器	小形器台	22%	底径 9.8		外縁: 3ココナ 内縁: ハラタメ	淡黃褐色 良好	1mm以下の砂粒を微量含む	--
11	I-N区 S102	土師器	低脚甕		器高 2.15 底径 3.1			淡黃褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-12	I-N区 S102-底面	土師器	低脚甕	90%	底径 5.8	不規		淡黃褐色 普通	1mmの大砂粒を多く含む	
-13	I-N区 S102	共生土器	底部	11%	底径 4.0	不規		淡黃褐色 良好	1mm以下の砂粒を多く含む	
-14	I-N区 S102-底面	土師器	器台	50%	口径 9.3 器高 6.3 底径 10.6			淡黃褐色 普通	1mmの大砂粒を多く含む	
15	I-N区 S102-底面	土師器	器台	25%	底径 9.4	不規		淡黃褐色 良好	1mmの大砂粒を多く含む	
16	I-N区 S102-底面	土師器	器台		底径 10.2	不規		淡黃褐色 良好	1mm人の砂粒を多く含む	
第14B図	I-N区 S101	土師器	甕	12%	口径 25.1		口縁: 不規 胴部内: ハラタメリ	赤褐色 普通	3mm以下白色砂粒を比較的多く含む	
-1	I-N区 S101	土師器	甕				口縁: 内外ココナ	赤褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を微量含む	
-2	I-N区 S101	土師器	甕				口縁: 内外ココナ	赤褐色 普通	1mm人の砂粒を多く含む	
-3	I-N区 S101	土師器	甕				口縁: 内外ココナ 底部: 丁字ちハラタメリ	赤褐色 普通	砂粒を殆ど含まず 精緻	--
4	I-N区 S101	須恵器	壺、瓶				山腹: 内外ココナ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
5	I-N区 S101	土師器	器把手					赤茶褐色 普通	3mm以下の白色砂粒を多く含む	
第17図	I-N3区 S-D01	土師器	甕	10%	口径 21.7		外縁: 3ココナ 内縁: 3ココナ、ケズ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
-1	I-N3区 S-D01	土師器	甕	25%	口径 17.3		外縁: 3ココナ 内縁: 3ココナ、ハラタメリ	淡褐色 良好	1mm程度の砂粒を少量含む	
-2	I-N3区 S-D01	土師器	甕	7%	口径 26.0		外縁: 3ココナ 内縁: 3ココナ、ハラタメリ	淡黃灰褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
第20図	I-N3区 S-B02-04	須恵器	壺、甕		口径 13.8		外縁: 3ココナ 内縁: 3ココナ、静止ガ	明灰色 やや不良	白色、暗灰色粒子を含む	
-1	I-N3区 S-B02-04	須恵器	壺、甕	16%	口径 12.8		外縁: 3ココナ 内縁: 3ココナ、静止ガ 脚部: 3ココナ、ハラタメリ	青灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
3	I-N3区 S-B02-04	須恵器	壺、甕	32%	口径 13.8		外縁: 3ココナ 内縁: 3ココナ	青灰色 良好	1mm人の白色砂粒を微量含む	
-4	I-N3区 S-B02-04	須恵器	壺、甕		口径 12.4		外縁: 3ココナ 内縁: 3ココナ	青灰色 良好	1mm以下の砂粒を微量含む	
-5	I-N3区 S-B02-04	須恵器	壺、甕		口径 13.0		外縁: 3ココナ 内縁: 3ココナ	青灰色 普通	砂粒を含む	

第2表 出土土器観察表(2)

団 版 番	出上場点	種類	器種	残存率 (%)	法 量 (cm)	調査・技 法	色 調 度	胎 土	備 考
第20回	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、蓋	15%	口径 13.8	口縁;内外ココナ	青灰色 良好	1mm人の白色砂粒 を微量含む	
-6	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、蓋			外縁:ハラマツ、ココナ 内縁:ココナ、静止ナナ		2mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-7	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、蓋						
-8	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、蓋	12%	口径 11.6	口縁;内外ココナ	淡灰色 普通	0.5mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-9	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、蓋	35%	口径 10.0	外縁:ハラマツ、ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	0.5mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-10	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、身	50%	口径 13.9 器高 4.25	外縁:ハラマツ、ココナ 内縁:ココナ、静止ナナ	灰白色 やや不良	1mm以下の長石、 黑褐色粒子を含む	
-11	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、身	23%	口径 11.4	外縁:ココナ 内縁:ココナ、静止ナナ	淡灰色 良好	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	一部自然精
-12	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、身	100%	口径 10.6 器高 3.9	外縁:ハラマツ、ココナ 内縁:ココナ、静止ナナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒、石灰、灰石を含む	
-13	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、身	18%	口径 11.	外縁:ハラマツ、ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	1mm人の砂粒を少 量含む	
-14	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、身	47%	口径 10.7 器高 4.1	外縁:ハラマツ、ココナ 内縁:ココナ、静止ナナ	青灰色 良好	0.5mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-15	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环、身	12%	口径 9.4	外縁:ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	0.5mm以下の砂粒を 若干含む	
-16	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	高台付碗	30%	底径 6.6	外縁:ココナ、静止ナナ 内縁:ココナ	灰色 普通	砂粒を殆ど含まず 精緻	
-17	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环	15%	底径 9.2	外縁:ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	砂粒を微量含む	
18	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	坏			外縁:ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	0.5mm以下の白 色砂粒を微量含む	
-19	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	高坏か?	44%	口径 15.2	外縁:ココナ 内縁:ココナ	青灰色 やや不良	1mm前後の砂粒を 少數含む	
-20	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	坏	25%	底径 9.8	外縁:ココナ 内縁:ココナ	青灰色 普通	砂粒を微量含む	
-21	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	高坏	11%	底径 9.3	外縁:ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	0.5mm以下の白 色砂粒を微量含む	
-22	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	高坏	20%	底径 9.8	外縁:ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	0.5mm以下の白 色砂粒を若干含む	
-23	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环		最大径10.8	外縁:ハラマツ、ココナ 内縁:ココナ、静止ナナ	黄白色 良好	0.5mm以下の白 色砂粒を若干含む	
-24	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	环?	40%	底径 4.2	外縁:ハラマツ、ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	0.5mm以下の白 色砂粒を若干含む	
-25	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	束	15%	口径 18.4	外縁:ココナ 内縁:ココナ、ハケ状工具ナ	淡黄色 良好	砂粒を殆ど含まず 精緻	
-26	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	束			外縁:ココナ 内縁:ココナ	外黒青灰 内淡灰色 良好	微細な黒色粒子を 微量含む	
27	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	斧		口径 27.6	外縁:ココナ 内縁:ココナ	青灰色 良好	密で砂粒を微量含 む	
-28	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	束			外縁:ココナ 内縁:ココナ	淡灰色 普通	3mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-29	I-N 3区 S B02-04	須 慈 器	束?			外縁:ココナ 内縁:ココナ	淡灰色 普通	砂粒を殆ど含まず 精緻	
第21回	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束?	10%	口径 17.8	外縁:ココナ 内縁:ココナ	外黒灰色 内橙色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-1	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束?						
-2	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束	25%	口径 14.8	外縁:ココナ 内縁:ココナ、ハラマツ	橙色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束	11%	口径 17.8	外縁:ココナ、観ハナメ 内縁:ココナ、ケタ	淡黃白色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-4	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束	24%	口径 13.8	外縁:ココナ 内縁:ココナ、ハラマツ	暗色 良好	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-5	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束	50%	口径 17.8	外縁:ココナ 内縁:ココナ、ハラマツ	外黒青灰 内橙色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-6	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束	15%	口径 17.8	外縁:ココナ 内縁:ココナ、ハラマツ	黃褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-7	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束	16%	口径 18.4	外縁:ココナ 内縁:ココナ、ケタ	淡黃褐色 良好	1mm前後の白色砂 粒を多く含む	
-8	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束	15%	口径 21.0	外縁:ココナ 内縁:ココナ、ケタ	外褐褐色 内深褐色 良好	3mm以下の白色砂 粒を含む	
-9	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束	15%	口径 21.0	外縁:ココナ 内縁:ココナ、ケタ	淡茶褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を含む	
-10	I-N 3区 S B02-04	土 鍋 器	束			外縁:ココナ 内縁:ココナ、ケタ	外:褐色 内:褐色 普通	2~3mmの白色砂 粒を若干含む	

第3表 出土土器觀察表(3)

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調整・技法	色調成	胎土	備考	
									外表面 内裏	内表面 内裏
第21回 -11	I-N3区 SB02-04	土師器	壺	10%未	口径 19.1	外面:コナデ 内裏:コナデ、ケズリ	外表面 内裏	白色砂粒 内裏褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-12	I-N3区 SB02-04	土師器	壺	15%	口径 18.5	外面:コナデ 内裏:コナデ、ケズリ	外表面 内裏	白色砂粒 内裏褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-13	I-N3区 SB02-04	土師器	壺	50%	口径 19.7	外面:コナデ 内裏:コナデ、ヘリケツリ	外表面 内裏	褐色 内裏褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-14	I-N3区 SB02-04	土師器	壺	50%未	口径 15.3	外面:コナデ 内裏:コナデ、ヘリケツリ	外表面 内裏	褐色 内裏褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-15	I-N3区 SB02-04	土師器	壺	25%	口径 27.7	外面:コナデ、底ハリ 内裏:コナデ、ヘリケツリ	外表面 内裏	白色砂粒 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-16	I-N3区 SB02-04	土師器	壺	12%	口径 15.2	外面:コナデ 内裏:コナデ、ヘリケツリ	外表面 内裏	赤褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
第22回 -1	I-N3区 SB02-04	土師器	壺	30%	口径 11.0	外面:コナデ 内裏:コナデ	外表面 内裏	深褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-2	I-N3区 SB02-04	弦生土器	高环?			不明	表面	灰色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	I-N3区 SB02-04	土師器	环		口径 11.4	外面:コナデ、手持ちヘリケツリ 内裏:コナデ	外表面 内裏	浅淡黄褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微細含む	
-4	I-N3区 SB02-04	弦生土器	要		底径 5.2	外表面:コナデ、ヘリケツリ 底径 8.8 内裏:コナデ、ヘリケツリ	外表面 内裏	外黒褐色 内裏褐色 良好	1mm以下の白・白 色砂粒を若干含む	
5	I-N3区 SB02-04	土師器	土製支脚			鋼部外:鉛頭压痕	表面	深褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-6	I-N3区 SB02-04	土師器	瓶把手				表面	深褐色 良好	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	I-N3区 SB02-04	土師器	土製支撑			一部焼けた	表面	深褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微細含む	
-8	I-N3区 SB02-04	土師器	瓶把手				表面	深褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
第31回 -1	I-N1区	須恵器	环、蓋			外表面:回転ヘリケツリ、コナデ 内裏:コナデ、静止ナメ	表面	青灰色 良好	1mm以下の砂粒を 微細含む	
-2	I-N区	須恵器	环、蓋	25%	口径 11.6 底径 4.8	外表面:回転ヘリケツリ、コナデ 内裏:コナデ、静止ナメ	表面	青灰色 良好	黑色粒子を多数に 含む	
-3	I-N区	須恵器	环、蓋	24%	口径 12.0 底径 4.8	1個	表面	深灰色 やや不良 質地	砂粒を殆ど含まず 質地	
4	I-N1区	須恵器	环、身	30%	口径 11.2	外表面:回転ヘリケツリ、コナデ 内裏:コナデ	表面	青灰色 良好	自然褐色	
-5	I-N区	須恵器	环、身	17%	口径 10.2 高さ 3.95	外表面:回転ヘリケツリ、コナデ 内裏:コナデ、静止ナメ	表面	深褐色 内裏褐色 良好	1mm以下の黑色粒子、 石英を含む	
-6	I-N区	須恵器	环、身	22%	口径 10.6	外表面:コナデ 内裏:コナデ	表面	青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を微細含む	
-7	I-N1区	須恵器	环、身	18%	口径 10.4 底径 5.7	外表面:コナデ 内裏:コナデ	表面	青灰色 良好	密度で砂粒を微細含 む	
8	I-N1区	須恵器	环、身、蓋			外表面:コナデ 内裏:コナデ、静止ナメ	表面	青灰色 良好	密度で2mm以下の砂 粒を含む	
-9	I-N1区	須恵器	环、身、蓋	20%	輪台 7.0	外表面:コナデ 内裏:静止ナメ	表面	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-10	I-N1区	須恵器	环、身 高台付脚	16%	底径 8.2	外表面:コナデ、静止ナメ 内裏:コナデ、静止ナメ	表面	深褐色 青灰色	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-11	I-N1区	須恵器	台付蓋?	17%	底径 8.6	外表面:コナデ 内裏:静止ナメ	表面	灰褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-12	I-N6区	須恵器	鉢か壺	18%	底径 13.2	外表面:回転ヘリケツリ、コナデ 内裏:コナデ	表面	深褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を数個含む	
-13	I-N6区	須恵器	高环			外表面:コナデ 内裏:コナデ	表面	深褐色 やや不良 質地	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-14	I-N1区	須恵器	蓋		底径 4.4	外表面:コナデ 内裏:コナデ	表面	青灰色 良好	砂粒を微量含む	
-15	I-N1区	須恵器	壺		口径 18.8	外表面:コナデ 内裏:コナデ	表面	青灰色 良好	砂粒を微量含む	
第32回 -1	I-N1区	土師器	壺	18%	口径 7.2	不明	外表面 内裏	深褐色 内裏灰褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-2	I-N1区	土師器	脚付壺	100%	底径 9.4	外表面:コナデ 内裏:コナデ	表面	深褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干下を含む	
-3	I-N1区	土師器	高环				表面	灰白色 やや不良 質地	1mm以下の白色砂 粒を若干下を含む	
-4	I-N2区	土師器	高环				表面	深褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干下を含む	

第4表 出土土器観察表(4)

団 版 番 号	出 上 地 点	種 類	器 種	残 存 率 (%)	底 盤 (cm)	調 査 ・ 技 法	色 調 焼 成	胎 土	備 考
第32回 -5	I-N3区	土器	低脚杯			外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外黄褐色 内青茶褐色 良好	0.5mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-6	I-N4区	土器	低脚杯	底径 4.7	外径:小明 内径:ナガ	淡黄褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む		
-7	I-N4区	土器	高脚杯	5% 口径 18.9	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ、ヘラナギ	外褐褐色 内灰褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を多量含む		
8	I-N1区	土器	壺	20%	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ、ヘラナギ	赤褐色 良好	2mm以下の砂粒を 微量含む、精緻		
-9	I-N6区	土器	高杯	15% 口径 14.4	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外淡褐色 内暗褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を含む		
-10	I-N4区	土器	杯		外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む		
-11	I-N4区	土器	高把子			赤褐色 普通	3mm以下の白系 色砂粒を若干含む		
-12	I-N4区	土器	壺	15% 口径 18.2	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ、ヘラナギ	赤褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む		
13	I-N1区	瓦器	火鉢	13% 口径 15.4	外面:ヨコナギ、印文化 内面:ヨコナギ	黒灰色 良好	2mm以下の砂粒を 微量含む		
-14	I-N区	土師質土器	壺	40% 口径 7.7	外面:ヨコナギ、回転系切口 内面:ヨコナギ	外褐褐色 内青褐色 良好	0.5mm以下の白色 砂粒を少量含む		
-15	I-N区	土師質土器	壺	口径 9.6	外面:ヨコナギ、回転系切口 内面:ヨコナギ	黄褐色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む		
第33回	I-S区 SI03-SK04	繩文土器	深鉢			外淡茶褐色 内黑色 不良	3mm以下の砂粒を 多く含む		
-1	I-S区 SI03	繩文土器	深鉢		内面:二枚貝条痕	淡茶褐色 不良	2mm以下の白色砂 粒を多量含む		
-2	I-S区 SI03	繩文土器	深鉢		内面:ヨコナギ	淡茶褐色 不良	2mm以下の白色砂 粒を多量含む		
-3	I-S区 SI03-SK04	繩文土器	深鉢			淡茶褐色 不良	2mm以下の白色砂 粒を多量含む		
-4	I-S区 SI03-SK04	繩文土器	深鉢鉢部	50% 底径 11.4	外明	淡黄褐色 不良	2mm前後の白色砂 粒をやや多く含む		
-5	I-S区 SI03-SK04	繩文土器	深鉢鉢部	口径 36.6	外面:二枚貝条痕 内面:ヨコナギ	淡茶褐色 不良	2mm前後の砂粒を 比較的多く含む		
第34回	I-S区 -1	須恵器	壺、蓋	11% 口径 13.4	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	赤茶色 不良	2mm以下の白色砂 粒を含む		
-2	I-S区	須恵器	壺、蓋	17% 口径 13.4	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を含む		
-3	I-S区	須恵器	壺、蓋	11% 口径 13.0	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	赤色 良好	2mm以下の白色砂 粒を含む		
-4	I-S区	須恵器	壺、蓋	25% 口径 12.4 器高 3.4	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナガ	外灰褐色 内赤褐色 良好	研磨		
-5	I-S区	須恵器	壺、蓋	口径 13.0	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-6	I-S区	須恵器	壺、蓋	17% 口径 12.8	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナガ	灰褐色 良好	1mm前後の白色砂 粒を微量含む		
-7	I-S区	須恵器	壺、蓋	10% 口径 14.6	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰褐色 良好	砂粒を少量含む		
-8	I-S区	須恵器	壺、蓋		外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰褐色 良好	砂粒を少量含む	△記号	
9	I-S区	須恵器	壺、蓋		外面:ヨコナギ	淡灰褐色 良好	白色砂粒を含む	△記号	
-10	I-S区	須恵器	杯、身	26% 口径 12.0 器高 4.9	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む		
-11	I-S区	須恵器	杯、身	口径 12.8 器高 3.4	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰褐色 やや不良	1mm以下の白色砂 粒を若干量含む		
-12	I-S区	須恵器	杯、身	20% 口径 10.8 器高 4.0	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰褐色 良好	3mm以下の砂粒を 微量含む		
-13	I-S区	須恵器	杯、身	14% 口径 10.1 器高 4.0	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナガ	青灰褐色 良好	外で2mm以下の白 色砂粒を若干含む		
-14	I-S区	須恵器	杯、身	38% 口径 11.3 器高 4.0	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰褐色 良好	1mm以下の白、白 色粒子を含む		
-15	I-S区	須恵器	杯、身	15% 口径 10.4 器高 4.0	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰褐色 良好	白色砂粒を含む		
16	I-S区	須恵器	杯、身	21% 口径 10.0 器高 4.0	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰褐色 良好	白色砂粒を含む		
-17	I-S区	須恵器	杯、身	19% 口径 13.2 器高 3.9	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡黄褐色 良好	白色砂粒を含む	都山然楠有	
18	I-S区	須恵器	杯、身	31% 口径 10.2 器高 3.9	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外灰褐色 内青灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む		

第5表 出土土器観察表(5)

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	口径 (cm)	法量 (cm)	調査・技法		色調焼成	胎土	備考
							外面	内面			
第43図 -19	I-S区	須恵器	环、身	30%	口径 10.6		外面: ハラ切付ナガリ、ココナチ 内面: ココナチ、静止ナガリ		外淡灰色 内淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 微量含む	
-20	I-S区	須恵器	环、身	20%	口径 10.8		外面: 回転ヘタツリ、ココナチ 内面: ココナチ		灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-21	I-S区	須恵器	环、身	24%	口径 11.0		外面: ココナチ 内面: ココナチ		淡黄色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-22	I-S区	須恵器	环、身	20%	口径 11.4		外面: ココナチ 内面: ココナチ		外淡黄色 内淡黄色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む	
23	I-S区	須恵器	环、身	16%	口径 10.8		外面: ココナチ 内面: ココナチ		淡黄色 良好	砂粒を殆ど含まず 焼成	
24	I-S区	須恵器	环、身	20%	口径 11.4		外面: ココナチ 内面: ココナチ		灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-25	I-S区	須恵器	高环	100%	口径 14.95		外面: 回転ヘタツリ、ココナチ 内面: ヘタツリ		暗灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-26	I-S区	須恵器	高环脚部	100%	底径 8.3				暗灰褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を含む	
27	I-S区	須恵器	高环脚部	25%	底径 10.4				淡黄色 良好	1mm以下の砂粒を 少量含む	
28	I-S区	須恵器	高环脚部	15%	底径 9.0		外面: ココナチ 内面: ココナチ		外淡灰色 内淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-29	I-S区	須恵器	盤	25%			外面: 回転ヘタツリ、ココナチ 内面: ココナチ		外暗灰褐色 内淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-30	I-S区	須恵器	高环	25%	口径 18.6		外面: ココナチ 内面: ココナチ		青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-31	I-S区	須恵器	加須型		口径 10.6				灰色 良好	1mm以下の砂粒を 少量含む	
-32	I-S区	須恵器	壺?	12%			外面: ハナナガ 内面: ココナチ		外青灰色 内淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 含む	
第44図 -1	I-S区	土師器	甕	17%	口径 36.6	口絶: 内外ココナチ 胴部内: ハタツリ		黄白淡褐色 普通	1mm前後の砂粒を 含む		
-2	I-S区	土師器	甕	10%	口径 24.0	口絶: 内外ココナチ		淡黄褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を多く含む		
-3	I-S区	土師器	甕		口径 14.3	口絶: 内外ココナチ 胴部内: ハタツリ		淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む		
-4	I-S区	土師器	甕	17%	口径 18.2			黄白色 小不良	1mm前後の砂粒を 含む		
-5	I-S区	土師器	瓶把手					淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-6	I-S区	土師器	瓶把手					外淡黄色 内黑色 普通	1mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-7	I-S区	土師器	瓶把手					淡白色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-8	I-S区	編文土器	深鉢?	40%	底径 11.4			茶褐色 普通	2mm以下の砂粒を 多く含む		
第46図 -1	I-S区 トソサS	土師器	深鉢				内面: 亂	灰茶褐色 やや不良	3mm以下の白色砂 粒を多く含む		
-2	I-S区 トソサS	土師器	深鉢					灰褐色 やや不良	3mm以下の白色砂 粒を多く含む		
-3	I-S区 トソサS	編文土器					内面: ココナチ 外面: RL脚文	外黒褐色 内素褐色 不良	3mm以下の砂粒を 多く含む		
-4	I-S区 トソサS	須恵器	环、蓋	35%	口径 12.6	外: 回転ヘタツリ、ココナチ、ハラ切 り後ナガリ内: ハナナガ、静止ナガリ		淡青灰色 良好	1mm前後の白色砂 粒を若干含む		
-5	I-S区 トソサS	須恵器	环、身	26%	口径 10.1	外面: 回転ヘタツリ、ココナチ 内面: ココナチ		淡青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-6	I-S区 トソサS	土師器	甕	25%	口径 19.8	口絶: 内外ココナチ 胴部内: ハタツリ		淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-7	I-S区 トソサS	土師器	甕	22%	口径 18.0	口絶: 内外ココナチ 胴部内: ハタツリ		淡褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-8	I-S区 トソサS	土師器	甕	16%	口径 17.4			明褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-9	I-S区 トソサS	土師器	甕底部				外面: ハナナガ 内面: ハナナガ	黄褐色 良好	3mm以下の白色砂 粒を若干含む		
第51図 -1	I-S区 SR01	弥生土器	甕	12%	口径 17.0			淡褐灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を含む	火度有り	
-2	I-S区 SR01	弥生土器	甕					黄褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		

第6表 出土土器観察表(6)

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調査・技法	色調成	胎土	備考
第51図 -3	I-S区 SR01	赤生土器	壺底部	37%	底径 5.5 外側:ハラヅ	外黒灰色 内淡褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を多く含む		
-4	I-S区 SR01	赤生土器	底部	20%					
-5	I-S区 SR01	赤生土器	裁形器台	27%	不明		淡黄色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
6	I-S区 SR01	赤生土器	底頭蓋		口径 8.7 外側:ミコナ 内側:ミコナ、ヘラヅ	外淡褐色 内褐色 良好	0.5mm以上の白色 砂粒を含む		
第52図 -1	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	15%	口径 12.0 外側:ミコナ 内側:ミコナ	外暗灰色 内淡灰色 良好	3mm以下の黒、白 色砂粒をやや多く 含む		
-2	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	11%	口径 13.2 外側:ミコナ 内側:ミコナ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む		
-3	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	30%	口径 13.7 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	黒灰色 良好	密		
-4	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	15%	口径 12.0 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ	外褐灰色 内淡褐色 良好	1.5mm以下の白、 黑色砂粒を若干含む		
-5	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	20%	口径 11.0 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を多量に含む		
-6	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	13%	口径 12.8 外側:ミコナ 内側:ミコナ	青灰色 良好	0.5mm以下の極小 の砂粒を含む		
-7	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	100%	口径 13.3 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	灰色 良好	石英、白色粒子を 含む		
-8	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	34%	口径 14.0 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	青灰色砂粒を少 量含む		
-9	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	15%	口径 14.0 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	黒灰色 良好	密で1mm前後の黑 色砂粒を若干含む		
-10	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	15%	口径 13.6 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	密で0.5mm以下 の黑色砂粒を若干含む		
-11	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	20%	口径 13.4 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む		
12	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	15%	口径 14.1 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ	外淡褐色 内明灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む		
-13	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	88%	口径 13.7 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ	外明灰色 良好	青灰色砂粒を含む		
-14	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	40%	口径 12.5 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	外褐灰色 内淡灰色 良好	青灰色砂粒を多く含 む		
-15	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	20%	口径 13.0 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ	外青褐色 内青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む		
16	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋		口径 14.4 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ				
17	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	11%	口径 11.7 外側:ミコナ 内側:ミコナ	青灰色 良好	青灰色砂粒を若干含む		
-18	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋		口径 13.0 外側:ミコナ 内側:ミコナ	青灰色 良好	密		
-19	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	16%	口径 14.2 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	3mm以下の砂粒を 含む		
-20	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	35%	口径 12.2 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	青灰色砂粒を若干含む		
-21	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	12%	口径 11.4 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	外濃青灰 内淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 少量含む		
-22	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋		口径 13.5 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	淡灰色 やや不良	2mm以下の砂粒を 微量含み、筋状		
-23	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	13%	口径 12.2 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	砂粒を少量含む		
-24	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	15%	口径 13.0 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 少量含む		
-25	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	12%	口径 13.2 外側:ミコナ 内側:ミコナ	外淡灰色 内淡褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む、や や粗		
-26	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	57%	口径 13.1 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	密で1mm前後の白 色砂粒を含む		
-27	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	11%	口径 13.0 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-28	I-S区 SR01	須恵器	壺、蓋	35%	口径 13.2 外側:回転ヘラヅ、ミコナ 内側:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	密で1mm以下の白 色砂粒を含む		

第7表 出土土器観察表(7)

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調整・技法	色調成	胎土	備考
第5288 -29	I-S区	須恵器	环、蓋	15%	口径 13.0 器高 3.7	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	灰色 良好	密で1mm以下の白 色砂粒を微量含む	
-30	I-S区	須恵器	环、蓋	10%	口径 13.8 器高 3.6	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	外表面灰 内底褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-31	I-S区	須恵器	环、蓋	25%	口径 14.4 器高 4.0	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	灰色 良好	密で1mm以下の白 色砂粒を微量含む	
第5389 -1	I-S区	須恵器	环、蓋	17%	口径 13.0 器高 4.5	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡褐色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-2	I-S区	須恵器	环、蓋	50%	口径 13.5 器高 4.0	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	外表褐色 内灰 やや不良	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	I-S区	須恵器	环、蓋	70%	口径 13.4 器高 3.6	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	白表面灰 不良	密で砂粒を極少量 含む	
-4	I-S区	須恵器	环、蓋	50%	口径 13.9 器高 4.45	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰白色 良好	密	
-5	I-S区	須恵器	环、蓋	30%	口径 14.0 器高 3.6	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰白色 良好	密で2mm以下の砂 粒を少量含む	
-6	I-S区	須恵器	环、蓋	45%	口径 13.8 器高 4.2	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	淡褐色 不良	砂粒を殆ど含まな い	
-7	I-S区	須恵器	环、蓋	25%	口径 12.7 器高 3.1	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ 良好	外表灰 内淡青灰 良好		
-8	I-S区	須恵器	环、蓋	33%	口径 12.0 器高 4.7	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	灰色 やや不良	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-9	I-S区	須恵器	环、蓋	20%	口径 13.0 器高 3.6	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	外表灰 内青色 良好	1mm以下の白、黑 色砂粒を含む	
-10	I-S区	須恵器	环、蓋	10%	口径 12.8 器高 4.7	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰 良好	密で3mm以下の砂 粒を若干含む	
-11	I-S区	須恵器	环、蓋	12%	口径 12.5 器高 4.7	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡褐色 良好	密で1mm以下の砂 粒を若干含む	
-12	I-S区	須恵器	环、蓋	16%	口径 12.4 器高 4.7	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外表灰 内灰 良好	密で砂粒を殆ど含 まない	
-13	I-S区	須恵器	环、蓋	14%	口径 12.8 器高 4.7	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外表灰 内灰 良好	密で砂粒を殆ど含 まない	
-14	I-S区	須恵器	环、蓋	20%	口径 13.2 器高 4.7	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外表灰 内灰 良好	密で砂粒を殆ど含 まない	
-15	I-S区	須恵器	环、蓋	9%	口径 14.0 器高 4.8	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外表面灰 内底褐色 良好	密	
-16	I-S区	須恵器	环、蓋	19%	口径 12.3 器高 4.8	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡褐色 良好	密で砂粒を殆ど含 まない	
-17	I-S区	須恵器	环、蓋?	20%	口径 12.2 器高 3.8	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡褐色 良好	密で1mm以下の砂 粒を含む	
-18	I-S区	須恵器	环、蓋	34%	口径 12.5 器高 4.5	外面:ハラ切後ナヂ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	青灰 良好	極密	
-19	I-S区	須恵器	环、蓋		口径 13.0 器高 4.5	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	白灰色 良好	密で1mm以下の砂 粒を含む	
-20	I-S区	須恵器	环、蓋	12%	口径 13.0 器高 4.5	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡褐色 良好	密で砂粒を殆ど含 まない	
-21	I-S区	須恵器	环、蓋	15%	口径 15.1 器高 4.5	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外表灰 内底褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-22	I-S区	須恵器	环、蓋	15%	口径 12.1 器高 4.5	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外表青灰 内底灰 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-23	I-S区	須恵器	环、蓋	50%	口径 12.7 器高 4.8	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-24	I-S区	須恵器	环、蓋	20%	口径 14.2 器高 3.8	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	暗灰色 良好	密で1mm前後の砂 粒を含む	
25	I-S区	須恵器	环、蓋	12%	口径 12.4 器高 3.8	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰色 良好	密で1mm以下の白 色砂粒を微量含む	
26	I-S区	須恵器	环、蓋	45%	口径 12.0 器高 4.5	外面:ハラ切後ナヂ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	青灰 良好	密	
27	I-S区	須恵器	环、蓋	20%	口径 10.8 器高 4.5	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰色 良好	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-28	I-S区	須恵器	アマ付蓋		アマ径 2.5 器高 4.5	外面:回転ヘリカス、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナヂ	青灰 良好	1mm以下の砂粒を 多く含む	
-29	I-S区	須恵器	环、蓋		アマ径 2.5 器高 4.5	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外表灰 内底灰 良好	2mm以下の白、黑 茶色の砂粒を含む	

第8表 出土土器観察表(8)

図版号	出土地点	種類	備考	残存率 (%)	法量 (cm)	調整・技法	色 調	質 感	土 種 考	
							外観	内面	外観	内面
第53回 -30	I-S区 SR01	須恵器 环、蓋				外面:ハナ切り、ミコナ 内面:ミコナ	青灰色 良好	少量の砂粒を含む	△	
	-31 I-S区 SR01	須恵器 环、蓋				外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外輪灰褐色 内輪灰褐色 良好	滑で1mm以下の白 色砂粒を含む		
第54回 -1	I-S区 SR01	須恵器 环、身		50%	口径 12.0 器高 3.8	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	滑で1mm以下の白 色砂粒を多く含む	△	
	-2 I-S区 SR01	須恵器 环、身		30%	口径 12.4 器高 5.1	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	灰色 良好	1mm以下の砂粒を 少許含む		
-3 I-S区 SR01	須恵器 环、身			24%	口径 12.1	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外輪灰褐色 内輪灰褐色 良好	滑で1mm以下の白 色砂粒を若干含む	△	
	-4 I-S区 SR01	須恵器 环、身		30%	口径 12.6 器高 4.5	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	淡灰褐色 食筋	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-5 I-S区 SR01	須恵器 环、身			25%	口径 10.4 器高 4.1	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	滑で黑色粒子を多 く含む	△	
	-6 I-S区 SR01	須恵器 环、身		20%	口径 11.1	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外輪灰褐色 内灰褐色 良好	滑で1mm以下の白 色砂粒を含む		
-7 I-S区 SR01	須恵器 环、身				口径 12.0 底径 14.3	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外輪灰褐色 内灰褐色 良好	滑で1mm以下の白 色砂粒を微量含む	△	
	-8 I-S区 SR01	須恵器 环、身		20%	口径 13.8 器高 4.7	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ	外輪灰褐色 内淡灰褐色 良好	滑で1mm以下の白 色砂粒を含む		
-9 I-S区 SR01	須恵器 环、身			80%	口径 11.7 器高 3.9	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外灰褐色 内淡青灰色 やや不良	滑で1mm以下の白 色砂粒を少量含む	△	
	-10 I-S区 SR01	須恵器 环、身		90%	器高 6.3	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外輪灰褐色 内灰褐色 良好	滑で1mm以下の白 色砂粒を多く含む		
-11 I-S区 SR01	須恵器 环、身				口径 12.0	外面:ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	滑で0.5mm以下の 黑色砂粒を含む	△	
	-12 I-S区 SR01	須恵器 环、身		35%	口径 12.2 器高 4.0	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	青灰褐色 良好	滑で1mm以下の白 色砂粒を含む		
-13 I-S区 SR01	須恵器 环、身			25%	口径 11.6 器高 3.5	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外輪灰褐色 内淡灰褐色 良好	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	△	
	-14 I-S区 SR01	須恵器 环、身		10%	口径 11.8 器高 3.5	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	青灰色 良好	白色砂粒を少量含 む		
-15 I-S区 SR01	須恵器 环、身			23%	口径 12.2	外面:ミコナ 内面:ミコナ	青灰色 良好	1mm前後の砂粒を 微量含む	△	
	-16 I-S区 SR01	須恵器 环、身		10%	口径 11.0 器高 3.6	外面:ミコナ 内面:ミコナ	淡灰褐色 やや小瘤 無	滑で砂粒を殆ど含 まない		
-17 I-S区 SR01	須恵器 环、身			17%	口径 10.6 器高 3.6	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	青灰褐色 良好	白色砂粒を少許含 む	△	
	-18 I-S区 SR01	須恵器 环、身		25%	口径 10.8 器高 3.6	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む		
-19 I-S区 SR01	須恵器 环、身			80%	口径 12.6 器高 3.75	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外輪灰褐色 内灰褐色 型崩	1mm以下の白色砂 粒を多く含み、1mm 前後の穴が多数有 る	△	
	-20 I-S区 SR01	須恵器 环、身		22%	口径 10.6 器高 3.4	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外青灰褐色 内セピア 良好	白色砂粒を含む		
-21 I-S区 SR01	須恵器 环、身			35%	口径 11.9	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ	暗灰褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	△	
	-22 I-S区 SR01	須恵器 环、身		45%	口径 11.5 器高 3.9	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ	明青灰褐色 良好	滑で1mm前後の白 色砂粒を多く含む		
-23 I-S区 SR01	須恵器 环、身				口径 11.0 器高 3.3	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	暗灰褐色 良好	2mm以下の砂粒を 若干含む	△	
	-24 I-S区 SR01	須恵器 环、身		20%	口径 11.0 器高 3.8	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外青褐色 内深青褐色 普通	1mm以下の白、黑 色砂粒を若干含む		
-25 I-S区 SR01	須恵器 环、身			15%	口径 11.4 器高 3.5	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ、静止ナ	外青灰褐色 内セピア 良好	白色砂粒を含む	△	
	-26 I-S区 SR01	須恵器 环、身		20%	口径 12.4 器高 4.0	外面:回転ハナカツリ、ミコナ 内面:ミコナ	外輪灰褐色 内灰褐色 やや不良	1mm以下の砂粒を 含む		
-27 I-S区 SR01	須恵器 环、身			12%	口径 11.5	外面:ミコナ 内面:ミコナ	白灰褐色 小良	滑で砂粒を極微量 含む	△	
	-28 I-S区 SR01	須恵器 环、身		17%	口径 11.4	外面:ミコナ 内面:ミコナ	灰色 良好	砂粒を殆ど含まな い		

第9表 出土土器観察表(9)

団番号	出土地点	種類	器形	残存率 (%)	寸法 (cm)	調査・技法	色調成	胎土	備考
第54回 -29	I-S区 SR01	須恵器	环、身	10%	口径 10.2 器高 3.7	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナギ	外著灰色 内セピア 良好	白色砂粒を含む	
-30	I-S区 SR01	須恵器	环、身	15%	口径 10.8	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナギ	淡灰色 良好	白色砂粒を少量含む	
-31	I-S区 SR01	須恵器	环、身	24%	口径 11.2	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	白色砂粒を少量含む	
-32	I-S区 SR01	須恵器	环、身	16%	口径 11.2	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を 少量含む	
-33	I-S区 SR01	須恵器	环、身	13%	口径 11.4	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
第55回	I-S区 -1 SR01	須恵器	环、身	20%	口径 10.8	小窓	淡灰色 普通	白、黑色砂粒を多 く含む	
-2	I-S区 SR01	須恵器	环、身	25%	口径 10.6	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡青灰色 やや不良	やや削で3mm以下 の砂粒を多く含む	
-3	I-S区 SR01	須恵器	环、身	35%	口径 10.8	不明	外著灰色 内淡灰色	3mm以下の砂粒を 多く含む	
-4	I-S区 SR01	須恵器	环、身	18%	口径 11.6	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナギ	青灰色 良好	密で極少砂粒を微 量含む	
-5	I-S区 SR01	須恵器	环、身	10%未 器高	口径 12.2	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外著灰色 内淡灰色	1mm以下の白色砂 粒を少し、黒色粒 子を多少含む	
-6	I-S区 SR01	須恵器	环、身	25%	口径 12.1	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナギ	外褐青色 内著灰色	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	I-S区 SR01	須恵器	环、身	25%	口径 10.4	外面:中央ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナギ	青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-8	I-S区 SR01	須恵器	环、身	50%	口径 11.2	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰 良好	密で1mm以下の白 色砂粒を微量含む	
-9	I-S区 SR01	須恵器	环、身	10%未 器高	口径 12.4	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外淡青色 内灰茶	0.5mm以下の白色 砂粒を含む	ハル記号
-10	I-S区 SR01	須恵器	环、身	100%	口径 13.7	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰 やや不良	1mm以下の白色粒 子(黄石)を含む	
-11	I-S区 SR01	須恵器	环、身	11%未 器高	口径 11.6	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	白色砂粒を含む	
-12	I-S区 SR01	須恵器	环、身	60%	口径 11.2	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナギ	暗青灰色 良好	密で1mm以下の黑 色砂粒を含む	
-13	I-S区 SR01	須恵器	环、身	24%	口径 11.6	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナギ	灰 良好	3mm前後の砂粒を やや多く含む	
-14	I-S区 SR01	須恵器	环、身	45%	口径 10.9	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	密で砂粒をあまり 含まない	
-15	I-S区 SR01	須恵器	环、身	25%	口径 11.1	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	紫灰色 良好	密で0.5mm以下の 砂粒を多く含む	
-16	I-S区 SR01	須恵器	环、身	20%	口径 11.1	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	井干有り 受運異形
-17	I-S区 SR01	須恵器	环、身	30%	口径 12.5	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外著灰色 内深灰色	1mm以下の白色砂 粒、黒色粒子を多 く含む	
-18	I-S区 SR01	須恵器	环、身	21%	口径 11.8	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰褐色 やや不良	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-19	I-S区 SR01	須恵器	环、身	20%	口径 11.9	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外褐色 内淡褐色	0.5mm以下の白色 砂粒を若干含む	
-20	I-S区 SR01	須恵器	环、身	85%	口径 12.0	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡青褐色 良好	密で2mm以下の白 色砂粒を含む	底部へ底有り 色砂粒を含む
-21	I-S区 SR01	須恵器	环、身	42%	口径 11.1	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	淡褐色で白色微砂を 少量含む	
-22	I-S区 SR01	須恵器	环、身	25%	口径 11.0	外面:ヨコナギ、静止ナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	微密	
-23	I-S区 SR01	須恵器	环、身	26%	口径 10.8	外面:ヨコナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	白色砂粒を若干含 む
-24	I-S区 SR01	須恵器	环、身	22%	口径 10.4	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外セピア 内著灰色	砂粒を殆ど含ま ない	
-25	I-S区 SR01	須恵器	环、身	24%	口径 12.6	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	砂粒を殆ど含ま ない	
-26	I-S区 SR01	須恵器	环、身	20%	口径 10.0	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰 良好	密で砂粒をあり 含まない	
-27	I-S区 SR01	須恵器	环、身	5%	口径 12.1	外面:回転ヘリテザリ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外青灰色 内淡褐色	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-28	I-S区 SR01	須恵器	环、身	8%	口径 13.6	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	白色砂粒を含む	

第10表 出土土器観察表(10)

版号	出土地点	備 記	器 様	残存率 (%)	法 量 (cm)	調 整・技 法	色 調 焼	胎 土	備 考
第56回	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏	12.5%	口径 16.4	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	暗灰色 良好	白色砂粒を含む	
-2	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏	16%	口径 14.8	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	砂粒を殆ど含まない	
-3	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏	5%	口径 14.2	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	灰色 良好	街で砂粒を極度に含む	
-4	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏	30%	底径 9.15	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外暗灰色 内淡青灰 良好	2mm以下の白色砂粒を含む	
-5	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏	20%	底径 9.7		淡灰色 不良	1mm以下の白色砂粒を含む	
-6	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏				やや不良	2mm以下の砂粒を含む	
-7	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏			外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナゲ	淡灰色 良好	少量の砂粒を含む	
-8	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏			外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナゲ	白灰色 良好	0.5mm以下白色砂粒を少く含む	
-9	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏			外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ、静止ナゲ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を含む	3方透かし
-10	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏脚部	30%	底径 10.2	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を少く含む	2方透かし
-11	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏脚部	25%	底径 10.4	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
-12	I-S区 SR01	須 恵 器	高坏脚部	16%	底径 10.8		淡灰色 不良	1mm以下の砂粒を含む	
-13	I-S区 SR01	須 恵 器	並底部			外面:凹輪ハケナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外青灰色 良好	街で1mm以下の白色砂粒を含む	
-14	I-S区 SR01	須 恵 器	短脚部			外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
-15	I-S区 SR01	須 恵 器	長脚部		口径 9.2	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
-16	I-S区 SR01	須 恵 器	壺	25%	口径 8.6	外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を少く含む	
-17	I-S区 SR01	須 恵 器	小型壺		口径 8.0	外面:凹輪ハケナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を含む	
-18	I-S区 SR01	須 恵 器	壺?	14%		外面:凹輪ハケナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を少く含む	
-19	I-S区 SR01	須 恵 器	小型壺?			外面:凹輪ハケナギ、ヨコナギ 内面:ヨコナギ	暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を少く含む	
-20	I-S区 SR01	須 恵 器	壺			外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	外暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
-21	I-S区 SR01	須 恵 器	壺			外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	淡灰色 良好	3mm以下の砂粒を少く含む	
-22	I-S区 SR01	須 恵 器	壺	5%		外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	砂粒を少量含む	
23	I-S区 SR01	須 恵 器	壺?	5%		外面:ヨコナギ 内面:ヨコナギ	青灰色 良好	砂粒を少量含む	
第57回	I-S区 -1 SR01	土 鍋 器	壺	13%	口径 13.8	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ハラナギ	淡灰色 普通	3mm以下の砂粒を含む	
-2	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	5%	口径 14.6	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ハラナギ	淡青灰色 普通	1mm以上の白色砂粒を若干含む	又底有り
-3	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	15%	口径 13.8	口縁:内外ヨコナギ	淡褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-4	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	3%	口径 20.2	外面:ハラ 胴部内:ヨコナギ	淡黄灰色 普通	5mm以下の白色砂粒を多く含む	
-5	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	42%	口径 16.0	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ヨコナギ	淡茶灰色 普通	3mm以下の白色砂粒を若干含む	
-6	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	6%	口径 19.4	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ヨコナギ	淡黄色 普通	1mm以下の白色砂粒を含む	
-7	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	10%	口径 19.8	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ヨコナギ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂粒を黒底有り	
-8	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	13%	口径 22.2	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ハラナギ	淡青白色 普通	0.5~2mmの砂粒を多量に含む	
-9	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	10%	口径 18.0	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ヨコナギ	淡茶褐色 普通	1mm以下の白色砂粒を含む	
-10	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	15%	口径 17.7	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ハラナギ	外赤褐色 普通	1mm以下の白色砂粒を多く含む	
-11	I-S区 SR01	土 鍋 器	壺	17%	口径 23.4	口縁:内外ヨコナギ 胴部内:ヨコナギ	暗灰色 普通	4mm以下の砂粒を含む	

第11表 出土土器観察表 (11)

図 番 号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調査・技法	色調 調成	胎土	備考
第57回 -12	I-S区 SR01	土師器	甕	26%	口径 19.0	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	淡黄灰色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-13	I-S区 SR01	土師器	甕	12%	口径 30.0	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	スズ底有り
第58回 -1	I-S区 SR01	土師器	甕	8%	口径 23.0	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	淡黄色 普通	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-2	I-S区 SR01	土師器	甕	15%	口径 20.0	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ 内面:コナデ、ハラズリ	淡黄色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-3	I-S区 SR01	土師器	甕	7%	口径 22.2	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ、ハラズリ	外壁褐色 内底褐色	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-4	I-S区 SR01	土師器	甕	10%	口径 26.8	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	外壁黄色 内底普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-5	I-S区 SR01	土師器	甕	25%	口径 20.8	口縁:内外コナデ	淡黄灰色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-6	I-S区 SR01	土師器	甕	23%	口径 15.6	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡黄色 普通	5mm以下の砂粒を やや多く含む	スズ底有り
-7	I-S区 SR01	土師器	甕	26%	口径 14.86	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を 若干含む	
-8	I-S区 SR01	土師器	甕	10%	口径 18.0	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を やや多く含む	
-9	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 23.2	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-10	I-S区 SR01	土師器	甕	15%	口径 23.9	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-11	I-S区 SR01	土師器	甕	6%	口径 19.0	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	4mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-12	I-S区 SR01	土師器	甕	30%	口径 15.0	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
13	I-S区 SR01	土師器	甕	6%	口径 10.4	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	茶褐色 普通	4mm以下の砂粒を 含む	
-14	I-S区 SR01	土師器	甕	16%	口径 12.0	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	スズ底有り
-15	I-S区 SR01	土師器	甕	25%	口径 11.6	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	外壁灰 内底灰色	2mm以下の砂粒を 含む	
-16	I-S区 SR01	土師器	甕	22%	口径 10.8	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	茶褐色 普通	4mm以下の砂粒を 含む	
-17	I-S区 SR01	土師器	甕	10%	口径 11.0	外縁:ハラズリ 胴部内:ハラズリ	板褐色 普通	5mm以下の砂粒を 含む	
-18	I-S区 SR01	土師器	甕	6%	口径 12.6	胴部内:ハラズリ	初灰 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
第59回 -1	I-S区 SR01	土師器	甕	28%	口径 16.0	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	淡黄灰色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-2	I-S区 SR01	土師器	甕	16%	口径 11.6	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	淡黄色 普通	2mm以下の砂粒を 若干含む	
-3	I-S区 SR01	土師器	甕	22%	口径 20.2	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	外壁灰 内底灰 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-4	I-S区 SR01	土師器	甕	25%	口径 15.0	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	1mm以下の黑色砂 粒を含む	スズ底有り
-5	I-S区 SR01	土師器	甕	80%	口径 21.4	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-6	I-S区 SR01	土師器	甕	12%	口径 17.8	口縁:内コナデ 胴部内:ハラズリ	外壁黄 内底灰 普通	2mm以下の砂粒を 少許含む	
-7	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 12.4	胴部内:ハラズリ	淡黄色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	スズ底有り
-8	I-S区 SR01	土師器	甕	100%	口径 16.5	口縁:内外コナデ 最高 25.5 胴部内:ハラズリ	淡黄褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-9	I-S区 SR01	土師器	甕	14%	口径 15.6	小口	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-10	I-S区 SR01	土師器	甕	17%	口径 16.2	胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	スズ底有り
-11	I-S区 SR01	土師器	甕	12%	口径 16.6	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	淡黄褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-12	I-S区 SR01	土師器	甕	12%	口径 17.6	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-13	I-S区 SR01	土師器	甕	13%	口径 18.2	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	暗褐色 普通	3mm以下の砂粒を スズ底有り 含む	
-14	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 22.2	口縁:内外コナデ 胴部内:ハラズリ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を スズ底有り 含む	
15	I-S区 SR01	土師器	甕	12%	口径 23.0	口縁:内外コナデ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	

第12表 出土土器観察表(12)

団体名	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調整・技法	色調	調査	胎土	備考
地60回	I-S区 SR01	土師器	甕	7%	口径 27.0	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡赤褐色 普通	4mm以下の砂粒を含む	黒斑有り	
-2	I-S区 SR01	土師器	甕	20%	口径 19.6	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む		
-3	I-S区 SR01	土師器	甕	15%	口径 27.2	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を含む		
-4	I-S区 SR01	土師器	甕	60%	口径 14.9	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	外淡褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を含む 内赤茶褐色 良好		
-5	I-S区 SR01	土師器	甕	18%	口径 24.6	不明	淡黄褐色 普通	6mm以下の白色砂粒を若干含む		
-6	I-S区 SR01	土師器	甕	16%	口径 14.4	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	淡茶色 普通	1mm以下の白色砂粒を少量含む		
-7	I-S区 SR01	土師器	甕	18%	口径 23.0	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡黄色 良好	3mm以下の白色砂粒を若干含む		
-8	I-S区 SR01	土師器	甕	20%	口径 13.4	胴部内:ハタケ	淡茶色 普通	3mm以下の砂粒を含む	太底有り	
9	I-S区 SR01	土師器	甕	11%		口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を含む		
-10	I-S区 SR01	土師器	甕	34%	口径 14.2	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡灰褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む		
-11	I-S区 SR01	土師器	甕		口径 23.0	胴部内:ハタケ	褐色 普通	3mm以下の砂粒を含む		
-12	I-S区 SR01	土師器	甕	5%	口径 21.0	胴部内:ハタケ	外深褐色 普通	7mm以下の砂粒を含む		
-13	I-S区 SR01	土師器	甕	10%		胴部内:ハタケ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を含む		
14	I-S区 SR01	土師器	甕	10%	口径 15.8	外面:ハタケ 胴部内:ハタケ	外淡褐色 普通	3mm以下の砂粒をやや多く含む		
-15	I-S区 SR01	土師器	甕	10%	口径 13.0	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	淡黄色 普通	2mm以下の砂粒を含む		
地61回	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 18.4	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡茶色 普通	4mm以下の白色砂粒を含む		
-2	I-S区 SR01	土師器	甕	16%	口径 22.0	不明	淡灰褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む		
3	I-S区 SR01	土師器	甕	20%	口径 21.6	不明	外淡褐色 普通	2mm以下の白、黒、赤茶色の砂粒を含む		
-4	I-S区 SR01	土師器	甕	10%	口径 18.0	胴部内:ハタケ	淡黄色 普通	3mm以下の砂粒をやや多く含む		
-5	I-S区 SR01	土師器	甕	2%	口径 20.4	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡褐色 普通	1mm以下の砂粒を含む		
-6	I-S区 SR01	土師器	甕	14%	口径 21.4	口縁:内外コナヂ	淡灰褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	黒斑有り	
-7	I-S区 SR01	土師器	甕	10%	口径 21.2	口縁:内外コナヂ	茶色 やや不良	2mm以下の砂粒を含む(黒斑片含む)	太底有り	
-8	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 24.0	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂粒を含む		
-9	I-S区 SR01	土師器	甕	20%	口径 20.2	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	淡褐色 普通	4mm以下の砂粒を含む		
-10	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 22.8	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	外淡褐色 普通	4mm以下の砂粒を含む		
-11	I-S区 SR01	土師器	甕	16%	口径 22.0	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	淡茶色 普通	1mm以下の白色砂粒を若干含む	太底有り	
-12	I-S区 SR01	土師器	甕	20%	口径 18.7	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	外茶褐色 普通	5mm以下の白色砂粒を多量に含む		
-13	I-S区 SR01	土師器	甕	19%	口径 22.8	口縁:内外コナヂ、ハタケ 胴部内:ハタケ	淡黄褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む		
-14	I-S区 SR01	土師器	甕	25%	口径 23.0	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	黄褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を含む		
-15	I-S区 SR01	土師器	甕	20%	口径 16.2	胴部内:ハタケ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を含む		
-16	I-S区 SR01	土師器	甕	8%	口径 24.2	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	淡灰褐色 普通	4mm以下の砂粒を含む		
-17	I-S区 SR01	土師器	甕	35%	口径 11.8	口縁:内外コナヂ 胴部内:ハタケ	淡茶色 普通	4mm以下の砂粒を含む		
地62回	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 24.4	胴部内:ハタケ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む		
-1	I-S区 SR01	土師器	甕	15%	口径 18.4	口縁:内外コナヂ	褐色 普通	2mm以下の砂粒を若干含む	黒斑有り	

第13表 出土土器観察表(13)

図版 番号	出土地点	断面 形状	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調査・技法	色調 発達度	胎土	備考
第62回 -3	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 17.6	口縁:内外コナゲ 胴部内:ハナケリ	外液灰褐色 内液褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-4	I-S区 SR01	土師器	甕	13%	口径 19.2	口縁:内外コナゲ? 胴部内:ハナケリ	淡黄色 普通	6mm以下の砂粒を 含む	
5	I-S区 SR01	土師器	甕	15%	口径 21.6	不明	淡黄褐色 普通	6mm以下の砂粒を 若干含む	
-6	I-S区 SR01	土師器	甕	15%	口径 19.4	口縁:内外コナゲ 胴部内:ハナケリ	淡黄褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-7	I-S区 SR01	土師器	甕	5%	口径 26.8	口縁:内外コナゲ? 胴部内:ハナケリ	深褐色 普通	白色砂粒を含む	
-8	I-S区 SR01	土師器	甕	27%	口径 12.4	口縁:内外コナゲ 胴部内:ハナケリ	淡黄灰色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-9	I-S区 SR01	土師器	甕		口径 21.5		淡橙白黃 普通	2mm以下の砂粒を 多く含む	
-10	I-S区 SR01	土師器	甕	11%	口径 12.8	口縁:内外コナゲ 胴部内:ハナケリ	淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-11	I-S区 SR01	土師器	甕	16%	口径 22.6	胴部内:ハナケリ	外液銀褐色 内液黄色 普通	6mm以下の砂粒を 多く含む	黒斑有り
第63回	I-S区	土師器	高环						
-1	SR01					外面:ハナケリ 内面:コナゲ	淡黄褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-2	I-S区 SR01	土師器	高环			外面:ハナケリ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	I-S区 SR01	土師器	高环			外面:コナゲ?/ハナケリ 内面:コナゲ?	外液褐色 内赤茶褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
4	I-S区 SR01	土師器	高环			外面:ハナケリ?	淡紫色 普通	2mm以下の砂粒を 少量含む	
-5	I-S区 SR01	土師器	高环			胴内面:刺穴候有り	森黄褐色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-6	I-S区 SR01	土師器	高环			外面:ハナケリ 内面:コナゲ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	I-S区 SR01	土師器	高环	20%	口径 15.4	外面:コナゲ? 内面:コナゲ?	棕色 普通	2mm以下の砂粒を 少量化	
-8	I-S区 SR01	土師器	高环	16%	口径 15.9	外面:コナゲ? 内面:コナゲ?	外液赤褐色 内赤褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-9	I-S区 SR01	土師器	高环?	14%	口径 14.2	不明	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 微量含む	
-10	I-S区 SR01	土師器	高环	13%	口径 15.0		淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 微量含み、鐵粉	
11	I-S区 SR01	土師器	高环脚部	100%	底径 10.3	不明	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を含む	
-12	I-S区 SR01	土師器	鉢	30%	口径 8.8	外液:コナゲ 内面:ハナケリ、コナゲ	外液赤褐色 内液褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒、鐵粉をやや多く 含む	双旗有り
-13	I-S区 SR01	土師器	鉢?	18%	口径 10.6	不明	淡黄褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-14	I-S区 SR01	土師器	鉢?	6%	口径 16.8	小明	淡褐色 普通	1mm以下の砂粒を 含む	
-15	I-S区 SR01	土師器	鉢	60%	口径 12.9 器高 5.5	不明	赤褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-16	I-S区 SR01	土師器	鉢	9%	口径 16.0	小明	淡褐色 普通	1mm以下の砂粒を 含む	
-17	I-S区 SR01	土師器	鉢	30%	口径 11.1 器高 4.9	内底:一部静止コナゲ	外液赤褐色 内赤褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	黒斑有り
-18	I-S区 SR01	土師器	鉢	12%	口径 12.4 器高 4.3	小明	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 若干含む	
-19	I-S区 SR01	土師器	製塙土器		口径 6.6 器高 7.7	外液:ハナケリ 内底:コナゲ?	明黄褐色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-20	I-S区 SR01		土鍵				淡褐色 普通	3mm以下の砂粒を 少量化	
第64回	I-S区 -1	土師器	甕	100%	口径 28.4 器高 31.6	外液:ハナケリ 胴部内:ハナケリ	淡褐色 普通	1mm以下の砂粒を 含む	
2	I-S区 SR01	土師器	甕	22%	口径 27.2	胴部内:ハナケリ	棕褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	I-S区 SR01	土師器	甕				淡黄褐色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
4	I-S区 SR01	土師器	甕	12%	口径 26.6	口縁:内外コナゲ 胴部内:ハナケリ	赤褐色 普通	白色、灰色の砂粒 を含む	
第65回	I-S区 -1	土師器	甕?	12%	口径 19.6	外液:ハナケリ 胴部内:ハナケリ	外液赤褐色 内液茶褐色 普通	4mm以下の砂粒を 含む	

第14表 出土土器観察表(14)

同版 番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調査・技法	色調 調成	胎土	備考
							内部:ヘラケツリ	4mm以下の砂粒を含む	
第658区	I-S区	土器	瓢箪形	9%	口径 33.6 底径 21.6	口縁:内外面コナチ 内部:ヘラケツリ	淡茶色 普通	4mm以下の砂粒を含む	
	-2 SR01	土器	瓢				淡褐色 普通	1mm以下の砂粒を含む	
	-3 I-S区 SR01	土器	瓢				外底褐色 内底茶褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-4 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外底褐色 内底茶褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
第660区	I-S区	土器	瓢	12%	口径 24.0 底径 21.0	口縁:内外コナチ 内部:ヘラケツリ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
	-1 I-S区 SR01	土器	瓢				淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
	-7 I-S区 SR01	土器	瓢?				茶褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を多量に含む	
	-8 I-S区 SR01	土器	瓢				淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
第668区	I-S区	土器	瓢	26%	口径 30.6 底径 21.4	内部:ヘラケツリ	淡褐色 良好	白色砂粒を多く含む	
	-10 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外面:ハナ有り	茶色 普通	
	-11 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外面:粗いコビテ?	赤褐色 普通	
	-12 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外底:粗いコビテ?	淡黄灰褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む
第670区	I-S区	土器	瓢把手			外面:粗いコビテ?	淡黄色 普通	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-14 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外面:粗いコビテ?	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-1 I-S区 SR01	土器	瓢把手				淡茶色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-2 I-S区 SR01	土器	瓢把手				淡黄色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
第678区	I-S区	土器	瓢把手			外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	淡黄色 普通	4mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
	-4 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	淡黄灰褐色 普通	
	-5 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の白色砂粒を若干含み、比較的細緻	
	-6 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外底:粗いコビテ?	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
第680区	I-S区	土器	瓢把手			外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	淡黄灰褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-2 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-3 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-5 I-S区 SR01	土器	瓢把手				外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
第688区	I-S区	土器	瓢	5%	口径 33.6 底径 21.4	内部:内外面コナチ 内部:ヘラケツリ	淡灰色 普通	3mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-2 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	3mm以下の白色砂粒を若干含む	
	-3 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:コナチ?	4mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
	-4 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:コナチ?	5mm以下の砂粒を含む	
第690区	I-S区	土器	瓢			外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
	-5 I-S区 SR01	土器	瓢				淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
	-6 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の砂粒を含む	
	-7 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の砂粒を含む	
第698区	I-S区	土器	瓢			外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	淡褐色 普通	4mm以下の砂粒を含む	
	-2 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の砂粒を含む	
	-3 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	4mm以下の砂粒を含む	
	-4 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	3mm以下の白色砂粒を含む	
第700区	I-S区	土器	瓢			外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
	-5 I-S区 SR01	土器	瓢				淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
	-6 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の砂粒を含む	
	-7 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の砂粒を含む	
第708区	I-S区	土器	瓢			外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	淡褐色 普通	4mm以下の砂粒を含む	
	-2 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:コナチ? 内底:ハラケツリ	2mm以下の砂粒を含む	
	-3 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	4mm以下の砂粒を含む	
	-4 I-S区 SR01	土器	瓢				外底:粗いコビテ? 内底:ハラケツリ	3mm以下の白色砂粒を含む	

第15表 出土土器觀察表(15)

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調査・技法	色調 調成	胎土	備考
第73回	II区 S X01	須恵器	長颈瓶	100%	口径 10.7 基高 29.5 底径 12.0	外壁:ミコナテ、平行二段ねぎ 内面:ミコナテ	青灰褐色 青褐色 灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
2	EPK S X01	須恵器	环、蓋	10%	口径 12.4	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	青灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-3	II区 S X01	須恵器	环、身	15%	口径 10.8	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	青灰色 良好	密で1mm以下の砂粒を若干含む	
第76回	II区 S X02	須恵器	长颈瓶	100%	口径 8.0 基高 21.3 底径 7.9	外壁:内面:ハラギリ、ミコナテ 内面:ミコナテ	灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒及び黑色粘物を微量含む	一部自然雑有
-2	II区 S X02	須恵器	环	100%	口径 12.4 基高 4.5	外壁:内面:ハラギリ、ミコナテ 内面:ミコナテ、静止ナフ	灰褐色 良好	白色的砂粒を少量含む	
-3	II区 S X02	土器	甕	25%	口径 11.4	口縁:内外:ミコナテ 胴部内:ハラギリ	黄褐色 普通	2mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
第78回	II区 S X03	須恵器	环、身	15%	口径 10.8	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を微数含む	
第79回	II区 -1	須恵器	环、蓋	90%	口径 12.3 基高 3.0 底径 4.7	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ、ハラギリ 内面:ミコナテ、静止ナフ	淡灰褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-2	II区	須恵器	环、身	50%	口径 10.9 基高 3.0 底径 4.7	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	青灰色 良好	密で0.5mm以下の砂粒を含む	
-3	II区	須恵器	高环			外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
第84回	III-1区	繩文土器	深鉢			外壁:ミコナテ? 内面:ミコナテ?	暗赤色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
-1						内面:ミコナテ?			
-2	III-1区	弥生土器	甕				外壁:黄褐色 内壁:黄褐色 膏油	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-3	III-1区	弥生土器	甕	18%	口径 23.8	口縁:内外:ミコナテ	淡灰褐色 普通	2mm以下の白、黒色砂粒を若干含む	
-4	III-1区	弥生土器	甕	14%	口径 16.8	口縁:内外:ミコナテ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
5	III-1区	弥生土器	甕	13%	口径 20.0	口縁:内外:ミコナテ 胴部内:ハラギリ	淡褐色 普通	1mm以下の砂粒を少量含む	
6	III-1区	弥生土器	甕	15%	口径 16.0	小頭	淡灰褐色 普通	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-7	III-1区	弥生土器	甕	15%	口径 12.0	口縁:内外:ミコナテ 胴部内:ハラギリ、胴部外:ハラギリ	黑褐色 普通	3mm以下の白色砂粒を若干含む	
-8	III-1区	弥生土器	甕	19%	口径 14.6	口縁:内外:ミコナテ 胴部内:ハラギリ、ミキモ 胴部外:ハラギリ	淡灰褐色 普通	1mm以下の砂粒を含む	
-9	III-1区	弥生土器	甕か壺の底部	35%	底径 4.8	不明	淡灰褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-10	III-1区	弥生土器	甕か壺の底部	50%	底径 4.8	内面:ハラギリ	外壁:褐色 内壁:褐色 膏油	3mm以下の砂粒を若干含む	
-11	III-1区	弥生土器	甕か壺の底部		底径 4.4	外壁:ミコナテ 内面:静止ナフ	外壁:褐色 内壁:褐色 膏油	1mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
12	III-1区	弥生土器	甕か壺の底部	59%	底径 4.2	内面:ハラギリ	淡灰褐色 底面:黑色 普通	1mm以下の白色砂粒を多く含む	
13	III-1区	弥生土器	高环		口径 24.4	外壁:ハラギリ、ミコナテ 内面:ミコナテ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を多く含む	
-14	III-1区	弥生土器	甕	10%	口径 15.2	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	淡褐色 普通	1mm以下の砂粒を含む	
-15	III-1区	土器	甕	7%	口径 17.4	口縁:内外:ミコナテ 胴部内:ハラギリ	淡黄色 普通	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-16	III-1区	弥生土器	甕	2%	口径 16.2	口縁:内外:ミコナテ 胴部内:ハラギリ	淡灰褐色 普通	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
第85回	III-1区 -1	須恵器	环、蓋	13%	口径 12.4	外壁:内面:ハラギリ、ミコナテ 内面:ミコナテ	灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-2	III-1区	須恵器	环、蓋	19.5%	口径 12.8	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	灰褐色 良好	白色砂粒を含む	
3	III-1区	須恵器	环、蓋	19%	口径 14.8	外壁:内面:ハラギリ、ミコナテ 内面:ミコナテ	青灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-4	III-1区	須恵器	环、蓋	26%	口径 14.2	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	灰褐色 良好	3mm以下の白色砂粒を若干含む	
-5	III-1区	須恵器	环、蓋	11%	口径 13.0	外壁:ミコナテ 内面:ミコナテ	暗灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
-6	III-1区	須恵器	环、蓋	9.5%	口径 14.0	外壁:内面:ハラギリ、ミコナテ 内面:ミコナテ、静止ナフ	淡赤褐色 良好	3mm以下の砂粒をやや多く含む	
-7	III-1区	須恵器	环、蓋	14.5%	口径 15.0	外壁:内面:ミコナテ 内面:ミコナテ	淡灰色 良好	砂粒を殆ど含まず 精緻	

第16表 出土土器觀察表(16)

國 版 番 号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法 算 (cm)	調査・技法	色 調 度	胎 土 備 考
第85回 -8	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	12%	口徑 13.2	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の黒色砂粒を少數含む
-9	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	21%	口徑 13.4	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を少量含む
-10	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	20%	口徑 14.2	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 器高 5.0	暗青灰色 良好	1mm以下の砂粒を多く含む
-11	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	22.5%	口徑 14.2	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ	やや不良	普通
-12	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋		口徑 14.0	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	1-2mm程度の砂粒を含む
-13	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋		口徑 13.0	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 器高 3.8	淡灰色 良好	1mm程度の砂粒を含む
-14	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋		口徑 13.8	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ、ハリ切 器高 4.0	灰褐色 普通	2mm以下の黒・白 色砂粒を若干含む
-15	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	90%	口徑 12.1 器高 3.0	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ、ハリ切 内側:ヨコナギ、静止ナギ	外淡灰色 内明青灰 良好	街で1mm前後の白 色砂粒を含む 一部自然釉有 ハラ記号
-16	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋		外:回転ハリナギ、ヨコナギ、ハリ切 内側:ヨコナギ	灰色 良好	1mm以下の白色砂 子を多く含む	ハラ記号
-17	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋		外側:ヨコナギ、ハリ切後ナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-18	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋		外:回転ハリナギ、ヨコナギ、ハリ切 内側:ヨコナギ、静止ナギ	灰色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む	ハラ記号
19	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	50%	口徑 9.5 器高 3.0	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	外輪灰色 内輪青灰 良好	街で1mm前後の白 色砂粒を含む
-20	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	25%	口徑 9.6	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む
-21	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋		口徑 13.7 器高 4.3	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ	外端灰褐色 内端淡灰色 良好	1-2mm程度の砂 粒を含む
-22	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	14.5%	口徑 13.2 器高 4.6	外側:ヨコナギ、ハリ切 内側:ヨコナギ、静止ナギ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む
23	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋		口徑 12.1	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	外青灰青 内明青灰 良好	街で0.5mm程度の 白・黒色砂粒を少 量含む
-24	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	16%	口徑 12.6	外側:ヨコナギ、ハリ切後ナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 含む
-25	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	15.5%	口徑 12.8	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	普通
-26	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	50%	口徑 12.4 器高 4.0	外側:ヨコナギ、ハリ切後ナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	外輪灰褐色 内輪淡灰色 良好	普通
-27	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	25.5%	口徑 12.4	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む
-28	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	15%	口徑 12.0	外側:ヨコナギ、ハリ切後ナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	灰色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む
-29	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	23%	口徑 11.2	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	灰色 良好	砂粒を殆ど含まず 精緻
-30	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	21%	口徑 11.0	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少數含む
-31	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	21%	口徑 11.6	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 少數含む
32	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	22%	口徑 11.2	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少數含む
-33	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋	4%	口徑 10.3 器高 2.2	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ	灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を極めて含む
-34	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、蓋			外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を少數含む
第86回 -1	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、身	9%	口徑 12.6	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 若干含む
-2	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、身	12%	口徑 14.2	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む
-3	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、身	25%	口徑 13.1 器高 4.8	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 良好	密で砂粒を殆ど含 まない
-4	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、身	90%	口徑 12.2 器高 4.2	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	淡灰色 不良	1mm程度の砂粒を 含む
-5	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、身	80%	口徑 12.3 器高 4.7	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	暗青灰色 良好	街で1mm以下の白 色砂粒を若干含む
-6	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、身		口徑 11.9 器高 3.8	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	淡青灰色 良好	街で1-2mmの白 色砂粒を含む
-7	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、身	80%	口徑 12.6 器高 4.5	外側:回転ハリナギ、ヨコナギ 内側:ヨコナギ、静止ナギ	乳白色 不明	1mm未満の砂粒を 含む
-8	Ⅲ-1区	須 惠 器	坏、身	50%	口徑 11.4	外側:ヨコナギ 内側:ヨコナギ	淡灰色 やや不良	1mm以下の白色砂 粒を少數含む

第17表 出土土器観察表 (17)

図版 番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調整・按法	色調 焼成	胎土	備考
第86回 -9	Ⅲ-2区	須恵器	环、身	15%	口径 11.4 内径: 3コナ	外面: 3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	青灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
-10	Ⅲ-1区	須恵器	环、身		口径 10.2 内径: 4.1	外面: 圆軸ハラズ、3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	灰褐色 良好	2~3mmの砂粒を多く含む	
-11	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	50%	口径 11.6 内径: 4.1	外面: 圆軸ハラズ、3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	淡灰褐色 良好	外: 1~5mmの砂粒を多量に、内: 烧成度の砂粒を含む	
-12	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	24%	口径 10.8	外面: 3コナ 内面: 3コナ	淡灰色 良好	1mm以上の砂粒を微量含む	
-13	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	17%	口径 14.1	外面: 3コナ 内面: 3コナ	灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-14	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	29.5%	口径 10.5	外面: 圆軸ハラズ、3コナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-15	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	11%	口径 12.8	外面: 圆軸ハラズ、3コナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
16	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	23%	口径 10.4	外面: 圆軸ハラズ、3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-17	Ⅲ-1区	須恵器	环、身		口径 10.2	外面: 3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を含む	
-18	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	22%	口径 11.9 内径: 4.1	外面: 3コナ、ヘラ切り 内面: 3コナ、静止ナナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白・黒色砂粒を少量含む	
-19	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	80%	口径 11.6 内径: 4.1	外面: 3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	淡灰褐色 良好	1mm程度の砂粒を含む	
-20	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	19%	口径 10.8	外面: 3コナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-21	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	20%	口径 10.0	外面: 3コナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	白色砂粒を含む	
22	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	34%	口径 10.6	外面: 回転ハラズ、3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-23	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	25%	口径 10.3	外面: 3コナ、ヘラ切り後ナナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-24	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	25%	口径 9.8	外面: 3コナ 内面: 3コナ	外底白灰 内底灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を含む	
-25	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	16%	口径 10.6	外面: 3コナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を微量含む	
-26	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	24.5%	口径 9.0	外面: 3コナ、ヘラ切り後ナナ 内面: 3コナ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-27	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	16%	口径 10.4	外面: 3コナ 内面: 3コナ	灰褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を微量含む	
第87回 1	Ⅲ-1区	須恵器	环、身		口径 16.6 底径 5.2 底厚 10.0	外面: 3コナ 内面: 3コナ	灰褐色 良好	1~2mm程度の砂粒を含む	
2	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	10%	底径 8.7	外面: 3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	淡灰褐色 良好	1~3mm程度の砂粒を含み、かなり粗	
-3	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	24%	底径 9.4	外面: 3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	淡灰褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-4	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	14%	口径 15.0	外面: 回転ハラズ、3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ 底径?	淡灰褐色 やや不良	3mm以下の白色砂粒を少量含む	
-5	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	40%	口径 12.8	外面: 3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ 底径?	外底褐色 内底茶褐色 不良	1mm以下の白色砂粒を含む	
-6	Ⅲ-1区	須恵器	环、身	9%	口径 13.1	外面: 3コナ、ヘラ切り後ナナ 内面: 3コナ	灰褐色 普通	3mm以下の白色砂粒を若干含む	
-7	Ⅲ-1区	須恵器	环	12%	口径 12.4	外面: 3コナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を微量含む	
-8	Ⅲ-1区	土師器	环	16%	底径 7.0	不明	外底褐 内底普 通	1mm以下の砂粒を少量含む	
9	Ⅲ-1区	土師器	环		底径 7.8	不明	淡黄色 やや不良	1mm以下の砂粒を含む	
-10	Ⅲ-1区	須恵器	环	6%	口径 14.8 底径 7.0	不明 底径 6.0 手切り	灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を含む	
-11	Ⅲ-1区	須恵器	高环	35%	底径 12.3	不明	外底黄 内底土色 やや不良	1mm以下の白色砂粒を含む	
第88回 -1	Ⅲ-1区	須恵器	高环	26%	口径 15.6	外面: 3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	灰褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	4方透かし?
-2	Ⅲ-1区	須恵器	高环	60%	口径 14.1	外面: 3コナ 内面: 3コナ、静止ナナ	灰褐色 良好	1~2mm程度の砂粒を含む	
-3	Ⅲ-1区	須恵器	高环	10.5%	口径 14.6	外面: 3コナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-4	Ⅲ-1区	須恵器	高环	14%	口径 15.0	外面: 3コナ 内面: 3コナ	淡灰褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を含む	

第18表 出土土器観察表(18)

図版 番号	出土地点	種類・器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調査・技法	色調 焼成	胎土	備考
第88回 -5	III-1区	須恵器 高环				淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を若干含む	
-6	III-1区	須恵器 高环			外面:3コナナ 内面:3コナナ、静止ナナ	灰色 やや不良	3mm以下の黒色砂粒をやや多く含む	
-7	III-1区	須恵器 高环			外面:3コナナ 内面:静止ナナ	灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-8	III-1区	須恵器 高环			外面:3コナナ 内面:3コナナ、静止ナナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-9	III-1区	須恵器 高环			外面:3コナナ 内面:静止ナナ	外淡灰色 内灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を微量含む	
-10	III-1区	須恵器 高环			不明	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-11	III-1区	須恵器 高环			外面:3コナナ 内面:静止ナナ	灰色 良好	1mm以下の白・黑色砂粒を含む	2方透かし
-12	III-1区	須恵器 高环			不明	白灰褐色 不良	黒	
-13	III-1区	須恵器 高环			外面:3コナナ 内面:3コナナ、静止ナナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を含む	
-14	III-1区	須恵器 高环			外面:3コナナ 内面:静止ナナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を少量含む	3方透かし
-15	III-1区	須恵器 高环			外面:3コナナ 内面:静止ナナ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を複数の2方透かし含む	
-16	III-1区	須恵器 高环	底径 13.0		外面:3コナナ 内面:3コナナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を含む	2方切口透かし
-17	III-1区	須恵器 高环	底径 10.4		外面:3コナナ 内面:静止ナナ	外淡灰色 内淡灰褐色 良好	1mm程度の砂粒を含む	脚部自然釉有
-18	III-1区	須恵器 高环脚部	30%	底径 10.8	外面:3コナナ 内面:3コナナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	2方斜形透かし
-19	III-1区	須恵器 高环脚部	26%	底径 9.1	外面:3コナナ 内面:3コナナ	淡灰色 やや不良	2mm以下の白・黑色砂粒を若干含む	2方透かし
-20	III-1区	須恵器 高环脚部	16%	底径 9.4	外面:3コナナ 内面:3コナナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を少許含む	
-21	III-1区	須恵器 高环脚部	30%	底径 10.0	外面:3コナナ 内面:3コナナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-22	III-1区	須恵器 高环		底径 9.51	外面:3コナナ 内面:3コナナ、静止ナナ	黄色灰褐色 不良	1mm以下の砂粒を含む	黒灰白色的斑点有り
-23	III-1区	須恵器 高环	80%	底径 8.7	外面:3コナナ 内面:3コナナ、静止ナナ	外淡灰色 良好	1mm以下の白・黑色砂粒を含む	2方一段透かし
-24	III-1区	須恵器 高环	50%	底径 9.4	外面:3コナナ 内面:3コナナ	外灰褐色 内淡灰褐色 良好	1mm程度の砂粒を含む	切口透かし
-25	III-1区	須恵器 高环脚部	14%	底径 12.6	外面:3コナナ 内面:3コナナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-26	III-1区	須恵器 高环	15%	底径 8.0	外面:3コナナ 内面:静止ナナ	外灰褐色 内淡灰褐色 普通	1mm以下の白色砂粒を若干含む	1mm以下の白色砂粒を含む
-27	III-1区	須恵器 高环	35%	底径 10.5	外面:3コナナ 内面:静止ナナ	外灰褐色 内青灰褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を微量含む	2方一段透かし
-28	III-1区	須恵器 高环脚部	17%	底径 12.6	外面:3コナナ 内面:3コナナ	外淡灰褐色 内灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	外自然釉有
-29	III-1区	須恵器 高环脚部	12%	底径 12.6	外面:3コナナ 内面:3コナナ	外暗灰褐色 内淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
-30	III-1区	須恵器 高环脚部	14%	底径 11.8	外面:3コナナ 内面:3コナナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を含む	2方一段透かし
第89回 -1	III-1区	須恵器 壺	口径 12.8	口径:内外3コナナ 外壁:平行3コナナ後ナナ 内面:同心円内当て具抜	1mm以下の砂粒を若干含む	1mm以下の白色砂粒を含む		
-2	III-1区	須恵器 壺	11%	口径 22.2	口径:内外3コナナ	濃灰色 良好	3mm以下の砂粒を含む	
-3	III-1区	須恵器 壺	22%	口径 18.3	口径:内外3コナナ 外:平行3コナナ:當て具抜	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	一部自然釉有
-4	III-1区	須恵器 壺			内面:3コナナ	外淡灰褐色 内灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を微量含む	外自然釉有
-5	III-2区	須恵器 壺?	10%	口径 16.0	口径:内外3コナナ 内面:同心円内当て具抜	外淡灰褐色 内淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-6	III-1区	須恵器 壺			内外面:3コナナ	灰褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	

第19表 出土土器観察表(19)

面番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調査・技法	色調成	胎土	備考
第89回 III-1区	須恵器	壺				口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	灰褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7						内外面:3カナ 外底:3コナ	緑灰色 良好	3mm以下の砂粒を 微量含む	
-8	III-1区	須恵器	壺			底径 11.3	青紫灰色 良好	青紫灰色 良好	
-9	III-1区	須恵器	壺			口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ相当具族 内面:3コナ	青紫灰色 良好	青紫灰色 良好	
-10	III-1区	須恵器	壺	9% □径 13.4		口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ相当具族 内面:3コナ	酒青灰色 良好	1mm以下の白 色砂粒を少量含む	
-11	III-1区	須恵器	壺			口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ相当具族 内面:3コナ	酒青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-12	III-1区	須恵器	壺			口縁:内外コロチ	酒青灰色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む	
-13	III-1区	須恵器	壺			外面:3コナ 内面:3コナ	灰褐色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含む	
-14	III-1区	須恵器	握把手				灰褐色 良好	砂粒を殆ど含まず 粗粒	
第90回 III-1区	土師器	壺		25%	□径 17.8	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	酒青灰色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-1						口縁:22.0	酒青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
2	III-1区	土師器	壺	20%		口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	酒青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-3	III-1区	土師器	壺	50%	□径 23.2	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	茶褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を多量に含む	
-4	III-1区	土師器	壺	10%	□径 12.4	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	褐茶色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-5	III-1区	土師器	壺	75%	□径 19.3	口縁:3コナ、ハナズリ 内面:3コナ、ハナズリ	外淡茶褐色 内淡茶褐色 普通	5mm以下の白色砂 粒を多量に含む	
-6	III-1区	土師器	壺	9%	□径 20.6	外:3コナ、ハナズリ 内:3コナ、ハナズリ	酒青灰色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干に含む	
-7	III-1区	土師器	壺	50%	□径 15.0	内面:3コナ、ハナズリ	赤褐色 普通	白色砂粒を多く含 む	
-8	III-1区	土師器	壺	15%	□径 18.4	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-9	III-2区	土師器	壺	10%	□径 22.0	口縁:内外コロチ	褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-10	III-1区	土師器	壺	22%	□径 19.0	口縁:内外コロチ	淡褐灰色 普通	2mm以下の砂粒を やや多く含む	
-11	III-2区	土師器	壺	25%	□径 18.4	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	酒青色 普通	4mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-12	III-1区	土師器	壺	15%	□径 25.1	外淡茶褐色 内淡茶褐色 普通	外淡茶褐色 内淡茶褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒をやや多く含む 12.究石をやや多 く含む	
-13	III-1区	土師器	壺	21%	□径 16.2	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	酒青色 普通	2mm以下の砂粒を 多く含む	
-14	III-2区	土師器	壺	29%	□径 15.6	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	酒青灰色 普通	2mm以上の砂粒を やや多く含む	
-15	III-1区	土師器	壺	20%	□径 24.0	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	酒青灰色 普通	4mm以下の砂粒を 若干含む	
16	III-1区	土師器	壺	30%	□径 22.2	外:3コナ、ハナズリ 内:3コナ、ハナズリ	淡茶褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を多く含む	
第91回 III-1区	土師器	壺		55%	□径 16.4	外:3コナ、ハナズリ 内:3コナ、ハナズリ	外淡茶褐色 内淡茶褐色 普通	4mm以下の大めの 白色砂粒を多量に に含む	
1						内:3コナ、ハナズリ	良好		
2	III-1区	土師器	壺	17%	□径 24.0	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	酒青灰色 普通	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-3	III-1区	土師器	壺	20%	□径 19.9	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	黄褐色 普通	4mm以上の白色砂 粒を若干含む	
-4	III-1区	土師器	壺	13%	□径 31.0	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ	酒青灰色 普通	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-5	III-1区	土師器	壺		□径 9.6	口縁:内外コロチ 腹部内:ハナズリ、指痕止痕	外淡茶褐色 内赤茶褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を多量に含む	
-6	III-1区	土師器	壺	20%	□径 21.4	外:3コナ、ハナズリ 内:3コナ、ハナズリ	酒青褐色 良好	1mm次の砂粒を多 く含む	
-7	III-1区	土師器	高杯	20%	□径 13.6	外:3コナ 内:3コナ	酒青色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
8	III-1区	土師質土器	盃形皿	100%	□径 8.1	外:3コナ 内:3コナ	赤褐色 底高 良好	0.5mm以下の砂粒 を含む	
9	III-1区	土師器	高杯	26%	底径 9.0	外:3コナ 内:3コナ	淡褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
10	III-1区	土師器	高杯				黃褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	

第20表 出土土器観察表(20)

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調査・技法	色調	焼成	胎土	備考
第92図 1	Ⅱ-1区	土師器	壺	6%	口径 26.6	外側:コナラ、ハクチ 内側:コナラ、ヘタケ	淡茶色 普通	4mm以下の白色砂 粒を若干含む		黒斑有り
-2	Ⅱ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ 内側:ヘタケ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を少量含む		
-3	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 少度含む		
-4	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ	淡茶色 普通	2mm以下の白色砂 粒を少量含む		
-5	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を少量含む		
-6	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ 内側:ヘタケ	淡茶色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		
-7	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ 内側:ヘタケ	淡黄褐色 普通	3mm以下の砂粒を 含む		
-8	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-9	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ	淡黄褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-10	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-11	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		
-12	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ	淡黄色 普通	1mm以下の黑白 色砂粒を若干含む		
-13	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ 内側:ヘタケ	淡灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒を少度含む		
-14	Ⅲ-1区	土師器	瓢把手			外側:コナラ、一部ハクチ 内側:ヘタケ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 若干含む		
第93図 -1	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡黄褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む		貫通孔有り
-2	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡黄褐色 普通	3mm以下の砂粒を 若干含む		
-3	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 含む		
-4	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	黄褐色 良好	3mm以下の白色砂 粒を多く含む		
-5	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-6	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡黄褐色 普通	1mm以下の砂粒を 若干含む		
-7	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ、コピヤニ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-8	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-9	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ、指揮頭質、一部ハクチ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		
-10	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡黄褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		
第94図 -1	Ⅲ-1区	土師器	ガマ			外側:コナラ	淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 若干含む		
-2	Ⅲ-1区	土師器	ガマ底部			外側:コナラ、ヘタケ 内側:ヘタケ	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-3	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		
-4	Ⅲ-1区	土師器	土製支脚			外側:コナラ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-5	Ⅲ-1区	土師器	ガマ			外側:コナラ、コピヤニ 内側:ヘタケ	淡黄色 普通	2mm以下の砂粒を やや多く含む		
-6	Ⅲ-1区	土師器	ガマ底部			外側:コナラ 内側:ヘタケ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		
第95図 -1	Ⅲ-5区 SI04-床面	箋	壺	9%	口径 13.6	口縁:内側コナラ	淡褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-2	Ⅲ-5区 SD05	土師器	壺	25%	口径 14.8	外側:コナラ、ハクチ 内側:コナラ、ヘタケ	褐色 普通	2mm以下の黑白 色砂粒を多く含む		
第96図 1	Ⅲ-3区	繩文土器	深鉢			外側:コナラ 内側:ヘタケ	暗茶褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒、角閃石をやや 多く含む		縫合文
-2	Ⅲ-4区	繩文土器	深鉢			外側:コナラ 内側:灰岩	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒、角閃石を多く 含む		
-3	Ⅲ-4区	繩文土器	深鉢			外側:コナラ 内側:コナラ、2cm?	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒、角閃石を多く 含む		
-4	Ⅲ-5区	繩文土器	深鉢			外側:コナラ	暗茶褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を多く含む		

第21表 出土土器観察表 (21)

団 級 番 号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	測量・技法	色調 調成	胎土	備考
第10回 -5	Ⅲ-6区	繩文土器	鉢			内面:ミズ?	淡黄色 普通	3mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-6	Ⅲ-5区	弥生土器	要	14%	口径 13.2	小判	淡灰茶色 普通	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	Ⅲ-3区	弥生土器	壺环	15%	口径 20.8	外面:ハラナギ	淡茶色 普通	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-8	Ⅲ-4区	弥生土器	壺环				淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を多量含む	円形スジ
-9	Ⅲ-5区	弥生土器	壺环				淡橙色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-10	Ⅲ-4区	弥生土器	要か壺の 底部		底径 5.4	外面:コナギ 内面:コナギ	外淡黄灰 内淡灰色 普通	4mm以下の白色砂 粒を多量に含む	
-11	Ⅲ-3区	弥生土器	要か壺の 底部		底径 9.4	外面:コナギ 内面:コナギ	外茶褐色 内淡黑色 普通	2mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-12	Ⅲ-3区	弥生土器	要か壺の 底部		底径 4.4	小判	外淡黄灰 内淡黑色 普通	1mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-13	Ⅲ-5区	弥生土器	要か壺の 底部	30%	底径 5.6	外面:ミズ 内面:ハラナギ	外暗黄褐 内淡黄褐 良好	1mm以上の砂粒を多 く含む	外面黒斑有り
-14	Ⅲ-5区	弥生土器	要か壺の 底部		底径 4.8	外面:ハラナギ 内面:ハラナギ	外墨灰色 内淡灰色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	外面黒斑有り
-15	Ⅲ-4区	弥生土器	要か壺の 底部		底径 4.8	外面:ミズ 内面:コナギ	外暗茶色 内墨色 普通	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-16	Ⅲ-3区	弥生土器	要か壺の 底部		底径 13.6	外面:ハラナギ	淡灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-17	Ⅲ-3区	弥生土器	要か壺の 底部		底径 10.6	外面:コナギ	淡黄色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-18	Ⅲ-6区	弥生土器	要か壺の 底部		底径 6.2	小判	外淡黄灰 内淡黑色 普通	4mm以下の白色砂 粒を多く含む	
第10回 1	Ⅲ-3区	弥生土器	要	17%	口径 19.0	口縁:内コナギ 内面:ハラナギ	外淡茶褐 内帶灰色 普通	2mm以下の砂粒を 若干含む	
-2	Ⅲ-4区	弥生土器	要	27%	口径 18.0	口縁:内コナギ 内面:ハラナギ	外淡茶灰 内淡黄色 普通	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
3	Ⅲ-4区	弥生土器	要	6%	口径 17.4	小判	淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-4	Ⅲ-4区	弥生土器	要	11%	口径 12.2	内面:コナギ	緑色 普通	3mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-5	Ⅲ-6区	古式土師器	要	5%	口径 23.6	口縁:内外コナギ	外淡橙色 内淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-6	Ⅲ-5区	古式土師器	要		口径 11.3	口縁:内コナギ 内面:コナギ	淡黃白色 普通	2mm以下の白色砂 粒を多く含む	外面スジ有り
7	Ⅲ-3区	古式土師器	要	13%	口径 22.4	口縁:内コナギ	淡黄色 普通	2mm以下の砂粒を 微量含む	
-8	Ⅲ-3区	古式土師器	要			外面:コナギ内面:コナギ ハラナギ、指痕压痕	淡黄色 普通	1mm以下の砂粒を 微量含む	
-9	Ⅲ-3区	弥生土器	鉢形器台	23%		内面:コナギ	淡青褐色 良好	1~2mm程度の砂 粒を多く含む	
-10	Ⅲ-3区	弥生土器	鉢形器台	25%		内面:コナギ	淡青褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-11	Ⅲ-4区	弥生土器	脚付鉢			不明	淡青褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を多く含む	
12	Ⅲ-6区	弥生土器	底脚坏		底径 5.5	外面:コナギ	淡褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
13	Ⅲ-6区	弥生土器	底脚坏		底径 5.8	小判	淡黄褐色 普通	1mm以下の砂粒を 微量含む	
第10回 1	須恵器	环、壺		22%	口径 14.2	外面:内コナギハラナギ、コナギ 内面:コナギ、静止ナギ	淡褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-2	Ⅲ-5区	須恵器	环、壺	40%	口径 14.9	外面:内コナギハラナギ、コナギ 内面:コナギ、静止ナギ	灰褐色 普通	砂粒を多量に含む	
-3	Ⅲ-3区	須恵器	环、壺	9%	口径 14.8	外面:コナギ 内面:コナギ	外黑色 内灰色 普通	砂粒を若干含む	
-4	Ⅲ-4区	須恵器	环、壺	26%	口径 12.8	外面:内コナギハラナギ、コナギ 内面:コナギ、静止ナギ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-5	Ⅲ-4区	須恵器	环、壺	27%	口径 11.6	外面:内コナギハラナギ、コナギ 内面:コナギ、静止ナギ	淡褐色 やや不良	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	

第22表 出土土器観察表(22)

図版 番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法 量 (cm)	調査・技法	色 調 焼	胎 土	備 考
都03四 -6	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	32%	口径 13.8	外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 幾量含む	
-7	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	25%	口径 12.9 脚高 4.5	外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	淡灰色 やや不良	3mm以下の白色 砂粒を多く含む	
-8	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	14%	口径 13.6	外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ	青灰色 良好	青灰色 胎	
-9	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	11%	口径 14.4	外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-10	Ⅲ-4区	須 恵 器	坏、蓋	19%	口径 13.2	外面: コナデ 内面: コナデ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-11	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	50%	口径 12.8 脚高 3.9	外面: コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	淡灰褐色 やや不良	1-2mm程度の砂 粒を含む	
-12	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	75%	口径 12.3 脚高 3.7	外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	青灰色 良好	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-13	Ⅲ-4区	須 恵 器	坏、蓋	13%	口径 13.0	外面: コナデ 内面: コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-14	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	84%	口径 13.2 脚高 4.5	外面: ハマ切り、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	暗褐色 良好	約1mm前後の白 色砂粒を若干含む	
-15	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、蓋	60%	口径 12.0 脚高 4.4	外面: ハマ切り、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	青白灰色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-16	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋			外面: ハマ切り後ナデ、コナデ、ナズ リ 内面: コナデ、静止ナデ	灰色 普通	1mm以下の砂粒を 少量含む	△記号
-17	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、蓋	26%	口径 12.4	外面: コナデ 内面: コナデ	灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-18	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、蓋	80%	口径 10.7 脚高 4.2	外面: 回転ヘリテジ、コナデ、ヘラ 切り 内面: コナデ、静止ナデ	淡灰白色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-19	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、蓋			外面: ハマ切り後ナデ、コナデ 内面: コナデ	灰色 普通	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-20	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋		口径 11.0	外面: ハマ切り後ナデ、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	淡灰色 良好	3mm以下の白、黑 色砂粒を少量含む	
21	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	19%	口径 11.0	外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-22	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	10%	口径 11.0 脚高 3.6	外面: ハマ切り、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	淡灰色 良好	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-23	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、蓋	20%		外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: 静止ナデ	灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-24	Ⅲ-6区	須 恵 器	坏、蓋			外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-25	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、蓋			外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-26	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、蓋	15%		外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	淡灰白色 良好	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-27	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋				淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-28	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋				暗灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-29	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋			外面: 回転ヘリテジ、静止ナデ 内面: コナデ、静止ナデ	淡青灰色 良好	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-30	Ⅲ-4区	須 恵 器	坏、蓋			外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: 静止ナデ	外淡茶色 内淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-31	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	24%		外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: 静止ナデ	灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-32	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋			外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-33	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	12%	口径 15.0	外面: 静止ナデ 内面: コナデ	灰色 普通	白色砂粒を含む	
-34	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	22%	口径 11.0	外面: 回転ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ	淡灰色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-35	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋	20%	口径 12.2	外面: コナデ 内面: コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-36	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、蓋	8%	口径 13.6	外面: コナデ 内面: コナデ	淡灰色 良好	砂粒を殆ど含まず 精緻	
-37	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、蓋		口径 14.0	外面: コナデ 内面: コナデ	暗灰色 普通	1.5mm以下の砂粒 を多量に含む	
-38	Ⅲ-4区	須 恵 器	坏、蓋	10%	口径 12.6	外面: コナデ 内面: コナデ	淡褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
第0416 -1	Ⅲ-3区	須 恵 器	坏、身	20%	口径 11.6	外面: 山形ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ	淡灰色 良好	砂粒を殆ど含まず 精緻	
-2	Ⅲ-4区	須 恵 器	坏、身	30%	口径 12.2	外面: 山形ヘリテジ、コナデ 内面: コナデ、静止ナデ	青灰色 良好	2mm以下の砂粒を 含む	
-3	Ⅲ-5区	須 恵 器	坏、身	25%	口径 11.8	外面: コナデ 内面: コナデ	外淡灰色 内淡灰白 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	

第23表 出土土器観察表(23)

版 番 号	出土地點	種類	器 種	残存率 (%)	法 量 (cm)	調 査・採 法	色 調 成	胎 土	備 考
第104回 -4	III-4区	須恵器	环、身	24%	口径 13.2	外面:コナデ 内面:コナデ	灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-5	III-6区	須恵器	环、身	40%	口径 13.4	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-6	III-4区	須恵器	环、身	25%	口径 11.4	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	III-4区	須恵器	环、身	11%	口径 12.6	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-8	III-3区	須恵器	环、身		口径 12.6	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-9	III-5区	須恵器	环、身	32%	口径 11.2	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	淡灰色 不良	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-10	III-3区	須恵器	环、身	10%	口径 14.5	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ	白色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-11	III-4区	須恵器	环、身	30%	口径 11.2	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-12	III-5区	須恵器	环、身	25%	口径 11.1	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
13	III-3区	須恵器	环、身	13%	口径 11.8	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	灰色 良好	砂粒を殆ど含まず 稍細	外面一部自然胎有
-14	III-6区	須恵器	环、身	30%	口径 11.9	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ	白青灰褐色 良好	密で2mm前後の砂 粒を多く含む	
-15	III-5区	須恵器	环、身	20%	口径 10.8	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ	灰色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含み、稍細	
-16	III-3区	須恵器	环、身	10%未 器高	口径 10.8	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	灰褐色 良好	外表面灰褐色 内面灰褐色 良好	
-17	III-5区	須恵器	环、身	20%	口径 11.1	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	暗灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-18	III-6区	須恵器	环、身	12%	口径 13.6	外面:コナデ 内面:コナデ	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-19	III-5区	須恵器	环、身	15%	口径 11.4	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 器高 4.1	灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-20	III-4区	須恵器	环、身	80%	口径 10.5	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	淡灰褐色 良好	1mm程度の砂粒を 含む	
-21	III-1区	須恵器	环、身	11%	口径 12.8	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-22	III-3区	須恵器	环、身	25%	口径 12.2	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ	麻斑色 不良	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-23	III-4区	須恵器	环、身	9%	口径 11.8	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-24	III-3区	須恵器	环、身	35%	口径 13.0	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	黄褐色 不良	砂粒を殆ど含まず 稍細	
25	III-3区	須恵器	环、身	24%	口径 12.8	外面:コナデ 内面:コナデ	灰色 普通	砂粒を多量に含む	
-26	III-3区	須恵器	环、身	20%	口径 12.2	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-27	III-3区	須恵器	环、身	26%	口径 12.6	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	淡黄灰色 やや不良	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-28	III-5区	須恵器	环、身	31%	口径 11.8	外面:コナデ 内面:コナデ	断灰褐色 普通	1mm以下の砂粒を 多量に含む	
-29	III-3区	須恵器	环、身	12%	口径 10.0	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-30	III-3区	須恵器	环、身	14%	口径 12.6	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-31	III-3区	須恵器	环、身	18%	口径 12.7	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 内面:コナデ、静止ナダ	暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を 少量含む	
-32	III-3区	須恵器	环、身	23%	口径 11.6	外面:コナデ 内面:コナデ	外表面褐色 内表面灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-33	III-5区	須恵器	环、身	22%	口径 11.2	外面:回転ヘラタグリ、コナデ 器高 3.5	淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 微量含む	
第105回 -1	III-3区	須恵器	环、身	35%	口径 11.2	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 少量含む	
-2	III-3区	須恵器	环、身	34%	口径 10.8	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	III-3区	須恵器	环、身	15%	口径 10.2	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-4	III-3区	須恵器	环、身	15%	口径 10.2	外面:コナデ 内面:コナデ	淡青灰色 やや不良	0.5mm以下の白色 砂粒を若干含む	
-5	III-5区	須恵器	环、身		口径 10.2	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を微量含む	
6	III-4区	須恵器	环、身		口径 10.0	外面:コナデ、ハラ切り後ナダ? 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	

第24表 出土土器觀察表(24)

民 番 号	出上地點	種類	器種	残存率 (%)	法 算 (cm)	調査・技法	色 調 度	胎 上	備考	
									外表面	内表面
第1058 -7	Ⅲ-5区	須恵器	环、身	85%	口径 高さ	12.0 4.2	外面:ミコナ、ヘラ切り 内面:ミコナ、静止ナガ	青灰色 良好	密で1mm程度の砂 粒を含む	ヘラ記号
-8	Ⅲ-5区	須恵器	环、身	24%	口径	10.0	外面:ミコナ、ヘラ切り 内面:ミコナ	淡青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-9	Ⅲ-3区	須恵器	环、身	15%	口径	10.0	外面:ミコナ、ヘラ切り後ナガ 内面:ミコナ?	灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-10	Ⅲ-5区	須恵器	环、身	100%	口径 高さ	9.6 3.9	外面:ミコナ、ヘラ切り、回転ヘタ 内面:ミコナ、静止ナガ	青灰色 良好	密で1mm程度の砂 粒を含む	自然釉有
-11	Ⅲ-6区	須恵器	环	48%	底径	8.0	外面:ミコナ 内面:静止ナガ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-12	Ⅲ-5区	須恵器	环	14%	底径	9.2	外面:ミコナ?	灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-13	Ⅲ-3区	須恵器	环		底径	8.8	外面:ミコナ、糸切り後ナガ 内面:ミコナ、静止ナガ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
14	Ⅲ-3区	須恵器	环	14%	底径	8.8		淡青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-15	Ⅲ-3区	須恵器	环	37%	底径	8.75	外面:ミコナ、静止ナガ 内面:ミコナ?	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-16	Ⅲ-5区	須恵器	环	13%	底径	6.6	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	淡灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-17	Ⅲ-4区	須恵器	环	24%	底径	8.4	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-18	Ⅲ-3区	須恵器	环	18%	底径	10.5		淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を微量含む	
19	Ⅲ-3区	須恵器	环		底径	9.5	外面:ミコナ 内面:静止ナガ	淡灰色 良好	3mm以下の白色砂 粒を含む	
-20	Ⅲ-3区	須恵器	环		底径	8.2	外面:ミコナ? 内面:ミコナ?	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-21	Ⅲ-5区	須恵器	环	40%	底径	8.0	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-22	Ⅲ-3区	須恵器	环		底径	8.3	内面:静止ナガ	淡灰色 良好	密で黒色粒子を 微量含む	
-23	Ⅲ-3区	須恵器	环	43%	底径	8.1	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	外淡灰 普通	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-24	Ⅲ-3区	須恵器	环		底径	9.6	外面:ミコナ 内面:静止ナガ	青白色 やや不良	砂粒を殆ど含まず 微細	
-25	Ⅲ-3区	須恵器	环	15%	底径	12.6	不明	淡青灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-26	Ⅲ-3区	須恵器	环	24%	底径	10.6	外面:ミコナ?	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-27	Ⅲ-5区	須恵器	环	50%	口径 器高 底径	12.8 4.35 9.0	外面:ミコナ、回転糸切 内面:ミコナ、静止ナガ	外淡灰 良好	密で1mm以下の白 色砂粒を含む	
-28	Ⅲ-3区	須恵器	环	57%	口径 器高 底径	13.0 5.1 8.6	外面:ミコナ、回転糸切 内面:ミコナ、静止ナガ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-29	Ⅲ-3区	須恵器	环	29%	口径 底径	12.6 8.4	外面:ミコナ、回転糸切 内面:ミコナ?	青灰色 良好	2mm以下の白・黒 色砂粒を若干含む	
-30	Ⅲ-3区	須恵器	环	19%	底径	10.1	底面:回転糸切?	灰色 良好	3mm以下の砂粒を 微量含む	
-31	Ⅲ-3区	須恵器	环		底径	10.2	外面:ミコナ 内面:ミコナ、静止ナガ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
32	Ⅲ-3区	須恵器	环			底径	10.0 外面:ミコナ 内面:静止ナガ	淡青灰色 良好	1mm以下の砂粒を 多量に含む	
-33	Ⅲ-5区	須恵器	环	18%	底径	6.0	外面:ミコナ 内面:静止ナガ	暗灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
第1068 -1	Ⅲ-3区	須恵器	环	13%	口径	12.2	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-2	Ⅲ-3区	須恵器	环	10%	口径	13.8	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	青灰色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含み黒粒子有	
-3	Ⅲ-3区	須恵器	环	8%	口径	6.0	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	暗灰色 良好	1mm以下の砂粒を 少量含む	
-4	Ⅲ-5区	須恵器	环	19%	口径	13.4	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	外茶色 内セピア 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-5	Ⅲ-3区	須恵器	环	5%	口径	12.0	外面:ミコナ 内面:ミコナ?	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を 若干含む	
-6	Ⅲ-3区	須恵器	环	30%	口径	8.6	外面:ミコナ、回転糸切 内面:ミコナ?	淡绿色 不良	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
7	Ⅲ-3区	須恵器	环	9%	口径	12.4	外面:ミコナ、回転糸切 内面:ミコナ?	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微含む	
-8	Ⅲ-3区	須恵器	环	20%	口径	11.6	外面:ミコナ、回転糸切 内面:ミコナ?	★淡灰色 良好	密で砂粒を含む	

第25表 出土土器観察表(25)

図版番号	出土場所	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調査・技術	色調	胎土	備考
第106号	III-5区	須恵器	环	65%	口径 13.05 底径 4.1 底高 7.6	外面:コナデ、系切り 内面:コナデ、静止ナナ	灰褐色 良好	2mm以下の砂粒を 微量含む	
-9									
-10	III-3区	須恵器	环	11%	口径 12.0	外面:コナデ	淡灰褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-11	III-4区	須恵器	环	31%	口径 11.2	外面:コナデ、系切り? 内面:コナデ	青褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
12	III-3区	須恵器	环			外面:コナデ、回転糸切り 内面:コナデ	茶褐色 やや不良	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-13	III-3区	須恵器	环	11%		外面:コナデ 内面:コナデ	灰褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-14	III-3区	須恵器	皿	5%未	口径 13.8 器高 3.1 底径 7.4	外面:コナデ、静止ナナ 内面:コナデ	淡褐色 不良	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-15	III-3区	須恵器	皿	26%	口径 16.4	外面:コナデ 内面:コナデ	淡黄色 やや不良	1mm以下の砂粒を 微量含む	
-16	III-3区	須恵器	皿	25%	口径 14.0	外面:コナデ、回転糸切り	灰褐色 良好	砂粒を多く含む	
-17	III-3区	須恵器	皿		口径 14.6	外面:コナデ、テヅリ 内面:コナデ	暗褐色 青透	2mm以上の白色砂 粒を少量含む	
-18	III-3区	須恵器	皿	17%	口径 13.4	外面:コナデ 内面:コナデ	暗褐色 青透	砂粒を多く含む	
-19	III-3区	須恵器	皿	25%	口径 11.7 底径 7.4	外面:コナデ、回転ハラズア 内面:コナデ	淡茶褐色 やや不良	密	
-20	III-3区	須恵器	皿	4%	口径 15.2	外面:コナデ、回転糸切り	青褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-21	III-3区	須恵器	皿	26%	口径 12.2	外面:コナデ、系切り 内面:コナデ	暗褐色 青透	砂粒を多く含む	
第107号	III-5区	須恵器	高环脚部	22%	底径 11.2	外面:コナデ、ナナ 内面:コナデ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	3方透かし
-1									
-2	III-3区	須恵器	高环脚部		底径 11.5	外面:コナデ 内面:コナデ	青褐色 良好	密	2段透かし
-3	III-5区	須恵器	高环	20%	口径 16.8	外面:コナデ 内面:コナデ	淡褐色 やや不良	1mm以下の白色砂 粒を含む	
4	III-5区	須恵器	高环		口径 13.5	外面:コナデ 内面:コナデ	青褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を微量含む	2方透かし
5	III-4区	須恵器	高环	20%	口径 14.6	外面:コナデ 内面:コナデ	淡褐色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-6	III-5区	須恵器	高环	50%	底径 10.0	外面:コナデ 内面:コナデ	暗舌褐色 良好	密	
-7	III-3区	須恵器	高环	5%	底径 8.8	外面:コナデ 内面:コナデ	暗褐色 内青状色 良好	3mm以下の黑色粒 子を多量に含む	2方透かし
-8	III-5区	須恵器	高环		口径 15.0	外面:コナデ 内面:コナデ	暗褐色 良好	密で1mm以下の砂 粒を含む	3方透かし
9	III-3区	須恵器	高环		底径 9.8	外面:コナデ 内面:コナデ	青褐色 良好	密	
-10	III-5区	須恵器	高环	60%	底径 9.2	外面:コナデ 内面:コナデ、静止ナナ	淡灰褐色 良好	1~2mm程度の砂 粒を含む	
-11	III-5区	須恵器	高环	80%	底径 9.0	外面:コナデ 内面:コナデ、静止ナナ	暗褐色 良好	術で1mm程度の砂 粒を含む	2方透かし
-12	III-5区	須恵器	高环	65%	底径 9.6	外面:コナデ 内面:コナデ	暗褐色 良好	密で1mm程度の砂 粒を含む	2方透かし
-13	III-3区	須恵器	高环		底径 10.3	外面:コナデ 内面:コナデ、静止ナナ	暗褐色 青褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-14	III-3区	須恵器	高环		口径 11.8	脚内面:ケヅリ?	暗灰茶褐色 やや不良	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-15	III-3区	須恵器	高环	9%	底径 11.8 底高 10.3	外面:コナデ 内面:コナデ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	2方透かし
16	III-3区	須恵器	高环?			外面:コナデ 内面:コナデ	须者灰褐色 良好	1mm以下の白色砂 粒を含む	
17	III-3区	須恵器	高环			外面:コナデ 内面:コナデ	淡褐色 不良	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	2方透かし
-18	III-5区	須恵器	高环			外面:コナデ 内面:コナデ、静止ナナ	青褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	2方透かし
-19	III-5区	須恵器	高环			外面:コナデ、テヅリ 内面:コナデ、静止ナナ	淡褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	2方透かし
-20	III-3区	須恵器	高环			外面:コナデ 内面:コナデ、静止ナナ	淡褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	2方透かし
-21	III-3区	須恵器	高环			外面:コナデ 内面:静止ナナ	深灰色 良好	2mm以下の砂粒を 若干含む	2方透かし
22	III-3区	須恵器	高环			外面:コナデ 内面:コナデ、静止ナナ	青褐色 良好	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	2方透かし

第26表 出土土器観察表 (26)

図版 番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法 直 (cm)	調整・技法	色 調 焼成度	胎 土 備考			
								外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	淡灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒を少量含む	2万透かし
第07回 -23	II-4区	須 恵 器	高环								
第08回 -1	II-5区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	淡灰色 やや不良	2 mm以下の砂粒を 含む	2万透かし
-2	II-4区	須 恵 器	高环								
3	II-5区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	内青灰色 脚外縁黒化 脚内墨化 良好	1 mm前後の黑色砂 粒を多く含む	3万透かし 自然釉有
-4	II-3区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	淡灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒を少々含む	2万透かし
-5	II-4区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	淡灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒を少々含む	2万透かし
-6	II-3区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	灰褐色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を若干含む	2万透かし
-7	II-3区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	淡灰色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
8	II-3区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ, ?, ヨコナフ 内面:ヨコナフ	淡灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-9	II-3区	須 恵 器	高环						淡灰色 普通	2 mm以下の白・黑 色砂粒を少々含む	
-10	II-3区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	淡灰色 良好	3 mm以下の白色砂 粒を少々含む	
-11	II-3区	須 恵 器	高环					外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ	淡灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒を少々含む	
-12	II-3区	須 恵 器	高环					外輪灰青 索内輪灰 普通	1 mm以下の白色砂 粒を多く含む		
13	II-3区	須 恵 器	高环脚部					外面:ヨコナフ	白で1 mm以下の 白色砂粒を含む		
-14	II-3区	須 恵 器	高环脚部	44%	底径 15.0						
-15	II-3区	須 恵 器	高环脚部	23%	底径 11.4	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		外輪灰色 内底青灰 良好			外面一辺銀色自然 釉有
-16	II-3区	須 恵 器	高环脚部		底径 7.1			淡褐色 良好	砂粒を殆ど含まず 精緻		部自然釉有
17	II-5区	須 恵 器	高环脚部		底径 8.2			暗灰色 普通	1 mm以下の砂粒を 若干含む		
-18	II-5区	須 恵 器	高环脚部	12%	底径 8.2			黑色 やや不良	1 mm以下の砂粒を 少々含む		
-19	II-5区	須 恵 器	高环脚部	31%	底径 11.8	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		外灰褐色 内淡灰色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-20	II-3区	須 恵 器	高环脚部		底径 10.9	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		淡灰色 良好	2 mm以下の砂粒を 含む	2万透かし?	
21	II-3区	須 恵 器	高环脚部		底径 10.2	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		淡灰色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を微量含む	2万透かし	
-22	II-5区	須 恵 器	高环脚部	20%	底径 9.6	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		暗灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-23	II-3区	須 恵 器	高环脚部		底径 10.8	外面:ヨコナフ, カキナ 内面:ヨコナフ, 静止ナフ		淡灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		
-24	II-4区	須 恵 器	高环脚部	16%	底径 14.0	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		淡灰色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-25	II-5区	須 恵 器	高环脚部	22%	底径 12.8	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		外褐色 内淡灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-26	II-3区	須 恵 器	高环脚部	10%	底径 16.2	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		青灰色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-27	II-6区	須 恵 器	高环脚部	11%	底径 11.0	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		淡灰色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を微量含む		
-28	II-3区	須 恵 器	高环脚部		底径 13.6	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む		
29	II-3区	須 恵 器	高环脚部	16%	底径 11.0	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		淡灰色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を若干含む		
-30	II-3区	須 恵 器	高环脚部	20%	底径 11.2	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		淡褐色 良好	1 mm以下の白色砂 粒を微量含む		
-31	II-4区	須 恵 器	高环脚部	26%	底径 12.2	外面:ヨコナフ 内面:ヨコナフ		淡灰色 良好	2 mm以下の白色砂 粒を多く含む	内面自然釉有	
第09回 -1	II-5区	須 恵 器	變か壺	36%	口径 19.8	口縁:内外二層引削外・平行 クサ 剥肉:同心円門当・且底 口縁:内外二層引削外・平行 クサ 剥肉:同心円門当・且底		淡灰色 良好	白色砂粒を含む		
-2	II-4区	須 恵 器	變					口縁:内外二層引削外・平行 クサ 剥肉:同心円門当・且底	淡灰色 良好	2 mm以下の砂粒を 含む	

第27表 出土土器観察表 (27)

図版 番号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調査・技法	色調 構成	胎土	備考
第109回 -3	III-5区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ 胴部内: 円心円当て具底	外縁灰色 内底灰色 良好	2mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-4	III-3区	須恵器	壺	26.5%	口径 13.8	口縁: 内外コロナ 胴部内: タキ後ナチ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-5	III-5区	須恵器	壺	6%	口径 16.4	口縁: 内外コロナ	灰褐色 良好	2mm以下の砂粒を多量に含む	
-6	III-6区	須恵器	壺	10%	口径 20.6	口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-7	III-3区	須恵器	壺	15%	口径 16.6	口縁: 内外コロナ(胴内: 平行 タキ) 脇内: 圓心円当て具底	淡灰色 良好	1mm以下の白・黒色砂粒を若干含む	
-8	III-3区	須恵器	壺	5%	口径 23.0	口縁: 内外コロナ 胴部内: 圓心円当て具底	淡灰色 良好	1mm以下の砂粒を微量含む	一部自然物有
-9	III-3区	須恵器	壺	6%	口径 18.0	口縁: 内外コロナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-10	III-3区	須恵器	壺	30%	口径 54.4	口縁: 内外コロナ	外縁灰色 内底灰色 良好	1mm以下の砂粒を含む	外面一部自然物有
第110回 -1	III-3区	須恵器	壺	6%	口径 21.8	口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-2	III-3区	須恵器	壺	17%	口径 19.0	口縁: 内外コロナ	外縁灰色 内底灰色 良好	2mm以下の砂粒を含み、今や粗	内面自然物有
-3	III-3区	須恵器	壺	8%	口径 22.2		外縁灰色 内底灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-4	III-3区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-5	III-3区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	外面一部自然物有
-6	III-3区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	外縁灰色 内底灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-7	III-3区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-8	III-5区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-9	III-3区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を含む	外回自然物有
-10	III-3区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-11	III-1区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を含む	
-12	III-5区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む	
-13	III-4区	須恵器	壺			口縁: 内外コロナ	外縁灰色 内底灰色 良好	1mm以下の砂粒を若干含む	
-14	III-3区	須恵器	壺			外縁: コロナ 内縁: コロナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
15	III-3区	須恵器	壺			外縁: コロナ 内縁: コロナ	外縁灰色 内底灰色 良好	2mm以下の白色砂粒をやや多く含む	外面自然物有
-16	III-5区	須恵器	壺			外縁: コロナ 内縁: コロナ	淡灰色 良好	4mm以下の白色砂粒を微量含む	
第111回 -1	III-3区	須恵器	壺	21%	口径 9.9	口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	砂粒を殆ど含まず 精緻	
-2	III-3区	須恵器	壺	20%	口径 9.2	外縁: コロナ 内縁: コロナ	淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を微量含む	
-3	III-3区	須恵器	壺	10%	口径 12.2	口縁: 内外コロナ 胴部内: 圓心円当て具底	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-4	III-5区	須恵器	壺		口径 20.2		外縁灰色 内底灰色 良好	砂粒を多く含む	
-5	III-6区	須恵器	壺		口径 11.0	口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-6	III-6区	須恵器	壺?	16%	口径 4.2	口縁: 内外コロナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
-7	III-5区	須恵器	壺			外縁: コロナ 内縁: コロナ	明青灰色 黒黄灰色 良好	密で1mm程度の砂粒を多少含む	
-8	III-3区	須恵器	壺			外縁: コロナ 内縁: コロナ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂粒を若干含む	
9	III-3区	須恵器	壺			外縁: コロナ 内縁: コロナ	灰褐色 良好	3mm以下の白色砂粒を若干含む	

第28表 出土土器観察表(28)

図版 番号	出土地点	種類 器種	残存率 (%)	法 直 (cm)	調査・枝法		胎 土	備 考
					外面:回転ハラヅイ 内面:ヨコナガ、静止ナガ	底色 普通 良好		
第111図 -10	Ⅲ-5区	須恵器 瓶		4.8		底色 普通 良好	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-11	Ⅲ-3区	須恵器 瓶			外面:回転ハラヅイ、ヨコナガ 内面:ヨコナガ、静止ナガ	灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-12	Ⅲ-5区	須恵器 瓶	18%	底径 6.4	外面:回転ハラヅイ 内面:ヨコナガ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-13	Ⅲ-3区	須恵器 瓶		底径 9.3	外面:ヨコナガ 内面:静止ナガ	灰褐色 良好	3mm以下の白色砂 粒を微量含む	
-14	Ⅲ-4区	須恵器 环、身?		底径 9.4	外面:回転ハラヅイ、ヨコナガ 内面:ヨコナガ、静止ナガ	淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 含む	
-15	Ⅲ-4区	須恵器 环、身?		底径 8.4	外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ、静止ナガ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-16	Ⅲ-6区	須恵器 鉢?	15%	底径 11.8	外面:回転ハラヅイ、ヨコナガ 内面:ヨコナガ、静止ナガ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-17	Ⅲ-4区	須恵器 环、身?		底径 9.0	外面:ヨコナガ	青灰色 良好	青で1mm以下の砂 粒を少量含む	
-18	Ⅲ-3区	須恵器 环、身?		底径 3.9	外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ	灰色 普通	1mm以下の白色砂 粒若干含みやや粗	
-19	Ⅲ-3区	須恵器 瓶			外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ、静止ナガ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-20	Ⅲ-3区	須恵器 瓶			外面:ヨコナガ 内面:同心円當て具痕	灰色 良好	砂粒を殆ど含まず 粗粒	
-21	Ⅲ-5区	須恵器 瓶			外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ	灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-22	Ⅲ区	須恵器 瓶			外面:平行タキ 内面:放射状タキ	淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 若干含む	
第112図 -1	Ⅲ-3区	須恵器 瓶			外面:回転ハラヅイ、ヨコナガ 内面:ヨコナガ	灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-2	Ⅲ-3区	須恵器 瓶			外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-3	Ⅲ-5区	須恵器 瓶	13%		外面:回転ハラヅイ、ヨコナガ 内面:ヨコナガ	暗灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-4	Ⅲ-5区	須恵器 瓶			外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ	灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を少量含む	一部自然釉有?
-5	Ⅲ-5区	須恵器 鉢?	9%	口径 19.2	外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ	淡灰色 良好	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-6	Ⅲ-5区	須恵器 挿把手				暗灰色 良好	3mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	Ⅲ-3区	須恵器 握把			外面:平行タキ柄タキ 内面:ヨコナガ	青灰色 良好	4mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-8	Ⅲ-3区	須恵器 握把			外面:平行タキ 内面:ヨコナガ、同心円當て具 痕	外深灰色 内青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-9	Ⅲ-4区	須恵器 握把				青灰色 良好	1mm以下の砂粒を 含む	
-10	Ⅲ-5区	須恵器 瓶	11%	口径 11.4	外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ	暗灰色 良好	3mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-11	Ⅲ-5区	須恵器 捨取把手				淡灰色 良好	2mm以下の砂粒を 含む	
-12	Ⅲ-3区	須恵器 平瓶?			外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ	青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を含む	
-13	Ⅲ-3区	須恵器 瓶?		底径 5.8	外面:ヨコナガ 内面:ヨコナガ	外濃灰色 内深灰色 良好	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-14	Ⅲ-3区	須恵器 瓶	12%	口径 40.	外面:ヨコナガ、平行タキ 内面:ヨコナガ、同心円當て具 痕後一盛け消し	淡灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
第113図 -1	Ⅲ-3区	土師器 瓶	57%	口径 18.0	口縁:内外ヨコナガ 胴部内:ヨコナガ	淡茶灰色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-2	Ⅲ-3区	土師器 瓶	100%	口径 19.4	口縁:内外ヨコナガ 胴部内:ヨコナガ	淡黄灰色 普通	3mm以下の砂粒を 含む	
-3	Ⅲ-3区	土師器 瓶	100%	口径 20.2	口縁:内外ヨコナガ 胴部内:ヨコナガ	淡黄灰色 普通	2mm以下の砂粒を 黒斑有り 含む	
-4	Ⅲ-5区	土師器 瓶	35%	口径 23.9	口縁:内外ヨコナガ 胴部内:ヨコナガ	外深茶色 内淡黒褐色 普通	1mm以下の白色砂 粒を多く含む	
第114図 -1	Ⅲ-3区	F. 鏡 壁		口径 21.6	口縁:内外ヨコナガ 胴部内:ヨコナガ	淡黄褐色 普通	2mm以下の砂粒を やや多く含む	
-2	Ⅲ-4区	F. 鏡 壁	45%	口径 18.8	口縁:内外ヨコナガ 胴部内:ヨコナガ	淡褐灰色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-3	Ⅲ-4区	土師器 瓶	23%	口径 15.4	口縁:内外ヨコナガ 胴部内:ヨコナガ	淡茶色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-4	Ⅲ-3区	土師器 瓶	10%	口径 24.0	口縁:ヨコナガ 内面:ヨコナガ、ヨコナガ	淡褐色 普通	1mm以下の黒・白 色砂粒を若干含む	

第29表 出土土器観察表 (29)

図版番号	出土地点	種類	器種	残存率(%)	法量(cm)	調査・技術		色調 焼成	胎土	備考
						口径	口縁			
第114図 5	Ⅲ-3区	土器	甕	8%	口径 32.2 口縁 内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡黃灰色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-6	Ⅲ-4区	土器	甕	25%	口径 11.0 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	Ⅲ-4区	土器	甕	13%	口径 13.4 口縁:内外ココナ 胴部外:ハナメ 胴部内:ハラズリ			1mm以下の白色砂 粒を若干含む		
8	Ⅲ-5区	土器	甕	25%	口径 17.4 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
9	Ⅲ-5区	土器	甕	40%	口径 25.0 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡黃褐色 普通	4mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-10	Ⅲ-4区	土器	甕	32%	口径 16.4 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡黄色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-11	Ⅲ-3区	土器	甕	14%	口径 30.2 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡黄色 普通	1mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-12	Ⅲ-3区	土器	甕	20%	口径 14.6 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			外葉褐色 内葉茶 普通	1mm以下の白色砂 粒を含む	
-13	Ⅲ-3区	土器	甕	15%	口径 20.0 胴部内:ハラズリ			灰褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-14	Ⅲ-4区	土器	甕	21%	口径 18.2 胴部内:ハラズリ			淡黃灰色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
15	Ⅲ-4区	土器	甕	11%	口径 27.8 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
16	Ⅲ-4区	土器	甕	45%	口径 16.6 口縁:外ココナ			淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を多く含む	
第115図 1	Ⅲ-4区	土器	甕	9%	口径 19.0 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-2	Ⅲ-3区	土器	甕	13%	口径 23.8 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			外葉褐色 内葉黒褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を少量含む	黒座?
-3	Ⅲ-3区	土器	甕	11%	口径 27.8 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡黃灰色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-4	Ⅲ-3区	土器	甕	14%	口径 19.0 口縁:内外ココナ			淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 多く含む	
-5	Ⅲ-3区	土器	甕	15%	口径 17.4 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 若干含む	
-6	Ⅲ-4区	土器	甕	23%	口径 12.8 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			外葉褐色 内葉灰茶 普通	1mm以下の砂粒を 若干含む	
7	Ⅲ-3区	土器	甕	25%	口径 19.0 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡褐色 普通	4mm以下の白色砂 粒を少量含む	X3底有り
-8	Ⅲ-3区	土器	甕	17%	口径 18.0 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡黃灰色 普通	1mm以下の砂粒を 少含む	
-9	Ⅲ-3区	土器	甕	17%	口径 17.6 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			外葉褐 内赤褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	X3底有り
-10	Ⅲ-3区	土器	甕	15%	口径 18.0 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-11	Ⅲ-5区	土器	甕	100%	口径 10.9 口縁:内外ココナ 胴部内:ハラズリ			淡褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
第116図 1	Ⅲ-3区	土器	甕	100%	口径 18.8 口縁:ハナメ			淡褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
第117図 -1	Ⅲ-3区	土器	高环		口径 20.5 不明			極端な 褐色	1mm以下の砂粒を 少含む	
-2	Ⅲ-3区	土器	高环	25%	口径 13.8 外縁:ココナ 内縁:ココナ			外葉褐色 内葉茶 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	Ⅲ-5区	土器	高环					外葉灰茶 内葉茶 良好	1mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-4	Ⅲ-3区	土器	高环					水褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-5	Ⅲ-3区	土器	高环					淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 含む	
-6	Ⅲ-5区	土器	高环					赤褐色 普通	3mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-7	Ⅲ-3区	土器	高环					褐色 普通	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-8	Ⅲ-3区	土器	高环					淡褐色 普通	2mm以下の砂粒を 少含む	
-9	Ⅲ-3区	土器	高环	14?	口径 13.4 外縁:ハナメ 内縁:ココナ?			外葉黑色 内葉茶 普通	1mm以下の白・茶 色の砂粒を含む	X3底有り

第30表 出土土器観察表 (30)

団 版 番 号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法 量 (cm)	調 査 ・ 技 法	色 調 成	胎 土	備 考
第117回 -10	Ⅲ-5区	土器	环	30%	口径 12.2 壁高 4.7 底径 4.8	小明	褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-11	Ⅲ-5区	土器	环		口径 12.4 壁高 3.8	外面:ヨリナ、静止ナ? 内面:静止ナ?	外褐色 内面灰褐色 普通	砂粒を殆ど含まず 精緻	黒唐有り 外面赤彩?
-12	Ⅲ-3区	土器	环			小明	淡褐色 普通	砂粒を殆ど含む	
-13	Ⅲ-5区	土器	环				淡褐色 普通	砂粒を殆ど含まず 精緻	黒唐有り
14	Ⅲ-5区	土器	钵	35%	口径 13.2 底径 11.8 高さ 7.6	外面:ヘタゾロ、ハナ 内面:ハナ?	淡褐色 普通	2 mm以下の砂粒を 含む	
-15	Ⅲ-3区	土器	钵	5%	口径 25.5 底径 12.5	外面:カヌリ、ナガミ 内面:ヨリナ?	淡黄褐色 普通	2 mm以下の砂粒を 含む	
-16	Ⅲ-3区	土器	钵		口径 11.8 底径 12.5	外面:ヨリナ、ヨリナ? 内面:ハナ?	淡黄褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を少々含む	
第118回 -1	Ⅲ-3区	土器	瓶	21%	口径 24.0 底径 28.5 高さ 7.6	外面:ヨリナ、ハナ 内面:ヨリナ、ハナ? 底径	淡褐色 普通	4 mm以下の白色砂 粒を多量に含む	
-2	Ⅲ-3区	土器	瓶	8%	口径 31.0 底径 30.2	内面:ヘタゾロ?	淡褐色 普通	3 mm以下の砂粒を 含む	黒唐有り
-3	Ⅲ-5区	土器	瓶	18%	口径 30.2	口縁:内外ヨリナ?	淡黄色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を少量含む	
-4	Ⅲ-3区	土器	瓶	16%	口径 33.2	口縁:内外ヨリナ?	淡灰褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-5	Ⅲ-5区	土器	瓶	14%	底径 14.4	内面:ハナズロ	淡褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-6	Ⅲ-3区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ 内面:ハナズロ	淡茶色 普通	1 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	Ⅲ-3区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ、ハナ 内面:ハナズロ	淡黄色 普通	1 mm以下の砂粒を 若干含む	
-8	Ⅲ-3区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ?	赤茶色 普通	3 mm以下の白色砂 粒を少量化	
-9	Ⅲ-3区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ、ヨリナ、ハナ 内面:ハナズロ	茶色 普通	3 mm以下の砂粒を 含む	
-10	Ⅲ-3区	土器	瓶把手				淡褐色 普通	3 mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-11	Ⅲ-5区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ?	淡灰褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-12	Ⅲ-4区	土器	瓶把手			外面:ハナ?	淡灰褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-13	Ⅲ-4区	土器	瓶把手			外面:ハナ?	淡灰褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
第119回 -1	Ⅲ-5区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ?	淡黄色 普通	2 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-2	Ⅲ-5区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ?	淡黄褐色 普通	1 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	Ⅲ-4区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ、ヨリナ 内面:ハナズロ	淡褐色 普通	2 mm以下の砂粒を 含む	
-4	Ⅲ-3区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ?	淡黄色 普通	1 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-5	Ⅲ-4区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ?	淡褐色 普通	1 mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-6	Ⅲ-4区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ?	淡褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-7	Ⅲ-4区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ、ハナ 内面:ハナズロ	淡褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を少量化	
-8	Ⅲ-4区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ? 内面:ハナズロ	淡黄色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を多く含む	
-9	Ⅲ-4区	土器	瓶把手			外面:ヨリナ?	赤茶色 普通	5 mm以下の砂粒を 若干含む	
第209回 -1	Ⅲ-4区	土器	カマ?			外面:ヨリナ、ハナ 内面:ヨリナ、ハナズロ	淡灰褐色 普通	3 mm以下の白色砂 粒を含む	
-2	Ⅲ-4区	土器	カマ?	12%	口径 29.0	外面:ヨリナ、ハナ 内面:ヨリナ、ハナズロ	淡茶色 普通	3 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-3	Ⅲ-3区	土器	カマ?			内面:ハナズロ?	淡褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	
-4	Ⅲ-3区	土器	カマ?			外面:ヨリナ 内面:ハナズロ	淡灰褐色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を含む	
-5	Ⅲ-4区	土器	カマ?				淡黄色 普通	2 mm以下の白色砂 粒を若干含む	
-6	Ⅲ-3区	土器	カマ?				淡褐色 普通	5 mm以下の砂粒を 含む	
-7	Ⅲ-5区	土器	カマ?				淡黄色 普通	4 mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	

第31表 出土土器観察表(31)

団 号	出土地点	種類	器種	残存率 (%)	法量 (cm)	調整・技法	色調 発達	胎土	備考
第120回 -8	Ⅲ-4区	土器	器	若干		外面:ヨコナギ、ハケ後ナギ 内面:ハナナギ	茶色 普通	2mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-9	Ⅲ-4区	土器	器	若干		外面:ヨコナギ	淡黄灰褐色 普通	2mm以下の砂粒を少許含む	
第121回 -1	Ⅲ-3区	土器	器	若干		内面:ハナナギ	淡黄褐色 普通	3mm以下の砂粒を含む	
-2	Ⅲ-3区	土器	器	若干		外面:ハケ後ナギ 内面:ハナナギ	淡褐色 普通	4mm以下の白色砂粒を若干含む	黒斑(スミ痕)有り
-3	Ⅲ-4区	土器	器	若干		外面:ハナナギ 内面:ハナナギ	淡褐色 普通	1mm以下の白色砂粒をやや多く含む	黒斑有り
-4	Ⅲ-4区	土器	器	若干		外面:ハナナギ 内面:ハナナギ	淡黄灰褐色 普通	2mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
第122回 -1	Ⅲ-3区	土器	器	若干		外面:ナギ 底面:ハケナギ	淡褐色 普通	3mm以下の白・黒色砂粒をやや多く含む	
-2	Ⅲ-5区	土器	器	若干		外面:ハナナギ、ヨコナギ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-3	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡黄褐色 普通	2mm以下の砂粒をやや多く含む	
-4	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ、ヨコナギ	淡黄灰褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む	
-5	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ナギ、ナギ、指頭压痕	淡黄褐色 普通	3mm以下の砂粒を含む	
-6	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ、指頭压痕	淡黄灰褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
第123回 -1	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ナギ、ナギ	淡黄灰褐色 普通	4mm以下の白色砂粒を若干含む	
-2	Ⅲ-5区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-3	Ⅲ-6区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-4	Ⅲ-5区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡黄灰褐色 普通	5mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-5	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡黄灰褐色 普通	2mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-6	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-7	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ後ナギ	淡褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-8	Ⅲ-5区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡茶色 普通	3mm以下の白色砂粒を多く含む	
-9	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ、ヨコナギ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
第124回 -1	Ⅲ-5区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ、ヨコナギ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂粒をやや多く含む	通中までの穿孔有り
-2	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡黄灰褐色 普通	3mm以下の白色砂粒を多く含む	
-3	Ⅲ-5区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ、ナギ	淡茶色 普通	3mm以下の白色砂粒を若干含む	
4	Ⅲ-4区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡茶色 普通	1mm以下の砂粒を含む	
-5	Ⅲ-5区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡黄灰褐色 普通	3mm以下の白色砂粒をやや多く含む	
-6	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ハナナギ	淡褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を少許含む	
-7	Ⅲ-3区	土器	土製支脚			外面:ヨコナギ	淡黄灰褐色 普通	2mm以下の砂粒を含む	
第125回 -1	Ⅲ-6区	陶器	李明白瓶	底延	4.6	外面:白釉	淡灰色 良好	緻密	
-2	Ⅲ-5区	陶器	青釉碗				淡褐色 良好	緻密	
-3	Ⅲ-6区	土器	器			淡黄褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を若干含む		
-4	Ⅲ-6区	土器	器			赤褐色 良好	2mm以下の砂粒を若干含む		
5	Ⅲ-3区	土器	器			淡黄褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む		
-6	Ⅲ-3区	土器	器			淡褐色 良好	2mm以下の白色砂粒を微量含む		
-7	Ⅲ-5区	土器	器			淡黄褐色 良好	1mm以下の白色砂粒を微量含む		
-8	Ⅲ-5区	土器	器			淡褐色 普通	2mm以下の白色砂粒を若干含む		

第32表 出土土器觀察表 (32)

圖 版 番 号	出土地點	種類	器種	残存率 (%)	底 盤 (cm)	調査・技法	色 調 燒 度	胎 土	備考	
									外 面	内 面
第126回 -1	III-3区	須恵器	环		12.2 4.55 9.1	口縁:ココナツ、回転系切り 腹高:内面:ココナツ 底径:	青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	『上』墨書後穿孔	
-2	III-3区	須恵器	环		12.3 4.3 7.6	口縁:ココナツ、回転系切り 腹高:内面:ココナツ、静止ナガ 底径:	青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	『上』墨書	
-3	III-3区	須恵器	高台付环	30%	底径: 8.8	外面:ココナツ、回転系切り 内面:ココナツ、静止ナガ	青灰色 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	『古?』墨書	
-4	III-3区	須恵器	环	20%	底径: 7.6	外面:ココナツ、回転系切り 内面:静止ナガ	灰褐色 やや不良	2mm以下の白色砂 粒をやや多く含む	『上』墨書	
-5	III-3区	須恵器	蓋?			外面:ココナツ、静止ナガ 内面:ココナツ、静止ナガ	外淡青灰 内淡灰白 良好	2mm以下の白色砂 粒を若干含む	『古』墨書	
-6	III-3区	須恵器	蓋?			外面:ナガ 内面:ナガ、ココナツ	淡灰白色 良好	砂粒を殆ど含まず やや粗	胎河土器	
-7	I-S区 SR01N	須恵器	蓋?			外面:ナガ 内面:黒いナガ	淡灰白色 良好	砂粒を殆ど含まず やや粗	胎河土器	
-8	III-3区	須恵器	脚付壺?			外面:ココナツ 内面:ココナツ	淡灰白色 良好	1mm以下の砂粒を 微量含み、やや粗	胎河土器	
-9	III-3区	須恵器	壺?			外面:ココナツ	外淡灰色 内黑色 良好	2mm以下の砂粒を 含み、やや粗		

第33表 出土石器一覧表(1)

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	遺存状況	石材	備考
第9回 -8	I-N区 S101	砥石	14.0	7.3	4.7	651.25			
第33回 -1	I-N5区	石鎌	2.6	2.05	0.5	2.6		黒曜石	
-2	I-N3区	石鎌	(1.4)	(0.9)	(0.3)	0.32		黒曜石	
-3	I-N区 -レチM	楔形石器	2.5	2.7	1.15	7.8		黒曜石	
-4	I-N1区	石鎌	8.4	7.1	3.6	270.0			
第45回 -1	I-S区	石鎌	1.2	0.93	0.25	0.19	両面加工	黒曜石	
-2	I-S区	石鎌	1.0	0.65	0.2	0.14	基部欠損	黒曜石	
-3	I-S区	石鎌	2.11	1.5	0.33	1.30		安山岩	
-4	I-S区 P-55	石鎌	(1.7)	(1.1)	(0.28)	0.28	基部欠損	黒曜石	
-5	I-S区 P-31	石鎌	(1.05)	(0.6)	(0.25)	0.18	基部欠損	黒曜石	
6	I-S区	石鎌	(1.35)	(0.8)	(0.2)	0.13	基部欠損、両面加工	黒曜石	
-7	I-S区 ガレル-	石鎌	3.7	4.7	1.05	16.75	両面加工	黒曜石	
第69回 -1	I-S区 SR01	石斧	10.1	5.4	2.74	189.83		緑灰色、敲打痕有り	
-2	I-S区 SR01	2次加工のある剥片	3.45	2.41	0.83	7.37		黒曜石	
-3	I-S区 SR01	石核	3.2	4.1	1.75	15.66		黒曜石	
-4	I-S区 SR01	石鎌	1.63	1.15	2.75	0.45		黒曜石	
-5	I-S区	石鎌	2.08	1.6	0.45	0.89		黒曜石	
第79回 II区、 -5 T-5	2次加工のある剥片	石鎌	6.55	4.74	2.0	51.0		玄武岩	
第127回 -1	III-5区	石鎌	(2.15)	(1.65)	(0.42)	1.06	基部欠損	黒曜石	
-2	III-3区	石鎌	(2.63)	(1.5)	(0.3)	0.89	先端部及び基部欠損	安山岩	
-3	III-3区	石鎌	(1.68)	(1.57)	(0.42)	0.95	先端部及び基部欠損	黒曜石	
-4	III-3区	石鎌	(1.43)	(1.0)	(0.22)	0.24	基部欠損	黒曜石	
-5	III-5区	石鎌	(2.18)	(1.34)	(0.5)	1.07	基部欠損	黒曜石	
-6	III-3区	石鎌	(1.65)	(1.2)	(0.37)	0.43	基部欠損、両面加工	黒曜石	
-7	III-5区	石鎌	(1.38)	(1.3)	(0.3)	0.44	先端部欠損	黒曜石	
-8	III-3区	石鎌	1.7	1.8	0.41	0.71		黒曜石	
-9	III-3区	石鎌	(1.9)	(1.44)	(0.36)	0.58	基部欠損	黒曜石	
-10	III-3区	石鎌	1.7	1.05	0.2	0.27	両面加工	黒曜石	
-11	III-3区	石鎌	1.96	1.34	0.34	0.47	両面加工	黒曜石	
-12	III-5区	石鎌	1.6	1.23	0.3	0.34	両面加工	黒曜石	
-13	III-3区	石鎌	(1.87)	(1.16)	(0.34)	0.44	基部欠損	黒曜石	
-14	III-5区 NS17+ -15	石鎌	(1.95)	(1.23)	(0.35)	0.56	基部欠損、両面加工	黒曜石	
-15	III-3区	石鎌	(2.0)	(1.85)	(0.4)	1.16		黒曜石	
-16	III-5区	石鎌	1.18	1.27	0.33	0.24		安山岩	
-17	III-6区 SD03	石鎌	1.94	1.55	0.37	0.82		安山岩	
-18	III-5区	石鎌	(2.6)	(1.58)	(0.5)	1.68		安山岩	
-19	III-3区	石鎌	2.27	1.6	0.42	0.87		安山岩	
-20	III-1区	石鎌	2.78	1.75	0.4	1.52		安山岩	
-21	III-4区	石鎌	(1.74)	(1.1)	(0.37)	0.51	先端部及び基部欠損、両面加工	黒曜石	
-22	III-3区	石鎌	(2.08)	(1.5)	(0.29)	0.66	基部欠損	黒曜石	
-23	III-3区	石鎌	2.2	1.55	0.5	1.34	両面加工	黒曜石	
-24	III-3区	石鎌	1.8	1.22	0.36	0.48	両面加工(比較的粗雑)	黒曜石	
-25	III-3区	石鎌	1.6	1.37	0.3	0.6		黒曜石	
-26	III-3区	石鎌	1.58	1.29	0.4	0.61		黒曜石	
-27	III-5区	石鎌	2.08	1.4	0.4	0.9		安山岩	
-28	III-3区	石鎌	2.3	1.55	0.4	0.99	両面加工	安山岩	
-29	III-1区 北壁7付	石鎌 (木製品)	2.08	1.53	0.28	0.74		安山岩	
-30	III-3区	石鎌	2.22	1.49	0.4	1.24		安山岩	
-31	III-3区	石鎌	2.48	1.6	0.32	1.17	内面加工	安山岩	
-32	III-6区	石鎌	1.45	1.24	0.33	0.41		黒曜石	
-33	III-3区	石鎌	3.0	1.85	0.6	3.47		黒曜石	
-34	III-1区	石鎌	3.4	2.37	0.7	2.02		黒曜石	
-35	III-5区 南北24内	石鎌 (木製品)	2.69	1.68	0.5	6.16		黒曜石	
第128回 -1	III-3区	有茎尖頭器	(4.36)	1.9	0.6	5.03		安山岩	
-2	III-3区	楔形石器?	2.66	2.6	0.93	6.68		黒曜石	
3	III-3区	ガレル?	(1.95)	(1.8)	(0.7)	2.48	・基部欠損	黒曜石	

第34表 出土石器一覧表(2)

図版 番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	遺存状況		石材	備考
第128図 -4	III-3区	カレイル	3.11	4.39	1.57	19.4	—	—	黒曜石	
-5	III-6区	2次加工のある剥片	1.5	1.7	0.37	0.88	—	—	黒曜石	
-6	III-6区	2次加工のある剥片	2.62	2.78	0.8	4.83	—	—	黒曜石	
-7	III-3区	2次加工のある剥片	2.7	1.9	0.94	5.4	—	—	黒曜石	
-8	III-3区	2次加工のある剥片	3.4	2.4	1.2	9.82	—	—	黒曜石	
-9	III-3区	2次加工のある剥片	3.6	1.79	0.9	5.12	—	—	黒曜石	
-10	III-3-5区 サト	2次加工のある剥片	1.85	2.13	0.59	1.87	—	—	黒曜石	
-11	III-5-6区 南北ノ内	石斧	(12.8)	(5.5)	(2.33)	243.27	—	—	達賀原区 敲打痕有り 岩	
-12	III-1区 北壁サト	石斧	14.4	5.67	2.5	282.07	—	—		
第129図 -1	III-1区	石核かスレ ル	8.41	7.1	2.83	117.05	—	—	黒曜石	
-2	III-6区	石核	5.25	3.35	2.03	31.85	—	—	黒曜石	
-3	III-4区	石核	3.28	2.7	1.65	11.64	—	—	黒曜石	
-4	III-6区	石核	4.38	2.92	2.56	25.08	—	—	黒曜石	剥片を素材とした石核
-5	III-5区 NSサト	石核	9.75	2.3	1.67	14.23	—	—	黒曜石	
第130図 -1	III-6区	石核	5.63	3.34	1.98	31.75	—	—	黒曜石	
-2	III-3区	石核	4.79	1.55	1.3	7.15	—	—	黒曜石	
-3	III-4区	玉未成品	8.15	2.2	2.15	19.01	—	—	やや純い 碧玉	
-4	III-6区 SD03	丸玉 未成品	1.92	2.09	1.93	12.61	—	—	水晶	
第131図 -1	III-3区	石盤	20.78	(20.0)	(8.55)	3000.0	—	—	模灰岩	
-2	III-4区	石盤	(6.49)	4.85	(5.5)	192.19	—	—		

第35表 玉類一覧表

図版 番号	出土地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	遺存状況	石材	備考	
第10図 -1	I - N区 SI01	臼玉	0.54	0.19	0.17	0.05		滑石		
-2	I - N区 SI01	臼玉	0.53	0.13	0.17	0.04	一部欠損	滑石		
-3	I - NI区 SI01	臼玉	0.55	0.17	0.19	0.01	1/3欠損	滑石		
-4	I - N区 SI01	臼玉	0.52	0.1	0.16	0.02		滑石		
-5	I - N区 SI01・P6-7	臼玉	0.5	0.12	0.18	0.03		滑石		
-6	I - N区 SI01・P6-7	臼玉	0.58	0.31	0.18	0.14		滑石		
-7	I - N区 SI01・P7	臼玉	0.48	0.2	0.18	0.04		滑石		
-8	I - N区 SI01・P7	臼玉	0.55	0.3	0.2	0.12		滑石		
第125図 -10	III - 3区	小玉	0.78	0.51	0.18	0.47		ガラス		
-9	III - 3区	勾玉	長さ 2.73	幅 1.39	厚さ 0.8	孔径 0.19 ~0.32	重さ 2.75	片面穿孔 両面欠損	碧玉	



# 図版





石田遺跡遠景（I-N区調査時、南から）



石田遺跡から東を望む（I-N区調査時、西から）

図版2



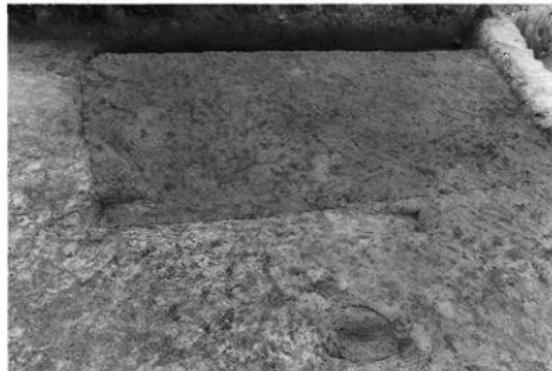
I - N 区完据時（西から）



同 S 102と掘立柱建物群



図版4



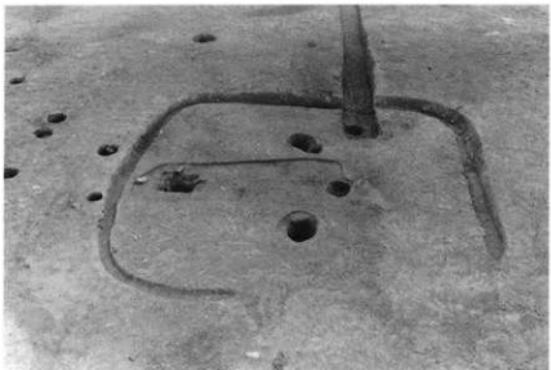
I - N区  
S I 01プラン検出時  
(南から)



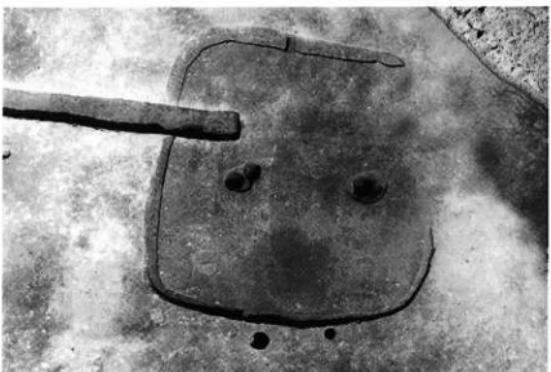
同、床面検出時  
(東から)



同、壁際土壤内  
土師器出土状況  
(東から)



S I 02 (東から)



S I 02床面  
(真上から)



同P 6セクション

図版 6



I-N区 SB01  
(南から)

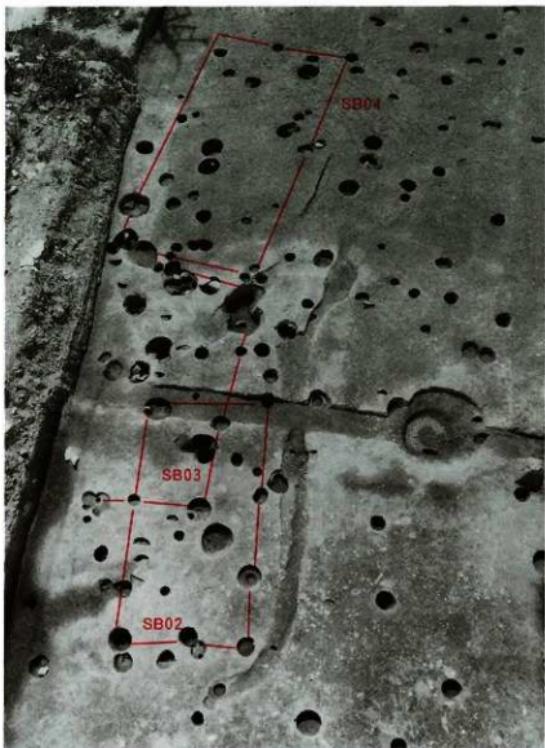


I-N区  
SB01(手前)  
とSI01(奥)  
(東から)



同、セクション  
(南東から)

図版 7



I - N区  
SB02~04 (北から)



同、北から

図版 8



I-N区 SB02  
区画溝内  
土師器出土状況



同、SB08 (北から)



I-N区 SB09、10、SA02、03（上から）



同（北から）

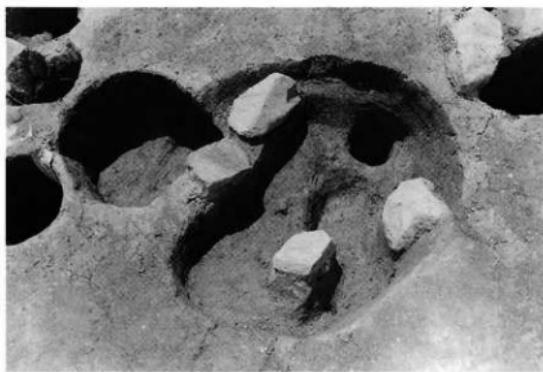
図版10



I - N 区調査風景



同、SK 01  
(北から)



SK 02



I-S区 完掘時（南から）



同（西から）

図版12



I-S区 SB05 (南から)



同、S103炉 (SK04) 縄文土器出土状況



I-S区 S I 03内  
SK 04セクション



同、完掘時



I-S区  
南壁セクション

図版14



I - S区  
S R01完掘時  
(北から)



同、東壁セクション  
(南西から)



同、東西セクション  
(南から)



II区調査前  
(東から)



同、調査後遠景  
(東から)



II区 S X01  
(南から)

図版16



II区S X01  
(北から)



同、完掘時  
(北から)



同、東西セクション